健軍三菱物語

目　　次

発刊にあたって	岡野允俊	5
「健軍三菱物語」発刊に寄せて	唐木文穂	6
忘れられぬ健軍		
「健軍三菱物語」発刊に寄せて	岡山忠生	7
熊本航空機製作所建設		8
熊航建設決定まで		8
土地買収始る		10
建設工事始る		13
熊本土地買収の思い出	有賀　秀一	14
名航・熊航の思い出	大塚敬輔	16
厚生施設建設予算取得の苦い思い出	唐木　文穂	17
従業員数の推移		17
熊坑へ転勤	中村貞喜	19
熊航へ転勤のころ	小粥治	20
熊本へ転勤	作重武	22
熊本へ転勤のころ	作元正武	22
健軍・三菱に入社	細川隆康	22
現地採用社員	岡山忠生	23
熊航立ち上りの頃	正清　敦	24
労務・管理制度		24
労働時間		
従業員管理制度		
福利・厚生		25
社　　宅		25
寮・その他の福利施設		27
工員クラブ探訪・・・	岡野　允俊	29
江津荘のこと	細川　隆康	30
幻の正員独身寮	林　　盛雄	31
白川寮一思い出すまゝ	入江敬之介	31
安全衛生、健康管理、病院		32

通勤手段 33

熊航設立の頃　山本　銈二　34

教　　育 34

青年学校 35

三菱青年学校の思い出　一期生　南　政一　36

三菱青年学校の思い出　一期生　中西誠一　37

思い出の健軍　二期生　八橋竜芳　38

熊本航空機製作所発足 40

鍛鋳品を熊本へ　佐久間久見　42

熊本へ転勤　野中　勝俊　43

熊本の思い出　佐久間美恵子（岡野）　44

熊航の思い出　小山　節郎（那須）　45

機　械　工　場　木下　囲資　46

キー 67　回想　吉長富士男　47

労働力の強制動員 50

徴　用　工 51

健軍三菱に徴用　堤　　隆喜　52

徴用工との対応　佐久間久見　53

女子挺身隊 54

女子挺身隊の思い出　甲佐高女　松永真由子　54

回　　顧　松橋高女　渕田　玲子　56

女子挺身隊の思い出　八代高女　頼藤　和代　59

女子挺身隊の思い出　八代高女　宇野美代子　62

挺身隊時代の患い出　尚絅高女　米原　絹子　63

学徒動員と操上げ卒業 66

三菱熊本工場勤労動員　熊工専　野中　　卓　68

勤労動員の思い出　熊工専　大塚　由成　70

学　徒　動　員　宮崎工専　外囲　　巧　71

健軍三菱への動員　五　高　中野　孝次　78

不自由時代　済々黌　副島　林造　81

勤労動員学徒隊長回想記…　熊　中　中村　昌信　82

三菱航空機動員学徒引率記…　熊　中　今村　恒吉　83

学徒動員の思い出　……　熊　中　森　　昭　84

勤労動員回想 …… 熊　中　森　里一郎 85
学徒動員の思い出 …… 鎮西中　木村　能章 85
勤労動員の思い出 …… 県二女　塩塚　由子 86
学校工場 済々黌百年史 88
社宅の生活 佐久間久見 89
社宅の生活 林　福洋（小串） 90
工場疎開 唐木文穂 91
長船から熊航へ 柳本　武 92
整備工場の思い出 久保田　貢 94
動員学徒と共に 中西　誠一 95
社宅一空襲 佐久間久見 96
長船から熊航への応援 白井　秀雄 97
熊本で見た赤い夕陽 富岡銀四郎 98
監　督　官 佐久間久見 100
空襲をくぐり抜けて、給料運ぶ 大島　豊三 101
大量工具の買付け 中村　貞喜 102
昭和 20 年度　日記 入江敬之介 103
昭和 20 年　熊航 細川　隆康 105
空　襲 吉長富士男 107
空　襲 久保田　貢 109
板金工場長　即死 柳本　武 109
召集者の貰い下げ 唐木　文穂 111
長崎原爆 佐久間久見 112
健軍飛行場と義烈空挺隊 112
健軍飛行場滑走路造り 熊　中　森　幹雄 115
義烈空挺隊の出撃を見送る 吉長富士男 116
終　戦 116
健軍商店街の発展 小粥　治 117

私と健軍三菱工場　往時茫々（回想記） 120
熊航の思い出 田尾　真一 120
会計検査院による会計検査 唐木　文穂 122
熊航の思い出 村上　隆行 122
三菱、健軍工場の思い出 江藤オトミ 123
健軍三菱の思い出 是枝　京（村上） 123
整備工場の患い出 南　政一 124
岩崎副社長をお迎えして 牧野　元 125
熊航に着任 山田鹿之助 126
健軍三菱の思い出 松崎　尚子（石田） 127

三菱の思い出　今村　秀子（中島）　127
三菱、熊本工場の思い出　山本チエ子（村上）　128
熊航一熊機一西整　新美すみえ（佐藤）　128
熊航最後の入社　田澤　玉雄　129
空　　襲　作　重武　130
工場防衛隊の募集　吉長富士男　130
熊航に出張・・・・・・　塚根　健治　130
熊航へ応援派遣　田中　尚　132
熊航での終戦前後　林　テツ　133
終戦時の健軍飛行場　岡野　允俊　133
健軍校区のうつり変り　健軍小学校　134
熊機時代の思い出・　吉長富士男　135
表彰申請　田口　守蔵　136
熊航に想う　細川　隆康　136
忘れ得ぬ人々　岡山　忠生　137
忘れ得ぬ人々　佐久間久見　137
忘れ得ぬ人々　林　盛雄　138

あ　と　が　き

「健軍三菱物語」の編集を終って　岡野　允俊　139

発刊にあたって

岡野　允俊

昭和 63 年秋、10 年振りに熊本へ行った。熊本空港に降り立っと、その年はめずらしく寒気の早い年とかで、その日もまだ秋だというのに風が冷たかった。

タクシーで健軍まで行く途中道路は直線的で仲々立派なものであった。私は久し振りに見る熊本の発展振りを見落すまいと後席から身を乗り出す様にして前方の風景を見つめていた。行き交う車も、追い越していく車も殆んどなく、車は極めて快適に走った。道路のよさをほめると運転手も誇らしげに、熊本は東部がめざましく発展したと語った。

私は昭和 29 年に熊本を離れて以来今日まで数回熊本に来てはいるのだが、この方面に来たのは今回が初めてであった。まさに 30 年振りに見る三菱跡地である。今日までの日本経済の成長によるものとはいえ、荒れ果てた、草原の様な工場跡と、健軍から東へは如何にも「村」という感じの、少しばかりの農家が点在していた秋津、沼山津という集落しかなかったという記憶しかない。

私は今浦島の様な気持ちで、ただただあっけにとられて北と東をみつめた。そこには高層県営アパート群、税務署、警察署、諸学校等の官公署群が整然と並び秋津、沼山津方面も銀行やレストラン等々賑やかな街並みに変っていた。

昭和 17 年～ 20 年、総坪数 140 万坪にも及ぶ大工場群がアッという間に建てられ、祖国のため一機でも多くの飛行機を造ろうということで18,000人にも及ぶ人々が寝食を忘れて日夜頑張った。その工場、三菱重工業・熊本航空機製作所がここにあったのだ。戦争末期に忽然と現れ、わずか数年しか稼動出来なかった薄命な工場ではあったが、熊本県下は勿論、九州一円から一万人にも及ぶ人がかき集められ、学業中途でペンをハンマーに代えさせられた勤労学徒、家業を投げうってやったこともないリベット打ちをさせられた徴用工の方々、女子挺身隊として否応なしに働かされた花嫁修業中のお嬢さん、当時 16 才～ 25 才前後の若者が血と汗と涙を流して頑張った。それはよきにつけ悪しきにつけ青春の思い出として脳裏に深く刻み込まれている。あの大きな鋸屋根の工場群、軍隊の様な生活を強いられた多数の寮の棟々、それら往時の感傷を誘う工場は今や一変して新しい町に生まれ代ってしまった。その街を行き交う殆んどの若者がこの事実を知らない。

大きな出来ごとがあったところには大程「昔こゝに何々があった」というモニュメントがある。残念ながらこれだけの大事業で、18,000 人もの人間が汗を流し、祖国の為に頑張った工場。そしてその跡地に今日の繁栄があることを知らしむるモニュメントの一つもないのは何とも淋しい限りである。

私は健軍の商店街を抜け、静かな旧社宅街を歩き乍ら何か記念に残しておくべきではないのか、手近かな方法で後世にこの事実を伝えるものはないかと考えた。

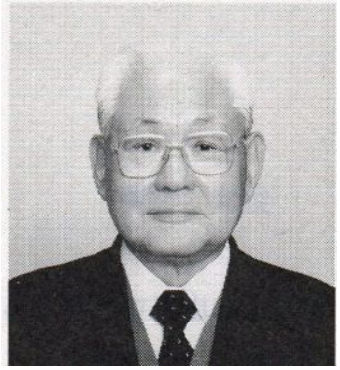
とりあえずは当時この地に、この工場にかゝわりのあった人々の証言位はまとめておくべきであろうと思った。早速、三菱重工本社に照会し、熊航の所史の有無を確かめたが、不思議なことに重工事業所は数々あるが、熊本だけその様な記録がないという返事であ

った。他の事業所は、大体その後何等かの形で生き残り、現在も事業を続けている。
そういう所は後継の事業所が所史を発行しているが、不運なるかな熊航は短命、薄幸な事業所であり、所史をまとめる余裕もなかったのであろうか。

今となっては公的な資料もなく、往時の上層部の方々も既に亡く、今更所史として公刊出来るものをまとめることは不可能であろう。

ならば古老の語り継ぎでもあるまいが、当時の関係者から聞き集めた話をまとめ、その昔、こゝでこんなことがあったのだ、熊本市東部発展の要因は何辺にあったのか、当時こゝで苦労を共にした人々の、共通の語り草として懐旧の話題にでもなればと願い「モニュメント」に代えてここに「健軍三菱物語」をまとめてみた。往時を回想いただければ幸いである。

「健軍三菱物語」発刊に寄せて



唐木　文穂

昭和 16 年 9 月当時の陸軍航空本部から「大型機月産 50 機」の生産拡充命令を受けた三菱重工業は、熊本市健軍地区に熊本航空機製作所を建設した。然し終戦と共に飛行機の生産は禁止され、その後熊本機器製作所として農機具生産に民需転換したが、時に利あらず経営難に陥り、工場及び厚生施設を井関農機に譲り、昭和 24 年 9 月熊機は閉鎖のこととなり、その後整理清算の段階に入り昭和 29 年完全にその幕を閉じた。思えば誠に短い生涯であった。そのためか「三菱重工業株式会社史」には全巻 816 頁のうち熊航、熊機の記事は僅か 3 頁に過ぎない。然し三菱の熊本工場は閉鎖されたとは云え、熊本に残した三菱の足跡は大きく、その後の熊本市発展のためには大きく寄与している。然し乍ら熊本健軍地区に三菱の工場のあった事は、年を経るにしたがって忘れられ、また覚えている人は少ない現状である。

岡野允俊氏は熊本工場の最後迄熊本にとどまり、その整理にあたった仁である。昨年三菱重工を定年退職され、その機会にライフワークとして熊本航空機製作所がどの様な働きをしたかを書き残そうと「健軍三菱物語」の執筆に取りかかられたが、如何せん閉鎖場所のことと又年数も経っていることから、資料もなく、己むなく当時の就業者の思い出や又記憶にたよらざるを得ず、あちこち聞いてまわられた。この苦労は並み大抵のことではなかったと思う。

私は三菱に入社して間もなく熊本工場の仕事を仰せつかり、熊機の閉鎖迄兵隊にゆくこともなく熊本の仕事に従事した。言わば熊本工場の生まれる時からその墓場迄その仕事に従事した訳である。正に私の青春は熊本工場と共にあった。この意味でこの「健軍三菱物語」は私にとっては誠に貴重な財産である。と同時にこの「健軍三菱物語」によって、熊航、熊機の歩いた道を正しく理解される事を願うや切である。

平成元年 12 月 1 日

忘れられぬ健軍
「健軍三菱物語」発刊に寄せて

岡山　忠生

ルソンの激戦地から、不思議に生きて帰って健軍の三菱（熊本の人達はこう云っていた）に行ったのは昭和 21 年の 1 月。余りにも変り果てたその姿に、唯呆然となったと言う他詞がなかった。爾来 40 有余年。“くまもと経済”の松岡泰輔社長から「熊本東部発達の基因である健軍三菱のことを書いておきませんか」と薦められていたが、此の度、小牧市の岡野氏より思い掛けぬ記事依頼があり、その苦労を多としながら一切を同氏に任せていたのが本書の出版と言うことになった次第である。

寄稿した懐しい人々を発見して、健軍三菱の昔に戻った気がする。三菱の清算が完了した時、健軍三菱の記念になるものを、例えば市電終点の「雨やどりの小屋」でもと願ったが無駄であった。後に井関農機としてせめてもと思い、健軍派出所の土地を寄付したが、もう忘れられていることと思う。

我々は、飛行場 100 万坪、工場 100 万坪、社宅 100 万坪の健軍三菱と言っていたが、それが熊本市東部発展への大きな足掛りになったことは否定出来ない. 県庁前の東へ伸びた直線道路、水前寺鳥居前の終点を延して健軍迄の道路と電車、工場跡地の官公庁、住宅群、変り果てた三菱跡地である。

三菱工場建設に当って蔭の力となられた森　慈秀氏（元県議、大矢野町長）が健軍ではなく、他の候補地に決めていたら、熊本は西又は南へ伸びたかも知れない。

健軍の三菱は熊本県民の殆んどを巻き込んだ。然し経済的にも、政治的にも大きな足跡を残した。熊本の中心は東方へ移り、行政の中心も白川を渡った。

忘れ去られることは良いことかも知れない。然し忘れてはならないことも多々ある。戦後の復興に汗水を流した青春時代の健軍。 40 有余年の時は流れた。然しまだ我々の心の中に生き続けているものがあることを忘れてはならない。熊本市東部の著しい発展の基となった健軍三菱の歴史を詳さにまとめてくれた岡野　允俊兄の労苦に対し深く感謝したい。

平成元年 12 月 1 日

熊本航空機製作所建設
熊航建設決定まで

昭和 16 年 9 月、陸軍航空本部より三菱重工業株式会社に対し「大型機月産50機、航空発動機 1500 馬力級月産 450 機の生産拡充命令が出された。このことは重工本店より直ちに、航空機機体については名古屋航空機製作所に、発動機については名古屋発動機製作所に示達され計画書を作成するよう指示された。　このため名航で陸軍軍用機を製作している第二工作部では、守屋学治、小山荘之助、田尾真一の三人の技師が中心となり計画をとりまとめることとなった。既に名古屋航空機製作所は増産拡充のため新工場を建設する余地はなく、他に工場立地を求めざるを待なかった。このため青森から鹿児島までの陸測五万分の一の地図を全部揃え検討することになり、又工場レイアウトも併せて検討されていった。

因に海軍関係は陸軍より 1 年早い昭和 15 年、既に拡充命令が出され、岡山県水島町海岸に新工場を建設することとなり建設工事が始まっていた。

地図を見る前に航空機産業というものは総合事業であるため裾野が必要である。即ち、下請け工場や協力工場が身近かな場所にあり、それらを十分利用できることが必要であった。こうなると工業地帯である中京、阪神地区が好都合であるが、何せ広大な敷地を必要とするため、これらの地区での建設は不可能であり、又敵の攻撃を受けた場合を考えると軍需産業、特に航空機工場の集中化には問題があった。　従って三菱としては協力工場、人的資源、土地等の面から新設される工場をうまく運営していける場所として瀬戸内の姫路地区を選び陸軍省に申し出たのである。陸軍省はこれに反対し工場を熊本に建設することを強く要求した。

米英に対する宣戦の詔書

天佑ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ践メル大日本帝国天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米国及英国ニ対シテ戦ヲ宣ス朕カ陸海将兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ従事シ朕カ百僚有司ハ励精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ尽シ億兆一心国家ノ総力ヲ挙ケテ征戦ノ目的ヲ達スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑々東亜ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄与スルハ丕顕ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳拳措カサル所而シテ列国トノ交誼ヲ篤クシテ万邦共栄ノ楽ヲ偕ニスルハ之亦帝国カ常ニ国交ノ要義ト為ス所ナリ

今ヤ不幸ニシテ米英両国ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民国政府曩ニ帝国ノ真意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有余を経タリ幸ニ国民政府更新スルアリ帝国ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提携スルニ至レルモ重慶ニ残存スル政権ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尚未タ牆ニ相鬩クヲ悛メス米英両国ハ残存政権ヲ支援シテ東亜ノ禍乱ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス

剰ヘ与国ヲ誘ヒ帝国ノ周辺ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戦シ更ニ帝国ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ与ヘ遂ニ経済断交ヲ敢テシ帝国ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシムトシ隠忍久シキニ弥リタルモ彼ハ毫モ交譲ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々経済上軍事上ノ脅威ヲ増大シテ以テ我ヲ屈従セシメムトス

斯ノ如クニシテ推移セムカ東亜安定ニ関スル帝国積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ帰シ帝国ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破砕スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神霊上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亜永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝国ノ光栄ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日

各国務大臣副署

陸軍側が熊本に固執した理由はいろいろ推察されたが、その一つに重工業地帯を避け、且つ少しでも戦場に近いところにすべきだとか、熊本は九州の中央であり乍ら産業のない悲しさから勢力はどんどん北九州へ流れていく、ここは願ってもない機会ではないかということで熊本出身で当時軍務局長の要職にあった武藤　章がこの巨大な工場を熊本に誘致すべきであるという力が働いたとか、憶測の域を出ないが色々な説が多々ある。

尚、陸軍が熊本に飛行機工場建設を固守するのに見逃せないのは、当時陸軍省航空本部の嘱託をしていた森　慈秀氏（故人）の働きである。かねて熊本こそ大東亜共栄圏の中心都市たらんという構想を抱いていた森は陸航本の航空機拡充命令の話を聞くや、チャンス到来とばかり熊本に三菱を誘致することを裏面から陸航本に強く働きかけたのではなかろうか。

陸航本は熊本を固守するについて黒石原、旧幼年学校跡地、健軍地区を候補地としてあげて来た三菱として一番心配した協力工場態勢については、九州地区の工場を自由に使ってよいこと、又下請工場を熊本へ連れていってもよいということが付け加えられていた。

このように機体工場を熊本に建設せよ、という陸軍省の要望は強く、三菱が提案した姫路の要求は認められなかったのである。

昭和 16 年 12 月下旬、現地視察ということで陸航本　伊藤中佐、名航からは大塚第二工作部長、守屋技師、小山技師らが熊本の三候補地を視察した。その結果、黒石原と幼年学校跡地にはそれぞれ難点があり、最後にみた健軍地区は、はるか東に阿蘇を望む遠大な地域であり、土地造成にも殆んど手間がかからず、かねて会社として検討していた工場レイアウト図からみても、ここが一番適切であるということになり、視察団はその日宿舎に帰って地図の中に赤線で四角形を画き、工場建設用地は熊本市郊外の健軍と内定した。

昭和 16 年 12 月 31 日であった。

この熊本航空機製作所は「兵器等製造事業特別助成法」に基く官設民営の工場として建設されることになった。

官設民営とは読んで字の如く官（陸軍）で建設した工場設備を民（三菱）の手で経営するというやり方である。だが一言でいえば簡単だが、工場を造ってもそれを運営していくには社員の寮、社宅、或は訓練のための学校等、たくさんの付帯施設も必要になる。そのため、こゝまでが官の負担で、これは民の負担という線引きが難しい。

結局、三菱は陸軍航空本部と種々折衝の結果、青年学校、実習工場、病院、社宅、寮、クラブ等の福祉厚生施設は民設（三菱の負担）ということになった。そこで工場施設及び飛行場敷地は陸軍航空本部が直接地主と交渉し、買収手続を進めることとなった。民設部分は官が交渉した条件にならって三菱で進めた。

一方、工場敷地の整地、建物及び機械設備にどの位の予算が必要かという設問が陸航本より三菱に出された。三菱（名航）は先に第二工作部の工場を建設した時の資料をもとに一億五千万円を算出し、大塚部長の命を受けて守屋技師が陸航本の担当主計少将に説明した。その主計少将は終始、黙って守屋技師の説明を聞いていたが最後にひとことだけ発言した。

「一億五千万はちょっと高い。何とかもう少し減らせないか」と。

守屋技師は大塚部長に相談する時間もなく決断を迫られた。

「一挙に完璧な工場の建設は無理でしょう。出来るだけ統合、合理化を図るなど出来る限り切りつめ、多少の困難はあるが、早期に着工致したいので一億二千五百万円では如何でしょう。」と提案すると

「よかろう、それでいこう。」ということになり、総工費予算が決定した。
この数字が熊本工場の建物、機械設備の予算となり、年度別に実施されていったと思われるが、各年度別の予算数字は資料になく不明である。

尚、飛行場は陸航本が直接、西松組に発注し建設された。この飛行場建設には使役として近郊の中学生低学年の生徒や、勤労報士隊、捕虜が使われた。が何処からの捕虜か、又どれ位の人数であったのかは定かではない。（一説によると壕洲兵という説もある。）

尚、兵器製造事業特別助成法、第四条による設備（建築物）の建設命令が昭和 17 年 10 月 26 日付で陸軍大臣・東條英機から三菱重工業株式会社　取締役社長　郷高　潔宛に出されており発動機工場の分については詳しく記述されているが、航空機・機体工場については「省略」と書かれており、何故省略になったのか不明である。或は熊本工場の建設費に関する資料の提出が遅れていたのかも知れない。

ついでながら付記しておくと、熊本工場を略号「カミク」と呼んだのは官設・民営・熊本工の頭文字をとったものである。

工場建設用地が健軍に決定すると同時に、先に並行して進められていた新工場のレイアウトもほゞ完成していた。

これは当時、守屋学治技師、小山荘之助技師、田尾真一技師が中心となって計画が進められていった。

その基準資料となったのは名航東敷地に陸軍の機体工場（第二工作部）を建設した際の資料及び経験によるものであった。何せ大型機月産 50 機となると出来上っていく機体がどんどん流れていくというにふさわしい製造工程に沿った工場が必要であった。名古屋の様な狭い土地に、継ぎ足して造るのとは違って、広大な土地に、零から建設するということであれば中途半端なものは出来なかった。折角建設する以上は、合理的で、能率的で、環境的にも優れたものを造るべきであった。そして何よりも恒久的に熊本市のためになる工場にすべきである等々、白紙に描く計画図は将来を見込んだ理想的なものであった。

もともと熊本は加藤清正公が造った、非常に土木の進んだ街である。その様な土地柄に似合った計画を、又清正公の思想を生かし、且つ将来何らかの形で残り、熊本市の発展に寄与できるものにしておく必要があった。

工場敷地に予定されていた所は、一面西瓜や麦畑で、こゝに工場敷地を真東と真南の長方形にとった。然しよくみると阿蘇に向って 12 度くらい振れていることが判ったので、工場建屋も 12 度位、それぞれ振れた配置にレイアウトした。

これは、こうすることによって、工場の真ん中の大通りのどこからでも阿蘇連峰がよく見えるようにするためであった。

だからこの大通りを「阿蘇見通り」と名付けようなどと計画に当った三人の技師は夢をふくらませていた。

土地買収始る

新工場設立に当ってはあらかじめ立案されていた計画書によると主工場 40 万坪、飛行場が 100 万坪、寮、社宅等厚生施設が 40 万坪という広大な土地が必要であった。偶々官設、民営工場であったため、買収用地の総括窓口は熊本市役所、買収用地の発表、申渡しは陸軍当

局がそれぞれ担当した。

昭和 17 年初め、先づ各地主さんに市長名で日時、場所を指定した召集令状が出され、当日市公会堂に知事、市長、地元議員参列の下に説明会が開催された。会場周辺には憲兵、警察官を配し陸軍航空本部の担当官、松沢主計少佐が胸に勲章をつけた正規軍服姿で壇上に立ち、いとも厳粛な口調で話を始めた。

その要旨は今度、時局の推移に鑑み、当地に軍需工場を建設することになった。各位には祖先伝来の土地を手離されることは誠に心中察するものがあるが、時局の重大性をよく認識せられ、「土地への赤紙」と思って賛同を得たい、詳細については市当局より説明がある。買収用地の位地は概ね別図の通りである」と予め用意してあった略図を示し、甲地区、乙地区を発表、それぞれの坪当り単価を発表した。それは最低の畑三等地が坪当り 2 円 40 銭で、最高の宅地で坪当り 10 円であった。

尚、従業員の社宅等厚生施設用地の買収については、後日三菱が行なうが価格等については、本日軍がお願いした条件と同一で応じて貰いたいと付け加えられた。

引続いて県知事、ならびに市長からも国家の要請に応え、売渡しについては承諾方懇請があった。戦局酣のことであり、耕作者等皆理解ある態度で協力し異議をとなえる者は一人もなく買収発表会は終了した。

さすがに略図を示された時、地主さん達はざわめき、身体をのり出して「全部やられた」「思ったより少なくて済んだ」「帰って爺さん、婆さんにどう話そうか」「から芋植えてもよかろうか」等さゝやく声も聞かれた。

農家の土地への執着が並々ではないと思うだけに地主さんの心中は図り知れないものがあった。

後日、工場の鉄柱が二、三本建ちはじめた頃、一人の年老いたお百姓さんが長柄の鍬に身を寄せて、変りゆく土地を眺め、秋の夕陽に長く吾が影を引き、じっと見つめていた姿が如何にも印象的であった。

厚生施設用地の買上げ

三菱は早速従業員の寮、社宅等厚生施設用地の買収を進めていった。これは官設民営工場という性格上、工場、飛行場については軍が買収したが、社員の厚生施設用地については三菱が買上げることになったためである。厚生施設とは具体的に青年学校、グランド、実習工場を含め、市電通りより南側一帯、現市民病院及び湖東町の一部及び水前寺帯山地区であった。

先に市公会堂で説明のあった単価を基準に三菱は個別に各地主と交渉を進めていった。

昭和 17 年 8 月 24 日付で熊本工場付帯厚生施設用地買収の伺出が重工本店に提出され、同年 9 月 14 日付で認許の通知があった。その内要は次の通りであった。

熊本工場付帯厚生施設用地		409,672坪3	予算	1,520,870円
(1)職員関係施設用地		101,546坪31		578,755円
宅　　地	(10円ノ坪)	866坪31		8.663円
畑　一等甲	(6円／坪)	14,352坪		86.112円
畑　一等乙	(5円／坪)	86.268坪		431,340円
墓　　地	(5円／坪)	60坪		300円
立　木　代				2.740円
耕作物、墓地移転補償費				27,540円
不動産取得税及登録税				22,060円
(2)　工員関係施設用地		231,775坪72		737,443円
宅　　地	(10円／坪)	703坪72		7.037円
畑　二等乙	(3円／坪)	83,032坪		249,096円
畑　三等甲	(4円ノ坪)	7,255坪		29.020円
畑　三等乙	(2.4円／坪)	135,633坪		325.520円
素　　地	(5円／坪)	36坪		180円
立　木　代				7,250円
耕作物、墓地移転補償費				62.850円
不動産取得税及登録税				50.350円
(3)青年学校その他用地		76,350坪		204.672円
宅　　地	(10円ノ坪)	197坪		1,970円
畑　三等甲	(4円ノ坪)	1,459坪		5,836円
畑　三等乙	(2.4円／坪)	5,530坪		145,244円
立　木　代				1,060円
耕作物、墓地移転補償費				20,700円
不動産取得税及登録税				16.590円

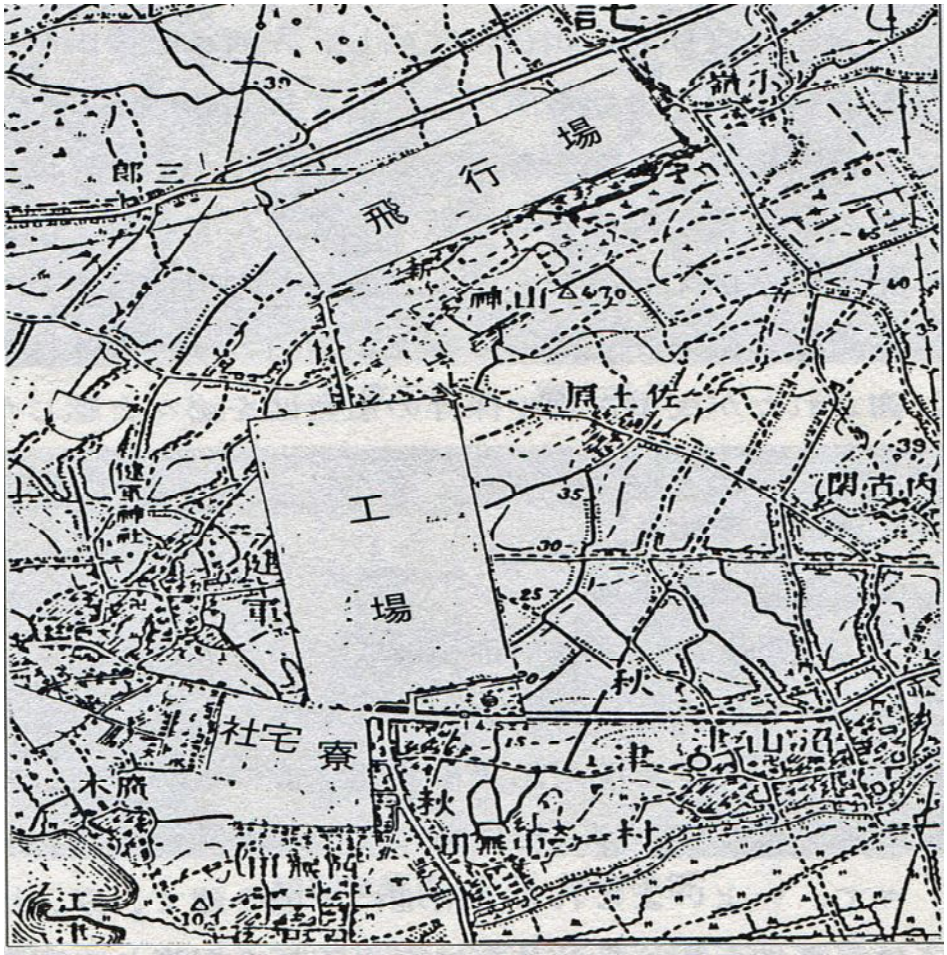
(4)　買収謝礼金（土地価格協定委員等）	20、500円
(5) 懇談会費	5，000円
(6) 用紙・印刷費　その他	3.500円

先の市公会堂における説明会のあとを受けて譲渡地域、価格、代金支払等についての詳細打合せが昭和 17 月 10 月江津荘において行われた。

江津荘の大広間に五百余人の関係者を四日に分けて参集願い、各人毎の譲渡地域、価格、代金支払等について詳細に説明し、承諾を求め極めて円満裡に調印が成立した。然し土地買

収については、当時農地管理令、価格統制令等の適用があり、その認可を必要とするので代金は前期法令の許可があるまで安田銀行・熊本支店に凍結することとし、売渡承諾の調印時には銀行通帳を各人に渡すということにした。

工場、飛行場、寮、社宅用地は　1 － 5 図の通りであった。



1 － 5　工場，飛行場、寮、社宅用地

建設工事始まる

(1)) 工場建設工事

工場用地、厚生施設用地の買収調印は順調に進んでいった。土地買収に当っては、今風の考え方からすれば当時は有無を言わせなかった。反対でもしようものなら国賊扱いにされかねない時勢であり、とても反対出来る雰囲気ではなかった。先づはこれも国の為ならという滅私奉公の気風の強い熊本ならばこそであったのかも知れない。

さて、いよいよこれらの用地に工場を建て、寮、社宅を建てることになったが、その施行に当っては三菱地所㈱が設計並びに工事監督を担当し、実際に着工するのは、工場建物は「竹中組」、厚生施設は「大林組」が担当することとなった。昨今の様にブルドザーやダンプカー等

土木機械のない時代である。健軍地区は比較的平たん地とはいえ、地ならしから始めなければならない。これらに要する労務者の確保も大変な仕事であった。

要所、要所にこれから先、長期こ亘って工事の中核となる飯場のバラック小屋が建てられ、工事推進に万全の態勢が整えられた。

昭和 17 年 6 月 15 日、熊本の梅雨は男性的といわれていたが、この日はこの大工事の行末を祝うが如く梅雨の間の晴々しい陽が輝いていた。

熊本土地買収の思い出

有賀　秀一

入社後七年、土地関係の仕事も漸く判りかけた私が青春のエネルギーを傾けて担当した のは、熊本工場の付帯施設用地の買収であった。昭和 17 年、熊本市健軍町に陸軍が航空機の工場並に飛行場建設をするに当りこの工場の経営を担当する三菱重工としては従業員の社 宅、寮等の用地が必要となり、工場近接地の土地約 40 万坪を買収することとなった。

事務担当としては夏の真最中に所有権、抵当権等の確認調査、税務署の地籍図調査、あるいは家屋、 農作物、立木、墓地などの地上物件の現地調査等、限られた日程内に仕上げるために苦しい作業を続け、昭和 17 年 10 月、江津荘の大広間で各人毎の手続を無事終った時は思わず力が抜ける様であった。

土地の売買については、当時いろいろな統制令があり、勝手に処分は出来ず、その許可が下るまで支払いを銀行に凍結し、売渡承諾の調印時に銀行通帳を各人に渡したのである。これを特に申し上げる所以は、 20 年程前、熊本の旧地主の一人が土地代金を貰っていないので時価に換算した額をもって支払方申出があり、遂に訴訟沙汰になったことがあった。代金支払の証拠書類等はすべて戦災で焼失しており、旧会社が困り抜いている由仄聞した私が、前記事情を伝えたのであるが、偶々参考用に私有していた関係書類の写が端緒となり、銀行を調査した結果、支払済の事実が明白となり事件は無事解決をみて、旧会社当より大変感謝されたが民事書類の保存の重要性を泌々と感じた。

三菱熊本航空機工場の地鎮祭及び起工式が陸軍省及び三菱重工業㈱の共同主催で行われたのである。この日、朝から黄色い旗をつけた陸軍の自動車や、官公庁や一般の乗用車が健軍の工場敷地内に続々とつめかけて来た。

午前十時、起工式は張りつめた空気の中で厳粛に始められた。斉主は陸軍航空総監兼本部長、陸軍航空本部第三部長、三菱重工業㈱取締役社長、同常務取締役、三菱重工業㈱名古屋航空機製作所長であった。

主たる来賓は熊本県知事、熊本県会議長、熊本市長、熊本市会議長、秋津村村長、広畑村村長を始め、県、市有力者、地元有力者等であり、その他多数の出席の下に式は神式で進められ、大工事の無事を祈った。

来賓側から熊本県知事、熊本市長、地元側から秋津村村長、広畑村村長がそれぞれ祝辞を述べた。それは何れも大型企業の少ない熊本に三菱が来て県市の発展に大いに寄与してもらいたい。又地元代表も広漠たる農地に、こつ然として現われた大工場に歓迎の意を表したいという

ものであった。

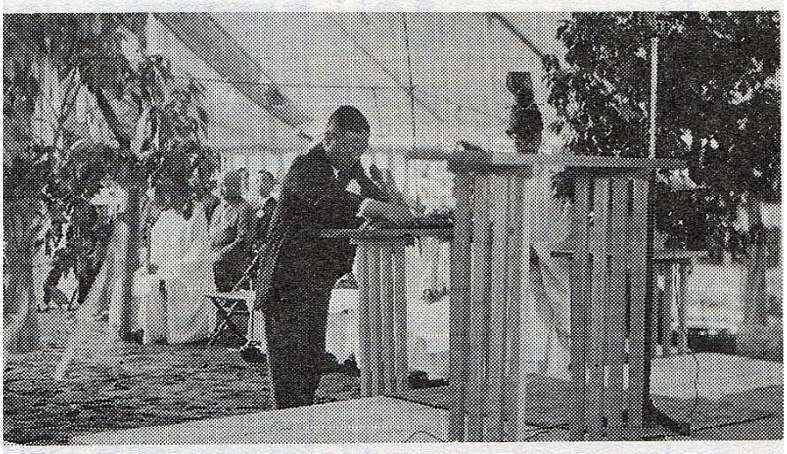
この日からのどかな田園地帯に、朝早くから夜遅くまで、建設工事の槌音が鳴り響いていった。

工事は健軍工場、飛行場、青年学校、寮、健菱園社宅、水菱園社宅と、それぞれの拠点を中心に、ほゞ同時に着工し、作業が進められていった。

起工式会場全景

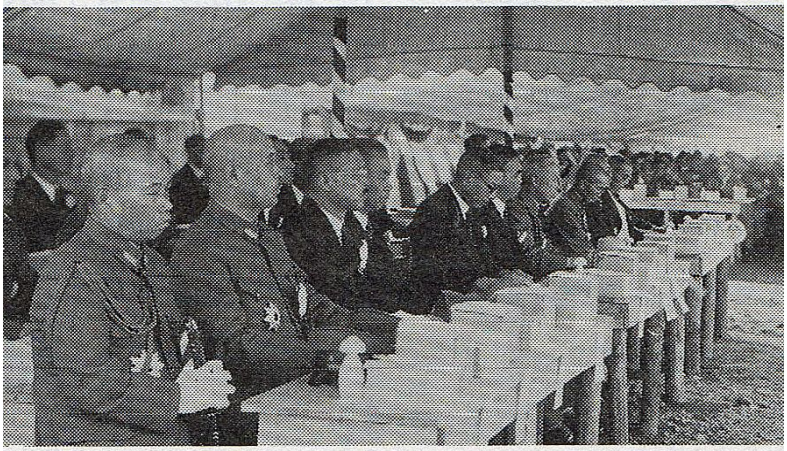
工事の手順として当然、建設資材を搬入する搬入路の着工から始まり、建屋、道路等の測量、くい打ちが随所で進められていった。

健軍の土地は冬になると霜柱が立ち、歩くとザクザクと音がした。そして日中の陽で、それらの霜柱が溶けて地面はぐちゃぐちゃになった。そんな中を工事は着々と進められていった。



三菱重工業㈱　郷古社長

軍の監督官は作業の進捗状況を見て廻り、怠けた労働者がいると怒鳴り散らしていた。熊本北警察署からも特高警察官が秘かに派遣され、挙動不審者、怠業的な労務者をチェックしていた。各工事現場事務所の女子事務員に、秘かに一冊のノートが渡され、挙動不審者、怠業者、その他なんでも気付いたことを書いて報告するよう依頼した。



特別来賓席　手前　河邊中将

これだけの膨大な工場が一挙に工事を始めたのだから、その労働力も相当量のものが投入されたことと思われるが、その経緯は当事者である竹中組、大林組の記録をみないと判らない。とに角、猫の手も借りたい折柄、飛行場作りなどは近在の婦人会、児童、

学徒などの勤労奉仕に依るところ大であったと思われる。又一部の作業はオーストラリア、ニュージランドの捕虜も使役に使われていたという。

工場の建設は軍の委任を受けて三菱が担当していた。予算、発注等の資料もなく定かではないが工事代金は官から支払われたものと思われる。18 年夏を過ぎる頃から、あちこちの工場の外骨が立ち上り、既でに外郭だけは出来上っていた工場もあった。これらの工事監督は三菱地所㈱が実施し、軍がフォローしていた。

名航•熊航の思い出

大塚　敬輔

昭和 9 年 3 月、真夜中に「工場が火事で大変だからすぐ来い」と就寝中に起され、周章狼狽、社宅の上司の方々と車でかけつけたところ南限館まで来たら吾が金属工場が大火災で燃え上っているのが眼の前に見えた。現場についても施す術もなく、興奮して只茫然と眺めて居るばかり、気のみあせって何も出来ず、その内に工場は全焼してしまった。

工場ではユンカース式超重爆撃機の完成間近かな二号機が全焼してしまった。この機体は陸軍が極秘製作中のものだからこれは大変なことであった。社運はもちろん国運にも影響しかねない一大事である。これ程の大過失、大失態はない。その責任の重大さを痛感し、血気にはやり興奮のあまり火中に飛び込み、死を以ってこの失態を謝すべきであると思った。しかしこの瞬間、ふと頭に浮んだのは小学生の頃学校で教わった忠臣蔵の唱歌で、大石蔵之助の「されど死するはいと易く、生くるは難きならいなり」の名句である。こゝに冷静を取り戻し、今はまだその時機ではない。原因がはっきりしてからでないと、当時はスパイに関する取締りが非常に厳重であったので、逆に何かスパイ計画があって第三者にでも放火させておいて、自分は白殺したのではないかとの疑いでも受けるようなことがあってはとんでもない逆効果となり、間尺に合わない（こんなトロイことがあらすか）と気が付き、原因がはっきりしてからその責任をとっても遅くはないと、動揺する胸を押し静め反省した。

翌日から早速原因調査が始ったが、軍はスパイの仕業ではないかとの疑を濃くし、私は責任者として名古屋憲兵隊に連行され、スパイ関係の取調べを主として猛烈な訊問を受けた。その後も連日のように呼び出され、色々訊問されたが、心当りがないため原因が判明するまでは名古屋市外に出ることを禁止された。結局、原因は工場塗装係の燃料とストーブの不始末の結果であったと判明し、スパイその他の一切の嫌疑は晴れた。

こんな前代未聞の大事故ではあったが、会社から受けた処罰は予期に反して極めて軽少なる減給処分だけで済んだのでその大赦に対し感激した。

熊本工場は一応独立した製作所でスタートしたが、実際内容はそうでもなかった。工場も未完成のところを度々空襲を受けて到底、軍の厳しい要望には副いかねるので、名航の分工場として、又姉妹工場として万事名航の援助を受けつつキー 67 を辛うじて数機組立ることが出来た位で、到底自力で立ち上ることは出来なかった。

その内に敗戦で閉鎖となり、一挙にして絶望のどん底まで叩きのめされたことは如何にも残念至極であった同所の急速なる立上りのために、名航は勿論、オール三菱挙げて各場所からも有能な人材を多数割愛してもらい、又部品、材料、機械等も廻してもらう等、数々の支援には感謝している。たまたま終戦時、私は定年制の年令になっていたので、同年 10 月定年退職

となり三菱を去った。国家と運命を共にしたあらゆる過去の活劇も、これ皆、夢の如きであった。

名航・菱光会「往時茫々」より

従業員数の推移

熊航の従業員は一体総員何人いたのか？という質問に対し各人の予想で答えてもらったところ、あれだけの大きな工場だから最盛期には学徒・挺身隊も含めて 5 万人位か？という人から下は 1 万人は居たであろうと随分巾があったが当時の自分の廻りの人数をみて推測した結果、こんなバラツキがあるのであろう。

然し今となっては年度別に把握された資料もないので明確な数字は不明であるが関連諸資料で判断すると次の通りである.

昭和 18 年 3 月現在

	名航からの転勤者	現地（熊本）採用者
職　　員	若　干　名	若　干　名
工　　員	180名	300名
青年学校生徒	若　干　名	1．500名

昭和 19 年には名古屋から転勤した基幹社員を中心に、現地採用後、名古屋で訓練を受けて帰って来た者、熊本要員として名古屋で新規に採用された者、新規採用工員、徴用工、青年学校生徒、勤労動員学徒、女子挺身隊を始め応援の軍人等加速度的に増加していった。

戦後、熊本民生部長からの照会に対し、昭和 30 年 2 月、三菱重工業㈱　総務部総務課長より次の通り報告されており、これが最盛期の公認人員であろう.

従業員総数（昭和 20 年 8 月現在）

尚、戦災死亡者として三砂応吉氏以下 29 名となっている。

名航から熊航に転勤した基幹工員は、名実共に熊航の中心となって現場の直接作業を遂行すると共に、熊本で新規に採用する工員を指導することを目的としていた。又、職員については名航から沢山貰うことも出来ず、結局熊本工場要員として新卒者を採用し、名航で教育を受けたあと熊本工場へ送るという状況であった.

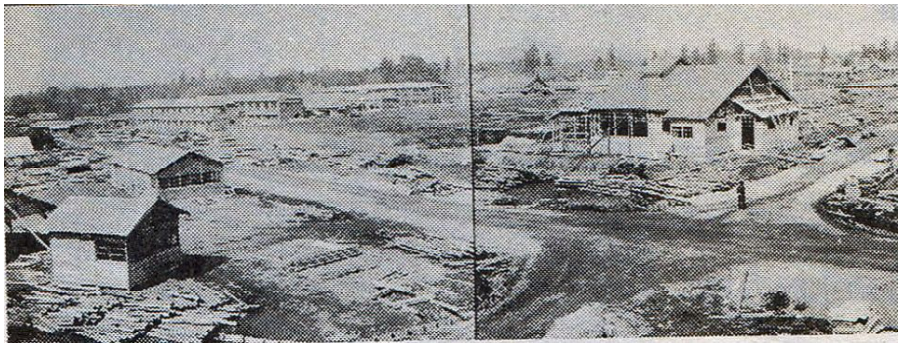
被徴用者数	女子挺身隊	動　労　動　員　学　校			合　　計
		大学、高専男子	中学男子	中学女子	
12．525名	2．012名	806名	2,095名	1,520名	18,958名

厚生施設建設予算取得の苦い思い出

唐木　文稔

寮、社宅等厚生施設の第一期工事が着々進んでいる最中に第二期工事に資する予算申請に当り、三菱地所㈱の岩間　旭氏と私とで重工本店にその説明に行った。松井常務、加藤経理部長、牛丸取締役、河部顧問の前で説明すると、建設費の査定に当っている牛丸、河部両氏より「建物の屋根を瓦一枚分狭くせよ」と指示された。確かにそうすれば家一軒につき数十枚の瓦が節約になる。　然し、建物はこの間にもどんどん建築され、工事が進んでいるので、こう云われたからとて建築済の建物についてはどうしようもない。

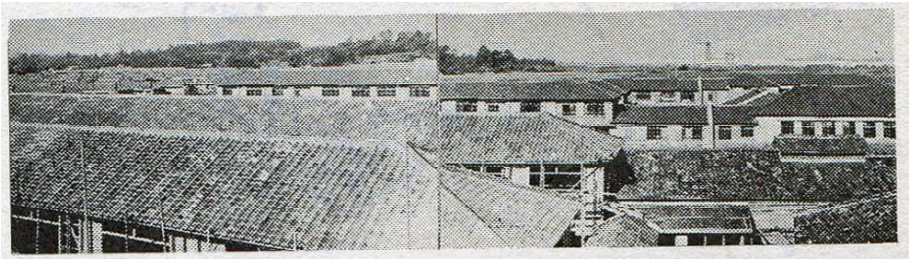
そこで既に建築済の建物もあるので、末建築分については御指示通りとするが、建築済の建物については今更その様なことは出来ませんと反論した。すると松井常務始め一同は「本店の認許なくして工事を始めるとはけしからん。熊本は私生児である。帰ったら所長によくこのことを報害せよ」ときついお叱りを蒙った苦い思い出かある。



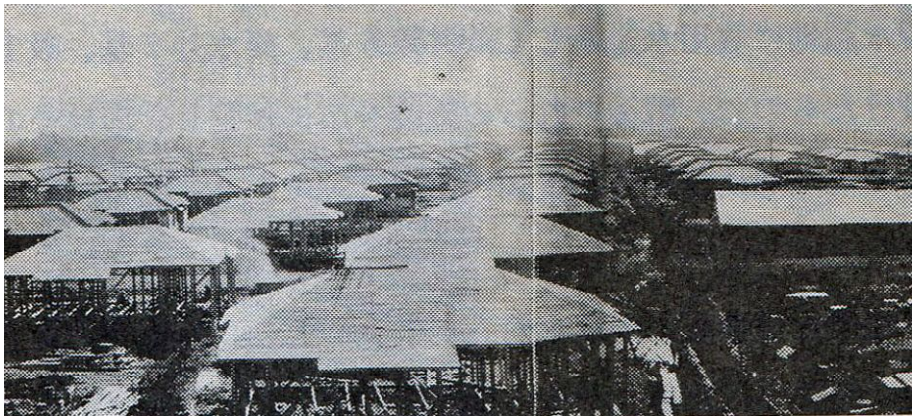
右
水菱園公衆浴場

左上
報国寮（現市民病院）

左
水菱園社宅用地



寮



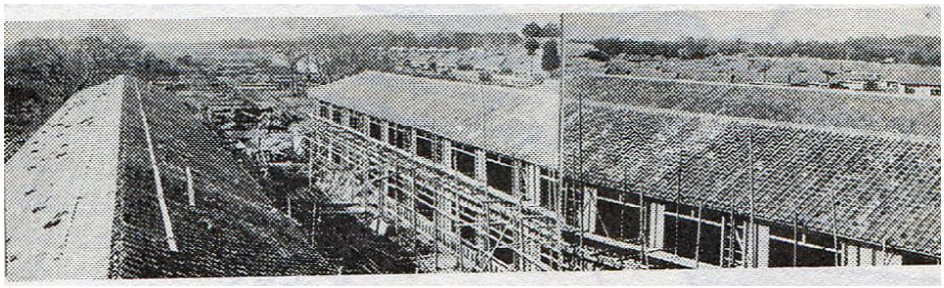
第2期
水菱園社宅

寮
左 8 寮
右 5 寮

遠景
工場

左
健 菱 園 社 宅

中央右
寮全景



8寮より
健菱園を
社宅を眺む

熊航へ転勤

中村貞喜

昭和 18 年 3 月、熊航要員として単身、名古屋から出発、途中最後のぜいたくを許してもらおうと倉敷で途中下車、一泊し一度は見ておきたかったが機会がなくそのまゝになっていた大原美術館を見学し、数々の名品をみて久々に心洗われる思いをして翌日熊本へ行った。まだ受入施設も不十分で、とりあえず江津荘に寝泊りすることになった。

18 年 3 月～ 9 月までの半年間を江津荘から健軍の工場へ通った。工場はまだ工事中であり、名航よりの基幹社員、指導員と共に設備、器材等の受入準備に着手していた。当時は仮に総務部企画室に所属していたが、本格的な作業に入ったのは 19 年になってからである。

昭和 19 年 2 月頃より、従業員 25000 人という計画に基き、諸搬の設備、器材、材料等の買付けが計画され、4 月頃より本格的に動き出した。その作業の一つとして機械工具及び消耗副資材の必要量を算出し、その申請を軍需省へ提出するため書類の作成を急いだ。当時名航の中にも臨時熊本工場建設事務所があり、そこでも熊航でのこの資料を作成した。

同じ目的で作った申請書を比較したところ当方（熊本）提出資料と名航で作成した資料とで

は例えばドリルの数量において大差があった。熊航提出書類は名航作成のもめより数倍も上廻る数量であった。

名航ではどっちの算出量で申請すべきかに迷い当方に問合せて来たので大きなものはとも角、細いドリル等、どれ位の損耗を見込んでおくべきか見当もつかない。従ってその分やや上乗せしてある。以後の交渉については名航に任せると回答した。名航では当方（熊本）提出の数量で申請したとのことであった。やがて軍需省から呼出しがあり、熊本は天文学的な数字を出して来たが、再検討しその妥当性を説明せよといって来た。

購買課担当者が東京から帰って来たので、再度協議の結果当方としては訂正の余地はないので再度そのまゝの資料で交渉し、それでも駄目なら先方が当方の数量を天文学的数字という以上は何かこれと比較するデーター（熊本の工具はこれだけあれば十分と見積られた）がある筈である、とに角先方の腹案であるその資料を入手したい、という気構えで再度軍需

省へ出向き、その線で交渉を進めたらあっさりと承認され気が抜けてしまった。（後日これは名航と熊航とで算出基準のとり方が違っているためと判明した。）

熊航へ転勤のころ

小粥　治

名古屋からの転勤は、基本的には 18 年 4 月、同 10 月、19 年 4 月……という様に段階的、集団的に転勤して来た。そして早い順に社宅の北の方、即ち（ほ）の方から入居していった。

私は 18 年 10 月に転勤旅費 13 円也の支給を受け熊本に着任、出来上ったばかりの 3 寮に入った。転勤して来た時、だだっ広いところに、同じタイプの社宅がずらりと並び、それ以外には何もないところで、これはえらいところへ来たというのが実感であった。工場も或る程度出来ていると聞いていたが、確かに或る程度であって、まだどんどん工事中であった。工場建物も未完成であり、当然仕事も出来ず、専ら青年学校の実習指導に当っていた。 19 年初めには工場も大分出来上って来たところで、やっと飛行機の作業に着手した。

当時、組立工場より整備工場に至る道路の工事をオーストラリヤ、ニュージランドの捕虜が就労していたし、秋津の方には飯場が続いており、相当数の労務者がいた。健軍のバス停留所は森本酒店のところにあり、そこから右手に上って行くと派出所があり、あたり一面、セイタカアワダチソウが人の背丈より高く生い茂っており、社宅も一部建設中であり全戸数揃ってはいなかった。もともと水前寺一健軍間には旧部落が点在する程度で健軍バス停から木山街道の南側には家は殆んどなかった。途中松島旅館というのがあり、その前の路が旧道（木山街道）であった。

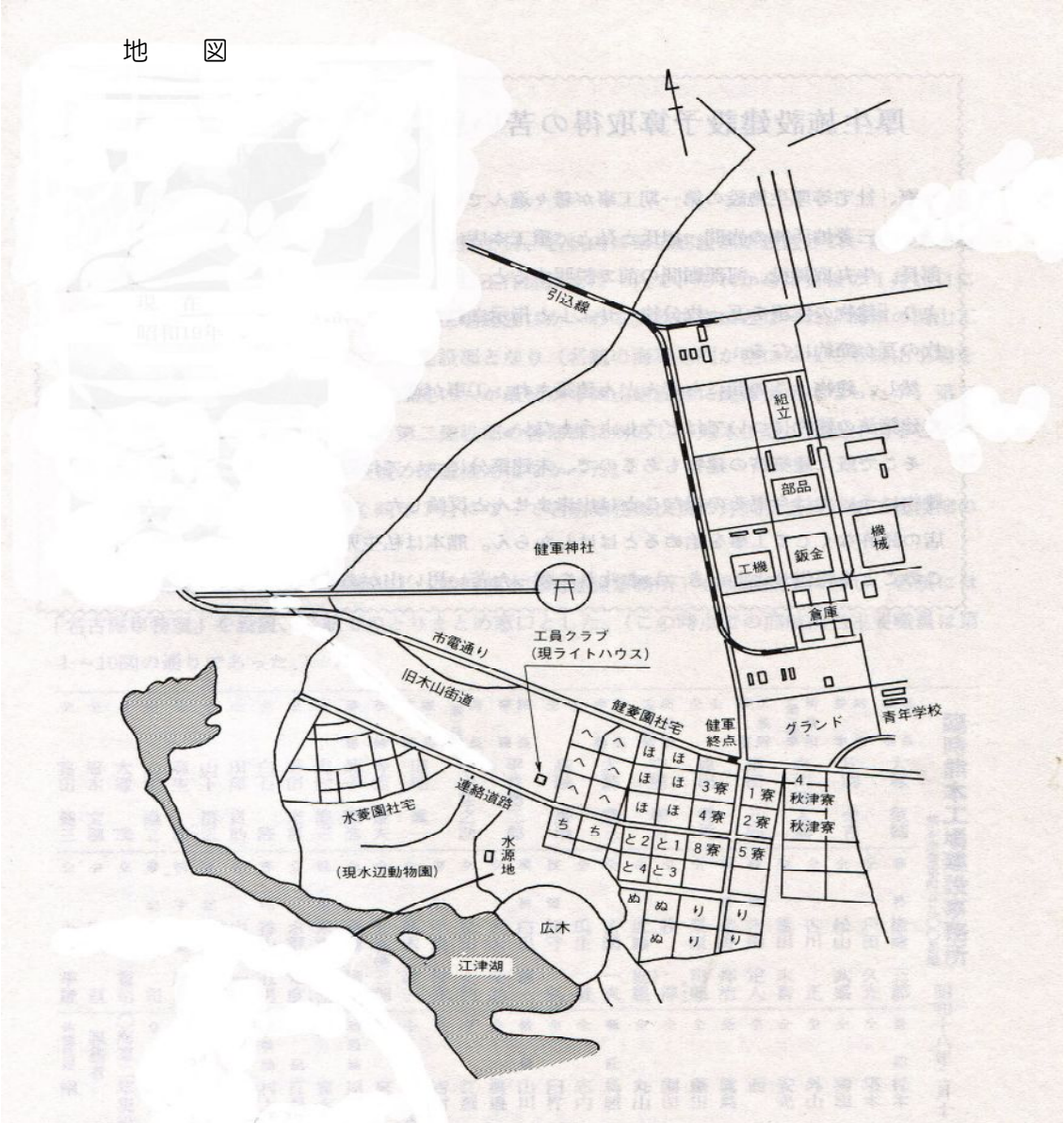
市電は水前寺までしかなく、20 年 5 月頃単線で健軍まで敷けたが朝夕は三菱従業員専用で一般の人は乗せて貰えなかった。就業時間は名古屋は朝 7 時からであったが、熊本では 7 時 30 分始業であり、こんな決戦時に 7 時始業にしてはどうかという意見もあったそうだが、会社は通勤事情もあり無理と判断し、依然 7 時30分始業であった。遠くは阿蘇山麓の立野を朝 5 時の一番列車で来る人も居たという。勤務時間は 7 時 30 分～ 5 時 30 分までが定時で、昼は 40 分の休みがあり、5 時間残業などザラで、時に二直制勤務もあった。

今思うと何故こんなに働かなくてはならなかったのかと思う。 1 日 10 ～ 12 時間労働の連

続であり、それが当り前であった。

こゝ（健軍商店街）は寮の焼跡で、1 、2 寮は青年学校の生徒、3 、4 寮は徴用工の寮で、一

地　　図



っ寮は 5 棟から成っていた。3 寮の隊長は東大尉という人で、毎日人員報告をしなければならず、外出、外泊で徴用工が出入りしたあとその把握が大変で報告に苦労した。

初めの頃、病院は青年学校にあった。或る日徴用工の人が酔って側溝に落ちて死んだ。その時、私の同僚が盲腸で入院したが緊急のこととて部屋がなく、その死体と並んで収容された。

三菱病院は青年学校グランドの西側（健軍交叉点の北東角）に建てられる予定とか聞いていた が、とうとう建たずじまいであった。そのグランドでは双葉山が社員慰労のための模範試合をやったので家族で見に行った。

このあたり（現、健軍商店街）の土地建物は三菱が財務局へ物納したものが多く、私の家も寮の焼け跡に建てられた市営住宅を払下げてもらったところである.

熊本へ転勤

作　重武

昭和 18 年 3 月 28 日、熊本へ行ったらもう本州へ来る機会もなかろうと思い、見納めに東京見物をして、そのあとすぐ熊本へ転勤した。折悪しく子供が病気をしたので転勤日をずらせて、熊本へ行った。

汽車で一昼夜かゝって熊本に着き、健軍バス停（森本酒店前にあった）に降り立った。途中うどん屋があったので入った。もう当時、名古屋には食べものは殆んどなく、外食など出来なかった時代であったが、熊本ではまだうどんが食べられ子供達も喜んで食べた。.ただその時、蝿の多かったこと、多かったこと、付近に蹄鉄所があったせいか、気候のせいか、あのものすごいハエには閉口した。社宅は「ほ」に入った。丁度家の前に高い杉の木があり、同じ様な家ばかりの中でこの杉の木が目印となり便利なところであった。工場の方に一軒だけ店があり、そこで日常の買物をした。寮の厨房の隣に病院（診療所）があり、こゝで長男が迷子になり「アノヨー、カアチャンが、オレヘーン」といってうろうろしていたら「（アノヨー）というとるけん、コリヤー名古屋ン子ばい」といって家まで連れて来てくれた。妙なところで名古屋弁が役に立ったものだ。この名古屋弁は土地の人には奇妙に聞えたらしいが別に対抗意識もなく、うちとけていった。

熊航へ転勤のころ

作元　正武

昭和 18 年 3 月、名古屋から熊本へ単身転勤して寮へ入った。当時、寮にはまだ畳も入っておらず、逐一整備される雑作業の手伝いを初め、環境整備作業を行ないつつ仕事をした。寮では朝夕、養成工の指導に当っていた。職場は鍛造で、小物部品の鍛造作業ばかりやっており、それを機械工場へ送っていた。

それが飛行機のどの部分のものか知らされもしなかった。毎日この鍛造作業が中心で、今の様に作業環境が十分整備されておらず、いうなれば悪環境の中で残業もし、徹夜もし、よく頑張ったものである。然も、その本来の作業の間に養成工の技術指導、生活指導もしなければならず大変であった。若さと気力で頑張ったものと思う。

健軍•三菱に入社

細川　隆康

昭和 18 年春、そろそろ南の海や空で日本軍の転進が始まっていた頃、熊本に大きな三菱重工の航空機工場が建設されつつあるということを耳にして、私は韓国の銀行勤めを辞めて帰熊することにした。

5 月に帰郷して、熊本工場建設の用地買収を初め万事に多大な尽力をしておられた森　慈秀先生のお口添えで丁度梅雨の時期に面接試験を受け、7 月に採用された。面接は午前 8 時 30 分に出頭のこととなっていたが、乗物はなし、義兄が借りていた新しい自転車を貸してもら

って出頭した。野天に自転車を置いてバラック式の事務所の一室に、散々持たされて、やっと面接を受けたのは午後 5 時過ぎであった. 入社するとすぐ名古屋航空機製作所に見習修業にやらされた。熊本工場からの見習職員の宿舎はもと遊廓であったという木造瓦葦二階建の大きな建物であった。

私が配属されたのは総務課文書係であった。新しい場所が新設されると社規類集（社規、社則を集録編纂したもの）を一式備えつけられる筈のところ、どんどん場所が増えためで新設の熊本工場にまで頒ける予備が無かったのか、この膨大な漢和辞典程の部厚い社規類集を早く覚えて帰れといわれたので、その要点を摘書きしていたら、そんなことをしていて間に合うか、と叱られたのには参った。新設工場の開店準備というものは何でも覚えていかねばならず、兎に角忙しかった。

小用のためトイレに立って行くのが唯一の息抜きであった。堪りかねて名古屋におられた熊本工場の幹部級の方に、もうそろそろ熊本工場に勤めさせて下さるようお願いして 11 月 3 日、やっと熊本に帰った。

熊本工場事務所に勤務して感じたのは極く一部のものだけだと思うが、名航から来た一派の人達が長崎造船所から来ていた上級幹部に対する排他性を以って地元熊本採用者の一部まで色分けされて嫌な思いをしたことがあった。

現地採用社員

岡山　忠生

大東亜戦争で二度目の召集を受けて北支へ渡っていたが、やがて時至り解除されたので司令部へ挨拶に行った。偶々係官が高等学校時代の配属将校で「何処に務めているのか、今度熊本に飛行機製作所が出来たが知っているか、何ならそこへ行ってみろ」という。

昭和 18 年 6 月であった。陸軍中尉の軍装のまゝ市電に乗り、終点の水前寺で降り歩いて健軍に向った。丁度、神水付近を歩いていたら後から来た車が私の側に停り「何処に行かれますか」と車中の紳士が声をかけた。「三菱へ」というと「ではどうぞ」と同乗させてくれた。工場の門を素通りして玄関で降りると「受付はこゝです」と言ってその紳士はさっさと事務所の中に入ってしまった。受付で用件を伝えると、応接室に通されたのでそこで軍刃に両手をついて構えていると、ドアが開いて入って来たのは先程同乗して来た紳士であった。「私は副所長の片岡です」といった。私は司令部に行って紹介された経緯を述べて挨拶をすると、簡単に学歴、軍歴等を聞かれたあと「では明日から出社して下さい」と言う。司令部から何か連絡が来ていたのか、どうかは知らないが、あっけない採用であった。然も大卒の現地採用にも驚いたが、すぐ承知して社員となった。

社員不足で困っていた様子で、配属されたのは庶務課であった。仕事はまさしく総務課といってもよい位、種々雑多で忙しいことこの上なしであった。

第三回の召集が来る昭和 19 年 6 月末まで、丁度 1 年間ここに勤務することとなった。入社して先づ文書を書くことで苦労した。学生生活と軍隊しか知らない私に懇切丁寧に文書の書き方を教えてくれた人は当時総務部の原田次長であった。原田次長は名航から来た人で、私の文章の字が一字でも生きる様に、針の様にとがった赤鉛筆で丁寧に修正して貰ったことが昨日の様に想い出される。次に朝のラジオ体操の指導である。男女別々に朝礼をしていたの

で時差出勤していたのであろう。先に男子職員、30 分程後に女子職員という具合に朝礼をやっていた。12 月 8 は大詔奉載日ということで、その日は軍服姿で出勤していた。何故か忘れたが、私は三菱重工　熊本在郷軍人分会長ということになっており、その日は片岡金吾副所長も軍服で来られ「今日は貴方に敬礼せねばなりませんナア」といっていたことを想い出す。

大変だったのは従業員の出勤状況の把握であった。水前寺駅から工場終点までの引込線で通勤する人、電車で水前寺終点から特別バスに乗り換える人、それらの整理やら指導やらをやった。私と同じ様に毎日通勤状況を見に来ていた人に野上進という人が居た。当時は熊本北警察署長であった人で、後に地場の大手企業、九州産業交通㈱の社長をしたり、参議院議員にもなった人である。温厚、誠実な人で長らく御交誼を願ったが今は亡い。当時は毎日の様に水前寺市電終点に立って通勤状況を視察、指導しておられた姿が眼に浮ぶ。

熊航立ち上りの頃

正清　敦

昭和 18 年夏、名航庶務課で研修を受け、同年秋に熊航庶務課に着任しました。草原のような広々とした工場敷地内に建っている極めて小さな建物が熊航建設事務所でした。当時は毎日朝礼があり、事務所裏の空地を何回も走らされ、これがつらくて一同からあまり歓迎されてなかったようです。

事務所からかなり遠方に大きな建物が建設中なので尋ねましたら、これが組立工場で建坪が 1 万坪とのことでした。後日、この建物が完成してから用事があって組立工場へ行きましたが、その大きさに驚きました。

工場内に停っている乗用車がまるで玩具のように小さく見えました。

労務管理制度

(I) 労働時間

戦後労働組合が結成されてからは労働条件の改善等積極的に進められ、昨今では立派な労働協約が締結され、労働者の地位が保護されているが、戦時中は非常時という条件もあったが、一応定めてある労働時間など無きに等しい様なもので、会社と家の区別がつかない程、会社に入り浸りという生活を余儀なくされた。ちなみに当時の定時間労働は朝 7 時 30 分から夕 5 時30分まで、その間昼の休みは 12 時から 40 分間で、一日8時間労働であった。5 時以降は残業時間として処理された。休日も建前は日曜、祝祭日、年末年始であったが、この他熊航では藤崎宮祭りの日も休日となっていた。特に 19 年～ 20 年にかけては、これらの規定など無きも同然であった。有給休暇も一応取得できるようになっていた。女子の生理休暇も認められてはいたがあまり取らなかった様である。

始終業管理は職員はタイムレコーダーにより、工員は職札による方法がとられていた。時間外労働、休日労働については、その時々の生産状況により変化していたが、一機でも多くという時勢であれば、まさに自己の体力の続く限り働くのを建前としていた。そのため時間外労働時間が増え、本給より残業手当の方が多く、三菱の従業員は結構給与は多かったと思うが、何せ買う物のない時代でもあり、折角増えた給料も軍国債券などを買わされ、給料から天引きされてしまった。

食べものも碌に無い時代、こんなに働いてもそれ程病人が出なかったのは気力で頑張ったせいであろうか、今から思うと全く不思議でならない。

（２） 従業員管理制度

従業員各人の学歴、勤続等の属人的要件に基き、その人の身分（資格）を定め、その身分によって処遇を決める身分制的資格制度を採っていた。

資格は職員、雇員、傭、工員の四つが設けられ、職員については参与、参事、正員、准員の 4 等級、工員については一等工手、二等工手、三等工手、及び普通工員の四等級に分けられていた。

学校を卒業してすぐ入社すると（これを新卒採用という）その学歴により職員は見習甲、又は見習乙、工員は技能養成工と称し、それぞれ習得期間が満了すると見習甲は正員に、見習乙は准員に登用され、そして技能養成工は普通工員に格付けされた。

職員（正員）	事務、技師、工師、警務等
〃 （准員）	書記、技手、守肇等
雇員	書記補、技手補、守警補等
傭	寮管理人、賄等
工員	機械工、板金工、溶接工等

この他に転職者等中途採用者を業歴者と称し職員は嘱託に、工員は臨時工として採用し、所要期間を過ぎると正員又は准員に、或は工員に採用替えされる。

その時の給与等の決定は似た様な条件（学歴、業歴等が）の人をキーマンとして決定していた。また業種によって職種が設けられており、そのいくつかの例は次の通りである。 だから同じ様な経理の仕事をしていても入社時の学歴で身分が決り大学を卒業していれば正員でとんとんと係長、課長と昇進
できたが、小卒だと工員籍でよほど長期間勤めないと職員へのくら換えは困難であった。

又、三菱は商売柄軍から転入してくる人もかなりあったが、これは士官、将校の人は正員として採用、下士官の人は准員として採用していた。

定年は工員が満 50 才、職員が 55 才であったが、戦後は共に 55 才になった。

福利・厚生

（１） 社 宅

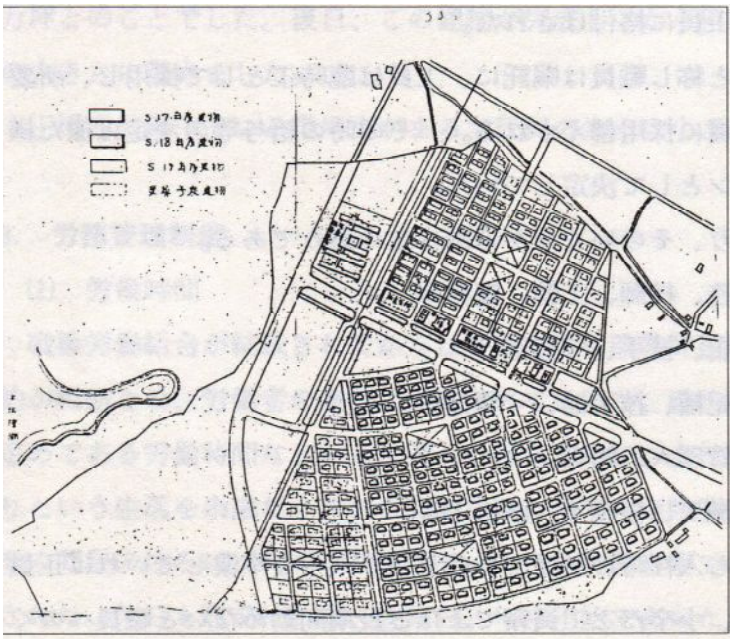
社宅の建設については、先に厚生施設建設の項で述べたが、こゝではそれらの社宅がどの様な建物であり、どの様に管理されていたかについて述べる。

熊航の主要従業員は名古屋から転勤してきた基幹社員であり、これらの人々が生活する家屋として次の三地区に建てられた。

即ち、江津湖畔の風光明眉なところに 180 戸の職員社宅（ 17 年度 22 戸、18 年度 158 戸）、工場に近い健軍町 6000 番地に三菱が建てた 1500 戸のものと、同敷地内に福岡住宅営団が建設した 582 戸の工員社宅、帯山地区に三菱と住宅営団が建てた 268 戸の工員社宅の三群から成っていた。その合計戸数は 2530 戸に及び、寮と合せて収容能力は 14 ． 860 名であった。

◇職員社宅

職員社宅は正員以上の妻帯者を入居させるためのもので、これを水菱園と称し管理上五十音の「か、れ」という大区分があり、そのあとに序番がつけられていた。即ち「かー 5 」という様な番号が付けられており、同じ型の建物に迷うことなく管理されていた。
家居はすべて一戸建で約 100 坪の土地に 25 坪程度の家屋が建てられていた。間取りは 8 畳 2 間、6 畳、5 ．5 畳に玄関、台所、風呂、WCがついていた。風呂も間取りだけはとってあったが、風呂釜が入手出来ないので、風呂桶は設けてなかった。従って風呂は職員社宅地区に 1 ヶ所の共同浴場があり、これを利用していた。　台所にはカマドはあったが燃料がないため、当初は建設現場からカンナ屑や木切れを拾って来て燃料にした。食糧難であったが、幸い庭が広かったのでそこに野菜や、さつま芋や、小麦まで作って食料の足しにしていた。



水菱園社宅配置図

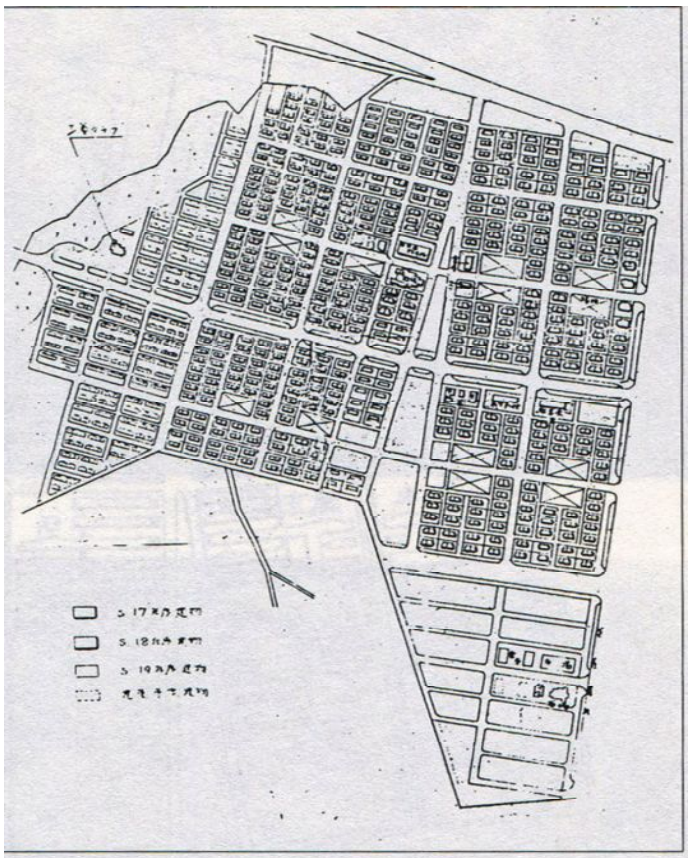
雨戸はなく警戒警報、空襲警報の際の灯火管制に、灯火が洩れないようにするのに皆苦労した様であった。畳は縁がなく坊主畳で、何かフカフカした安造りのものであった。然し戦時中のこととて国民生活は耐乏を強いられており、誰も不平を言うものはいなかった。
◇工員社宅
名古屋からの基幹工員の妻帯者を入居させるためのもので、場所は健軍町6000番地（工場の南側）及び水前寺（帯山）の 2 ヶ所にあった。健軍町の社宅を「健菱薗」水前寺の社宅を「前菱園」と称した。
ところが飛躍的に増加する現地採用工員で通勤不可能者を入居させたため、絶対数不足となり、健菱園には福岡住宅営団が建てた 582 戸を 1 ，984 ．202 円で買収し、又前菜園には住宅営団が建設した家屋 68 戸を 212 ，939 円で買収した。工員社宅の管理番号は前菱園が「い」「ろ」、健菱轟が「は、へ、と、ち、り、ぬ」であった。
例えば、健菱園の「と」の地区は更に 1 ～ 4 ブロックに分れ「とー 2 」となり「とー 2 」の中で更に 1 戸 1 戸の番号があり「とー 2 － 25 」という番号が、現在の「水源 2 丁目」という呼称に変るまで居住者に愛用された。
工員社宅は 2 戸建で一棟を半分に仕切り 6 畳 1 間、4 ．5 畳 2 間、玄関、台所、トイレから成り（大きさは 1 号～ 3 号まで 3 種類あり、号数が大きくなる程、建坪が大きくなっていた。）一戸当りの土地は約 40 坪、家屋建坪は 13 ～ 14 坪程度であった。営団住宅になると間取は更に小さくなり、4 戸建になると一戸当りの間取りは押して知るべしであった。
風呂はもともと各戸にはなく、社宅の中央部と営団住宅の中央部にある共同浴場へ行くことになっていた。随分広い浴場ではあったが、何せ何千人という人口を有する集落だけに、ピ

ーク時は芋を洗う様な活況を呈した。　この他、理髪所、配給所等もあり、一応生活用品の調達は可能であった。家賃は月 1 円 50 銭程度であった。

これらの社宅は、戦争末期に、然も戦時規格で急造されたものであるが、今尚、当時のまゝで使用されているものも散見できる。決して立派な普請ではなかったのに 40 余年を経た今日尚、往時のおもかげを残している。

（2）　寮･その他の福利施設

寮は健軍町（現在の市電終点を挟んで南西、南東地区）及び秋津村入口にかけて建てられた。1 寮から 5 寮、（何故か 6 、7 寮がなくて）8 寮及び秋津 1 寮と同 2 寮があり、それぞれ単身赴任者、独身者を収容した。1 寮、2 寮は青年学校生徒、3 寮、4 寮、5 寮、8 寮は各地から採用した独身工員、徴用工を収容、秋津寮には女子挺身隊、女子工員を収容した。各寮は 5 棟からなり、一部屋は十二畳で、その中に 5 人ずつ起居した。



健菱園社宅配置図

これら寮の管理は、軍隊式に分隊、小隊等の区分があり、小隊長とかの中間監督者には名古屋から転勤した基幹工員が当っていた。その上に責任者として寮長、舎監等があり各寮の統轄的管理をしていた。

毎朝出勤時は全員が整列して工場西側の都大路を上って正門から入り、それぞれの職場に行った。

これら健軍寮は 20 年 7 月 1 日の空襲で 1 寮、2 寮、3 寮、4 寮と秋津寮が焼失、5 寮と 8 寮が残り、戦後は海外引揚者を収容し、一棟に20世帯入居しており、全部で五棟あったので 8 寮だけで 100 世帯位入っていたのであろう。

昭和 18 年に建設されたこれらの木造の寮も、20 余年の役目を果し、昭和 40 年に鉄筋の県営住宅として生れ代っている。　戦後、天皇陛下が熊本巡幸された時、この 8 寮にもお立寄りになり引揚者の家族にお言葉をかけられた。

隣の 5 寮は、戦後の清算時代から熊機時代にかけ独身社員の寮として使用していた。又熊機閉鎖後は、青年学校の事務所も井関農機へ売却したため、西部整理事務所を、この 5 寮に移し、ここで整理業務を行なった。このあと 5 寮も立退くこととなり、西部整理事務所は秋津寮厨房のあとを改造した事務所に移ることとなった。

寮（報国寮）

准員独身者の寮として報国寮というのがあった。これは神水にあり、規模は健軍寮とはゞ同

一であった。終戦前に病院を移動するために、その時点での入居者を全員 5 寮に移し、こゝを三菱病院とした。戦後は市民病院として活躍し現在では高層の熊本市民病院として生れ代っている。

江津荘

熊本工場の建設準備等関連業務が増加するに伴ない本店（東京）や名航（名古屋）から熊本への出張者がどんどん増加していった。これら出張者の宿泊、或は顧客の接待等を行なうため、三菱としての拠点が必要であった。そめため真先に確保されたのが出水町にあった江津荘であった。

これは水前寺成趣園から五百米程下った川添いにあった回遊式日本庭園の邸で、料亭画津花壇といい、昭和 17 年 4 月に三菱が 15 万円で買収し「江津荘」と名付けた。規模は土地 4324 坪、建物348坪であった。　これは熊本の大名、細川侯の邸園であったが、細川忠毅侯の代に人手に渡ったものを三菱が買上げたものである。

庭園四千余坪の中に三百五十坪の邸があり、庭には砂まで数えられる程の清澄な水が湧き出る水と、これを囲む築山、そして庭木や芭蕉林があり、きれいに手入れがしてあった素晴らしい庭園であった。

やがて工場が動き始めると、増員された三菱の職員の一部を収容し、一時職員寮とした。ここでは時に出征する社員や、転勤する社員の歓送迎会の会場にもなった。20年に入り空襲が激しくなると、健軍工場の各部門は市内、近郊の学校等へ疎開したため、もぬけの空となり、各疎開場所との連絡場所、即ち中枢として所長室をこの江津荘に移した。 20 年 7 月には空襲を受け、ここの百畳敷の部屋が焼失した。戦後は米軍が熊本へ進駐して来た折、料亭「新茶屋」が接収され、「新茶屋」は行くところがなく、進駐軍の命令ということで、この江津荘に入り込んで来た。

更に、昭和 24 年、三菱熊本機器製作所が井関農機へ身売りした時、同時にこの江津荘も井関農機の手に移った。そして現在は熊本県が井関農機から買上げ、こゝに立派な県立図書館が設立されている。

白川寮

あらたに建設した寮とは別に既設の料亭や屋敷等の建物を買収して寮に当てたものもあった。その一つに正員独身者（又は単身赴任者）を収容するため、白川沿いにあった屋敷を買収し、これを「白川寮」と称して使用していたが、7 月 1 日の空襲により焼失した。

その他の寮、社宅

その他、市内各地の邸宅を買収して社員寮としたものに「城東寮」（女子寮）とか「神水荘」（土地 591 坪、建坪 140 坪）があった。又、長船からの応援者の宿泊には市内の旅館を契約し「初音寮」として使用し建坪 49 坪）があったが、これも 24 年に井関農機に譲渡した。

工員クラブ

健菱園（工員社宅）の西はずれに工員さん達の慰労、集会の場所にする予定で工員クラブという建物が建てられた。これは、結果的にはクラブとしては使われなかったので、どんな建物であったか知らぬ人が多いのではなかろうか。

そもそも新築はおぼつかず、玉名方面にあった大きな木造瓦葺二階建の日本家屋を解体し

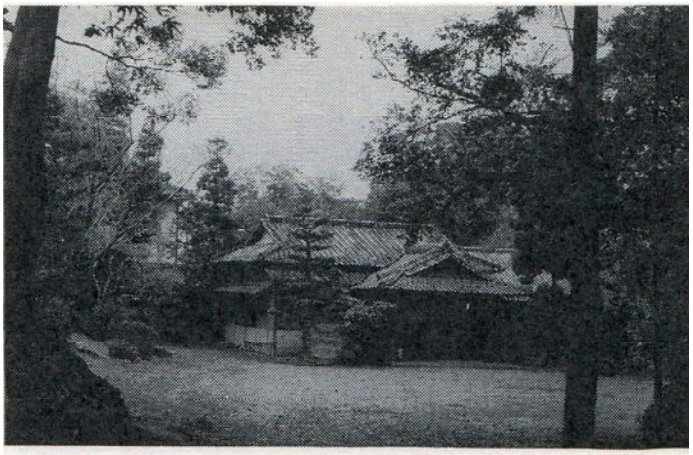
て移築したものであった。結構大きな家で、誰も入っていなかったので薄気味が悪く、俗に「幽霊屋敷」と呼ばれていた。　まだ瓦屋根と柱と床板がやっと出来ただけで階段もなかった。こゝへ総務課文書係所管の書類を収蔵するようになり、仕掛り中の書類を除いた保存文書を収納する書庫として使用した。階段もつけられていない 2 階に梯子を掛けて、山の様な書類を収納した。だだっ広い部屋に無雑作に書類を置くだけでは散逸する恐れもあるので、工場で万一の場合に備えてあった数個の棺桶を流用し、その中にきちんと収容した。このとり敢えずの書庫は総務課・文書係の管理するところとなった。（収容された文書は購入要求書・人事採用関係のものも含まれており、又、ここへ書類を運んだという他課の人もあり、いろいろな課が文書の疎開先として使用したと思われる。）　戦後は盲聾児収容施設「ライトハウス」として使用され、現在では立派に改築され活用されている。

工員クラブ探訪

岡野允俊

戦争が終ったあと（20年9月頃か）私はふと、この奇妙な建物に足をとめ、何とも薄気味悪かったが、こわいもの見たさに恐る恐る入っていった。二階へ上る階段はなくハシゴが掛けてあった。たくさんの部屋があり、各々の部屋には、多量の書類が散乱していた。何の書類だろうと思って拾い上げてみたらビーカーとかフラスコとか、薬品の購入資料と、人事採用の資料であろうか、履歴書に戸籍謄本が添付されたものであった。それには母「ウシマツ」とか「じゃう」とか書いてありその変った名前に興味をもって数件を調べたら、それらの人々が奄美大島出身の人々であることがわかった。

この書庫の資料が、いっ片付けられたかは知らない。



江津荘玄関

江津荘庭園

（3）厚生ー給食、特配など

戦時中のこととて、食料事情は悪く、然も多勢の従業員に高カロリーの食物を供給することは大変なことであった。然し幸いにも当所は軍需工場であったため、特別の割当配給を受けていたので、何とか給食を続けることが出来た。食事は中央厨房で作り、食堂で各自食券と交換で給食した。農村から来る人は各自弁当を持参していたが、社宅の人、市内から来る人々は、ひじきや春雨の様なものを竹の茶碗で食べていた。徹夜勤務をすると、夜半に夜食を喫食することが出来た。20 年春になって各工場が疎開したあと、健軍工場に残っているのは組立工場と整備工場だけで、厨房も一時の様

な大量給食は無く、時には材料も余ったとみえ、残留の一部若い従業員は白い飯を食べさせてもらったとか聞いた。幸い、熊航は名古屋と違って近隣町村にまだまだ食料があったため、いざとなれば自給（弁当持参）が可能であった。少くとも終戦までは軍需工場特配により何とか給食も可能であったが、戦後はこれらの特配が打切られたので、当然給食はなく、従業員の自給自足に頼る他なかった。

県立図書館　２０１０年２月

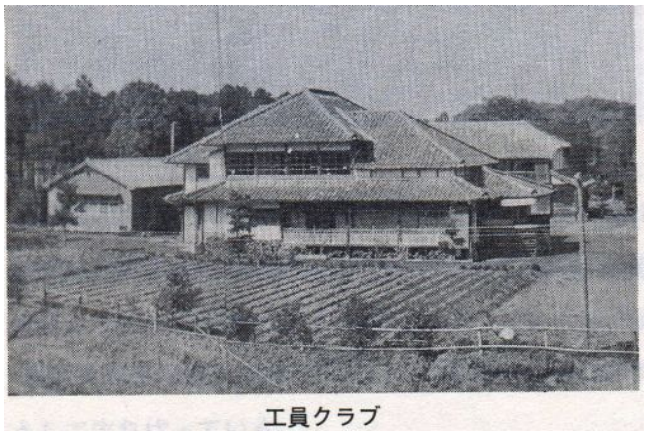
これだけ食料の無い時代ではあったが、歓送迎会等の宴会時にはどこからともなく酒食品が調達されたから不思議なものであった。（出征していく人には別途、酒の特配もあったが）

又、軍需工場の特典としていろいろな物資、食料品の配給があった。その最たるものが台湾から送られて来た干バナナであった。甘いものにうえていた当時としては格好の食べものであった。時には中にウジがわいているものもあったが決して捨てず、ウジを取り除いて貴重なバナナを食べた。

江津荘のこと

細川　隆康

成趣園から五百米程下った川添いに江津荘と呼ばれていた回遊式日本庭園の邸があって、これを三菱･熊本工場が買収して職員寮にしていた。庭園は、五千坪近くはあったと思う。庭の砂粒まで数えられる程、清澄な水の湧き出る泉水と、これを囲む築山、そして庭木や大木、その先に芭蕉園があった。ここは私の祖父（細用忠毅）が居て伯父の代に人手に渡ったものである。そして三転して三菱のものになった。この邸を所有したものは没落するというジンクスがあったようである。大塚所長が「細川君、今度は天下の三菱が買ったのだから大丈夫だよ」といわれたが、その三菱も敗戦による財閥解体でこの邸を手放し、井関農機㈱の手に移り、そして今は熊本県が買収して立派な県立図書館が新築されている。


工員クラブ

幻の正員独身寮

林　　盛雄

昭和 18 年 9 月、熊航要員として大学、高専卒業者約 50 名が三菱名古屋航空機に入社した。

全般教育のあと、各職場で実務を習得し、そのノウハウをそのまゝ熊本へ持っていくことが我々に与えられた使命であった。

私は事務屋なので、原価計算を希望し、名航会計課、第二原価係（陸軍）に配属され 19 年 2 月までの 5 ケ月間で難解な重工の経理システムを叩き込まれたがとても十分理解できる筈もなかった。当時の課長、牧野　元様には、その後長く御指導をいただいた。19 年 2 月、熊本に着任した。その日は熊本にはめずらしい雪の日であった。先ず江津荘に入ったが単身赴任者でごった返しているという感じであった。ここは料亭を買収したものであり、庭園や庭木は立派であったが寮として毎日起居生活をするには不適であった。一部屋に数人の雑居生活は何とも落付かない。同僚と相談して 2 階の舞台付大広間の端を仕切って一応独り部屋をそれぞれ確保した。当時その広間に相当量の陶器が山と積んであった。多分高価なものであったと思うが何せ毎日が腹ぺこで、本気で水前寺の池のコイをアライにして食べようと考えた時代であったから腹の足しにならないものには誰も見向きもしなかった。

神　水　荘

その内にどんどん人が増え、いよいよ手狭になったので日頃考えていた名航時代の正員独身寮である「第一正風寮」の様なものを実現しようと発奮、既設建物の買収に努力する。施設課の同期の友人に事情を説明して、手頃な物件があったらよろしく頼むと依頼しておいた。

2 カ月が過ぎた。白川端の大甲橋の近くに手頃の物件ありという情報が入り早速下見に行く、広い敷地に 2 階建で建屋は 100 坪もあろうか、庭は広く、樹木が繁り、大きな岩が力強く、仲々立派な屋敷であった。

早、「第一正風寮」の名幹事であった唐木さんに相談を持ちかけ所長伺の原文を練ってもらって申請したら認可がおりた。

あとは施設係の友人が改装を行ない 6 月初め 20 余名の正員独身者が入寮した。私はその時、白川寮初代幹事を引受けた。9 月入隊までの数ヶ月間であったが、あの苦しい時代にあってまさに楽しい青春の日々であった。

20 年 10 月復員後、復職のため健軍へ行く時、電車の中から見たらあの白川寮は完全に焼失していた。

私にとっては正にまぼろしの様な白川寮であった。

白川寮ー思い出すまゝ

入江　敬之介

1.場　　所

熊本市新屋敷町 425

2.規　　模

立派なしもた屋風御屋敷、二階建、庭は十二分に広く樹木鬱蒼、巨石豊富、築山等あり、白川に直面す、推定なるも土地　250 坪•建坪 100 坪

3 . 存在期間

昭和 19 年 6 月　開設

昭和 20 年 7 月 2 日早暁（午前一時）米軍焼夷弾攻撃により灰燼に帰す。

4 . 寮の諸要件

（ 1 ）寮生　平均 20 名内外が転入、召集、結婚等により出入。

（ 2 ）部屋 10 室位か？（個人の屋敷であった為、単に襖等で仕切られた開放的なもので、これら各室に 2 ～ 3 名ずつで生活す。

（ 3 ）寮管理人及び賄人として中年の夫婦 2 人及び女中 2 名。

（ 4 ）共同施設、食堂、風呂場、便所、台所等適宜増改築し寮風に設置しあり。

（ 5 ）空襲対策　20 年 5 月頃空襲に備え天井板をすべて徹去せり、然し結局 7 月灰燼に帰す。

5 . 寮の生活

昭和 20 年 1 ～ 2 月頃迄は庭の木々のしじまの中に寮を包む空気は平和そのものの感じであった。

暇さえあれば屋根に上り陽光を十分浴びた。

寮生の起居は勿論自由、朝夕夫々食事をとり出発、そして帰寮、弁当を持って出社したと思う。こうした生活、食事、入浴、雑談等同じ屋根の下に住む者同志親睦を深め、折に触れ「寮生会」などを行なう、有難かったのは、あの物資不足の時代に寮の管理人御夫婦が実にこまめに我々の腹を満してくれたことである。時に転入者あり、又結婚のため退寮する者には追出し会、召集令状の来た者へは涙の送別と激励の会を、さゝやかではあったが、その都度開催していた。

戦局は昭和 20 年 2 月～ 3 月頃より次第にけわしくなり曾て平和そのものであった寮内も緊張を加え遂に昭和 20 年 7 月 1 日の夜を迎える。真に痛恨の一夜であった。

安全衛生、健康管理、病院

熊航の特性として、学徒、女子挺身隊、応徴士など作業経験の浅い人が多く、これらの人々に対する安全、衛生面には神経を使い種々配慮されていたが、何せ生産優先の時代であり、昨今の様な過保護とも思える様な安全や健康管理対策など夢の様な話で、健康保持の上から残業時間が月 50 時間を越えてはならないとか、一週間に 70 時間以上働いてはならないとか、女子は深夜残業をしてはならない等ということは当時の状況では全く考えられなかった。勤務時間は7:30から 17 : 30 までとなっていたが、実際は俗に 7 時から 7 時までといわれ、数ヶ月も家に帰らなかった人も多々あったという。こんな厳しい環境下にあり乍ら、その割には犠牲者も少なく、皆よく耐え頑張ったものだと感嘆せざるを得ない。

人身事故も時折耳にした。セーバーに引摺られたり、ボール盤で髪を巻かれたり、プレスで指を落したりする様なことも少なからず発生した。これらの事故が発生した都度、朝礼等でその事例を発表して横通しを行ない事故再発防止を図った。空襲が激しくなるにつれ、熊航は都合 4 回の爆撃や機銃掃射を受け死傷者 29 名を出した。

衛生管理の面では工場危害予防、および衛生規則に沿った対策が名航で確立されており、

熊航でもそのシステムをそのまゝ適用した。即ち安全管理者と工場医を選任し、従業員の疾病予防に当り、毎日、所定の体操を行なうなど基本的なことから、定期健康診断による健康管理を行なうなど予防管理を徹底した。当時は栄養等の関係からツベルクリン反応による確認など結核対策も重視されていた。19 年春、寮で赤痢が発生した時など、伝染防止対策等手際よく構じられ蔓延を防止できた。

監督官に追いまくられ、牛馬の様に増産に追われた当時の従業員の精神衛生面についても種々対策がとられた。有名歌手による慰安会や、双葉山一行の角力試合などが催され、交代で見物させるなど配慮された。時には核となる中堅社員の修養会を開いたり、修練道場に出席させる等して健全思想の拡散浸透を図った。

環境面からも、工場の暖房は昨今の様なスチーム、ヒーター等が設置されているわけでもなく、工場の一角に四角い木枠の火鉢があり、そこでマキを燃して暖をとったり、事務所ではダルマストーブがあったが燃料の石炭は殆んどなく、これもマキを燃いていたので書類の上にたくさんススが落ちてきた。

現場で手がかじかんでくると 100 Wの電球を抱えて暖をとり、指を伸して細かい手作業をした。

病院は健軍十字路（現市電終点）の北東高台の角地に建設される予定であったが最後まで建築されぬまゝ終戦を迎えた。従ってその本病院が建設開院されるまで転々と移動した。

即ち、工場開設当初は健軍第 3 寮の中にあり、規模としては診療所をやゝ大きくした程度のものであったが昭和 19 年 2 月頃、入寮者の増加と共に青年学校内に移った。20 年に入り熊本も空襲を受ける公算が大となり工場隣接の青年学校では危険ということで水菱園（職員社宅）の空家の幾棟かを仮病院として使用していたが、その後、報国寮の一部に入り終戦を迎えた。

名古屋航空機病院の副院長であった北岡正雄氏が熊本航空機病院の初代院長に就任した。（戦後市民病院への移譲については「航空機工場清算業務」の項で詳述する。）

通勤手段

熊本工場は熊本市東部の未開地に建設されたため、公共交通機関としては水前寺から九州産交のバスしかなかった。従業員の多くは社宅や寮から通勤していたため問題はなかったが、19 年に入って大量の学徒、市内及び近郊在住の従業員は何らかの交通機関が必要であった。その点も含めて国鉄水前寺駅から工場まで専用引込線が敷設され、大部分はこれを利用した。又、水前寺からは社有の電気バス 3 台が運行された。（これは当時 1 台 5800 円で購入したものであった。）そのため市電終点の水前寺駅はこれらのバスに乗る人で混雑し、時には積み残しも出る始末で交通機関の充足が痛感されていた。

折しも、昭和 18 年、藤原査察使御一行が熊航の航空機生産状況を視察された。その時、生産の隘路になっている問題点を報告せよとのことで、会社としてはこの通勤交通手段の充足も答申した。その結果、水前寺から健軍まで先ず幅員 22 米の道をはぼ一直線に通し、3．3 K に亘るその道路に市電の延長工事が行われることとなった。この時の道路拡張工事には秋津村をはじめ近郊の婦人等による勤労奉仕も行われた。然し鉄材不足の折柄、新設するレールはなく止むを得ず当時廃線になっていた熊本市南西部の百貫鉄道のレールを外してそれを敷

設し、20 年 5 月 5 日に単線開通した。途中神水に待避線があり、こゝで上下便の待避をしたため待ち時間が長く、その輸送量は限られていた。

又その頃、既に健軍工場はおおむね疎開し、逆に健軍工場への輸送量は減少したため折角の市電も大した寄与は出来なかったのは残念であった。

然しこの道路と市電は戦後熊本市東部発展の引導役としては大いに貢献した。

熊航設立の頃

山本　鐘二

昭和 18 年 9 月、藤原銀次郎氏勅命を帯び査察使として三菱名航をはじめ建設途上の各場所の生産態勢を査察に来られ、各場所長より現況の報告と増産計画の詳細な説明を受けられたが、査察使来名に先立ち、各場所関係者は、資料作りに忙殺され徹夜の連続であった。

私は熊本要員として当時の熊航工務課長小山荘之介氏と機械工場長田尾真一氏と三人で名古屋市広小路の朝日神社横にあった、かっぽう旅館「鯛めし」に陣取って、毎日毎晩、熊航の建設計画ならびに生産計画を練っていた。主として小山、田尾両氏の計画によるもので、私は助手を勤めたにすぎないが、今振り返って考えてみると国の戦時における国土計画の一環として、航空機生産工場の建設及び経営計画が素案といえどこの様に若い課長、工場長（当時は 30 才台であった）の手に委ねられたということは、委せる方も委せる方だが、引き受ける方も引き受ける方である。よくやったものだなと沁々思うのである。

例えば 150 万坪にも及ぶ膨大な敷地を計画、それに対して人員、資材を運ぶ交通機関は皆無に等しかった。いかに人を集め、二直、三直に応えられる宿所を作ったとしても輸送機関がなくしてはどうしようもない。小山課長はその頃、熊本駅前から水前寺まで来ていた市電を健軍の工場まで約 4 粁延長すべきであると判断、査察使に対する答申資料に織り込んで、当時の大塚所長と小山課長より交々に説明、遂に市電が敷かれたのである。（これは百貫鉄道の線路を外して敷設された）

この市電の延長敷設は戦力にはそれ程寄与せぬまゝ終戦を迎えたが戦後、熊本市健軍地区の発展に大きく貢献したことは特筆大書すべきであろう。

名航菱光会「往時茫々」より

教　育

熊航における教育体系は概略下記の通りであった。

職　員　1．名古屋から熊航へ転勤になった職員（入社時教育済）。

2．将来熊航に勤務という前提のもとに名古屋で新規採用になった者は 3 ～ 6 ケ月間

名古屋で実務教育を受け、熊本に着任。

3．熊本で新規採用になった職員。数ヶ月名古屋で実務教育を受け帰熊し実務につく、或は熊本で①、②の指導を受け乍ら実務に就く。

4．技術員養成所（名古屋）で一般教育を受け帰熊。

工　員　1．将来熊航での基幹工員として、核となる人で名古屋から転勤した人（入社時教育済）。

2．現地採用の工員、応徴士は名古屋で数ヶ月の教育、訓練を受け熊本で実務に就く。

3．末期に採用された工員、応徴士は①、②の指導により熊航で教育を受け、実務に就く。

4．青年学校生徒、第一期生（18／4月入校）、第二期生（19／4月入校）、第三期生（20／4月入校）がそれぞれ入社。

5．学徒、女子挺身隊

実習工場で基本仕上げ作業の訓練を受け、現場に配属後は①、②の指導を受け乍ら実務に就く。

入社時期、その他の状況によって多少は異るが、基本的には上記の様な教育体系をとっていた。

教育は専ら座学と実習を主体とするもので、座学は名古屋から転勤した主要技術職員が担当し、実習は中堅工員が当った。

将来、現場の中堅として活躍すべき技能養成工（青年学校生徒）については体系がしっかりしているので、これについて詳述する。

（1）青年学校

将来、熊航での現場の中堅として活躍してもらう人物育成のための教育体系は大切な課題の一つであった。教育方針、綱領など基本的には名古屋の形態をそのまゝ受け継いでいたが、特に教育県として誇り高い熊本県民性を配慮し、「熊本県教育是」を織り込んだ。三菱青年学校の教育綱領及び熊本県教育是の綱領ならびに決戦綱領は次の通りであった。

決戦綱領

我等ノ生産ハ国運ヲ決ス、今コソ精神ヲ傾ケ聖慮ヲ安シ奉ラン

三菱青年学校の歴史は古く、明治に長崎造船所の三菱工業予備学校から始り、途中幾多の変遷を経て、長崎及び神戸の両職工学校に私立青年学校を併設、他の工場についても漸時展開していった。

名古屋では昭和 11 年に私立三菱名古屋航空機青年学校を開設した。昭和 12 年には既に工員の充足に相当困難を感じ、その引抜きや争奪も激しくなったので、三菱が三菱学校を創設以来堅持して来た生徒の取扱方針を大きく転換して、同年四月より学校本来の使命を工員養成に置き、生徒は同時に三菱在籍工員たることに決めた。

昭和 17 年 4 月には、各工場の青年学校を三菱工業教育会に統括して管理することとなった。尚、この三菱青年学校への入校希望者は多く、学術、操行共に優秀な者でないと仲々入れなかった。

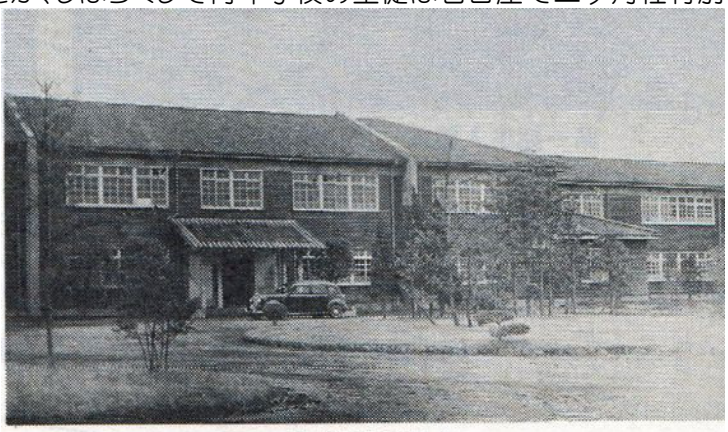
熊航の青年学校は昭和 18 年 4 月に開校する計画で準備が進められていった。即ち、学校校舎、付属施設は勿論のこと、それまでに優秀な生徒の確保が必要であった。昭和 17 年 9 月、臨時熊本工場建設事務所となったのを契機に、名航から熊本工場建設事務所に多数の人が転勤（又は出張）しており、その時から青年学校生徒募集に、熊本県下は勿論、九州一円を東奔西走し優秀な人材の確保に努力した。その結果、熊本航空機製作所青年学校第一期生1500名の生徒が入校し、予定通り 18 年 4 月開校の運びとなり、生徒ならびに関係者、来賓が青年学校西のグランドで華々しく入学式を行なった。この日を記念して社内及び市内関係者に記念の絵葉書が配布された。尚、初代校長は片岡金吾副所長が兼務した。

以降、昭和 19 年 4 月、20 年 4 月にそれぞれ第二期生、第三期生を採用していった。 昭和 63 年には第一期生が、平成元年には第二期生がそれぞれ還暦を迎えている。

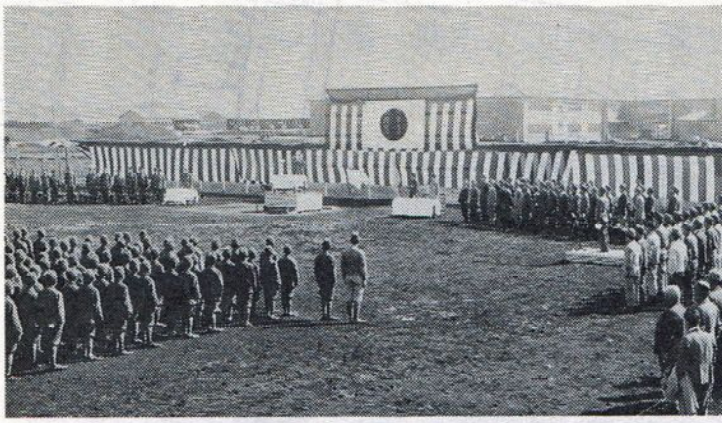
三菱青年学校の思い出

第一期生　　南　　政一

私は昭和 18 年 4 月に三菱名古屋の青年学校に入校、翌 19 年 6 月に父親と一諸に名古屋から熊本に転勤した。その間、約一年青年学校の教育は名古屋で履修していた。熊本に転勤してからは整備工場に勤務していたが、しばらくして青年学校の生徒は名古屋で三ケ月程特別実習教育をやるということであった。



青年学校校舎



開　校　式

熊本の青年学校は 18 年 4 月開校時に現地で採用になった者ばかりで、私の様に名古屋で入校して熊本へ転勤して来た者はめずらしいのではなかろうか。だから熊本入校組が名古屋へ教育に行く時、私も再び名古屋へ連れて行かれたのである。名古屋では三ケ月の教育期間があったが、勝手知ったるところでもあり、又同僚も多数居ることから故郷へ帰った様な気楽さがあった。再び熊本に帰って平常通り勤務についた。その時、青年学校生徒は全員寮に入って集団教育を受けていたが、私は親と一諸に転勤して来た手前、親と一諸に社宅から通勤していた。

ところが何回目かの給料日のことであった。何故か、この日から私の給料が無かった。労務課へ行って尋ねたら「養成工は一括して寮で支払うことになっているので、そっちへ入れたから寮で貰え」ということであった。仕方がないので寮へ貰いに行ったら「養成工は皆寮へ入ることになっている。自宅通勤とは何ごとだ」ということで以来寮へ入れられ、同僚と一諸に生活することとなった。しかし、やがて空襲やら疎開やらで寮での共同生活は出来なくり、再び自宅から通勤することになった。

三菱に入ったのは 15 才であった。日給 95 銭、給料は諸手当、超過勤務手当等を含めて月平均 21 ～ 22 円位であった。あの物の無い時に服も、本も支給され、食事もついて、おまけに一日中勉強させてもらって、その上 20 余円の給料が貰えるのだから有難いことであった。

三菱青年学校の思い出

第一期生　　中西　誠一

昭和 18 年 3 月 30 日、熊本市立島崎尋常高等小学校（高等科）を卒業、翌 31 日午後、花畑公園に集合してすぐトラックに分乗、健軍の三菱第二健軍寮の前で降りました。当時この一帯は見渡す限り畑、畠でその中にポッンと建った寮、土塀が印象的でした。

入寮後、点呼、30 人一組で入浴、大きい木桶に号令第一声「はいれ」「あがれ」、その間ほんの 2 ～ 3 分でした。この寮も完傭工、女子挺身隊の増加で、秋津女子寮など 8 寮を数えるまでになりました。

八畳の部屋に 5 人ずつ見知らぬ者同志が一夜を過しました。私は第一大隊、第一中隊、第二小隊 117 番として配属されました。一小隊 60 人単位、合計 25 小隊の 1500 人が一期生、翌年の二期生も 1500 余人が入校。三菱名古屋青年学校の先輩が区隊長として各小隊を統轄しました。

後日、私は区隊長室付となり多忙をきわめました。職番のチッを配布、職種の決定がされました。生徒は熊本、佐賀、大分、宮崎、鹿児島と九州各県から来ていました。4 月 1 日、入学式、一週三日は学科、一過三日は実習の予定でしたが、まだ学校も工場も建設中で、しばらくは毎日飛行場建設のため土運びや、防空壕掘りばかりでした。初めの日曜日はホームシック防止のため外出禁止。

漸く校舎も完成し授業が始りました。学科は徳育、国語、歴史、数学、物理、力学、製図、体操、教練等、実習は初めの内はハンマー振り、ヤスリ掛けという基本訓練の毎日でした。不器用な私は、最初ハンマーがタガネに当らず、指を打ち血がふき出す始末でした。

教育綱領

一、国体ノ本領ヲ辨ヘ忠孝ヲ第一義ト心得ヘシ
一、徳ヲ修メ技ヲ練リ智ヲ磨クヘシ
一、質実剛健ノ気風ヲ養ヒ身体ノ鍛錬ニカムヘシ
一、長ヲ敬ヒ和ヲ旨トシ規律ヲ尚フヘシ
一、責任ヲ重ンシ分ヲ守リ職務ニ精進スヘシ

熊本県教育是

国体ノ本義ニ徹シ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉戴シ錬磨育成以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉ランコトヲ期ス乃チ茲ニ綱目定ム

綱領

一、菊池伝来ノ遺風ヲ発揚ス
一、肥後文教ノ精神ヲ紹述ス
一、日新又新ノ規模ヲ開拓ス

実践條目

一、勤皇愛国ノ大義ニ生キ去私奉公以テ至誠純忠ノ臣節ヲ完ウス
一、敬神崇祖ノ源流ニ沿ヒ孝友和順以斉正醇美ノ家風ヲ樹立ス
一、隆師親友ノ郷俗ヲ成シ体壌相保以テ重厚典雅ノ民風ヲ作興ス
一、文武不岐ノ遺範ニ拠リ心身磨礪以テ清廉剛毅ノ士風ヲ陶冶ス
一、学問技術ノ振興ニ努メ修習精練以テ体察独創ノ学風ヲ昂ス
一、度量識見ノ恢弘ヲ図リ和衷戮力以テ生々発展ノ気魄ヲ涵養ス

寮では午前 6 時に起床ラッパが鳴りひびく、点呼、掃除、朝食後 7 時から全員整列して工場へ出発、帰寮は 6 時だったろうか？　入浴、夕食、点呼、五省を朗読、10 時の消灯ラッパで床　に入る。毎夜交替で不審番、週番区隊長と寮生が 2 時間おきに巡回する。無断外出して、憲兵につれられて戻された者もいました。

青年学校生徒寮

手紙の検閲はともかく、食料の持込禁止には誰もが困りました。次にシラミの発生には悩まされ通しで、退寮の日まで続きました。　6 月末まで飛行場建設と実習のくり返しでしたが 7 月から名古屋航空機工場に出張、名古屋の第一工場で陸軍爆撃機用燃料タンクの製造、隣の第二工場では海軍の偵察機が増産中でした。10 月 1 日から再び熊本工場に帰り、第一部品、盛本班に配属され、爆弾懸吊の部品組立に従事しました。三菱熊本工場は見渡す限り一面の畠の中に資材、鋳物、機械、板金、部品、熱処理、組立、検査等の建物が続き、専用鉄道が水前寺駅より工場まで引込まれ、工員、徴用工、動員学徒、女子挺身隊、軍人、医師とそれは賑かでした。勿論、腕章、職番バッチ無しでは一切入門できませんでした。

その工場跡地も今では官公庁施設が建ち並び往時のおもかげもありませんが、その地に立って眼を閉じると強く印象づけられた昔日の想い出がはっきりとよみ返って来るようです。

思い出の健軍

第二期生　　八橋　竜芳

昭和 19 年 5 月頃、雲ひとつない青空に赤トンボが今日も飛行訓練をしている。高等練習機か単葉であったように記憶するが定かではない。

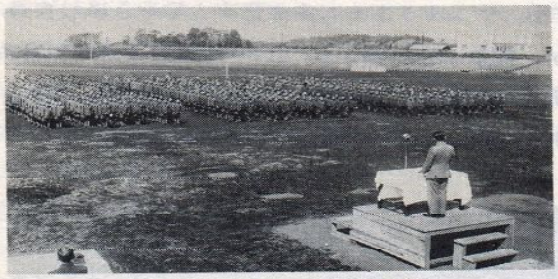
三菱熊本航空機製作所の養成工二期生の私達、今日は実習工場への出勤である。現在市電終点から右の方角へ行き左側に第一、道路をへだてて第二健軍寮があった様に思う。その第二健軍寮から出た我々 11 小隊はまだ舗装もしてない道を砂ぼこりを上げながら実習工場へと向った。軍歌「ここはお国の何百里」「敵は幾万ありとても」を元気で斉唱しながら通った。2 日青年学校での訓練・教育を受けていた。服装は物資の不足で決っておらず、まちまちであった。でも少年産業戦士として必勝を信じていました。青年学校の 2 階の窓からは菊池の鞍岳や、遠くに阿蘇山も見ることが出来ました。阿蘇の山々が今でも脳裏に焼きついています。
田舎育ちの私にとってはすべてがめずらしいものばかりでした。学科は一教科に一教師が当り、常任の先生やら各課で仕事をしている大学卒の職員がいろいろな科目を担当してくれました。授業は判り易くよく理解できました。厳しかった訓練など思い出の一つです。厳しいので思い出すのは健軍の冬のことです。それからノミ、シラミに悩まされたことも厳しい思い出の一つかも知れません。人工の綿でしょうか、毛布のカスみたいなものが入っていたふとんも途中青年学校の正門もあり、寮から 1 Km程の道のりであった。18 小隊の中1/3が週切れてしまいまい、四方の角に寄ってしまいました。ノミ達と一諸に、二人分のふとんを合せて二人で寝

て暖をとる始末でした。

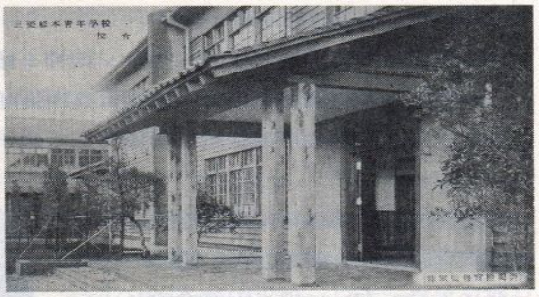
これに併せて空腹との戦いもありました。やがて空襲にも備えねばなりません。何人かの犠牲者を見送る度に「撃ちてし止まん」の覚悟を強くしたものです。

当時の健軍はしばらく走ると雑木林や畑に着きました。空襲の時には、これが格好なかくれ場所でしたが、これが又逆に敵機からはよくねらわれました。燃料や弾薬が隠してあるとでも思ったのでしょうか。

8 月頃であったと思いますが、現場に配属され、私は技術課、手順班に編入されました。この頃から次第に空襲警報の度数も多くなって来ました。20 年 3 月から工場分散が始まり各種学校へ疎開しました。私達は熊工専へ移り健軍から市電を利用して通勤しました。市電健軍線は



第一期生入校式　片岡校長挨拶



青年学校校舎（玄関）

その当時単線で神水に待機場所があり、ここでどちらかから来る電車を待ちました。月 2 回程休日がありましたが市電には乗らず水前寺まで歩くことが屡々でした。

出撃する特攻隊員を路傍より見送ったのもその頃でした。砂塵を立てて走るトラックの上から手を振る勇士たちに武運を祈りました。そして夜になってキーンという独特の爆音をたてて飛び立っていく飛龍を見ながら再度祈ったものでした。

戦局我に利あらず、分散した工場での生産はどれ程のものだったのでしょうか。オートメ化する現代の産業に比して、当時の生産は如何に微々たるものであったかと想像します。

空襲で焼野原となった市街、爆弾や焼夷弾で破壊、炎上した家々、寮や社宅、現在の健軍からは想像も出来ない状況でした。変らないのは空と健軍小学校の子供達の楽しそうな明るい声だけだと思います。市電終点に向って左側の道路際には数える程の家しかなかったようです。その一軒の農家に熟柿を何回か買いに行っては食べていました。

飽食の現代が益々飽食になればなる程、食べ物の欠乏に苦しんだ一年有余の健軍時代が懐しくさえなります。そしてネオンサインがきらめく商店街を見るとき、そのあたりにあった健軍寮やその他の施設が思い浮びます。時々まぶたを閉じると拳突き体操の声や、消燈前の五省の声が聞えてくる様な感じさえします。

実　習　工　場

そして漸く 8 月 15 日を迎えました。分散していたそれぞれの職場から、再び健軍工場に集り、刃折れ、矢尽きた思いでそれぞれの郷里へ帰って行きました。

熊本航空機製作所　発足

昭和 19 年に入ると、保管倉庫等収容建物が完成し部品工場、機械工場、工機工場等は外敦が出来ており、機械等の内部設備も着々設置されてはいったが、こういう時勢でもあり、すべてが計画通りには進まなかった。機械設備も設計通りには揃わず、能力的に不均衡なまま生産に入ったため、完全な生産には程遠かった。従ってこの頃ではまだ名航の支援がなければとても独立してやっていく能力はなかった。

こんな状況下ではあったが昭和 19 年 1 月を以って熊本航空機製作所という場所として独立、発足した。工場の建設と飛行機の生産が並行して進められた。従って部品の生産が遅れ、当初は名航から送られて来たものを熊本で組立るという方式をとっていた。時に緊急不足部品が生ずると名古屋へ行ってかき集めてくるという、いわゆる「リックサック部隊」を派遣し、熊本ー名古屋間の運送屋が始った。

当時汽車旅行は大変なことであった。片道 24 時間もかかり出張する人も大変だったが、この切符を手に入れるのが又、大変であった。発売枚数に制限があり公用の証明がないと一般では仲々入手出来なかった。三菱では駐在監督官の証明を用いたり、名古屋駅とコネをつけたりして毎日一定枚数の切符を確保していた。部品、資材を持てるだけ手荷物にして車内に持込むのだが持込み荷物にも制限があり、小さなトランク程度のものしか持込めなかったが㊨というマークをよく見える様に標示し、改札で大目にみて貰うことにして選んだ。

こうして熊航での作業は設備の充実・完成と並行して部品の製造がどんどんすすめられていった。

1・一号機進空式

朝夕この地方独特の霜柱がとけ、漸く春の兆が出はじめた頃、名古屋からキー 67 完成機の解体部が熊航に搬入された。熊航一号機である。これらの部品の整理には事務系の職員も毎晩 10 時過ぎまで残業を命じられ。まさに熊航従業員が一丸となって作業に当った。

まだ未完成の組立工場で再組立工事が始った。名古屋から転勤した基幹工員を中心に、機体組立技術を習得してきた人達によって「飛龍」が組立てられていった。 4 月に入りほゞ完成、最終整備を終え、晴れて天長の佳節を期して、この熊航での一号機の進空式が行われた。（艦の進水式に対して「進空式」といったのが時代がかっていて面白い）。純熊航製ではないが、熊本航空機製作所として発足した手前、従業員の生産意欲向上を期待して出来るだけ早い機会に飛ばそういうことになりこの佳き目が選ばれたのであろう。　当日は快晴であった。万全の整備をされたキー 67　熊航一号機は整備工場を出て健軍飛行場滑走路に停っていた。多勢の従業員が整列し、神式により一号機の進空式が行われた。やがて、離陸時間になった。エンジンを始動、いよいよ離陸である。工場関係者が見送る中を大きな機体が飛んだ。キー 67 独特のキーンという快音をとどろかせて工場の上空を飛んだ。それは前日遅くまで仕事をして、この日を迎えた多くの従業員に晴れ姿を見せるかの様に誇らしげに飛んでいた。

この時間を待っていた全従業員が事務所の窓から身を乗り出して、又各工場からしばし手を止めてこの英姿をみつめ感激した。こうして熊航一号機は無事に飛行を終え従業員の一人一人

が（自分達が造った飛行機）に誇りをあらたにした。この行事を記念して全従業員に陶器製のキー 67 の模型が贈られた。

キー 67 の晴姿を眺めていた。乗って中を見てよいというので乗ったが、その胴体は鉄骨だらけであったが広いのに又びっくりしながら最後尾まで見て廻る。機関銃座が五っもあるという。戦闘能力を備えた垂爆撃機だと説明してくれた。

今から装備のために各務ヶ原まで飛ぶので万事を連絡せよという。各務ヶ原で兵器装備を行うためである。時速から計算して各務ヶ原までの一般電話では間に合いそうもない。西部軍司令部（第六師団司令部）に連絡すると機種、高度、型式を教えよ、さもないと下関要塞で撃墜するという。無茶なと思ったが軍機密であり、極秘であるから一切言えないと云うと何か訳のわからぬまゝ「宣しい」と云って来た。とに角、各務ヶ原には連絡しなければならないので、西部軍司令部より中部軍司令部へ軍用電話で出発時刻と、到着予定時刻だけをお願いする。そのためあちこちと走り廻ったことと、皆がこの大きなキi 67 を見上げていた姿が目に浮ぶ。無事にキーンという快音をたてて健軍を離陸し、金峰山を下に見て飛んだ時のことは忘れられない思い出である。

キー 67　後日談

フィリピンのルソン島北部ツゲガラオ地区にて米軍と最後の決戦を挑む時期の来た昭和 20 年 5 月か 6 月ころであろうか、我々がルソン島に上陸を開始し、そして上陸後に至るも日本軍機は一機も見なかった。そこへ軍通達が来て、「飛龍という重爆撃機が応援に来る、型式はこうだ、敵機と間違えないように」とのことである。私は懐しいと言うよりも自慢気に、私の部隊に通達を出した。即ち「三菱重工　熊本工場で我々が造った飛行機だ」と。

然し通達は空に終った。とうとう一機も姿を見せなかった。米軍機の攻撃と地上よりの砲撃にさらされながらどんなにかキー 67 の到着を待ったことか。後で待っ方が無理であったと知った。その頃から戦況は極端に我に不利となっていたからである。

2　キー 67 の生産

キー 67 の生産に当っては、従来機にない多量生産方式が数多く採用されている。これは名古屋に於けるキー 67 の生産方式であるが、その量産工場である熊航においても、ほぼ同一の形態がとられたと思われ、次の様な思想に基いて展開されていった。

（1）図面の新体制

多量生産を容易にするためには、まづ図面から新しい方式をとり入れそれは要約すると次の如くであった。

ィ. 機能的、説明的図面をやめて、製作単位の図面にした。

ロ. 単一部品、部品組立、組立の段階に図面を分けた。

（ハ）組立治具の単純化

分割により組立単位が小さくなり、従って組立治具も小さく、かつ機構も単純となり、材料、設計労力等の減少を図り得た。

（二）作業の機械化

分割により、従来殆んど使用出来なかった自動絞鋲機、スポットウエルダー等の使用が可能となった。

3　活気づく熊航（昭和 18 年～昭和 19 年）

昭和 18 年夏頃には名古屋から転勤した基幹工員、名古屋で訓練を受けて帰って来た現地

採用の人々は工場建設作業が進むにつれ、工場内のレイアウト、機械の据付指導、作業台の配置、現場事務所の設定、環境設備を始め、どんどん必要となる人の対策、機械、部品、材料の購入手配、納入された資材、部品の整理管理、新規採用者の教育等、下準備の仕事に追われていた。

工場建物は当然生産ラインの始めの方から態勢が整えられていった。名古屋から運ばれて来た部品、材料等を格納、保管する部品倉庫が最初に完成した。

その後、大きな建物としては板金工場、機械工場、組立工場、工機工場が順次完成していった。

これら昭和 17 年度着工計画の主要建物が完成したのは、昭和 19 年春から夏にかけてであった。その後 18 年着工分、19 年着工分の建屋工事があったが、これらがほゞ完成したのは昭和 20 年に入ってからであり、今度は逆に疎開が始まるという皮肉な現象となった。

一方、昭和 18 年頃、熊航籍にはなったが、そのまま名古屋の熊航事務所に居て熊本工場の仕事をしている人もあった。何せ工場建物が完成次第、飛行機を造るといっても、部品、材料が急に揃うわけでもなし、それまでに着々と部品を集めておかなくてはならない。本来ならば九州各地の下請工場から計画的にどんどん納入されるべきであろうが、まだその様な態勢は出来ていない。従って関連部品を始め、装備品、材料等はすべて名航に依頼しなければならなかった。熊本からはリュクサックを背負い、名古屋から重い部品を持帰るという如何にも原始的な、リュクサック部隊と呼ばれる調達、輸送方法を使った。

こうして名古屋で作られた部品をどんどん熊本へ運んだのである。

鍛鋳品を熊本へ

佐久間　久見

昭和 18 年中頃、私は熊航転勤の辞令を受け、熊航籍になったが、勤務は名航内にある熊本出張所（所長　手嶋事務）に在って名航から貰った部品を熊本へ送り込む作業に従事していた。名古屋熊本間の往復数も多くなり、お陰で、本来の給料の上に出張費が併給され、家庭経済の上には大いに潤った。

或る時、熊本から郡さん、小山さんが来名、名航の守屋部長を中心とした幹部との間でキ 167 の鍛鋳品の受渡しについての会議が開かれた。これは難行するであろうと察した私は一計を策した。名航の鍛鋳品の責任者でもある川合工場長に、「製品倉庫が大部乱雑になっている様ですね、少し手伝いましょうか」と声をかけたら「それは有難いよろしく頼む、倉庫の方には連絡しておく」ということであった。

私は早速部下を集め、製品倉庫に入って機種別、部品別に製品の整理を命じた。と同時に国鉄の貨車を取っておき、キー 67 の鍛錬品に限っては名古屋の生産機数の 1．5 ケ月分を残し、それ以上のものは全部貨車に積んで熊本へ送ることを含ませた。

既に川合工場長から倉庫側には話が伝っており、誰も口出しする者もなく、我々は堂々と貨車に運び出すことが出来た。

一週間程で倉庫の中は整理が終り、貨車何台かの鍛錬品は熊本へ発送済になっていた。

会議が終った小山さんに会った時、私は「小山さん、熊本へお戻りになったら件の鍛錬品が山積みになっていますよ」というと小山さんは「そんなことはないだろう、守屋さんも軍のき

びしい要請もあり、鍛鋳品については頭をかゝえているといわれ、その為にこれら部品の貰い受け会議も長引いているのだよ」といわれた。私は経緯の一部始終を説明したが、小山さんは尚信じられない様な顔で熊本へ帰っていかれた。5 ～ 6 日過ぎた頃、川合工場長に会った時、「佐久間君、やられたね」というので「相済みません、返しましょうか」というと「いや、倉庫も奇麗になったことだし、いづれもお国の為だからね」と云われ、叱られずに済んだ。

熊本に戻った小山さんは会社の引込線構内に山積みになっている鍛鋳品をみて驚いたと後日聞いた。

熊本へ転勤

野中　勝俊

昭和 19 年 2 月、名古屋から熊本工場へ転勤し、水前寺の社宅に入って熊本での生活が始った。そろそろ名古屋には食料品（主食以外の口に入れるもの）は店頭から姿を消していたが、こゝ熊本ではまだふりかけ食などを売っていた。仕事は組立工場（ 3 ／ 3 ）中胴作業であった。ラインの前後には作さん、南さん等が居た。やがて戦況がひっ迫してくると、多数の学徒、挺身隊、徴用工などが入り賑やかになった。動員学徒は五高、熊工尊、九学、天草高女の生徒が私のところへ来た。五高の学生はこまめに働いていたが、熊工尊の学生は「僕達は将来指導する立場にある身だからこんな仕事は出来ないといってあまり働かなかった。天草高女の生徒は一つの仕事に 20 人近くも寄り集り、逆に人が多すぎて仕事にならなかった。今から思えば、もう少し計画を十分練り、効率のよい運営をやればもっと効果があったろうにと思う。あれは受入側自身が不備であったため、折角「撃ちてし止まん」の勢いで、張り切ってやって来た若い力を十分使うことが出来なかった。

19 年も暮れになると生産は思うに任せず、夜は 11 時～ 12 時まで働き、朝はきちんと 7 時半に始まった。深夜残業、徹夜など連日のことであった。自分の担当作業は進めなくてはならないし、その間に学徒や徴用工の教育もしなければならず、とても時間が足りなかった。

疲労のため仮眠所で寝ていると監督官がとんで来て怒鳴り散らされ、疲れた身体にムチ打って作業につく有様であった。一度たっぷり眠りたいというのが当時の皆の最低の希望であった。

当時は水前寺の社宅から近道をして健軍の工場まで自転車で通勤した。汽動車もあったが、歩く時間、待ち時間を考えると自転車の方が早かった。

20 年に入ると健軍工場が空襲にあい、やがて生産に影響が出てはというので、各部で疎開が始った。我々組立工場も（総組立を除き）例外ではなく、中部胴体を組立てるため山鹿の鹿本中学に疎開することになった。

その為の受入態勢を整えるために 20 年 4 月から山鹿中学へ行った。毎日学校の床を外したり、邪魔な柱を切り倒したりして、とに角中胴作業が出来る様な工場作りにあけ暮れた。殆んど出来上がっていよいよ中胴工場の引越しというところで終戦を迎えた。学校を壊しに行った様なものであった。

折角疎開先の鹿本中学に搬入設置した機械を、今度は又健軍の工場へ逆疎開することとなった。これらの機械をめぐって、戦後のドサクサにまざれて横流しをやった人もあったとか。

水前寺の社宅が空襲を受けた時、社宅を放棄して逃げたところは皆焼けてしまった。親父が

「サラリーマンは社宅に入り、自分の家ではないのでイザとなれば放り出して逃げてしまう。自分の家ならそんなことは出来ない。焼夷弾位い消せばよい」といって怒っていた。事実、放棄したところだけ焼失してしまった。終戦後は何故か水前寺の社宅の人は全部健軍へ引越した。

熊本の思い出

佐久間　美恵子（岡野）

昭和 17 年 4 月、三菱名古屋航空機へ入社、18 年～ 19 年頃、続々と熊本へ転勤する人があった。父も 18 年 8 月に熊航要員に決定し屡々熊本へ出張していたが 19 年 4 月、いよいよ転勤となった。

今までそんなに遠くへ動いたこともなく九州への転勤は多少ためらいもあった様だが熊本に骨を埋めるつもりで転勤を決めたらしい。

昭和 19 年 4 月、住みなれた名古屋の家から家財道具を馬車で運び出し、ものものしい引越しとなった。中学在学中の弟一人だけを親戚の家に預けて一家は熊本に向った。初めて渡る九州・熊本という土地、一体どんなところだろうか不安と期待を持って熊本に来た。水前寺からバスで健軍に降り立っとまだ新しい社宅が何百戸も建設中であり、背丈もある草が道の両側に生い繁る中を十分程歩いて木の香もかぐわしい社宅に入った。まだ荷物が着かないので食事は父が寮からもらって来てくれた様である。一週間程遅れて荷物が着いたが、何故かミシンが迷子になり未着であった。

父の転勤に伴い、私も自動的に転勤扱いとなった。翌日から工場に出勤、新しい工場建物がどんどん建設中でただその広さに驚いた。

最初に行った事務所はあまりきれいな所ではなかった。まっ先に後藤課長のところへ挨拶に行った。この事務所には先に転勤していたのか、名古屋で一緒に働いていた人々も居られ心強かった。

新しい熊本での職場では購買業務を担当、直材、ジュラルミン板等の買付け事務処置をやっていた。当時材料の神様といわれた瓜生さんが居られ、その帳簿を我々が記録、整理していた。その帳簿が空襲で焼けたので倉庫の書類や払出控や経理支払等などとつけ合せて帳簿を作るのに徹夜したこともあった。当時は女子といえども徹夜など当り前であった。

20 年 5 月頃だったろうか、敵艦載機の空襲も激しくなったので水前寺の出水小学校へ疎開することとなった。同校の教室を事務所にして、そこで事務をとった。

出水小学校へ来てから空襲は更に激しくなった。校舎の横に掘った防空壕にはよく非常持出書類を抱えて退避した。健軍の両社宅の連絡道路東口に別荘の様な屋敷（工員クラブ）があって、そこへ書類を疎開した。通勤には、この連絡道路を歩いて出水校まで通った。20 年半ばになると男子社員の方々がよく出征して行かれた。中には終戦の直前に出征された方もあり軍隊に入ったと思ったらすぐ帰って来られた人もあった。佐藤さんだったと思うが 8 月 7 日に出征、その時の挨拶に（必ず帰って来ます）といわれたのが印象的で、未だに頭に残っている。

空襲が激しくなり、健軍の家にも機銃弾がとんで来て危いので空襲警報が出ると広木に退避していた。

そして 8 月 15 日、終戦は出水校で迎えた。8 月末、戦後の残務整理でまだ引続き出水校へ

通っていた。いつもの通り歩いて出勤していたら出水校の前のバス停で見たことのあるトランク（父のトランクで満州や台湾のラベルがたくさん貼ってあった）を発見、ふと見ると名古屋へ一人残して来た弟が七つ釦の軍服をきちんと着て立っていたので職場へ事情を話してその日は休ませていただき、弟と一緒に今来た道を健軍の家まで帰った。途中神水の清流で汗を流し真夏の太陽が照りつける中を歩いて家に帰りついた。

出水校を引揚げ、引続き健軍の工場で整理業務を行なった。その時、事務所はもう青年学校へ移っていたと思う。熊機時代は経理課、総勘定グループに居た。熊機で作った衣粧函、縄張等を貰った（買った？）ことをかすかに記憶している。

熊航の思い出

小山　節郎（那須）

昭和 19 年 1 月、宇土中学を卒業する少し前から三菱熊本航空機製作所に入った。入社当時工場はまだ建設中でだだっ広い敷地に、部品工場、機械工場、工機工場位が各一棟づっ建っていた。機械等はまだ片隅に 2 、3 台据わっている程度で、建物内は殆んど空っぽの状態であった。又、青年学校の東にあった実習工場では我々学歴工や、養成工、さらに徴用工がそれぞれ旋盤の使い方や仕上げの実習としてバイス台にはさんだ鉄板をタガネで切断する練習をさせられていた。厳寒の日々にハンマーで手を打ちつけて血が飛び散り、幾度も泣いたことを思い出します。食糧事情は極端に悪く、蛋白源としては牛か豚の臓物を炊き込んだものを食べさせられ泣かされました。時々台湾産の干レバナナの配給があり、一人当り 20 本位づっ渡されましたが、その甘ずっぱい様な味が当時のせめてその慰めでした。

我々の学歴工時代は青年学校に入り、毎日午前中は数学、特に力学の勉強をさせられました。 19 年秋になって技手の登用試験があり、無事合格して技手に登用されすぐに材料整備課、鍛鋳係りに配属されました。この頃、特に鍛錬部品の不足がひどくこれの確保には随分苦労した。更に新規採用の徴用工、工員の技術の未熟さにより折角出した原料部品が機械工場に送ってから「オシャカ」続出のため二重に泣かされる始末であった。（ 10 機分の原部品を出して 2 ～ 3 機分の合格品が出れば良い方であった。）この様な状態のためキー 67 製作計画は遅れる一方で、若い監督官から矢の様な催促を受け、随分言いあったこともあった。 20 年に入って名航へ部品の調達に数 回行った。 4 月になると、いよいよ鍛鋳部品が逼迫したので、宮本中尉が操縦するキー 67 完成機に乗って各務ヶ原まで飛び、飛行機はそのまゝ待たせておいて名航から鍛鋳部品、ガラス製品、車輪等色々の緊急部品を一括融通して貰い、これらを待たせておいたキー 67 に積み込み、車輪などは爆弾倉に縄で吊り下げて、翌日とんぼ返りで健軍へ帰って来た。

学歴工時代は健軍第四寮に住み、相変らずの飯の不足と蚊、のみ、しらみの猛攻に泣かされた。技手になってからは神水町の報国寮に移り、よほど楽になった。飯も苦いコッパ飯からヒジキ飯になり、後には春雨飯になって量も少し多くなってきた。報国寮から工場まで歩いて通っていた。途中道端の南瓜の実になったばかりの青い小さな球を二つ、三つ失敬して寮に持ち帰り、これを刻んで片栗粉と塩を混ぜ味付けをして飯盒で炊いて食べたものである。又、夜半に江津湖の近くの唐芋畑に入り二、三度黙っていただいたことも忘れられぬ一駒である。

給料は入社第一回のものが確か 15 円 18 銭であったと記憶している。又一年間無欠勤で日

給の昇給は最高額の 10 銭であった。二、三日でも欠勤すると昇給は 6 ～ 7 銭位に下るという評定である。技手に登用されてから月給となり、最初の本給は 45 円であった。徹夜、残業をすると給料は月 80 円位になった。或る時、どう間違ったのか 114 円だったか 140 円であったか、はっきりした記憶はないが 100 円をうんと越えた額が給料袋に入っていたので、びっくりして「これは間違っていませんか」と労務課給与係まで持っていったら「もう決済してあるから今更返してもらっても困る、貰っておけ」といわれ、有難いやら後めたいやら妙な気持ちでそのまゝ貰っておいた。

20 年 4 月頃であったろうか、私達材料整備課は水前寺の盲唖学校に疎開し、又、その後鍛錬係だけ今度は上熊本工場（元製糸工場）に移った。既にこの京町台の下は横穴を掘り廻らして旋盤を始め、その他の機械類が一杯詰っていて、そこで仕事をしていた。

運命の 8 日 10 日がやって来ました。上熊本工場がこの日、コンソリデーデットB－ 24 の空襲を受け、私は九死に一生を得ましたが、事務所建物は焼失しました。大量の図面、書類など一切合財焼けてしまいました。

これで私の仕事は全て終ってしまったのです。そして 5 日あとに、8 月 15 日の敗戦の日を迎えました。このあと残務整理のため小川の自宅から上熊本まで通勤し、部品類の整理に当りました。

その年の 12 月末までに整理も終ったので会社命令により退職致しました。

退職金は 300 円也でした。

機械工場

木下　囲資

今でなら「ネジロール」一台で出来る仕事を数十台のターレット旋盤と、その台数の二倍以上の学徒群が、松根油の切削煙の中にうごめいてボルトを削る。それが何群も何群もつづいて、広い機械工場はその三分の一位の視界しかない。

削っているボルトはキー 67 の機体組立用の三級巌合の、割に精度の高いボルトである。その精度の高さのせいか、バイトのヘタリが早いのか、旋盤の精度が低いのか、合格品より不合格品の方が多かった。

つまり、鉢巻をしめて、お国の為に学校から動員されて来た学徒は暖もとれず、かじかみ、アカギレした手を松根油のしみるまゝにして、一生懸命に不合格品をつくっていた。健軍の冬は寒かった。現場においた机の上のインク壷のインクが朝は凍っていて、それをとかして書いているうちにまたシャーベット状になって行く、そのくらいの寒気であった。

あるとき、私は機械工場でつくられたボルトがどういう風に使われているかを、組立工場に見に行った。その組立工場では驚くことに、吾が機械工場で入念に高精度を出して削り上げたボルトが乱雑におかれ、その表面には運搬保管中の打痕が指先でさわってもハッキリわかる様についており、さらに驚くべきことに、組立工はボトルをさし込むのに、はいらないので、孔の方とボトルの両方を炉で削っているではないか。何ということだ。

これなら、吾が機械工場の不合格品の山をもって来ても全部使うことが出来るではないか。

私は、機械工場の不合格三級ボルトの山と炉でゴシゴシ削って折込んでいる組立工場の三

級ボルトの間に、何か生産の邪魔者が居ると考えた。

当工場をスートッハトーバイズしているのは陸軍の監督官であった。

彼等が機械工場に来た時、努めて客観的に私は彼等のひとりひとりに話した。きつ過ぎる加工精度が生産を阻害している。

彼等の返事はのらりくらりであった。又、時には高飛車でもあった。結果として全く改善はなかった。一機入魂。そういった風の手仕事、名人芸の飛行機を造ることだけ。広大な工場、全国からかき集められた工作機械、従業員、挺身隊、動員学徒の大群は目的のないうごめきでしかない。一向にキー 67 の生産は軌道に乗らない。ベクトルの合わない、てんでんばらばらの大群集でしかなかった。海の向うでは自動車も、飛行機もマスプロダクションの為に設計され、マスプロダクションの為に工程が組まれ、人員が配置され、何も出来ない素人にでもマスプロタクションのベルトコンベアで 100 パーセントの機能が出せるように配置された。

マスプロダクションと左甚吾郎の生産競争の勝負は明日であった。ジリ貧ではなく、日本は、日本の軍需産業は音を立てて崩れて行った。

あの日から 40 余年、

国家の名のもとに、家屋敷から田畑までも取り上げられ、自ら生命を絶った健軍村の農家の人達があったことなど、誰も語ることなく、健軍町は発展をつづける。これが歴史であろうか。

そして、最高のGNPを誇る日本は、最高の物価にあえぎ、益々狭くなる宅地に小さな自宅をつくることをメガロポリスでは絶望となる。そんなことは一向にお構いなく、今、日本の軍備はあの頃を超えた軍事大国になった。

ヒットラーと東条ら、狂神の哄笑がきこえる。又、あの狂気の時代がやって来るのが見えて来た。

職業軍人、軍隊とは一面を追求していけば殺人のプロフェショナルズであり、軍需産業はその殺人専門集団の為に殺人道具を供給する業種である。そして三菱はその軍需産業の中央を歩きつづけて来た。そして又、未来に日本と、日本の戦争の演出家であり続けるのであろうか。

キー 67　回想

吉長　富士男

昭和 19 年 12 月、就職内定先の三菱、熊本工場に学徒動員として勤務した。職場は希望した組立工場の総組立であった。こゝは飛行機の姿に完成させる最終工程であって、飛ぶために整備工場へ送り込むまでのところであり、「飛龍」の構造がよく判り、幸運な職場であった。こゝで初めて「飛龍」を見、手を触れたのが 8 号機であった。

昭和 20 年 4 月 5 日に学校卒業で正式入社となり産業戦士の一員に加った。最初は職制と作業関係を理解するため各組長のもとを一廻りし、全体のことを早く覚える体験作業が課せられた。まづ作組長のもとで防弾燃料タンク、爆弾倉扉、機首部等の取付を、高田組長の処ではパイプの曲げ、接続部の加工、そして取付、南組長のところでは主翼、エンジンそして主脚の大物の取付けを見習った。

総組立を完了した機体を整備工場に引渡すために機体についていって、整備工場の一面も覗くことが出来たし、時には飛行場まで行って「神風」の鉢巻もりりしく出撃していく隊員と飛行機を見送ったこともあった。

生産機とは別に、戦火をくぐり抜け傷ついた機体の修理を手掛けたこともあった。昭和 19 年 12 月より、終戦までの短かい期間ではあったが、キー 67 とのかゝわりでその姿や構造がおおまかに判るようになっていた。戦後名航に行き再び航空機に係りがあったが、私にとってはこの「飛龍」との出会いが最も印象深く、今でも当時の生産状況が彷彿と浮び上ってくる。その一駒一駒が私の青春の思い出である。以下思い出すままにその断片を記す。

（1）燃料タンクは重かった

防弾燃料タンク（約 20 ミリ厚で二層で出来ており、弾が突き破ったら、弾力と外層側防弾ゴムの溶融によって穴を防ぐと聞かされた）を吊帯紐に天秤棒を通して、タンク置場からクレーンの下まで作組長と担いだ、「実に重かったアー」というのが実感であった。

防弾燃料タンクは胴体左舷の上部、通信士席の後から上方 20 ミリ旋回銃座の前までの 1 番、2 番、4 番タンクの 3 ケと胴体翼位置の前桁と後桁の中の 3 番タンク 1 ケの計4個であった。（両翼内タンクは別）

燃料タンクは私の初仕事であったためまづ最初に思い出す事柄である。又、戦後、このタンクに張ってあったゴムを切取ってゴム草履を作った。

（2） 鳥籠の取付ーたくさんのボルト・ナット

機首部を通称、鳥籠と呼んでいた。前方射手と爆弾手が乗り込むところで、前胴との結合部は直径が約 1．8 米、この内側円周に添って直径 10 粍位の沢山（50 本位か）のボルト、ナットで取付けた。

狭い個所でのスパナ締め、現在の様にラチェット、スパナがなく手間どった。更に割ピンを差し込んで開くのもむづかしくはないが苦労した。

（3）エンジンの取付ー 4 ヶ所でとまるのに感心

エンジンの支点はエンジン架の 4 ヶ所で径 70 粍程の袋ナットであった。やはりエンジンをクレーンで吊って少しづつ近づけて合せ、取付ける。

エンジン（プロペラを含む）の重量がたった 4 ヶ所で取り付けらけていることが不思議であり感心した。

（4）車輪扉の開閉、調整

主脚（尾輪も同じ）上げ下げは油圧によるが、その動きから脚支柱を起点としてクランクや、ロッドで車輪扉に連なり開閉する。脚上げの時、扉の閉まりが早ければ脚で扉を壊すし、遅ければ扉の閉まりが悪い。その調整は何本かのロッドの長さで行う訳だが、その上手、下手は経験がものを云う。経験豊かな、腕のよい工員さんについて教わり作業をした。この時は脚の上げ下げは池圧ポンプを手で突きながらやった。ロッドの長さが決ったところで廻り止めのロッキングを施した。

（5）武装機に．／被弾の勇姿に．／驚く。

沖縄戦の頃か、健軍飛行場より、夕方から夜半にかけて 4 ～ 3 機の編隊で、時間をおき、3 回程に分れて飛び立って行き、明け方に帰投してくる。

その時は機影が 1 ～ 2 機減っていたことがあった。徹夜明けにみた光景であった。戦地も銃後も共に戦っている感じであった。

時に戦火をくぐり、傷ついた何機かが三菱の工場に搬入されたことがあった。この時、初めて「飛龍」の武装された姿と、被弾の凄まじさを見て驚いた。（今まで手掛けてい

た機体は武装なしだから）武装の状況を列記してみると、　上機体中央上部の 20 粍砲や前方、後方、側方の 12．7 粍機銃 4 門、そしてこれらの弾帯、それに回収洩れの薬きょうが床の狭間に転がっていたのにはびっくりした。

2．尾輪カノバーの周辺機内には、巾約 50 粍、長さ約 1 米位の錫箔が一杯積み込まれたまゝのものがあった。レーダー妨害用のものであると、それとなく聞いた。

3．主翼前縁と胴体側方にレーダーアンテナを付けた機体もあった。当時は見なれていない妙な突起物だったから非常に印象に残っている。

4．尾輪カバーは取り外され（重量軽減か）その胴体内両側に一つづべニヤ製の簡易燃料タンク（魚雷型）が無造作にベルトで縛ってある機体もあった。

（6）被弾機の修理

戦火をくぐって傷ついた被弾機でよく覚えている一機に、左翼下面に砲弾の炸裂痕があちこちにあって、翼の外板が裂け、内側に傷口が開いている。中には上面に抜けたものもあったり、又翼内に砲弾片が残っていたりした。

大きい弾痕では長さが 300 粍位のものもあったろうか。左翼下面は一寸少なめで小さかった。胴体左側には少々の小さい砲弾跡、胴体右側には、機銃弾の跡と思えるものが、胴体の日の丸の下辺から 20 粍砲塔下に向って斜め上方に 600 粍位等間隔で点々と穴があった。

（7）完成機を整備工場へ

整備工場に「何日の何時、渡し」と決まって居れば、その日時が近づくと特に慌ただしくなる。取付部品が済んでいなくても、組立工場としての責任上、整備工場へ運び込まなくてはならないからである。

いよいよ搬出の時になると、未取付部品を工具と共に、側方銃座（後の半分が上方に半円を措く様にして外せる）の開いた口や、下方乗降口より、養成工の小西君ら何人かと慌当日済まないと翌日も、次の日も整備工場まで通って作業をしなければならない。

機体随行者であった先輩職員の山川技手によく部品積込時にはハッパをかけられた。機体随行者としては他に江頭技師、仁多田工師、河野技手も居り、誰かゞ操縦席に乗り込んで牽引車に引かれる機体を、曲がる時はブレーキを踏んで方向を変えていた。

大分なれてからの搬出時に、私も操従席に座らせてもらったことがある。“動いている飛行機の操縦桿を握る”ということがとても気分がよかったことが忘れられない。

（8）飛ばなかった 46 号機

終戦時、手掛けていた飛行機は 46 号機で、九分九厘まで出来上がっていた。8 月 15 日、敗戦後の数日はなす術を知らず、皆、ただ茫然としていた。工場の中も今はリベットの音もなく静かなものであった。

この状態に元気付けようという意味であったろうか、手島工場長が「此の飛行機を完成させて、思い出に皆んなで乗ろうではないか･･･」との一声で、我々は乗りたい一心、もあって敗戦の沈滞ムードを吹き飛ばす様に活気づき、やがて完成させた。そして工場長の手配で記念写真を撮ることになり、機体を外に突き出して皆が（30 ～ 40 名位か）この最終号機に群がった。私は右発動機ナセルの内翼側にあぐらで座ったことを覚えている。此の写真はとうとう貰えなくて、キー 67 と私のかゝわりを示す証拠となるものが手元に残らなくて本当に残念でならない。

さて、こうして完成させた機体を、乗せて貰えるという期待をもって整備工場に運び込んだのであるが、整備工場側は、組立工場長の「全員が乗れるように」との願いにも拘らず素知らぬ顔をしていた。

全員が同乗するという夢は泡と消えて 46 号機はとうとう飛ばず終いの飛行機となってしまった。

更に付け加えると、終戦後、この機体を完成機として「軍に売りつけた」と手島工場長は自慢話の一つとして語って居られた。よって熊航での完成機数は 46 号機までであった。

(9) 兵隊さんも飛行機造り

昭和 20 年 4 月頃からか、一つ星の新兵さんが飛行機造りの応援に来た。初めの頃はゴボウ剣を下げて居り、銃こそ持っていなかったが一応は兵隊の格好で隊列を組んで毎日通って来たが、飛行機造りに剣は不要であったか、暫くしたら、腰に剣なしの兵隊のサマになら で来る様になった。

この中の一人に気のやさしい兵隊さんが居り、この人と養成工の小西君と、私とで組んで仕事をしたこともあった。

(10) 片手にハンマーの監督官

組立工場の床を長靴で踏み鳴らして巡視していた軍派遣の監督官は二名居た。やかましい事で定評があり、怖がられていた監督官は丸顔で小太りの佐藤という中尉であった。常時、手には半ポンドのハンマーか鞭を持っていた。

我々は彼の姿が見えると、出来るだけ隠れるように機体の蔭で仕事をした。

もう一人は、おとなしい感じの人で、めぼしき特徴も、名前も記憶はない。位は少尉位だったであろうか、佐藤監督官より一つ下だったので控え目にしていたのだろうか。

労働力の強制動員

昭和 16 年頃から急増する労働力需要に対し従来行なって来た農村労働力や、学校卒業者等では応じきれず、それに対応するためには、徴用による動員を急増させるはかなかった。徴用の対象者の多くは、「不急産業」と中小商工業からの転・廃業労働力であった。

徴用制は、昭和 14 年の国民徴用令の施行によって開始された。やがて戦火が激しくなり労働力が枯渇してくると徴用令も改定され、国家が必要と認めた場合には、どのような職種の技能、技術者でも指定の職場に徴用でき、また特定企業、業務の従業者を事業主もろとも現員徴用することができるようになった。まさに国民の職業移動の自由を封じた労働者の強制配置政策であった。 開戦とともに徴用制は労働力動員の「伝家の宝刀」として全面的に発動された。多くの中小企業は軍需産業への転換が不可能だとして、強引な企業整理を断行した。弱少資本および戦争目的に添わぬ企業の制限や閉鎖を命じ、中小企業の大企業への吸収、系列化を進めた。

昭和 19 年になると国民職業能力申告令が改正され、要申告者を男子 12 才～ 60 才、女子 12 ～ 40 才の未婚者にまで拡大した。即ち、未就学児童、国民学校生徒、既婚女子、60 才以上の老人を除く全国民に申告義務が課せられ、固民を強制動員する「国民皆労体制」が導入されたのである。

しかしすでに男子の基幹労働力は枯渇していたから、19 年度計画を充足するためには、在

学中の学生、生徒など若年労働力や女子を徹底的に動員するはかなかった。また強制連行された朝鮮人や中国人の動員がさらに激化し、捕虜や　囚人の動員さえ行われた。

このように戦争末期には、政府は大がかりな未熟練、未経験労働力の強制動員によって、労働力動員計画の帳じりをあわせようとした。しかし量的不足の埋めあわせは、ある程度はできても、労働力全体の質的低下ははじめから顕著であった。生産手段や技術的条件の悪化、労働条件の急速な低下のなかで、労働生産性は下降するいっぽうであった。

（中村隆芙「戦争経済とその崩壊」岩波日本歴史 21 ）より

勤労報国隊を結成せよ

徴用工

「嫌ヂャアリマセンカ徴用ハ好キデ来タンジャナイケレド、朝カラ晩マデ働イテ一円五十銭トハナサケナィ、本当二本当二御苦労ネ……」徴用工の中からこんな替え歌が流行した。たしかに徴用された労働者は、戦時中の日本人労働諸階層のなかで、労働条件の劣悪さからも、戦意と労働意慾がもっとも低かった階層といえよう。徴用制の施行にさいして、はじめは軍隊への応召に次ぐ名誉だとして応ずる人の姿もみられた。しかし徴用された職場での軍隊式労務管理や労働条件のひどさが伝わって、不評を買っていった。やがて徴用を忌避する人々が続出していった。国民は「赤紙」（召集令状）に対して徴用令状を「白紙」といって恐れていた。徴用を受ければ、命令一本でどこへ飛ばされるかわからず、職場の工場や、会社は軍人や警察官の監督のもとで、軍隊式の規律が支配していた。監督官による殴打も日常茶飯時であった。しかも徴用工は転・廃業企業から動員された未熟練労働者が多く、新しい仕事を覚えるのも大変であった。縁故のある人々がってを求めて軍需会社につとめることが続出したのも、どうせ徴用でとられるならばという気持が大きく左右したためであろう。一般に徴用工の動向はいかにも平穏にみえるが、それは「不平を唱え、不満を漏らせば上役からにらまれるだけで、意見として取り上げられるわけでもなく、嫌でも二年は勤めなければならぬ」という諦観からきているもので、全般に勤労意慾は低調だとしている。しかも一部ではささやかながらもサボタージュ、逃亡、集団暴行や生産妨害等不満の爆発があとを絶たなかった。

熊航でも、大なり小なり問題もあった様であるが、むしろ管理する側の方のため息を聞かされることの方が多かった。

熊航の場合

昭和 18 年～ 19 年にかけて名古屋から中堅工員が続々転勤して来たが、これと並行して多数の徴用工が採用された。

昭和 18 年 9 月に男子就業職種が次官会議できめられて 14 才～ 40 才の禁止職種男子従業員は、一勢に徴用の対象となり、強制的に軍需部門への労働力のかり出しが全面化していった。熊航には約 1500 名の徴用工が集められ、基礎実技訓練を受けて各工場に配属された。徴用工に対しては三菱は新規採用工員として遇した。

これら徴用工の前歴は様々で商人、製造業、事務員、僧侶、銀行員等があり、中には職種区分不詳というやっかいな人も居た。会社としては、これらの人々をどの様な職場に配属させるかに悩まされた。せめて鋸かヤスリでも使えるなら何とか使い途もあろうが、生まれて初めてハンマーを握った様な人に当座雑用か補工として働いてもらうより致し方なかった。然し、全般としてはさほど心配することもなく、短期の基礎実習を終え、旋盤、その他の工作機械もどんどんこなしていった。

彼等の勤労振りも、この機会に仕事を覚えようとする積極派が 10 %、国家の非常時だから何でも御奉公すべきであるという者が 70 %、不満の面持ち 15 %、残りの 5 %位は取扱い困難な人々であった。

職制としては、「この非常時に妻子と別れ、伝来の職業を放棄して国家に御奉公下さる皆様に感謝する。時には無理な命令も出るかも知れぬが、お国の為に我慢して、一機でも多く、一日でも早く飛行機の増産に励んでいただきたい。なお、衣食とも決して十分とはいえないが、暮々も健康と安全に留意して御奉公下さるようお願いし、喚起した。

これら徴用工の方々は健軍第三、第四寮に入寮し、寮生活をして工場へかよったが、現地採用で通勤可能な人は自宅から通勤した人も居た。

健軍三菱に徴用

堤　　隆喜

昭和 18 年、徴用工として三菱健軍工場へ出社するよう通知が来た。かねてから覚悟はしていたことであった。店の写真館の方は幸い家内が多少の心得もあり、閉めることもなくそのまゝ継続し、私だけが出社すればよかった。

当時、下通りから自転車で健軍まで通った。最初の 3 ケ月間は教育訓練で、はじめて握るハンマーによるタガネ作業、ヤスリによる仕上げ等、手作業の初歩を教育された。教育期間が過ぎると機械工場へ配属された。仕事はターレット旋盤による小さな部品の量産であった。その部品が「飛龍」のどの部分に使はれるのかは教えてもらえなかった。ただ機械的に黙々と作った。

昭和 19 年に入って、逆に名古屋へ応援に行くことになった。（或いはこれも教育であったのかも知れない）ベテランの名航から、立上ったばかりの熊航へ応援に来て貰うのならば話はわかるが、どうして素人の我々が名古屋へ応援に行ったのかわからない。或いは少しでもターレット旋盤が操作出来る人に手伝って貰わなければならない程、名古屋も逼迫していたのであろうか。

その日、熊本から 200 ～ 300 名程の人が臨時列車で名古屋へ向った。汽車は窓に鎧戸をおろし、外の景色を見ることも許されない。まるで囚人の護送車のようであった。こんなに大量

の作業者が名古屋へ動くこと自体が秘密であったのかも知れなかった。

名古屋では寮に入り、熊本とは違った意気込みを感じ乍ら「飛龍」の生産に従事した。私の仕事は、熊本と同じターレット旋盤作業であった。勤務は一週間交代で日勤と夜勤のくり返しであった。

名古屋での仕事に就いて 2 ～ 3 ケ月後に召集が入り、熊本へ帰った。その頃はもう下通り商店街には男は居らず、留守をあづかる女房方、既婚女性ばかりが残っており、私はこれらの婦人方に・送られて福岡の海軍航空隊に入隊した。

徴用工との対応

佐久間　久見

熊本へ転勤して初めて出勤した日、城間という部下が工場を案内してくれた。その時異様な光景に出会い驚いた。それは機械工場の中であった。機械一台に作業者一名が配置されているのだが、その連中は各所に 5 ～ 6 名づっ群がって愚ともつかないことをやって時間を潰していた。直径 10 センチ、長さ 1 米程の鉄棒を片手で持上げることができるかどうかを競っていたのである。

持ち上るとかん声が上り、落すと爆笑がとぶ。私は思わず彼等に向って「馬鹿野郎、何をしている」と怒鳴った。彼等は一応解散し、それぞれの機械に戻った。城間がしきりに私を引張って（えらいことを言いましたね、彼等はきっと闇討ちをかけて来ますよ、名古屋から来た者は組長も熊本の連中に殴られているんです。何しろ彼等は何人かで組んで来ますからね）という、私は（第ーこの超非常時に、あんなことをやって遊んでいるのを黙って見過す手はないぞ）というと（仕事がないんだから仕方がないんですよ）と城間はいう。彼の説明を聞くまでもなく、機械工場、部品工場、組立工場も工場一杯に人だけはあふれていたが、作業をしているのはほんの一部分の者だけであった。

無理もないことで、材料も部品も名古屋から送られて来ない限り熊本では殆んどないのである。それにも拘らず国家総動員法によって徴用され、かり集められた人々である。まづ訓練工場に入れられ八紘一宇の精神を叩き込まれながら厳しい作業訓練を受ける。何故家業までやめなければならないのか、という反感がこの教育訓練中にどうやら国のために止むを得ないことだと洗脳される。ところがいざ現場に配属になると、人ばかり多くて仕事はない。家業を投げうってまでも来なければならない様な仕事はどこにもない。国のためと思って御奉公に来たのだが、この現実はどうだ、とばかり彼等は何とも複雑な気持にさせられる。その内

応徴士の人々はわずかな教育訓練のあと、旋盤等工作機械で仕事をした、

に腹が立ってくる。毎日毎日規則づくめの環境の中に閉じ込められていなければならないことが何ともいまいましいことであるに違いない。必然的にその憤満やるかたない気持がまづ直接の上司に向け

られ、反抗となるのであろう。幸い私はとうとう一度も殴られずに済んだが。

女子挺身隊

「あらゆる年令の婦人は男子より高い戦意をもっており、又男女を問わず若い者は年寄りより　も高い戦意をもっていた」。これは戦後アメリカの調査団が分析した太平洋戦争中の日本人の戦意に関する調査報告の一節である。たしかに銃後ではもっとも高い戦意と勤労意慾をもっていたのは婦人、とくに若い女性と子供や学校生徒、学生であった。長年にわたる軍国主義的な教育や教化政策がこれらの階層に純粋なかたちで浸透したといえよう。また社会での経験が長い人々に比べて「建て前」と「本音」を使い分けることを知らなかった世代ともいえよう。女性や青少年の多くは「お国のため」としてひたすら戦争協力に挺身したのである。

昭和 18 年 9 月、14 才から 25 才までの未婚•無職、不在学の女子を居住地で挺身隊に組織することが決った。翌年 3 月から強制的となり、6 月からは年令が 12 才に引き下げられた。8 月からは勅令により法制化され、一年間の動員が義務づけられて、違反者には一年以下の懲役または千円以下の罰金が科せられることになった。以後、居住地と職域の二本立てで挺身隊が結成され、女子青年団や女学校ごとに名簿を作成、警察の指導下に各工場へ動員された。

中には親が知人や親戚のってで娘をかたちばかりの軍需会社勤務にしたり、家事のつごうを理由に動員を避けることもあったという。

20 年に入ると職場における労働条件は苛酷で、すでに就業時間や深夜業の保護規定も撤廃され、徹夜すら余議なくされたという。このため熟練度の不足から労働災害が増加した。また空襲が本格化するなかで爆撃された工場で負傷した人もあった。

女子挺身隊の思い出

甲佐高女　　松永　真由子

私が挺身隊として、熊本航空機製作所に入所したのは戦局もいよいよ厳しく緊迫してきた、19 年の 10 月だった。3 月の卒業と同時に行く筈が延び延びになっていた。その頃の私は、7 月末に母を亡くしたばかりで何をする気力もなく悲しみのどん底にあった。女子挺身隊出動の通知を手にして「泣いている時ではない。国の大事に立ち上がらねば」と 16 才の私としては随分と悲壮な決意をしたことを思い出す。

工場に初めて行った日は殊の他暑い日だったように思う。私達の仕事場は技術部の作業課だったと記憶している。作業課というからどんな作業をするのだろうかと話し合っていたら伝票やカードの整理など事務的なことや図面のトレス等であった。産業戦士という名称から予想し覚悟していた過酷な労働ではなく、これで国の大事に役立っているのだろうかと思った。同じ課には私達の他に第一高女や尚絅高女の方達もはいっており賑やかであった。学校生活の続きのような毎日であった。一度だけ工場の方へ使いに行った時見た汗と油にまみれて働いておられる人達の姿と、モーターのうなる音にひどく胸をうたれたのを思い出す。

社員の方で菊池から来ておられた三宅さん、熊本市内からの高島さん、松岡さんが私達に仕事を教えたり、世話をしたりして下さった。三宅さんは召集令状が来て私達五、六人で菊池

までお見送りに行った。無事戻って来れたであろうか。松岡さんは現在熊本市内で画材店をなさっている。時々逢って昔話をする。名古屋から来ておられた坂口さんはおとなしい方だったが名古屋弁が珍らしく笑ったり、まねたりして坂口さんを困らせたことを、今深く反省している。その頃、毎日の様に空襲があった。サイレンが鳴り避難命令が放送されると皆が一斉に避難するので足音がすごく大きく聞こえ、いっも私だけおいていかれる様な恐さを感じた。突然敵機襲来ということもあった。或る日資材を積んだ一台の馬車が工場内を通っていた。突然馬が何かに驚いて走り出した。それが引き金になり人、人、人が次々に走り出しB－ 29 の来襲だとの誤報がまたたく間に工場内全体に伝わり皆が走り出し避難するという椿事が起こった。後でさんざん叱られるというおまけつきであった。

寮は学校別に部屋割があって私達は 1 棟であったと思う。一一部屋には 6 人づつ入っていた。隣の 2 棟には山鹿高女の方達であった様な気がする。私達は戦時中のこととて修学旅行にも行けなかったし、同級生ばかりなので一緒に寝泊りするのが珍らしく、仲良く生活した。寮の規律は厳しく寮長先生は特に恐かった。夜の点呼などで誰かが欠けると代弁をしたりしてうまく難を逃れた。夜は消灯までの時間、家から持って来た妙豆など山の様に積み上げ、ポリポリ食べながらおしゃべりに夢中になった。騒ぎ過ぎてよく叱られた。食事は当時の一般家庭の食生活からすると良かった方ではないだろうか。それでも甘い物のきらいな私はさつま芋御飯は苦手だった。芋を取り出すとご飯はほんの少ししか残らなかった。今は懐しくさつま芋をよく食べている。

空襲のために、夜はモンペをはいて、いっでもとび出せる服装で床に就いていた。枕元には救急袋と頭巾を置いて寝た。或る夜、空襲警報に起こされ素早く身仕度し、暗い道を走り（今は当時の面影もない賑やかな住宅街になっている）秋津の竹林の中の防空壕に避難した。夜明けまで警報が解除にならないので朝御飯は竹林の中でいただくことになった。支給された朝食は久しく見ることのなかった、まっ白いおにぎりにたくあんであった。

朝露に光る竹の葉の緑と、まっ白いおにぎり、たくあんの鮮やかな黄色にひどく感動した。味は勿論涙が出る程おいしかった。今思い出しても、あの朝の感動はいじらしく、切ないものがある。　また冷汗の出る様な思い出もある。学校時代から仲良しの友達が「夜勤をすると次の日に休みがとれて家に帰れる」という話を聞いてきた。その友達とふたりで「夜勤をしてみよう。そうしたら家に帰れる」と話しあい、上司に申し出た。するとあっさり許されて夜勤をすることになった。寒い日だった。夕方になると広い部屋に私達二人と係長さんだけになった。暗くなるにつれて私たちは心細くなって来た。夜食の時間になり係長さんに連れられて食堂に行くと昼間と違って広く暗い工場は不気味だった。食堂に入ると女性は私達だけであとは男性ばかりであり、急に恐しくなった。夜食はいつもの食事よりご馳走の様だったが恐ろしさでのどを通らなかった。部屋へ帰って夜空の星を眺めて二人でしくしく泣いていたら係長さんが「もういい、仕事をしなくていいよ。私の横で寝ていなさい」と毛布を貸して下さった。二人で毛布をかぶって、この非常時に何ということをしたのだ、情けないね。と自責の念にか‘られながらも恐しく何もできず動けなかった。後日休みをとって家に帰ったかどうかは、全く記憶がないがその夜の恐しさと、情けなさだけは強く記憶に残っている。

昭和 20 年、戦争もますます激しく、緊迫し夜となく、昼となく敵機襲来で工場もあちこちに被害を受け、分散疎開することになり私達作業課は熊工専に移った。大きい資材、荷物は馬車等で運んだが小さい荷物は私達が黒髪町の工専まで歩いて運んだ。途中健軍まで来た時、警

報も無いまゝ突然数え切れない程の敵機が飛んで来て機銃掃射をあびせて来た。私達は避難する間もなく松の下の根元にひれ伏した。一瞬これで死ぬのかなと父や兄弟姉妹の顔が脳裏をかすめた。暑い暑い一日であった。

疎開して間もなく入隊したばかりの兄が面会に来てくれた。友達に訳を言って煎り豆を手のひらいっぱい分けて貰った。学校の芝生に座りひとときの平和を感じた。父のこと、亡き母のこと等を話した様に思う。豆を一粒、一粒口にはうり込む様にして食べた兄。笑う口元や目元が横綱の千代の富士に似ているのを最近発見し以来、千代の富士の大ファンとなった。

その最愛の兄も戦争故に今は亡い。この日の兄が私の心に残る最後の兄の姿であった。熊工専へ疎開をしてから私達の宿舎は市内草葉町の旅館に移った。今はとても歩けない距離であるが、当時は毎日歩いて通った、夜空襲があると第一高女の運動場の防空壕へ避難した。7月1日の大空襲の夜も忘れられない。降る様に焼夷弾が落とされた。上通り町一帯から市役所付近一帯が火の海となって私達にも消火に当るよう指令がくる。女や年寄りばかりであった。バケツリレーで市役所の消火に当った。気がつくと上へ上へとおしやられ私は一番先頭に立っており危うく煙にまかれそうになった。「危ない逃げろ」と叫ぶ声にふと我に返り急ぎ階段をかけ降りた。

女子挺身隊のりりしい姿

終戦の日、異様に静かな朝であったのを思い出す。皆泣いた、茫然自失、誰もが言葉を失ったかの様にへたりこんでしまった。空はうその様に青く澄み、晴れていた。挺身隊時代をふり返るといっもお腹をすかし、食べ物の話をすることで満腹していた時代、着るものも無く、何度も死の恐怖におびえた、暗い恐しい出来ごとばかりだった筈のあの時代、国の大事に胸を熱くし血を燃やし、不満も言わず友と心を一つにした日々はやはり悔いはない。16才の青春だったと私は思うのである。

回　　顧

松橋高女　　渕田　玲子

女子挺身隊の歌

1. 長い黒髪きりりと結び
今朝も朗らに朝つゆ踏んで
行けば迎へる友の歌
あゝ愛国の血は燃ゆる
我ら乙女の挺身隊

2. 可愛い工具に頬すり寄せて
花も命も容貌も要らぬ
早く翼が送りたい
あゝ愛国の血は燃ゆる
我ら乙女の挺身隊

今でも口ずさむ此の歌、凛凛しい鉢巻姿の友どもの顔が壊しく蘇り、改めて血が燃えたぎる感を覚える。女学校時代後半は殆んど授業返上で奉仕作業にあけ暮れそして卒業、従軍看護

婦、造船所、航空機製作所、淡い乙女の夢もかなぐり捨て、固い握手に只お互いの無事を祈りながら女子挺身隊としてそれぞれの職場へととびたっていった。

私は三菱重工、熊本航空機製作所勤務となる。

健軍の秋津寮から工場までを長い二列従隊で合唱も高らかに通い続けた思い出の歌……モンペ等に防空頭巾を肩から提げ、頭巾袋の中には母より差入れの炒り大豆の小瓶も忍ばせて……現場は板金工場で板金に形を描き、機械に掛けて切り抜く作業であった。一一枚でもオシャカ（欠陥品）を出さない様に皆で頑張った。友達の中に過って親指を機械に巻き込まれた人も居た。

寮生活も大分慣れた頃、朝の洗顔を済ませ、顔を上げた途端棚に置いた腕時計が失くなっている。急いで部屋に戻ってみると同室の者が時計の皮バンドを外し自分の胸もとに提げているではないか。私は恐しくなり何も言えず、心は震えながらも歯を食いしばって我慢した。反対にその人が凄む様に私をにらみつけたあの形相が忘れられない。

或る日、食堂で夕食をとろうと皆が並んでいると、私のよく知っている賄いのおばさんから手招きをされたので近寄っていくと小声で「今夜の肉フライはネズミの肉も入っているから食べん方がいいよ、誰にも内緒よ」といって餅を一切れくれた。

私は席に戻って箸を付けずにいると隣の人が喜んで全部食べてしまった。炊事場の裏にネズミの頭や、しっぽが小積みになっている……・と噂が立ち始めたのもその頃であった。それにしても戦時下の貴重なタンパク源だったのであろう。日に日に激化する敵機襲来に工場には煙幕が張られ、私たちは工場に寄りつけないまま八丁馬場の桜並木の木蔭や田んぼに避難した。ヒュルヒュル　ヒュルという爆弾が落ちてくるあの音を聞く度に、教わった通り耳を両手で塞ぎ口を大きく開けて地面に伏した。秋津寮も愈々危険にさらされたので鏡町の自宅より汽車通勤となり、職場も作業課の事務に廻された。部品疎開先の上無田の倉庫まで、いっも数人で連れ立ち、伝票と番号を引き合わせ鋳造、鍛造の部品を運んで来た。途中素晴らしい江津湖の風景に、ホッとひと息入れながら作業をした日々が今は懐しい。

連日連夜の空襲警報の中、通勤列車の発着が不規則となり私は砂取の父の友人の方の家に下宿させていただくことになった。その日、父はウグイス色の国民服、母は紺色のモンペ姿で二人揃って私のためにわざわざ来てくれた。挨拶を済ませ、淋しそうに帰っていく父母のうしろ姿がいっまでも忘れられなかった。或る日、残業で夜 10 時過ぎとなり、灯火管制で道路はまっ暗闇、下宿のある方角も判らず、あぜ道を足探りで歩いているうちに背丈程もある胡麻畑に這入りこんでしまい出口がわからず右往左往し、必死で帰り着いたのは真夜中であった。下宿の冷たい布団の中で母が恋しくさめざめと泣いたことを覚えている。こんなこともあって浄行寺に下宿している友人からの誘いで私もそこから一緒に通うことにした。

勤め帰りの夜みち、浄行寺のあの曲り角でラジオからいっも流れる国民歌謡のメロディーだけが今でも壊しく蘇る。　その頃、組立工場の工員さん達の慌ただしい動きに飛行機の完成を知らされ友人達みんなと心踊らせながら広場へと駆けつけた。既に掛けられたキーンというエンジンの始動音が耳をつんざく。

キラキラと眩しく光る銀白色に真紅の日の丸がくっきりと映え初々しくも、どっしりと額もしげな巨体を横たえていた。

飛龍と命名されたこの飛行機の胴体を撫でながら「私達の造った部品はどの辺にあるのかなあ」などと携わる人々の歓声の中に「ステキ！わあステキ！」とはしゃぎ廻る乙女たち……

この感激を全身に受けとめながら「これからも頑張ろうね」と皆で励まし合い、胸をはずませながら、又それぞれの職場へ帰っていった。

巷では特攻隊の軍歌が流れ、暗いニュースを聞く度に「頑張らなければ」と身が引きしまる。

鈍く、唸る様な爆音を発しながらB－ 29 の大編隊が絶え間なく襲来、避難命令はかかり通しの日が多くなった。或る朝、人々のざわめきの中で非常招集が発令された。板金工場長が爆死を遂げられたことを知らされた。

その日の午後、待避命令で友人と手をつないで防空壕にかけ込む途中、トイレに立ち寄ったその友人が直撃弾を受けて即死、私は我慢したので命拾いをした。運命とはこういうものか。又、機械工場の窓ぎわに居た工員さんが窓越しに機銃掃射を受けられ、その肉片が窓ガラスに飛び散った現場の有様にはもう目を被うばかりであった。

まるで戦場にいる様な連日の或る日、警報発令もないまま、私たち数人で立ち話をしているところに突然、グラマン一機が急降下するなり、機内のパイロットが私達に白い歯を見せて笑いながらハンカチを振り、あれよ、あれよという間に空高く舞い上って行った。「馬鹿にしとるわね･･･」と腹立たしいながらも何だかポッとした一瞬でもあった。

6 月の終りになって幼な友達の一家のお世話になることになった。そして 7 月 1 日の大空襲に会い洗馬橋の下で恐怖の一夜を明かした。近くの病院の患者さんが読経を唱える傍らで私は友の手を一晩中握りしめていた。身の危険を返りみず最後まで陣頭指揮に当っておられた方々のふり絞るようなあの声がいまだに忘れられない。

夜が明けて橋上が白む頃、魔の一夜から漸く解放され、通りにはまだ煙続ける焼け跡に焦げた人がうつ伏せに倒れていた。

「新市街は黒すぼれしとるぞ！」との声に震えながら、もう一刻も早く熊本を離れたい……幼なじみのその一家に別れを告げ八代の両親の許へ急いだ。

有佐駅から我が家まで転げるようにして着いた。

「只今ッ……」と格子戸を開けた途端、「玲ちゃん、あんた生きとったね！」と母が泣きくずれ私を力一杯抱きしめてくれた。「ゆうべは家中で祈っとったばい！」と父も涙声であった。鏡の方から見た熊本はまるで火の海だったとのこと。「あの火の中で玲子はどうなっているだろうか」と母は一晩中泣いていたという。

ひと息ついた母がエプロンのポケットから小さな紙をとり出して私にそっとくれた。

影もなく　踏みしだかれし　ひな草の
床しく　匂う　姿うれしき

短歌の好きな母が必死に私の無事を祈りながら万感の思いをこめて詠みあげたのであろ

う。あの日の喜びは、今でも心の奥深く焦きついている。もう母の許から絶対離れまい。

翌朝のニュースで、熊本市は続いて爆弾攻撃を受けたと報じられた。私たちが前夜に避難した洗馬橋が次の日には爆弾の直撃を受けたという。あの日、一緒に避難した人達は無事だったろうか。

不気味なきのこ雲が西の空にモクモクと現れ、後日それが長崎に投下された原爆であったと聞かされ、間もなく終戦を迎える。

欲しがりません、勝までは！と歯を食いしばって戦って来た友々の面影が今も彷彿と蘇る。戦争は悲しいもの、平和は尊いもの、終戦記念日を重ねる度に、その感をますます強くする。この平和をいつまでもと祈りつつ。

女子挺身隊の思い出

八代高女　　頼藤　和代

一億一心、総突撃、世はまさに国を挙げて戦時一色の昭和 19 年 3 月、私達は八代高女を卒業しました。人手不足は私達の卒業を待っていたかのように卒業と同時に八代宮で戦勝祈願式がありました。

三菱熊本航空機、三菱長崎造船、山陽航空、三楽、国鉄、興人…•等の挺身隊として、或は代用教員として働く職場は違っても、ただお国のためにと東へ西へとそれぞれ巣立って行きました。私達三菱挺身隊は 24 名、勇躍志願したものの卒業から 4 ケ月間家庭待機させられました。今日か明日かと待っているうち、7 月 22 日、やっと入所となりました。

家を離れるのが初めてで、希望と不安が交錯したものでした。工場はまだ建設工事進捗中のようで、家庭待機もそのせいであったのでしょう。卒入所後 3 ケ月は訓練期間で秋津寮生活。健軍神杜の拝殿で訓話を聞いたり、座禅をしたりの日々でした。行動を共にした 24 名も、やがて工機工場を主に、事務、金型、製図、倉庫等に配属されました。

§　寮の出来ごと

入所数日にして思いもよらぬ悲しい出来ごとがありました。入寮前から羅病していたと思われる同僚が高熱におかされ、下痢が続いたのです。親もとを離れて、苦痛を訴える友の不欄さ、私達は交替で必死になって介抱しました。頭を冷やしたり、夜中にトイレまで背負って何回通ったことか、後日赤痢と診断されびっくりしたものでした。とうとうその友は若い命を終えてしまいました。私達は黒髪の火葬場まで霊柩車と同伴し、突然の死が悲しく泣けて泣けて仕方がなかったことが、今もまざまざと蘇がえります。当時の食糧事情からしても、私達の体力も十分とはいえなかったと思いますが、誰にも感染しなかったことが不忠議に思えてなりませんでした。

§　寮の食事

忘れられないものの一つは寮の食事のことです。厨房でつくられた食事は馬車で寮まで運搬されていました。或る日厨房を覗いたことがありましたが、その釜の大きいこと、御飯を大釜からスコップで容器に移し換えていたのには驚きました。御飯はひじき入りの黒飯、更にこの中に大豆や切り干大根等が入っており米粒はどこに入っているのか解からない程でした。肉類といえば何の内臓なのか、繊毛のような、ビラビラのついた腸のようでもあり、犬肉ではないかと囁いたものでした。決して美味しいものではありませんでしたが、後では空腹も深刻で

一匙でも多く食べたい思いが始終つきまとっていました。

会社から寮に帰って、何とか空腹を満たそうと健軍神杜の近くへ、或は木山方面まで買い出しに出かけた人もありました。茄がいた唐芋が主だったようです。夜、空襲警報が発令されると六嘉村の竹薮まで何回か走りました。寒くて冷たい夜、流れ星を見て遠く離れた家の事を思い出して涙したこともありました。

§　外出

入寮して 3 ケ月は家への帰省は許可されませんでした。しかしホームシックと空腹感は私達をますます無断帰宅へと拍車をかけました。一刻も早く家に帰りたい一念で、日曜の早朝、まだ星が輝いていました。

工事中のトイレ用に掘った穴から壁を抜けられることを知り、その穴にとび降り、そこから這い上って寮の外に出ました。まだ明けやらぬ道を走る様に急いだことを覚えています。八代行きの汽車に乗るために駅まで歩きました。その駅が水前寺駅だったか記憶がありません。又、2 時頃に寮を出たという友は熊本駅まで歩いたようです。その人達は八代から更に乗換えなければならないので一足先に出たのでしょう。そして彼女らが肥薩線の段駅に着いたのが 6 時頃であったと聞きました。家に帰りたい一途な気持が道の暗さ、恐ろしさも全て気にせず突拍子の行動をとらせたのでしょう。

進め一億火の玉だ

わずか数時間の在宅で 14 時頃寮に帰る準備をしていた友は丁度兄さんの戦死公報に接し、その日に帰れず、翌日寮に帰ったので無断外泊がばれて新谷寮長と吉村寮母に随分叱られたとも話していました。

§　寮での面会

我が家から母や、姉妹が面会に来てくれました。尋ね、尋ねて馬車の轍の深い秋津のガタゴト道を木炭自動車のバスに乗って来てくれました。バスは何回も薪を注いだそうです。とうとう乗客が降りて後押しする場面もあったとか。手作りの布団や饅頭などが届いた時は、ただ嬉しくて何の話をしたのか全然覚えていません。面会に来るのもどんなに大変だったか、今改めて当時の話を聞くにつけ感激しているのです。お互い顔を会わすなり、私が家に居た時より、げっそり痩せて頬がこけており驚いた、と姉が言っておりました。

§　工場の空襲

私は第 2 倉庫でした。空襲の時、健軍神杜の方へ退避したり、すぐ前の深い土手下等に逃げており余り恐ろしいとは思いませんでした。

その土手の上を白いマフラーを巻いた航空隊の人達が通り過ぎて行ったのが今でも鮮やかに思い出されます。いずれ死に赴く特攻隊の人であろうといつまでも見送ったものでした。

§　家から通勤、工場疎開

訓練期間が終り、大分勝手がわかって来た頃から寮を出て自宅から通勤する人も出てきました。私もその一人です。朝 4 時頃母に起こしてもらい、4 時半頃に家を出て 5 時の汽車に乗

りました。私は駅の近くでしたので楽な方でしたが駅から遠い人は随分早く家を出られたようです。

列車は三菱の通勤専用列車の感があり、顔見知りの徴用のおじさんや、学徒動員の生徒さん等で八代駅でもう満員になりました。熊本駅に着くと別のプラットホームに待っている水前寺行きに乗換えるため、往きも帰りも走って乗り継ぎました。汽車を降りるおじさん達について私も、まだ完全に止っていないうちにとび降りて転び、立ち上れない程腰を打ちつけたのが今でも痛みます。水前寺駅から工場へ引込線がありました。木組のようなプラットホームがあって沢山の人達が降り、工場の門に吸い込まれて行きました。引込線の車輌は貨車でした。星を仰いで我が家を出て工場に着いたものの仕事は毎日倉庫の掃除ばかりでした。

20 年 4 月頃、私達は江津湖に近い農業学校に疎開しました。どの様な道順で農業学校まで通ったのか全て記憶がありません。疎開先での仕事もトイレの掃除しか覚えていません。通勤途上で空襲警報がかゝり友達と二人で歩いていましたが逃げ場がなく、河原町辺りだったでしょうか、大きな酒屋か醤油屋の広い土間に私達二人が十分に入れるような大きな鍋があり、それを被って警報の解除を恐る恐る待ちました。

§　グラマン川尻駅機銃掃射

川尻駅での機銃掃射は本当に恐ろしかった。いつものように 5 時発の通勤列車に乗り、列車が川尻駅に着いた時です。突然グラマン 4 機が私達の列車を銃撃してきました。どうして汽車から降りたのか、我に返った時は待合室の椅子の下に這いつくばっていました。

その時、頭の右上部がピカッと光り、機銃の弾が落ちて来ましたが、幸い怪我もなく、友達と二人で銃声の止んだ間に駅を離れようと、駅前広場の大木の下に移動しました。そこから汽車をみると機関車が白い蒸気を噴いていました。

グラマンは再びやって来ました。

逃げた場所の近くにある工場を狙っているとのことで、弾の音はバラバラと無気味に響き頭上のトタン屋根を叩いている様に感じました。やがて音が止み私達も国道に向けて歩きましたが、立ち止ると膝がガクガク震えるのです。

もう会社に行く元気もなく、家へ帰る為に再び汽車に乗る気も起らず、国道を通る車に乗せて貰おうと手を上げましたが駄目でした。そのうち、あちこちに逃げていた友達がどこからともなく集り、お互に無事を確かめあって喜びを分ちました。

その時、がらがらの下り八代行が到着したのでそれに乗って八代へ帰りました。この時、同僚の一人が膝に貫通銃創を受けたことを後日知りました。

家に帰り着くまで顔は蒼ざめていたらしく家族を驚かせました。以来会社へも行かなかったように思います。長崎の原爆の時も、終戦の詔勅も家の防空壕で迎えました。

健軍の工場へ通っていた時、先の引込線に乗らなかった時は水前寺から健軍神社前の八丁馬場を通り、神社の右側を廻って工場に達するコースもよく走りました。その時、八丁馬場の北側の薮影にグリーンの屋根の西洋館が見えました。このモダンな西洋館は何だろうと考えながら走ったものでしたが、後に私はそこに勤務することになり深い縁に驚いています。それは児童福祉施設「慈愛園」です。そして厚生年金のお世話になる時が来て、加入期間をコンピュータで出してもらいましたら資格取得日は三菱勤務の日になっていました。本当に驚きました。

あの終戦のゴタゴタの時に、大勢の従業員にも拘らずきちんと残務整理が為されていたこ

と、さすが三菱だと改めて感心致しました。

女子挺身隊の想い出

八代高女　宇野　美代子

私は工機工場の事務係として配属になりました。当時の課長が田澤貞助さん、そして職員の若い伊藤さん、ご年輩の飯尾さん、名古屋から来られた女性の滝川さん、その他一般工、徴用工、本渡高女、菊池高女の挺身隊等あちこちから来ている人達がいました。とても良い雰囲気の中で仕事が出来ました。

同じ挺身隊でも現場に配属され夜勤をさせられた人、一日中立ちづくめで機械にとり組む人に申し訳けない思いがしたものです。当時工機工場には 2000 人位居たのではないかと思います。

仕事の内容は勤怠係で入退場、出勤状況を憲兵隊が詰める監督官室に毎日報告に行きました。監督官室に入る時はドアのノックから一挙一動、それは厳しいものでした。現場に憲兵の姿が見えるとみんな恐れていました。

“憲兵に非ずんば人にあらず’’と言った態度に見えました。それから何カ月か経って各工場の勤怠係は労務課に集約移動となりました。当時の課長が高城さんだったと思います。

やがて戦局も険しくなり私たち八代高女の挺身隊も疎開先へ散って、互に会う機会もなくなりました。疎開先は熊農、熊工専、隈府、松橋高女、宇土等、様々であったようです。

20 年 3 月、私と同僚 2 人は宇土工場に参りました。宇土工場は市内の真中にあり、萩原さんという酒屋さんの蔵を改造したところでした。一階は薄暗い裸電球の下に旋盤が何台か据えつけられている程度で健軍工場に比べたら細々としたものでした。二階が事務所になっており、工場長を当時は群長さんと呼んでいたようでした。現在田尻町在住の浅井宗光さんといい仕事には厳しく、人間的にはとても優しい方でした。出勤表は何日かに一回、健軍（労務課）まで届けて居られた様です。現在、日奈久在住の白浜芳太郎さんでした。

又、20 年 6 月頃、宮崎工専からの学徒動員で片野冨志（鹿児島市在住）、外囲巧（福岡県粕屋郡在住）、黒木康秀（宮崎県在住）各氏が来られ、事務所も賑やかになりました。

健軍工場に居る間は寮生活でしたが、宇土工場に疎開してからは家から通勤となり嬉しくて嬉しくて仕方ありませんでした。

然し、当時は車も、バスも通っておらず、母は雨の日も、風の日も毎朝 5 時から人家のない球磨川べりの山道を 4 k程歩いて八代駅まで私を送り、そして又歩いて帰っておりました。その母も一昨年 85 才で亡くなりましたが、あの頃の母の姿が私の瞼から離れることはありません。

§　空襲

工機工場にいた頃、昼間に空襲警報が発令され、全工場従業員が一勢に正門に押しかけ、人の波、波…で遠くに爆音が聞えるのに一歩も前進せず、健軍神杜の森や、麦畑の深い土手下の防空壕まで辿り着くのに大混雑したことがありました。あの時、機銃掃射でもうけたらひとたまりもなかったでしょう。

20 年 3 月、前日に降った雪がコチコチに凍りついて冷気が肌をさす冷たい夜に空襲警報が発令され、秋津寮から六嘉村の竹薮の防空壕まで走りました。

私達の頭上から低空飛行で工場を集中攻撃しました。本当に恐ろしかったことを思い出します。その時、工機工場の隣にありました機械工場が被害を受け、従業員がなくなられたと聞きました。健軍は阿蘇から吹き下す風が冷く、寮には暖房の設備もなく、両手の霜やけがくずれ、その傷あとが今も右手に深く残り、手を見る度に、寒くて、辛かった健軍の寮生活を思い出します。

川尻駅が機銃掃射を受けた頃、私は宇土工場の二階におりました。爆音が遠く南の方に聞こえるので、東海電極、田浦工場に学徒動員として行っている弟のことを案じて窓から眺めていると、その瞬間、私達の上にグラマンが…・パチパチ、バリバリ、ヒュンヒュン・・それはもう何と表現したらよいのか生きた心地がしませんでした。階下の人は防空壕へ飛び込み、下に降りて来いと叫ぶのですが、全くその余裕すらありませんでした。5 ～ 6 人が、それぞれの机の下に耳を押え、伏せておりました。耳をつんざく様な炸裂音、屋根が吹きとぶような爆風、窓を明けていたので機内から私達の姿が見えたのか、超低空飛行で、何回も、何回も集中的にやって来ました。一寸静かになったので頭を上げてみたら近くの日本合成宇土工場を攻撃していました。やれやれと思っていた矢先、再び私達の工場を襲撃し始めました。この間、どの位の時間だったでしょうか。まさに生地獄、表現の仕様のない恐ろしい体験でした。

敵機が去って我に返ると、下の防空壕には何発かの弾が当っておりましたが、幸い人には被害はありませんでした。隣の民家の人が何人か亡くなられたと聞きました。宇土駅もその時焼失したのではなかったかと思います。

8 月 9 日、艦載機も頻繁に来襲し、汽車も延着の連続、夕方になってやっと来た貨物列車に沢山の人が乗っておりました。その貨車は屋根も無ければ、手すりもない原木を運ぶ貨車で、押せば振り落される様な貨車に宇土駅から乗り風に吹かれながら、西の空を眺めていると、彼方に夕焼けの様なオレンジ色の輝きが目に入りました。それが長崎の原子爆弾でした。終戦の日、朝から何故か艦載機のことも気にならないーいっもと違った静かな日でした。宇土工場階下の旋盤の間に全員が整列して玉音放送を拝聴しました。ガアガアと雑音が入って十分聞きとれませんでしたが、その主旨は解りました。その時、私の頭にまっ先に浮んだのは戦死した兄でした。大学を卒業したばかりで長髪をおとし丸坊主になって出征していった兄、勝つことのみを信じて 26 才の生涯を国に捧げた兄、その死が犬死ではなかったかと涙が溢れた日を今も忘れることはありません。

挺身隊時代の想い出

尚絅高女　米原　絹子

昭和 19 年 3 月 22 日、尚絅高女を卒業と同時に挺身隊として三菱健軍工場に行き、入所式が行われました。各学校卒業生も同時に入所し 2 千人以上の挺身隊がモンペ姿も凛々しく、不安と期待に緊張した面持ちで整列致しました。

広い工場に入り、所長の御挨拶や注意等があり指導の先生方のお話もありました。それから毎日、実習工場で指導員の笛の音に合わせてハンマー打ちや、ヤスリ掛けの練習が交替で行われ、工場内にはハンマーの音が響き渡りました。

戦争は日増しに厳しくなり物資不足、食糧難となりましたが私達は唯耐え忍び、陛下の御為にと頑張り続けました。

時々、干バナナ、飴、こんにゃく石鹸、等の配給がありました。その時は嬉しくて家族共々喜んだものでした。こんにゃく石鹸はその名の通り見た目にはこんにゃくその物です。全然泡も立たず、あまりよごれもおちませんでしたが無いよりはまして、母もとても喜んでいました。近所の人にも分けてあげていました。実習期間も終り、配属先は工場管理部門の管理課材料係でした。高木課長、有住係長、今井技師の下で働くことになりました。課内には係長が数名、技師、技手の方がそれぞれ数名おられました。挺身隊は第一高女、尚絅高女、市立高女、松橋高女卒業生が 5 ～ 6 名と簿記学校卒業生、養成工、女子徴用で来た人数名、合わせて 40 ～ 50 名居た様です。男子は鹿児島の七高生と熊本語専の学徒動員の人も来ていた様です。

朝礼は男子が 7 時 30 分、女子は 8 時でした。交通機関も悪く朝礼に遅れる人もありました。水前寺駅から第 3 通用門の近くまで線路が敷設され、多くの通勤者はこのトロッコの様な車両に乗せられて通っていました。現在では住宅やら、色々な建物が並んでいますが、当時は渡鹿の練兵場で広い広い野原で、見渡す限り芝草と所々に背の低い松が生えていました。引込線の通勤列車は、その中をゴトゴトと走っていました。これに乗り遅れた時、トラックに乗せられたこともありました。

しばらくの間は学校の寄宿舎から通勤していましたが、食糧難になると共に郷里の田舎から通勤することになりました。家は飯野村の船野山の裏にあり、そこから木山の停留所まで歩いて 40 分、木山からバスで健軍まで来て、そこから第 2 通用門まで小走りに坂道を急いで職場に入る毎日でした。大抵、始業 30 分前には着き、皆さんの机上を拭き、係長の机上には時々花を飾っていました。朝礼、点呼が終るとそれぞれの持場に行って仕事を始めるという生活でした。或る日、今井技師が組立工場に連れていって下さいました。重爆撃機が組立中でした。 2 枚羽根の小さなトンボの様な飛行機も 4 、5 機いました。

当時は、何でも軍極秘でしたので、あまりあれこれ聞くことも出来ず、それが何という飛行機かもわかりませんでした。帰りがけに、二枚羽根の飛行機に乗せてもらいました。「飛んでみたい」というと、その内に一回位、乗せて（飛んで）あげるよと云われましたが、遂にその機会はありませんでした。

鋲一本打つにも魂を打ち込んでしないと飛行機が空中分解すると教えられました。

昭和 20 年に入ると部品や材料がうまく揃わず、又空襲も激しくなり、生産はまゝならなくなりました。或る日、昼の休憩時間に皆で輪になってバレーボールをしていました。その時打上げたボールが機械工場の屋根にひっかかったので、学生がよじ登ってとりに行ったところスレートが割れて落下しました。

すぐタンカで運ばれましたが、気の毒に亡くなったと聞かされ涙が出ました。

7 月に入り毎日の様に警報が入り大事な書類だけ持って近くの竹藪の防空壕に待避しました。高小を出たばかりの女子工員が空襲の恐しさのあまり「お母さん」と云って泣き出したので私は彼女の肩を抱き、妙り豆を食べさせて励ましてあげました。彼女等は当時 14 ～ 15 才で親元を離れ、寮生活をして頑張っていましたが、やはり母親と離れていることが淋しく、つらかったのでしょう。

当時、私達の姿はモンペをはいて、防空頭巾をかぶり、非常食（大豆を炒ったもの）を入れた袋を肩から下げていました。この姿は日本国中、申し合わせた様に格一的なスタイルでした。耳をすまし、敵機が遠ざかるのを待って職場に帰っていきました。

7 月 1 日の深夜、熊本市は壊滅的な空襲を受けました。市内の空は真紅な火の海と化し、絶

え間なく聞える敵機の爆音がにくらしくてなりませんでした。

私は会社が気になったので、翌日早目に出勤しました。健軍の社宅もいくつも焼けて、課内でも 2 ～ 3 人が焼き出されました。職場は空席が目立ち、女子では川下さんと私の二人だけで、男子が 5 ～ 6 人出勤して来ましたが仕事にならず、その日は帰りました。

翌日課長のお話しがあり、「敵機の本土空襲も日増しに本格化して来たが、森都熊本の軍需工場では、増々旺盛な戦意を以って敵撃滅のため生産に邁進し、頑張っていこう」と激励されました。工員の方の中には、家財をすべて焼かれ、肉親を失った方々も出ましたが神州不滅を信じて頑張りました。

私も心を強く持ち直し、負けてはならじと気を引きしめました。然し部品も底をついたのか、飛行機は仲々完成せず、不安がつのって来ました。敵機の空襲がある度に、こんなに敵の為すがまゝにされ、日本の飛行機は対抗出来ず、山の中に据えてあった高射砲を一度も発射する気配もなく、私達は敵機が去るのを見届けて壕から出てくるという状態です。

8 月 10 日、私はどうしても気が進まず、会社を休みました。お昼近くになったら御船方面から来た敵機約 50 機が船野山から低空に入り、太陽の光をあび健軍目がけて突込んで行きました。やがて健軍上空で大きな輪を描きながら、次々と爆弾を落し、見る間に黒煙が立ちこめました。船野山の裏の高いところにある私の家から健軍はよく見えていました。私はこわいもの見たさに杉垣の間からその光景をじっと見ていました。次の瞬間、職場の皆さんや同僚の安否が気になりました。会社に連絡をするにも、その頃電話は一里程離れた役場と学校に一台づつあるだけで、誰も電話のかけ方もわからない人ばかりでした。歩いて行ったり来たりで知らせ合っていた時代です。

三菱へ行っている近所の人の帰りを待って工場の状況を聞きました。その人は「もう恐しくて、腰が抜けそうで、死ぬ目に遭った」と涙を流さんばかりにして話てくれました。低空で舞下りて来て機銃掃射をしていき、アメリカのパイロットが見えたとも云っていました。が、とに角、皆無事と聞きほっと胸を撫で下しました。

この頃は、通勤バスも木炭車で火力が強くならないと動かないので、皆んな降りてバスを押し、やっとェンジンがかかったと思うと又停まるという調子で、健軍→木山→家まで歩いて通う日が多くなりました。靴も破れ、下駄で通いましたが、その下駄すらすり減って割れてしまい、素足で帰ることもありました。会社は事務所の横の空地に大きな穴があき、爆風で窓ガラスの破片が辺り一面に乱れ散り、そのすさまじさに思わず目を見張りました。幸い課内の人は無事でしたが、同級生の前田さんの職場では吹きとばされて眼鏡だけが残っていたそうです。

鍍金工場の 2 千屯プレスの上には 200 kg爆弾が落され大分やられました。この日の空襲で大分あちこちがやられ建物は無残な姿となり只、呆然となるばかりでした。疎開が始り、私達管理課は水前寺の盲学校（現在むつみ荘）に疎開しました。畑の中には焼夷弾の不発弾がニョキニョキと突き立っており、その間を縫うようにして走り抜けたこともありました。

8 月 14 日出勤したら、課長から明日天皇陛下のお言葉が伝えられるので聞く様にと云われました。翌 15 日、皆外に並んでその時を待ちました。

日本は無条件降伏したという内容のお言葉であったそうですが、はっきり負けて降伏したというお言葉は聞けず、とてもむづかしい言葉であったが、何となく負けたのだという感じが段々判って来ました。

課長からは「無条件降伏の詔書が奉読され、陛下は国民のことを心配されとても苦しんでのお言葉でした。残念だが今となっては詮方ない。」と話があり、長く、苦しかった戦いも終りを告げました。

8 月 20 日に挺身隊は解除されました。29 日にちょっと残務整理に行き、500 余円の賃金を頂きました。ハンカチ一枚もない世の中、金はあっても買う物がなく金は役立ちませんでしたので、私の給料袋は神棚にずらりと並べてありました。

健軍終点の土手の上には、焼夷弾の空や不発弾が集められ、山と積まれていました。戦争が終ったら今度は生きるために一生懸命戦はねばなりませんでした。リュックを背負った人達は、田舎へ田舎へと行き、から芋、かぼちゃ、お米など食べられるものなら何でもいいからと、大切にしていた着物などとの物々交換が続きました。夜は電気もなく菜種油で灯されました。

かつて私達が、毎朝小走りに駆けていった工場西の道路も、今は桜並木が続き花見時は歩行者天国となり、花の下には敷物を敷きつめ、唄ったり、踊ったりの大娠いです。この天国の様な昨今を見るにつけ、その昔、私達が同じこの地で歯をくいしばって生きて来たことが何であったろうかと、フト考える昨今です。

学徒勤労動員と操上げ卒業

昭和 13 年（1938 年）6 月、中学校以上の学生は夏休などの休業時、3 日ないし 5 日の勤労奉仕を行うこととなる。14 年 3 月にはそれが正課となり 16 年 2 月にはそれが年間 30 日に拡大された。

そして 18 年 6 月、学徒勤労動員体制確立要綱が決定。10 月には年間 3 分の一に拡大、19 年 1 月、年間 4 ケ月の継続動員、2 月には中学以上の通年動員を決定。こうして日中戦争のときからはじまった学生、生徒の勤労動員は臨時的なものから長期的なものへと移っていった。やがて学徒勤労報国隊が結成され、学校は工場、鉱山、農村の勤労奉仕へと駆り立てられていった。

昭和 19 年 4 月からは中学校の高学年以上は、授業を停止して通年の勤労動員が義務づけられた。さらに同年 7 月からは、国民学校高等科と中学校低学年の動員が決定されるとともに、中学校三年以上の男女学生の深夜就業さえ実施されることとなった。20 年 3 月になると「決戦教育措置要綱」により、国民学校初等科を除いた男女の学生、生徒はすべて一年間授業を停止することになった。学校にかわって毎日、軍需工場に出勤することになったのである。こうして学校で授業を行なうという通常の光景は姿を消し、学校とは名ばかりの強制労働態勢になりかわっていった。

尚、中学校では本来 5 年で卒業のところ、昭和 20 年 3 月卒業者に限り 4 年で卒業した。即

ち、この年は本来の 5 年卒業者と操上げの 4 年卒業者とがあった。又、大学、高専の学生はこれより先に操上げ卒業制度がとられていた。即ち 17 年 3 月卒業者は 16 年 12 月に操上げ卒業とし、18 年 3 月卒業者は 17 年 9 月に卒業（以下同じ）となった。

「あゝ紅の血は燃ゆる」という学徒勤労動員の歌に示されるように、男女の学生、生徒の多くは不慣れな工場で一般労働者以上に勤務意欲を燃やし、生産に励んだ。

然し所詮は未熟練労働者であり、空襲、疎開等ですでに軍需生産の基盤が崩壊しつつあった当時にあって、学徒動員がただちに生産力増強として結実したことにはならなかった。

熊航の場合、それは受入側の運用法にも問題があった。昨今の合理化的感覚からすれば当然 2 ～ 3 人で為すべきところに 10 人も 20 人もの学徒を投入した部署もあった。

人間だけがうようよして仕事がうまく当てがわれなかったという様な不満も出た。統轄責任者である各学校側は、生徒が大人の世界に入って仕事もなくぶらぶらさせておくことに一抹の不安を感じた。

監督官は「ウロウロするな」といって追い廻す、三菱の現場の責任者は「自分の仕事をやり乍ら、たくさんの学徒の守りもしなければならず大変であった」という。

こういう不満の声も一部にはあったが、全体的にみて純心な学徒の気概は尊いものがあった。当時動員された学徒も戦後それぞれの分野で要職を経て、昨今還暦を迎え、当時をしのぶに当って皆それぞれ物質的にこそ苦しかったが、空襲などにより常に生死紙一重の生活の中に清純な、そして強烈な青春を過したことに郷愁を感じている。

三菱熊航への学徒動員は、高等・専門学校 806 人、中学男子 2095 人、中学女子 1521 人、計 4422 名であった。ちなみには日本全国での動員数は延 300 万人ともいわれ、劣悪な労働条件や空襲によって約 4 ～ 5 万人の死者、及び約 1 ～ 2 万人の負傷者が出たと記録されている。尚、熊本県下の学徒勤労動員の展開状況は次図の通りであった。

学徒動員の歌　「嗚呼紅の血は燃ゆる」

①花の蕾の若桜　五尺の命ひっさげて
　国の大事に殉ずるは　我等学徒の面目ぞ
　嗚呼紅の血は燃ゆる

②後に続けと兄の声　今こそ筆を投げうって
　勝利揺るがぬ生産に　今ぞたちたる兵士ぞ
　嗚呼紅の血は燃ゆる

③君は鍬とれ我は槌　戦う道に二つなし
　国の使命を遂げるこそ　我等学徒の本分ぞ
　嗚呼紅の血は燃ゆる

④何をすさぶか小夜嵐　神州男子此処にあり
　決意一度　火となりて
　嗚呼紅の血は燃ゆる

県下学徒動員展開状況

日　付	動　員　学　校	動　員　先
19．5．11	五高　理3年	三菱長崎造船所
15	五高　文3年	八　幡　製　鉄　所
	熊本工専2年	阿　蘇　三　井　鉱　山
	東洋語専3年	兵　　器　　廠
	御船中学等	隈庄飛行場建設
6．2	玉名、鹿本、御船、済々黌、鎮西等（4，5年）	鹿屋海軍航空隊
3	熊本、九学、八代、宇土、大津、天草	同　　上
20	熊工、熊商、市商工、八代商（3，4年）	三菱長崎造船所
7．14	五高　文2年	三菱長崎造船所
20	県一女（5年）	東　肥　航　空
	水俣実商、東亜鉄道、熊工、市立高女、芦北女	県　下　各　工　場
	熊工専　電気科	福岡無線工事局
8.	済々黌、熊本、鎮西、九学、尚絅、松橋等20校	三菱・熊本航空機
9.		
10．20	天草、宇土、御船、人吉（3，4年）	大村海軍航空廠
12.	上林女	臼　蚕　坪　井　工　場
20．1.	五高、七高、熊工専、宮崎工専等高専クラス	三菱・熊本航空機
3.	山鹿高女	城　北　航　空　機

三菱熊本工場勤労動員一日記から

熊工専　　野中　　卓

昭和 20 年

1 月 7 日　熊本工専 1 年生、学徒勤労動員令により健軍町の三菱第九製作所へ勤労動員となる。

1 月 11 日 13：00　水前寺集合、健軍報国寮にてパス、米増配手続、身上調査などの諸手続を済ます。

1 月 13 日　9：00　工場第 3 西門に集合、工場見学、部品及び板金工場は活発に作業中であったが、組立工場はガランとした風景であり気合い抜け。

1 月 14 日　儀装を希望したが結局組立工場 14 班、胴体の部分組立に配属、工専土木工学科学生と同じ職場、班長紹介後突然工機工場に集合を命じられた。治工具図面（青図） 4500 枚をトレースし原図とする為、学校（工専製図室）で作業をするようにとのこと。泥縄的な動員計画である。

1 月 15 日　8：30　登校、学校でトレース作業、2 枚仕上げた。暖房もなく寒い、トレースより工場でハンマーを持って飛行機を造りたかった。

2 月 6 日　再び工場勤務、組立 14 班工程掛、部品進捗表を書き、部品請求伝票を作り、時々部品、板金工場へ連絡に行く。

2 月 18 日　軍監督官と動員高専学生との感情はよくない。学生に対するコンプレックスあり。名古屋に出張していた友人学生から、日本にも双胴新鋭機やロケット爆弾VI、V 2 、V 3 、V 4 などがあると聞き心強し。

2 月 20 日 19 框が不足、24 号機より 130 ／ 5 の治具上組立作業は不可能と思われる。19 框は名航でしか製造出来ぬと聞く。午後工場外の集会室で慰安演芸会があり許可をもらって見物に行った。小夜福子一座であった。終って外へ出たら学生は見に行ってはいかんと若い監督官になぐられた。軍の威力を借りた横暴に怒りを感じた。

2 月 23 日　生産力目に見えて低下、まだ 25 号機が組立中だ、21 号機は（試験飛行中か？）胴体着陸し泥まみれで帰って来た。早速組立工場で修理。

3 月 3 日　秘かに設計図を持ち帰り、自宅で三面図をコピーした、飛行機に対する純粋な興味から。

3 月 18 日　工場空襲を受く、鋲金工場被爆（ 50 k爆弾）屋根、スレートは吹飛ぶも鉄骨の被害は少なかった。命中点は板金の工程掛の位置、2000 トンプレスは被弾して故障。米軍は主要機械の位置まで知っているとの噂。

3月 27 日　3 月末で健軍工場動員は解除の筈であったが延長と聞いてガッカリ。昼前B－ 29 来襲、頭上に来て高射砲発射で気づき、場外に退避。

4 月 6 日　熊工専及び五高に疎開した部品や工具のリストを作るため調査に行く。尚絅高女には現図場が疎開していた。

5 月 12 日　工専学生土木 35 名と冶金学生は三菱工場動員解除となり、夫々専門の職場に動員、生産能率上らず、ダラダラした気分。工場名の看板は何時の間にか「 1011 工場」と書き替えてあった。

6 月 16 日　工専建築学生 20 名、（佐世保海軍施設部隊へ動員替え、残された学生は 10 名位になってしまった。

7 月 31 日　工場通勤にバスを利用するようになった。但し高専学生のみ水道町⇔交通局⇔水前寺⇔健軍のコースであった。今日は 8 ： 20　交通局前でバスを待っていたが一時間経っても来ず、遂に欠勤す。

8 月 9 日　工場休む、組立工場工程掛ではあまり我々を必要としない状態である。7 月 1 日の大空襲で工場の生産は殆んど止ったようである。

8 月 15 日　終戦の放送を聞く。我々の青春は一体なんだったのだろうか。

8 月 16 日　工場へ行ってみる。飛行場にキー 67 が数機放置してあった。内部に入ってみると、時計は既に抜きとられていた。　“記憶から’

§　高専学生は日給 2 円、半額は強制貯金。残りは月給として毎月支給、タバコ、甘味の特配は上部で消え学生の手には渡らない。

§　鉢巻のゆるんでいた女学生が、ボール盤に髪を巻き入れて、頭皮をそっくりはがされた話を聞いた。ドリル傷やハンマー傷は当たりまえで話題にもならなかった。機銃掃射で死んだ中学生が居たと聞いた。

§　2 枚の外板のドリル穴がうまく合わずに小判型に穴をあける生徒がいたが、名古屋から来た工員がうまくごまかしてオシャカを出さぬようにしてくれた、リベットの打ち損じをごまかしておくと、完成検査のとき連続的にエンジンをかけると鋲頭が切れてしまいバした。

§　胴体は分割工法で、前部、中部、後部各胴体を別々に組立て、最後にボルトで結合した。風防は有機ガラスで、破片をこするとバナナの様な匂いがした。時には、わざと破損させて煙草のぱパイプを作るものもいた。スプリングで短刀を作った話も聞いた。

§　時々、組立工場には実戦機が修理のため帰って来ることがあった。機内に入るとレーダー妨害用のアルミテープが散乱し、時々は血痕すらついていることもあった。後部動力砲座に座って回転させてみるのも面白かった。
爆弾庫の扉を開けると下が見え、狭い通路から落っこちそうになって恐かった。機内に乗り込む時は操縦席下のハッチを開けたと記憶する。航法席の上には、小さなプラスチックの流線型ドームがあったようだ。（天側用）

§　工場内に反戦分子がおり、便所内にそのような落書きが発見されたとかで筆跡鑑定のために作文を書かされた。

§　通勤は、朝水前寺駅に汽車（客車 5 ～ 6 両連結）が待っており、動員学徒（職員、工員も乗ったと記憶）はこれで工場の門前まで乗った。バスを買っていたと思うが、実際は改札口を通らず、踏切から駅の構内に入り直接乗降していた。線路は工場専用引込線で終端は工場内の荷卸し場であったが、人間の乗降は工場西側の道路であった。帰りは朝と逆の順序である。その他に一輌だけのヂーゼルカーがあって、一定時間おきに工場正門前と水前寺駅の間を往復していた。動員学生も要務のとき腕章をもらって利用していた。職員は通勤にも使っていたかも知れない。

§　動員学徒の作業については、計画性がなく、能力、適応については行き当りばったりの感じであった。軍は気合いを入れるばかりであり、近代経営感覚を持った上級職員はいなかったと思う。技術者は技術のことだけしかわからなかった様だ。中学生も最初は純粋な気持で、真面目に働いていたが、次第にそんな空気に染っていった。又高専学生も、男女間のロマンを求める感情は高かったが、デカタンに走るものは無く、哲学書、純文学書をむさぼるように読み、人生や恋愛論もたたかわせたものである。
中学生は喫煙の習慣を覚えたものが多く、よく吸殻を拾い喫みしていたのを見た。酒を飲む機会はあまり無かった。

勤労動員の思い出

熊工専　大塚　由成

昭和 19 年春、熊本工専に入学、早速製図等習い始めたばかりのその秋から、三菱健軍工場

からの機械部品の青焼図面のトレースをさせられました。建築製図とは違いますが珍らしくもあり、お国の為と思い頑張りました。その年の 12 月には所謂、学徒勤労動員がかゝり、各科それぞれ軍需工場等へ散って行き、我々建築科 40 人も、三菱健軍工場の各部門（組立工場、第一、第二部品工場、ボイラー室等）へ配属されました。宮田　滋君（長崎出身）と私の二人は組立工場の事務室（工場の東隣り、木造 2 階建）へ配属され、早速「飛龍」の組立作業用の足場台の設計を命じられ、何度も工場に出向いたりして図面を引き、作業台が出来上ったときは、ちょっとした感激を覚えました。　事務所の一画は仕切られていて、若い技術将校の監督官が、肩を張って治まっていました。手島工場長は、頼もしい練達の紳士でしたが、戦後松本車体㈱の工場長として活躍しておられました。

名古屋から派遣されていた待田班長には仕事を教えてもらいましたが、今も懐しく想い出されます。

事務所には尚絅高女の女子挺身隊員の目の覚めるような美女（東さん、酒井さん）が居ましたので、他の職場の同級生達が、何か口実を作っては見に来ていたようです。我々学徒・挺身隊は工員さんたちと一緒に水前寺駅から引込線の貨車に鈴生りになって通勤しましたが、厳冬期には 15 分足らずの道程ながら、入口の手摺から手が離れて落ちそうでした。

20 年の春頃から残業が多くなり、たまたま孟宗竹の碗一ばいの唐黍飯と沢庵漬の夜食を美味しくいただいたことも想い出します。

空襲警報解除後の職場復帰が遅れて、監督官から打たれたこともありましたが、学生の気楽さからか、鈍感なのか、少しも悲愴感が無く、懐しく楽しい想い出ばかりです。空襲がひどくなり、事務所も被弾していて、私の製図板も吹飛んだ後の 20 年 6 月には、我々の一部は、海軍施設部に動員替えになり、長崎の喜々津の建築工作隊で終戦を迎えました。

学徒動員

宮崎工専　　外園　　巧

戦局がどのように推移ししているのか詳しい報道がなされないまゝ、昭和 19 年も終りに近づこうとしていた。ペンを銃に替え、出陣して行った文科系の学徒、敵艦に体当りして散っていく特別攻撃隊の悲報が、連日耳に入るようになってきて、これは人ごとではないぞと誰しも感じつつあったに違いないし、事実沖縄の周辺まで敵は制海、制空するところとなっていた。

こうした時に我々理工系の学生にも動員の命が下ったのである。四月に入学して八カ月で学徒動員の命令である。学ぶ道を間違ったと思い、退学するつもりでいた私は、二学期の試験をボイコットしていた。そこに動員の話を聞き、これで製図を書いたり、勉強をする必要はなくなると思い早速落第を免れるため追試験を申請……こんなことで私は勇躍、熊本市にあった三菱航空機製作所に馳せ参じた次第である。この時、宮崎工専から動員されたのは機械科、航空機科の生徒約百名であった。

◇　入寮と配属

健軍にあった三菱の寮に全員が収容され、生活することになった。だが仕事の内容により交替制で、全員が一緒に暮らすことはなかった。規則の束縛を受けることもなく自由に過すことが出来、軍需工場のせいか食糧事情も一般に比してあまり悪い状態ではなかった。ただ寒さは厳しかったし、それ以上に苦痛であったのは虱の発生であった。これは寮生一同の最大の悩

みであった。

配属された職場は、機械科の学生は主として機械工場に、航空機科の学生は組立工場その他に配属され、私は三名の同僚と機械工場の第四群に配置された。第四群は飛行機の内部を支えている桁を作るところで、それに伴う工作機械が備えられ、私達は進捗班というところに配置され、最初に与えられた仕事は桁がどの部分に使用され、桁の設計がどのようになっているかを製図することであった。第四群には群長一名（技手）と他に技手二名で、私達はこの指揮下に入った。人との出会いは大切なものというが、ここでのエピソードを記すことで私の学徒動員の生活が青春の燃焼であり、極めて有意義なものであったことを語りたい。事の起りは配属された日の群長の挨拶に始まる。

私が机の縁に手をついて話を聞いていたということでものすごく激怒された。私にしてみれば全て心外であった。会社からは技手と同様に職員待遇だとの話であったし、折角仕事の加勢にやって来たのに、こんな怒り方はないであろう。今まで中学時代を通じて下級生に対し、度量の大きな接し方をしてきたと自負していた私にすれば、私とは正反対の気持の小さい人だなあと思った。同時にこんな長の下では働きたくないという感情がむらむらと起ってきて自制しようもなかった。然し、これは全く私の判断の誤りであったことに気がつくのであるが、その時は腹がたって、二、三日目から私は群長に対する抵抗を始めだしたのである。毎朝出勤すると椅子を並べて横になり、時に頭が痛む、時に腹が痛い（勿論仮病である）等と理由をつけては仕事をボイコットする作戦をとった。それが一週間程続いた。遂にたまりかねた群長は「君はもういらないから他のところで働いてくれ」と怒りの配転通告をされた。

この通告は自分の望んでいたことであり、してやったりと喜んでこの命令に従うことにした。転居したのは他の群で、工作機械を主体とした部品の作製工場で旋盤、シェーパー、スロット盤等あらゆる工作機械が並んでいた。群長同志の取り計いがあったのかどうか知らないが、私は直接ボルトの製作に従事するところで三交替で働くことになった。直接、航空機の部品作製に携わることの歓びと、出来るだけ多量の製品を作るという目標を得て私は懸命に働いた。怒り持て職場を追い出された者としての意地が、私を異常なまでに仕事に熱中させたのである。この事は私の生涯の中でも懐しい思い出のひとつである。

さて、私は新しい群に来て一ケ月ばかり全力を奮ってボルトの製作に取り組んでいたが、その間、私をじっと監視している人がいた。やがてその人は私に「頑張っているね」と時々、言葉をかけてくれた。それは誰であろう私を追い出した前の群長であった。私の性格の中には過去のわだかまりを全く気にしないという長所があると思っている。その声を掛けてくれた人が前の群長だと気付いた時も恨みの眼を向けることはなかった。むしろ笑顔で「有り難うございます」と挨拶が出来た。

それから一ケ月も過ぎた頃、生産を元気づける意味で、工場長から各職場に酒の配給があり各課毎に酒食の宴が催された。私達も参加して飲んでいるところに前群長が来て、私に一杯差して「君、工場長のところに行って酒が無くなったからもう少し下さいと言って行く勇気があるか、そしてあくまでも自分が飲むのだと主張できるかね！」と問いかけられた。この人は自分を試しているのだなあと思い、又少々酔いも手伝って血気盛んな私は即座に「行って来ますよ」と返事をし、工場長のところへ行き「酒が無くなったので下さい」とお願いした。工場長は「配給してしまったのでもう無いよ」と優しく言ってくれたのを覚えている。その旨を前群長に伝えたところ彼は「本当に言ったのか」と驚いて、確認に行ったのか、どこかへ行ってしま

った。しばらくして彼は私のところに来て「もう一度僕のところに帰って来る気はないかね」と問いかけてきた。私は今の群長と話がつけば帰ってもよいと答えた。彼は「もう話は出来ている。決して悪い様にはしないから是非帰って来て欲しい。」と懇請する様な口調で云った。「解りました、明日からそちらの方に行きます」と答えたのを今も鮮明に憶えている。

くどくどと書いたのは、この出来事が学徒動員生活を楽しく有意義にし、私の人間形成に、そして又将来幹部としての物の考え方、人の扱い方を学んだ、人生の大切な第一頁だったからである。

元の職場に帰った私には同僚二人とは全く別の仕事が用意されていた。別にこれと決った仕事はなく、群長の言う仕事をすればよいのであるから彼の秘書みたいなことになった。彼から言われた仕事は養成工の指導、女子挺身隊の監督、怠まん者の監視、各地への連絡等々であった。時たま市内の分散工場との連絡のための出張があり、そんな時、群長は「仕事は早く片付けなさいよ、夕方は遅くなっても構わないよ.と出張の命令を出すのである。

翌日、顔を合わせると「映画は面白かったかね」といたずらっぽく親しい眼差しを向けられるのだった。こうした対話が進む中で、柔道の有段者同志であったことも手伝って、お互いの武勇伝まで話したり、親密の度が強まっていった。次第に毎日の仕事が楽しくなり、この人の為になら‥‥、と考えるようになっていった。群長の方でも工作機械を横穴式に入れる配置図までも私に任せてくれる様になりこの人間関係は疎開するまで続いた。

◇　女子挺身隊のこと

私が健軍に来る前、すでに宮崎県の小林高女、都城高女の生徒は女子挺身隊として働いていた。軍需工場が他にあまりなかったせいか、南九州の学生の殆どはこの健軍の工場に集中していたように思うが郷里に近いこの二校しか私の記憶には残っていない。

工場では昼食時間になると志気高揚のためと、従業員の慰安のために軍歌を流していた。時には声楽班が組織され個人的な歌を放送したりした。誰の紹介か知らぬが私も放送員の一員として歌うことになった。「若鷲の歌」とか「女子挺身隊の歌」などが私の持ち歌であったが、やがて放送員の中にいた都城高女の生徒から私のことが知らされたらしく、昼食時間になると五、六十人の人々が私の周りを取り囲んだ。そして歌を唱ってくれないとこの中から出さないという。私はこんなに女の人々に取囲まれてワイワイやった経験がなく、恐らく顔を真紅にしてうろうろしていたに違いない。とにかく度胸を決めて、リクエストされるまゝに唱ったところ、彼女達は褒美にといって郷里からの土産を次々に渡してくれた。当時の女学生らは今はどうしているであろうかと思うと懐かしい限りである。

小林高女の生徒は郷里が同じせいもあって、彼女達の寮の前を通ると目白押しに窓から顔を出して「外囲さん、外囲さん、どこへ行くの！」と声を揃えて私を冷やかした。

思えば何の楽しみもない工場生活では、こんなことが喜びとなり愉しみでもあり、そして私達世代にとっては数少ない青春の想い出でもある。

都城・小林の女子挺身隊は小学校の先生になる為に二月頃には皆引揚げていった。その中の一人に私の友人の恋人がいた。確か川水田さんとかいったが、友との恋は実らなかったとか、もしこの手記を読まれて御存知の方が居られたら御連絡いただきたい。

◇　健軍　空襲

三月も中旬であった。その日は早くから長いサイレンが鳴って警戒警報が発令されていた。工場は休日であったが保安要員と、忙しい職場の従業員が多数出勤していた。拡声器から「本

日、専門学校の生徒は九時から十時半まで保安要員として工場に出勤すること」という命令があった。別にこれといった仕事は無かったが言われるまゝに工場周囲の警戒に当って十時半には寮に引揚げた。それから三十分程経過した時である。空襲警報が発令されると同時にすさまじい爆発音がした。私は驚いて庭にとび出した。グラマンと双胴のロッキード数機が低空飛行で機銃掃射とロケット砲を発射しながら工場めがけて波状攻撃を加えていった。初めてみるものすごい光景に度胆を抜かれ、逃げるのも忘れてしばし見とれていた。高射砲弾が申し訳程度に二、三発打ち上ったようであったが、日本軍の飛行機は応援するどころか迎撃もせず、敵の為すがまゝに指を喰えているという状態で情けなく激しい怒りを覚えた。敵艦載機が飛び去ったあと、工場に馳けつけてみると私達の職場、機械工場は敵機の砲弾を浴び、コンクリートの壁には肉片が飛び散り、数十人の死傷者を出し、そのすさまじい惨状は形容し難いものであった。そして工場の周囲には何十発という不発弾が打ち込まれていて、縄がはられたが相当の被害があったようである。帰寮があと三十分遅ければ私達も敵機の餌食になっていたかも知れない。今改めて亡くなられた方々の御冥福をお祈りする次第である。

◇　工場　疎開

当初の計画では横穴式の地下工場に移すという大規模なものであったが、空襲の速度が早まり激しくなったので所詮、絵に措いた餅でしかなかった。連日危機にさらされるに及んでは生産どころではなく、まづ工場全体を分散、疎開させることが先決であった。私達第四群は宇土に疎開することになった。

工場疎開は資材の分割運搬、製品の集荷が大変で、全部トラックに頼ってなされ、極度に能率を低下させた。さて、私達が宇土に疎開するために輸送班が組織され、同時に現地で機械を搬入、設置する人も先発隊として派遣された。

この輸送班を組織するにあたって、私に輸送班長という大任が下った。

群長のお伴をして宇土に下調べに行ったのだが、輸送班の指揮班長を任命されたのは意外であった。数多い動員学徒の中でこんな仕事を任せられたのは私一人であろうと自負し、一番車が出発する時は先導車に乗り込んで皆の拍手を浴びながら勇躍戦地に赴くような誇りをもって出発したものである。数台の車に工作機械を積んで熊本一宇土間を往来し、三日かかって宇土の荻原酒屋さんの酒工場に土台だけを改造して機械の搬入据付をした。以後生産までに何日かかったのか記憶はないが一階は生産工場、二階は事務所と検査班の女子が勤務する場となって体制は整ったのである。

◇　宇土工場での生活

群単位で疎開したので夫々一つの工場としての組織編成がなされた。労務班から私達の勤怠をチェックする為に二人の女性が派遣されてきた。新しい組織は工場を真中にして昔料亭であったという三浦屋に男子寮、反対側の大きなお寺を借りて女子寮とした。当然群長は工場長となり、私は養成工及び女子工員の指導教育係と経理担当責任者（経理担当は他にいなかった為）を命じられた。さてこゝらで少し艶っぽい話を書いて拍手をいただきたい。

宇土に移って間もない頃、クラスメイトで級長をしていたM君が相談に乗って欲しいといって私を訪ねて来た。それは、或る女性が自分を非常に慕っていて、自分も憎からず思っている。ところがこの女性を級友のHがしつこく追い廻して困っている。やゝこしい関係になると困るので貴君のところでこの女性を預って貰えないかとのことである。日頃から工場長は、君の言うことなら大抵のことは聞き届けてやるから困った時には相談に来いと言われていたし、

級長が俺を信頼して頼みに来たことだし、こゝは一番！男気を出して「私に任せとけ」と胸を叩いたのである。早速工場長のところに行って、事の次第を話し是非お願いしますと頭を下げた。工場長は「それは無理だよ、外囲君まではいると四角関係になるじゃないか」と苦笑、これはOKだなと解釈して「有難うございます、何日から出勤させていいですか」とお伺いをたてた。

「僕が連絡するから、明日からにしよう」との工場長の返事を貰った時は、面目躍如で鼻高々であった。

彼女は早速翌朝から宇土に出勤して来た。工場長のところに彼女を伴なって挨拶に行くと「一生懸命頑張って貰いたい。仕事は外囲君の助手を命ずる」といきなり言われ困惑してしまった。が宇土工場全体の経理事務は少々荷が重いかなあと思っていた矢先でもあり、第一印象で好感を持った女性でもあり、「わかりました」と返事をしてその日から仕事の補助をして貰うことになった。

話の成り行きとして彼女の話をもう少し続けよう。 40 年の歴史を考えると、実名で話しても、もう許していただけるであろう。その人の名は上田慶子様と記憶している。仕事を覚えるのも早かったが、私には殆んど仕事をさせないようにして、精力的に仕事をされるので大変有り難かった。

そうした或る日、彼女と同じ方向から通勤する女性が数名、私のところにやって来た。「外囲さん、あなたは上田さんにばっかり仕事ばさせるけん、上田さんが私達と一緒に帰られんじゃなかですか。一緒に帰れるように早く彼女を解放して下さい」との抗議であった。私は彼女達の要求の主旨を私なりの言葉で上田さんに伝えて納得して貰おうと試みたが「私はいいのです。あなたのお役に立てることが一番嬉しいのです、構わないで下さい。」と言って聞き入れてはもらえなかった。好んで残業をしたのではなく、精一杯の努力をしても残業をせざるを得なかったのである。抗議に来た彼女達は抗議が無視されたと思ったのでしょう。やがて私の耳に嫌なことが伝わって来た。私が上田さんを愛しているから引きつけて放さないのだという噂であった。上田さんの感情が理解できないわけではなかったが、真正直な、一本気な私は級友から預っている人だから愛するなどということは許されないのだと感情的になってしまった。そこで彼女を呼んで「どうして私の言うことを聞いてくれないのか、どんなに忙しくても時間になったら帰っていいとあれ程言ってあるではないか、私が命じたことは必ずそうして欲しい、それがまもれないようであれば私にも考えがある。」と厳しく言った。彼女は素直に「はい、解りました」と云ったが、その日から仕事中でも殆んど彼女と口を利かなくなってしまった。「外囲さんが私に対して冷たくなってしまったと言って上田さんが泣いていましたよ。」と人が教えてくれたが、微妙に揺れ動く乙女心を思えば申し訳ないことをした。

決して私の本意ではなかったことを伝え、許されることなら是非一度お会いしたいものである。病床で想う青春の日々、出会った人々が懐しくて一人一人に会ってお詫び申しあげたい。

松橋高女出身の賀来さん、後藤さん、よく気をきかせて私の面倒をみてくれた。八代高女出身の宇野さんとKさんは誰からも好かれる性質の方で男女という関係を抜きにして友達になって欲しいと申し出た尊敬出来る人であった。

愛とか、恋とかを抜きにした、こんな男女の友情というのも美しいものであろう。寮長としての務めは、時々寮の炊事担当の方と宇土街の周辺に買いだしにいくことがあった。宇土に居

たおかげで食糧の危機には陥らないで済んだ。

思い出として残っているのは男子寮の数名と女子寮の数名とで夕涼みをしようとの名目で、夫々にパートナーを決めて田園を歩いたことである。何れも天草出身の塚本さん、佐藤さん、機会を得て想い出話に花をさかせたいものである。

◇　六月からの生活

この頃になると、毎晩 10 時頃、警戒警報が発せられ、12 時には敵機来襲のけたたましいサイレンが鳴り響いた。殆んど毎晩のことで男子は明日の生産を考えると退避させることより、そのまゝ寝かせておくことに決めていたが、女子の方はそうもいかず、寮長としての責任上警報が発令されるとすぐ身仕度をして女子寮にかけつけた空襲警報と同時に全員を工場の防空壕に退避させ、入口に立って番兵である。こうした毎日であったが誰一人として交代してやろうという人は出て来なかった。それどころか寮母は男が一人で女の部屋に入るとは……と言い出した。彼女達の生命を守るために自らを顧みず、深夜の番兵になっているのに……と思うと無性に腹が立ったが、次の日から私は女子寮の部屋の外で蚊の集中攻撃を受けながら空襲警報まで待つことにした。一本気な男のとった行動とはいえ、やり場のないつらさ、苦しさであった。この防空壕に避難させることは毎日真夜中であり、本当につらかった。

◇　夢と消えた表彰状

敵機は何の抵抗を受けないで悠々と爆撃を繰り返していた。大牟田空襲の時は真赤な炎が空を焼く様が宇土からもはっきりと見えた。熊本空襲の時は本当に身近に感じ、級友の無事を祈った。情報がはいらないまゝ数日後、健軍を訪れたら寮は天井が抜け、一階の畳の上には瓦、土、木材などが山のように盛り上っていた。級友達の姿はどこにも見当らない。秋津の方面にでも逃げていて無事であって欲しいと思った。後で判ったことは、二、三人が負傷し、一人不明で死んだのかも知れないということであった。

神国日本も最早、生産能力もなく、戦う気力も失せてしまったようにしか私の目には映らなかった。そんな時、工場長が私を表彰するということで所長に申請書が提出された。

「学徒動員で生産工場に参加した外園巧は昼夜の別なく精勤し、昼は業務のかたわら工員の指導育成、不良工員の善導、夜間においては寮長として女子工員の避難誘導など、勤務に対する熱意、その働き振りは誠に目ざましいものがあり、特に町民の人々からも信頼が厚くその実績は顕著であり、学徒動員の範となるものでありこゝに表彰方を申請する」という内容であった。

しかし、この動員学徒に対する表彰は時の差で夢と消えてしまった。

◇　危機一髪

七月も終り頃になると我々の宇土工場も毎日敵艦載機に攻撃され始めた。宇土には大きな化成工場があったため、初めはこの工場が敵の攻撃目標であると思っていた。ところが寮に用事があって帰る途中、敵機は寮の目の前にある化成工場を旋回し銃撃を始めていた。その内の一機が低空飛行しながら私を目がけて飛んで来るではないか、寮には防空壕がない。どうしょうかと考えている内にシュン　シュン　シュンと弾がきて足下で土煙があがった。咄嗟に木にしがみついた。全身がカラカラになっているようであった。敵機はしつこく私を狙って放さない。木の回りを廻って寮の調理台の下に逃げこんだ、バッバッと銃弾はそこにも撃ちこまれた。

生きた心地もないというが、空からの機銃掃射の恐ろしさはまさにその通りであった。危機

一髪、生き延びた私は当たりそこねた機関砲の弾二発を掘り出し記念品として終戦後も保持していたが今はもうそれもない。

八月になった。危機一髪は毎日やってくるようになった。敵機の攻撃目標は化成工場、白川、緑川にかかっている国鉄の鉄橋、と拡大されていった。

松橋町を襲撃する様を工場の外側についていた非常階段の上で見ていた日、又、私は頭上から狙撃される羽目になった。階段を降りる以外逃げ道はない。だがそうすれば標的になってしまうので止むを得ず二階にとび込んだ。女性が 20 名位居たが逃げ口がない、二階に閉じ込められて敵襲を受けることになった。敵弾が一階の工場に集中し、窓硝子の砕ける音、衝突音、女子の悲鳴一恐怖の谷底に突き落されようとする中で、大きな定盤があったのでその後に隠れるよう指示をした。彼女達は私のどこかにすがりつこうとして「帰してください、家に帰してください」と泣き叫ぶ。身動き出来ない状態の中で奇妙なことに私は冷静になっていた。

「みんな聞け、今は多分こゝで死ぬだろう。いさぎよく死のう、だらしのない死に方だけはやめようじゃないか」と大きな声で呼びかけた。二階は静かになった。恐ろしさで声も出なかったのか、しばらく沈黙が続いた。敵機は去った。危機一髪ではあったが幸い負傷者は一人もいなかった。

◇　敗戦の日

八月十日と記憶している。敵機が大挙して宇土の街を空襲した。九時を少しまわった頃、機銃掃射が始り全員防空壕に退避した。機銃掃射が続き、焼夷弾が降って来た、宇土の街々に火の手があがった。やがて火の海は荻原酒店の近くまでやって来た。防空壕から工場長がとび出し「外囲は屋根に登り死守せよ！」とどなりつけた。他の者も夫々工場長の指令を受け、持ち場に散った。消火作業を始め、ほどなくして空襲は終った。すると入れ交りに敵機はビラを撒いていった。

「我がトルーマン大統領は、ポツダム宣言により投降したものは、すぐ日本に送還する。皆も父や兄などと早く会いたいだろう。君達は明治大帝の五ヶ条の誓文にも反するし、教育勅語にも反している。今すぐ投降すれば攻撃を中止し、日本国民の生命、財産は保障する」ということが書かれていた。工場長は私にすぐこのビラを憲兵隊本部に届けて来いと命じた。

当時、工場長と私は憲兵隊本部から非常線突破証を貰っていたので私に届けさせたのであろうが、空襲直後の道路は人が通行できる状態ではなく、とうとうビラは届けずに終った。

通信は全く跡絶えて原子爆弾が投下され数十万の人が死んだことも知らないで時は過ぎた。もう生産のことは考えてはいなかった。私達が終戦を知ったのは 8 月 16 日であった。昨日、天皇陛下の放送があったという町の人達の話を聞いて終戦が嘘でないことを知った。工場では一般の人は明日から帰ってよいと言われた。その夜は男女の別なく男子寮に集り何処から調達したのか、酒や缶詰が用意された。積り積ったうっ憤を晴らし、別離の宴であったろうか、どのような結末になったかは知るところではなかった。私は経理の後始末のため、21 日まで仕事をした。工場長が「外園君、どうしても帰るのか、僕と一緒に山にこもってゲリラ戦で頑張ろうじゃないか」との言葉が今も私の耳にある。

私に対して与えられた深い信頼、そして太っ腹で情熱的なこの人との出会いが学徒動員という体験を、私の人生の礎石とした。感謝の気持で一杯である。

この偉大なリーダーに別れを告げ、黒木君と二人、混雑する列車で郷里に向った。途中、八代駅で見送って下さった宇野美代子さんとお友達とに改めてお礼を申しあげ学徒動員の筆を

置く。

あとがき

この手記を依頼された日、平成元年 2 月 14 日、私は脳硬寒と心臓発作の為入院し、やっと意識をとり返した時でした。一応お断り申し上げたのですが少々遅れても何とか書けたらという事で、それでは何とかお役に立ちたいと思いお引受けしました。5 月 17 日以降、心臓発作が続き絶対安静だったので、やはり断念せざるを得ないかと寂しい思いがいたしました。6 月末にやっと書き終わりましたが、何せ病室で、机も無く必死になって書いたものです。記憶違いのところも多々あるかと思います。又、名前を出させていただいた方々にお許しを得る手紙を出したいと思っております。

40 余年振りの邂逅を願いつつペンを置きます。

健軍三菱への動員

五高文科　　中野　孝次

昭和二十年一月十日、文科一年生は市外健軍の三菱航空機工場への学徒動員を命じられた。こんどはいままでのような短期動員でなく、期限なしの動員であった。二年から落ちてきた連中は大抵どこかに疾患があって免除され、結局郊外の三菱寮に移ったのは前年四月一緒に入った三十人足らずになっていた。

野原のなかに一棟だけ立った小さな寮であった。小綺麗な六畳間が並ぶ廊下で、わいわい部屋の配分を争うあいだはにぎやかだったが、ひとまとめに学校から運ばれてきた荷物を受取って部屋にとじこもると、とうとう自分たちだけになったという感慨があった。

同じ寮に鹿児島の文科生も来ていた。早速寮の中庭で交歓ストームをし、食堂で話しあうと、鹿児島では艦載機の銃爆撃やどこから飛んでくるかわからぬ艦砲射撃の巨大な砲弾で戦争を身近に体験してきているのだった。こうして同じ立場に置かれると、やはり徴兵猶予停止を承知で文科に入ったかれらのほうが、同じ学校の理科生より親しく感じられるようであった。

作業は翌日から始った。朝六時「起床、起床」とどなる声で起され、まだ暗さと寒気ののこる食堂でそそくさと、味もなにもない冷たい黒いヒジキめしをのみこんで、すぐ外に整列しなければならなかった。靴や地下足袋などもうほとんどが持っていなかった。ゲートルの下に藁ぞうりといういでたちで、まだ眠気のとりきれぬからだを運んでゆくと、ちょうどそのとき真横から太陽があがった。枯草の原にも麦畑にも一面に霜がきらきら輝いた。見渡すかぎりどこにも家がなかった。起伏しながらつづく原野と麦畑のところどころに、霜枯れた焦茶色の杉林と、弓なりに垂れさがった猛宗竹の大きな薮がある。二十分ほど、霜柱の光る野道をいった先に、低い灰色の大きな工場が現れた。だれもこんなところにこんな工場があるのを知らなかった。

六人ばかりが部工配属ときまって、敷地中央を十字に走るひろい通路ぞいの工場に案内された。アスベスト板で覆われた屋根の下に、幾列にも厚い油まみれの台が並んで、真新しいジュラルミン板を相手に、作業服の工員や白鉢巻をした女子挺身隊が働いていた。ふりむく者はなかった。ただ金属の叩かれる音、モーターの唸り、工具の音が、わーんと鳴っているだけだ。

油じみた戦闘帽の頬のこけた男が簡単に手ほどきをしただけで、すぐ作業が始った。もっとも、作業そのものは単純で、半円筒型のジュラルミン板にドリルで鋲穴をあけるだけである。

「はじめは少しぐらい仕事が遅くともよか。オシャカを出すな」と戦闘帽の男は言った。木を相手に仕事をしたことのあるぼくには、作業はばかばかしいほど容易に見えた。たしかに薄いジュラルミン板は、ちょっとドリルを押しすぎると裏まで抜けてしまい、手加減がむずかしいが、すぐ慣れた。無器用な大野が気の毒だった。顔中にニキビあとのある唇の厚い大野は、ふだんは無口でなにもしない男なのに、どうしても一人前に働こうとして、緊張のあまり右手の筋肉をぶるぶる懐わせていた。

数日たって、しかしここでの本当の敵は、技術的な問題でなく、単純な作業のはてしもない繰返しにあることを、だれもがいやというほど思い知らされた。七時から十二時まで、十三時から十七時まで、九時間を単調な同一作業でみたすことはほとんど拷問の苦痛だった。耐えがたいのはそのあいだじゅう、「こうやって貴重な時間がどんどん潰されてゆく」という意識が頭を去らないことだった。が、私語もわき見も中座も許されていなかった。どこかに監督官の目が光っていた。監督官は、正門を入って右手の事務室の二階を占めていて、そこには終日ストーブが焚かれ、かれらは赤い長靴をみがくしか能がないみたいだったが、いっその陸軍中尉の姿が現れるかわからなかった。もっとも、かれの目がなくとも、だれも仕事をずるけようとはしなかった。すぐむこうの作業台で、筒袖のモンペ姿に日の丸の鉢巻をした女子挺身隊員や、女学生らが、休みなく働いているのを見ただけで、とうていずるける気にはなれなかった。彼女たちはずいぶんお国の為にと本気で信じて働いているのだった。

「あの子たちはみんな、仕事をしてるときはきりっとした実にいい顔をしているね。本気で何かに身を捧げている、崇高な感じさえあるんじゃない。」

口の重い大野が仕事の合間にそんな感想を言ったことがあった。

「そこへいくとおれたちは、こんなことをして何になるとすぐ思ってしまうからだめだな」、今野が茶かすように口を出した。

昼休み、待ちに待ったサイレンが鳴ると、どの工場からもいの一番にとびだしてくるものは、三十人の仲間だった。所内中央を走る十字路の角の食堂に、まず一番にとびこむのも同じ連中だった。たがいに呼びかけ、叫びあい、そこここにかたまって大声に話しあう目線幅は、動作の緩慢なカーキ色の群のなかでひときわ目立った。ここでもくいものは黒く水っぽいヒジキめしと、うすい雑炊にきまっていた。それを工員も女学生も黙々と腹に入れていた。そのなかで、たがいにわれがちに作業や見聞したことを伝えあおうとするにぎやかな集団は、やはり特権的な意識を持っているといわれても仕方ないに違いなかった。工員たちがこのはしゃいだ集団に好意をもっていないことは、かれらがふとしたときに見せる暗い目付きや、故意に無関心を装う態度からもわかった。

夕方、すでに陽が沈んでしまった十字路を「歩調とれえ、頭あ右っ」と号令をかけて正門を通過して、また野中の道を三々五々と帰るときは、疲労と飢餓感とともに、物悲しいまでの無力感があった。日がたつにつれ疲労と無力感が体内ふかくたまっていった。寮に帰るのはいつも暗くなっていたが、まずいわびしい夕食のあと、夜は消灯まで少しでも長く本に向わずにいられなかった。「おれらは一体いつまでこんなことを繰返しているんだろうなあ。」

ここへ移って以来、仲間うちでは本から金銭からすべてごちゃまぜの一種の共産生活になっていた。思いがけず月末に工場から十五円が支給された。四人はそれをひとまとめにして町へくり出し、まずガルボの闇の鳥の唐揚げを食った。まだ油のはぜているような鳥肉を頬張りながら、「ひゃあ、うまか」と満足のうなり声をあげるときは、なんだかもう昔からこうして四

人で暮している気がした。運命共同体という言葉がはやっているときで、だれもが、これが死ぬまでの自分の仲間だという気がしているのだった。

こうして、寮と工場を往復しながら、一月が過ぎ二月が過ぎ三月になった。三月に入って、急に空襲警報が頻繁に出はじめ、ある日ほんとうに暗灰色のグラマンが工場の空を低くかすめていった。グラマンはそれからつづけてしばしば来襲しはじめた。数日後、いっものように工場に隣りあった健軍神社裏手の竹薮にひそんでいると、突然背後から鋭い金属音とともに頭でっかちな暗灰色の機影がすぐ真上をかすめていって、ダダダッと本物の音をひびかせていった。つづけてまた一機、また一機、驚くほどの超低空でうしろから迫り、腹にひびく機銃掃射を行った。工場のへんで物の壊れる連続音が起った。これが本格的な空襲の始まりだった。

それから連日のように空襲警報のサイレンが鳴り、鳴ると同時に先を争って竹薮にとびこんだ。発令中は少なくとも作業から開放されるので、はじめのうちは避難は歓迎されたが、機銃の迫力ある音を聞いて以来ことは冗談事ではなくなった。工場の屋根に穴があき、あとに十センチほどもある真鍮の弾丸が残っていて、だれもがそれを見ていたのだ。もう竹薮のなかにのんびりねそべっている者はなかった。竹薮のなかにジグザグに掘られた防空壕は浅く、竹の根がひげ状に垂れ赤土が露出していたが、音をきくとその土にからだを密着させずにはいられなかった。本物の物理的な恐怖の前には、このあいだまで気楽に死のことなど話していたのがどんなに甘いかがよくわかった。

三月二十六日、空襲警報がでてながいこと壕に潜んでいた。このときははじめから空にぶきみな気配があった。七高生も女学生も壕の根方に背を伏せて黙りこくっていた。空気をふるわせていやな金属音が迫ってきた。それが二機や三機の音ではなかった。ふいに一機のグラマンが風防ガラスのなかの顔が見えるほど超低空をかすめズズンとひびく機銃掃射をしていった。と見ると、すぐあとから同じやつがつづいた。工場の方で破裂音が起った。爆弾のらしい地ひびきもした。今日の襲撃は執拗だった。七、八機が一度過ぎていったと思うと、別の方角から新しい編隊が襲いかかってきた。一体全部で何機来襲しているのかわからず、空はただ間近な爆音にみたされ、空気がふるえっづけた。ときおり地をゆるがせる爆音が起った。

機銃掃射は竹薮のなかを走りぬけた。ぼくは本能的に壕の土に顔を埋めていた。それから気がついて顔を起すと、すぐむこうで、胎児のように薮の根方に縛っている女学生が、土にしがみついて、無意識に細い手で土を掘っていた。鉢巻も顔も土まみれなのに気がついてもいないようだった。グラマンは弾丸のあるかぎり去らぬ気らしく、左右からうしろから前から、舞いおり舞いあがり何度でも襲いかかった。

それから、敵が去ったのではない、一時敵が不在になっただけのような、シーンとした時間があった。密生した竹の葉群を通過してきた春の光が、水泡のように足許に小さな斑点を揺らしていった。生きていた、と思った。自分も仲間も七高生も鉢巻姿の女高生も女子挺身隊も工員も、生きていた、戦争があって、こうやってグラマンのなぶりものになりながら、まだこうして生きていると思ったとたん、切なくて、涙がこぼれそうになった。敵は本当に去ったようであった。ごそごそそのへんで起きる物音が耳に入り、緊張しきっていた神経がゆるむと、生きている者全部にたいする甘やかな感傷が襲ってきた。だれかがむこうで素頓狂な声をあげた「ひゃあ、助かったぞう。」

工場はもう仕事どころではなかった。屋根が壊れ、部品は多く破壊されて、ほうぼうに十センチ大の弾丸が見つかった。死者が出たといううわさがあったが、定かではなかった。空襲の

あとの点呼で女学生が一人行方不明だと大騒ぎしたが、これはあとで監督官の一人が彼女をどこかに ひっパりこんでいたといううわさが流れた。

この日の空襲以来工場全体が急に浮足だち始めた。そのうち、山鹿へんの地下工場へ疎開だという話になり、しかしトラックがないのだとか、いや地下工場そのものがいま掘り始めたところだとか、命令と流言がいり乱れるなかで、作業はもう元の秩序に戻らなかった。

空襲警報は連日のようにでて、なんどか本物の空襲があった。あたたかい日々であった。竹藪の上にも、むこうの麦畑にも陽の光がみち、ひばりの鋭い鳴声がきこえた。よく見るとはるか上空に羽根をこまかくふるわせて停止している姿さえ見られた。かげろうの立っ原をわたってきた生暖かい風が壕のなかにいても感じられた。外に溢れる生命の感じが、かえって身近な死を連想させるようであった。

河出書房新社刊　中野孝次著「麦熟るる日に」より

不自由時代

済々黌　　副島　林造

昭和 19 年の秋、たしか 10 月 6 日から、僕らは三菱の飛行機工場へ動員のため殆んど教室から離れ、正規の勉強も放棄しなければならなかった。

この頃既にアッツ島の玉砕を始め方々での後退、転進、或は飛行機不足の悲観的な声を耳にしていた時でもあり、初めの中は随分真剣な、緊張した気持で終日ジェラルミンを相手にハンマーをふるい、ヤスリでやかましい音もたて、時には臭いにぎり飯一つ貰って突貫作業と称する徹夜作業までやった。

工場側で自慢し、又僕らも一寸感心した二千屯プレスなどといいう機械も大して威力も見せない中に、疎開という事になってしまった。

当時は殆んど軍隊的規律や統制が幅を利かしていたし、極度の精神主義や自己犠牲の精神が美徳として通用していた時代でもあったが、同時に又、人前丈なんとかうまくやっていくという様な狡いやり方も相当に根を広げて居り、僕らも時にはこの様な要領主義的な方法も利用した。

動員中、夜の 9 時頃仕事を脱け出して登ることは禁じられていた百尺余りの煙突に登りに行ったり、材料箱をひっくり返して、その中で眠ることを覚えたりしたものであった。

しかし、一般的には、とも角、最初の中は強制された緊張の中に毎日を過していたし、又僕ら自身の生活も決して意識された生活とは言えなかった。

戦争とか、平和とかいうものの本質について本当に考えさせられたのは終戦後しばらく経ってからであったが、終戦間際の僕らは自分自身にさえ目的がはっきりとは判らない値に、いわば生理的に、自分達の置かれている立場に不満を感じ、漠然とではあるが、それに反抗しようとしていた様にも考えられる。

当時、時々工場を見廻りに来ていた若い軍人の監督官の威張った恰好を見る度に強い反撥を感じたことを今でも覚えているし、何かやり場のない鬱憤を屢々感じたものである。この様な鬱憤が潤いに乏しい毎日の生活に一層増大されて、様々な問題を惹き起したものであった。工員達との衝突、喧嘩、殴り合い、時には工員の義眼をこわしてしまう様なことまでやった。

勿論、こんな殺伐なことばかりやっていたわけではなく、それ相当に面白いこともやったり、愉快なこともあったと思うが、それらのことは余り思い出せない。

「済々黌百年史」より

勤労動員学徒隊長回想記

熊中教頭　　中村　昌信

戦争も末期になり、飛行機が足りなくなって、健軍に三菱飛行機製作所が出来ることになり、その敷地の地均し作業に生徒と共に参加す。

愈々同製作所が出来上ると、まづ理数科の教員が徴用され、熊中から大場嘉一教諭が徴用をうけた。19 年 9 月には県下の中等学校生徒が飛行機製作の為に動員されることとなった。9 月早々県庁から呼び出しがあって出かけた。由良学務部長から「今度学徒隊を編成して三菱飛行機製作所に出動する。君達三人で学徒隊本部として世話して貰いたい。特に申し添えておくが、時局は大変な事態になっているので一生懸命やってほしい。但し君達の背後には沢山の学徒がいることを常に念頭において貰いたい」とお話があった。私が隊長、西尾、河添両氏が副隊長として学徒隊の世話をすることとなった。その時動員された学校は済々黌、熊中、熊商、鎮西、九学、尚絅、阿蘇高女、菊池高女、松橋高女、本渡高女の 10 校であった。

製作所には組立、部品（第一、第二）、工機、鍍金、機械の五工場があって、すべての工場に生徒を配置し、各担任の先生はそれぞれの工場で生徒の作業を見守って貰った。

各工場における生徒の活動の状況を総括的に把握し、出来るだけ生徒が安心して働ける環境をつくる為、会社側と折衝することが本部の第一の仕事である。工場までの通勤は、水前寺駅から健軍工場前までの引込線で二輌の貨車を利用した。郡部からの女子生徒は全部秋津寮に収容し、西尾副隊長が寮に泊りこんで世話をみた。

空襲に備えてまづ避難の為の壕を造ることとし、健軍神杜の境内と神社までの道路の両側の土堤を利用した。壕掘りが済むと愈々本格的な作業が各工場で始まった。工場では夫々指導員がついているので心配はない。生徒も大張切りである。

作業を開始して何日か経った或る日、板金工場配置の学校の担任の先生が本部に来て「生徒が作業中、指に怪我をした、危険だから作業場を変えてほしい」と申し出て来た。危険な場所で生徒を働かすわけにはいかないが、果してそんなに危険なのか一寸判断に迷って、とに角早急に検討してみることにした。

ところが先生が帰ると入れちがいに生徒代表が来て、「少々のことで配置転換をしないでほしい」と連名願を差し出した。よく考えてみるからと生徒を帰し、すぐ板金工場長にわけを話し、工場の直接の責任者にも事情をきいて貰ったら、注意してやれば心配する程危険ではないと分かり、以後十分気をつけて作業に従事するよう関係者にも話してそのままにした。その後は何の故障もなく順調に作業は進んだ。

戦局は更にきびしくなり二前線から飛行機の請求がはげしくなって「仕上げを急がねばならないので、生徒にも夜勤をさせてほしい」と労務課長から申し出て来た。まだ仕事に十分慣れていないし、体力的にも無理と考えるので夜勤はもう少し先にしてくれと返事した。

ところが軍需工場の係官として出向して来ている監督官の大佐から、「時勢が緊迫して来ているので、生徒諸君には無理かも知れないが、何とか協力してほしい」と深々と頭を下げて

の願い出があった。その真剣さに打たれて、出来るだけ協力を約し、具体的なことは労務課と打合せをすることにした。

早速、労務課長に無理にならないよう案を作って貰った。寒さも厳しくなった時期である。出来上がった案は三交替の二番手、午後 4 時から午後 11 迄。一夜夜勤したら翌日は休みということでそう無理にはならない。此の案をもって板金工場長の柳本さんと一緒に学務部長を訪ねて許可を得て実施した。

健軍の夜はよく冷える。夜勤の工場内は零下 4 度まで下ることもある。夜勤を終えた生徒を帰したあと、八丁馬場を通っての帰途、杉の枝に積った雪がバサッバサッと落ちる音がまだ耳の底に残っている。

熊中同窓会誌」より

三菱航空機動員学徒引率記

熊中教諭　今村　恒吉

大東亜戦争も愈々苛烈さを加える昭和 19 年 10 月、熊本市内の中、女学生の大半は健軍に新設された三菱重工の飛行機製作所に動員されることになった。その総数 1 万数千、各学校の学年毎に各工場に配置された、その中、私の率いる熊中 3 年 6 組の一隊は、各工場の最終工程を担当する組立工場に配置された。各学校の動員生徒には、学校毎に夫々隊長が設けられたが、熊中隊の隊長は教頭の中村昌信先生であった。出退勤の動員生徒並びに工員の為に、わざわざ水前寺駅から健軍工場行の列車が特設された位だから、如何に動員生徒及び工場の規模が大きかったかを推察することができる。当時、我々引率教諭の勤務内規は、1 ケ月工場に勤務したらその翌月は学校に帰って骨休めをしてもよいということになっていた。私は「自分の担任生徒が工場で苦労しているのに、その担任教師が学校へ帰って楽をするのは許されないと考え、隔月学校へ帰任するを潔しとせず、ずっと工場に泊まり込む覚悟をきめて、翌 20 年 8 月私に召集の赤紙がくるまで、約 10 ケ月間工場に身を挺した。

私の目に映った当時の工場内は、徒らに多数の動員学徒ばかりが工場に溢れて、それに見合う仕事は部品欠乏のため殆んど皆無の有様で、所謂「小人閑居而為不善」の状態で、誠に勿体ない憂うべき状況であった。動員数ヶ月後、三菱の大塚所長以下幹部職員と動員引率教諭との合同会議が開催された時、私は以上の点を指摘して、強く会社側に迫り、「仕事がなくて、朝から生徒を遊ばせる位なら、生徒の訓育上からも甚だ面白くないから直ちに生徒を学校に帰せ。部品が出廻って仕事が出来る様になったら、何時でも我々は生徒を引率して馳せ参ずる用意がある。」と鋭く詰め寄ったことを覚えている。

この時、三菱側は部品欠乏の為の余儀なき開店休業状態なので苦悩の色濃く、確たる返答を為し得なかった。私は心中ひそかにこの戦いの前途に暗澹たるものを感ぜざるを得なかった。

工場内の見かけだけの敢闘空振りの実態は之に止まらず、時折「徹夜作業」と称して凛々しく「必勝」の鉢巻きをしめて徹夜作業を強いるものの、その実、為すべき作業は殆んどなく、生徒は余儀なく徹夜を強いられるだけで、有給の職員、工員は要領よく機械の蔭で仮眠をとり、朝になると何処からともなく顔を出してくる者もあり、既に敗戦の様相は工場内にも漂よっていた。かゝるだらけた空気の中で、私は如何にして生徒の気風を堕落させず、昂揚振起するか

に腐心し、朝は折からの寒風を衝いて裸体操並びに駈足を行い、在校当時と同様、生徒の毎日の生活を詳細に記録した日記を提出せしめて之を点検し、個別に之を指導した為か、私の組の生徒の勤務状況は以外に評判がよく、当時の学徒の出勤率は 70 %を割る低い中にあって 90 %を上廻る高率を上げ、工場内でも工員に劣らぬ仕事振りを認められて、先づ手島組立工場長より表彰を受け、次いで県知事の表彰もあり、時の新聞紙上にも「真実一路」の見出しで、その働き振りを紹介され、近く文部大臣より表彰の予定とまで宣伝されたが、その後間もなく終戦となり之が実現は見なかった。

もしこの時文部大臣表彰が実現していたら、さらでだに戦後戦争協力者としてその筋から睨まれた私は、間違いなく追放の憂き目をみていたであろう。

かくして私は昭和 20 年 8 月 14 日（終戦の前日）召集で、思い出の三菱の工場を去ったのである。

「熊中同窓会誌」より

学徒動員の思い出

熊中　　森　　昭

昭和 19 年 10 月から終戦までの 10 ケ月間、我々熊中 3 年生は健軍町の三菱航空機製作所へ動員された。こゝは三菱の従業員は半分位で、後は社会人からなる女子挺身隊員と中学・高専生からなる動員学徒であった。いわば半分は素人で陸軍の爆撃機「飛龍」の製作に当っていたのである。

動員後 1 ケ月足らずの訓練期間のあと、健軍工場の敷地内に点在する金属工場、部品工場、工機工場……にそれぞれ配属された。私たち 3 年 6 組は組立工場の総組立班になった。飛行機の胴体、翼、脚などの取りつけが我々 6 組の仕事であった。

悪童たちにすれば、戦争が激しくなる一方の慌ただしい中での動員、授業のない毎日という初めての経験を面白がる間もなく、狭い機体の中で体をねじ曲げて、連日ボルト締めをやるという労働の辛さを、嫌という程味わう破目になった。腰の痛かったこと、夜勤の夜の手の冷たかったことが昨日のことのようだ。夜半に勤務が終ると、空襲で壁の破れた工場の片すみに皆んなで身体を寄せ合い、電球を抱いて暖をとりながら朝を待った。

勤務中に空襲警報が鳴り、防空壕へ逃げ込むことも多かった。終戦近くなるとその回数も増えていった。機銃掃射のため低空飛行してくる米機の爆音やピュッ、ピュッという弾の音、悪童たちも防空壕の中で小さくなって、敵機の去るのを待った。

それから成長盛りの中学生にとってもう一つの苦しみは食べものであった。から芋に飯粒がパラパラ程度のものが主食であった。しかしこんな時代でも、「戦争には負けない」と何となく思い込んでいた。それでも戦局は悪くなるばかりであった。

熊本市内の空襲で母校も焼失し、腹は空き、落着いて勉強できる状態ではなかった。こんな中にあっても、機械の好きな者は休憩時間に工員からエンジンの構造を習ったり、帰宅後夜遅くまで勉強する者もいるなど、さすが熊中生であった。

一方では殺伐とした時代を反映して熊中生も喧嘩が流行ったが、色気の話は少なかった。今にして思えば、この時代決して灰色ばかりではなかった。

現在陸上自衛隊の兵舎の一部となった鋸切型の屋根を見ると、あの機体に吹き付けられる

塗装の臭いがしてくるようで、懐かしさに今でも立ち止まりたくなる。やはりそれなりに楽しい青春一駒であったと思う。

「熊中同窓会誌」より

勤労動員回想

熊中　　森　里一郎

昭和 19 年 10 月、中学 3 年の秋から、今まで続けて来た学業を全て離れて学徒動員として航空機製作に従事することになると伝えられた時、当時の事情とは言え、何か一抹の不安感が漂った。

工場に配属されると、全く未知の仕事や環境ばかりで、一日も早くその仕事に慣れるよう級友が一致して各工場に入り込み、ただ黙々と努力したことが何より喜ばしいことの様に思われる。その他日勤はもとより、全てなれない夜勤や深夜勤の労働を行ない、早朝に堅い霜柱を踏みながら帰路についたこと等、体力の消耗もはげしく、そのつらさは身に沁るものがあった。

戦争も末期となり、工場に出勤はするものの、連日の艦載機の空襲にて半日以上の退避生活が続き、殆んど仕事にもつけず帰宅し、夜は夜で空襲の繰返しで睡眠も十分とれぬままの状態が続いていた。その間には空襲のため、級友が全身にひどい火傷を受け、命だけほとりとめたものの、両腕切断という痛ましい状態になった。その上母校までもが灰燼と化し、なっかしかった母校の面影すらながめられなくなった。

思い出というものは、その中に必ず喜怒哀楽の情が含まれるのが常であろうが、この学徒動員の思い出に限っては、そのすべてが充たされない特異なものの様に思われて仕方がない。

熊中同窓会誌」より

学徒動員の思い出

鎮西中　木村　能章

我々鎮西中学校も学徒動員の一員として胸踊らせて三菱航空機製作所に行った。訓練工場で約 1 ケ月、ハンマー打ち方、ヤスリのかけ方等一応の訓練を受け、いよいよ本工場に入り各クラス別にそれぞれの工場へ配属された。

我々のクラスは部品第一工場に入り、各作業場に分れ、そこで指導員の方々より色々仕事の注意を受け、早速作業に取組んだ、作業は教えて貰った様にはいかず、なかなか難しいものであった。

我々の作業場は、指導員、養成工、徴用工の皆さん 12 名位であった。翌日指導員より、造っている部品は飛龍（キー 67 ）の後尾銃座であると教えられた。

以来、毎日「神風」と書いた鉢巻を締めて作業に励んだものであった。一生懸命作った部品を検査室に持って行くとたまには「不合格」の言葉をもらい。又やり直すこともあった。

作業にも馳れ、指導員から用事を頼まれ他の工場に行った時、初めて、その敷地の広さ、作業員の多さに驚かされた。その内、我々も夜勤作業が始り、辛かったがこれも戦争に勝つまでと思って頑張った。一晩の作業が終り、翌朝お互いの汚れた顔、眠そうな顔を見合せて笑いあ

ったものである。

自分達の作った部品も 70 号機まで位の製品であったと記憶する。或る日、完成した六号機（と思われる）が飛行場より飛び立ち、工場上空にあの大きな姿を見せた時は作業の疲れも忘れ、皆と万才をしたものであった。

然し、工場内で聞くところによると、戦局はどうも日本が不利の様な話ばかりであった。やがて工場にも空襲がある様になり、我々はその都度健軍神社の森の中に避難した。その内、我々のクラスは配置転換があり、第四倉庫にかわった。そこはジュラ板の倉庫で、そのジュラ板をトラックで津森小学校まで疎開する作業であった。クラスの 5 名位が倉庫に残り、錆ついたジュラ板の錆落し作業であり、こゝでは夜勤作業はなかった。

昭和 20 年の正月を迎えたが、休日は元旦の一日だけであった。 2 日以上の無断欠勤をすると教師から体罰を受けた。

この職場で挺身隊のM子さんと親しくなり、本当に毎日の作業が楽しいものとなった。

そして、あの 7 月 1 日夜の熊本大空襲に会い、父は職場の当直のため家に居らず、母と二人で必死の思いで消火に努めたが、たちまち火の海に包まれ、着のみ着のまゝで五高のグランドに避難した。工場の方もしばらく欠勤した。

一週間振りに工場に出勤した日、彼女が涙をためて慰めてくれたことが昨日の出来ごとの様に思い出される。

8 月近くになって我々のクラス 1 組は上熊本東方の西里村に疎開工場建設ということでハンマーをスコップにかえて終戦の日まで頑張った。8 月 10 日、この西里村で米軍機コンソリ 12 機により機銃掃射を受け、自分は一番奥で作業をしていたため避難が遅れ、竹林の中に一人とり残され死ぬ思いであった。この日、村の老人一人と、養成工一人が死亡したという記憶がある。

そして、8 月 15 日終戦の日、陛下の放送を聞き家族皆で涙を流した。

戦後 40 年目に野中　卓民らの音頭で旧三菱組立工場（現自衛隊使用）の前にあるサンパレスにて、旧三菱職員、応徴工、挺身隊、学徒によるパーティが開かれ、 200 名近い人々が集り、自分も友人数名と参加出席し、M子さんとの再会を期待したが、彼女の姿はとうとう発見出来なかった。もう一度、彼女と会って、共に苦労した昔日の思い出話でも語りあいたいものだと、ほのかな望みを持っていったのだが。

勤労動員の思い出

第二高女　　塩塚　由子

私たち熊本県立第二高等女学校四年生が、学徒動員として、熊本航空機製作所に通い始めたのは、昭和 19 年 10 月のことであった。学業を離れることは非常に残念なことであったが、戦局急を告げる時期であるから、私たち学徒が航空機生産に頑張らなければと、皆で決意をあらたにした。

初めの頃は、鉄道の引込み線はなくて、水前寺公園前に集って、トラックの荷台に乗せられて、工場に通っていた。あとで引込み線ができてからは、水前寺駅前に集って、汽車に乗って通った。徹夜明けの男子学生が降りたあとの列車に乗るので男性のひといきれが残っていたのを覚えている。駅前の集合はかなり早い時刻で、小沢町から通っていた私は、朝まっ暗いうち

に家を出て、呉服町から市電に乗っていった。電車はいつも殆んど満員で、手動の扉をひらけたまゝ、ステップに足をかけ、ぶら下るようにして乗っていくことが多かった。

服装は、母のかすりの着物で作ったモンペに下駄ばき、工場への道の霜柱は、普通の平地と比べるとかなり長く、それを踏み砕きながら歩いていったものである。

私達が最初に配置されたのは、翼内四番タンクの工場であった。ジェラルミンの板を何枚かつなぎ合わせてタンクを作るのである。ドリルで鋲の穴をあけ、そこに赤い接着剤のようなものを塗り、鋲を入れてエアーハンマーでかしめていく。3 ミリ、3．5　ミリ、4 ミリという鋲が一緒に箱に入れてあったが、必要な長さの鋲をすばやく取り出すのができたのは、若さのせいであろう。

ドリルで穴をあけるときに出るジュラルミンの粉は、マスクのガーゼを通し、エアーハンマーの空気は乾燥していたので、気管を傷める者が多かった。タンクが出来上ると検査室に運ばれ、ガソリンを少し入れて圧搾空気が入れられる。鋲のかしめ方が悪いと、そこからガソリンが噴き出し、チョークでバツが付けられ、“オシャカ’として差し戻される。場所が悪いと、鋲をたくさん切り、開けなければならず、大層苦労した。

工員の人達は名古屋方面から来た人が多く、名古屋弁が珍らしかった。

仕事をする時は、必ず鉢巻きか、頭巾を着けなければならなかった。機械工場に挺身隊で来ていた女性が、パーマネントの髪に鉢巻きをしていなかったので、髪が機械に巻さっき、頭の肉までガバッととれたと聞き、身のすくむ思いをしたのを覚えている。

しばらくして、板金工場に配置換えになった。ジュラルミンの板の上に鉄板でつくった型を置き、けがきで形をかき、その 2 ミリ位外側を鋏で切り、あとはやすりで形を整えていくのである。毎日の仕事で握力が大分強くなった。

あとで私は事務の方にまわされた。各工場から部品を取りに来るので、伝票を書き、部品を渡す仕事である。組立工場から来た工専の学生に「飛行機に乗せてやるからおいで」といわれ、出かけて行って組み立てられたキー 67 の操縦席に座ったこともあった。

私は昭和 20 年のはじめ頃、女子師範学校を受験した。当時、工場から市内へ通じる電話はなかったので、合格発表の日、引率の先生が外へ出て学校に問い合わせて下さった。

工場への通勤には、防空頭巾と救急袋を肩からかけなければならなかった。お弁当も、いも入りごほんにつけもの程度の粗末なものであった。魚屋の娘であった私が、ゆでた蟹を一匹持っていくと、大勢でそれを突っいたものである。

昭和 20 年には五年制であった中学校も女学校も四年で打切られ、私たちも四年生で 3 月に卒業した。その頃から工場は近くや、熊本市の学校や工場に疎開した。第二高女、女子師範では雨天体操場にプレスや旋盤の機械が設置された。女子師範の入学式は 7 月 1 日であったので、それまでは同級生（挺身隊となった）や女子師範の予科の生徒たちと一緒に仕事をした。

ある時、予科の生徒が、一人でしなければならないプレスの仕事を二人でしていて、一人がまだ形を整えているとき、もう一人がペダルを踏んだので、指の上に数トンのプレスが落ちた。その人は「あーつ」と叫んで 2 ～ 3 米走って倒れた。みんな茫然としていたので、私が走り寄り腕を止血した。肉も骨も砕けている。担架に乗せて西郷病院に運んだ。指は切断、まだ抗生物質がない頃であったが、その人は敗血症の危機を乗り越え、教職につき、数年前に退職している。

いま、当時をふり返ってみると、青春まっただ中、物は本当に乏しかったが、純粋に日本の勝利を信じ、少しでもそれに協力することで、精神的には張りつめたものがあった。それでも、美しいもの、ロマンへのあこがれは強く、救急袋の中には、ハイネの詩集や、アンドレ・ジイドの小説を入れていた。休憩時間にボール遊びや、合唱をしたこともなっかしい思い出である。中には工場での恋が実った人もいる。

以後 40 余年、あの頃から考えると信じられない程、日本はかってない物の豊かな時代を迎えた。

然し、国際的に諸般の情勢を考えるとき、日本の繁栄が砂上の楼閣のように思われてならない。一旦緩急あるとき、豊かな時代に育った若者が、どのように日本の国を支えていくであろうか。

戦中、戦後の激動の時代を生き抜いてきた一人として、それが杞憂であってはしいと願うものである。

学校工場

済々黌百年史

昭和 20 年 3 月 18 日、払暁よりおびただしい艦載機の波状攻撃が熊本を襲い、健軍町の三菱航空機製作所が爆撃を受けた。この頃から三菱工場の疎開が始まり、済々黌の剣道場、柔道場はその工場となり、南校舎は工員の宿所と事務所及び部品倉庫になった。 3 月の末から 4 月 10 日にわたり、木葉 5 年生は、健軍から木葉まで機械類の運搬に従事した。新校舎には飛行機の製作に当る 30 名の兵隊が宿泊した。本葉での飛行機部品の製作は三菱の工員と本馨の 4・5 年生の手でキー 67 爆撃機の爆弾牽引装置の製造に当り、終戦までに 54 機分を造り、本章の成績は優秀であるとの評を受けた。 4 月 20 日に「斯道文庫」は青写真工場となり、南校舎は完全に工場側に譲ることとなり、生徒机等は北校舎階下に、「斯道文庫」の二万冊に近い図書は理科室に運搬することになった。然も 4 日間で移せということで学校中あげてその運搬作業に当った。

6 月中旬には陸軍の整備兵 180 名が北校舎階上に宿泊することとなった。かくして本校は 6 月に陸軍が将校以下約 220 名、三菱工員 300 名の多数が入り、日夜、日の丸鉢巻姿もりりしく、本堂生徒も共に頑張った。

7 月 1 日、夜半 11 時半頃警戒警報のサイレンが鳴りひびいた。早速登校すると丁度正門前で空襲警報のサイレンとなった。サイレンの間隔が余りに近いので、今日は熊本の空襲ではないかと予感した。私は南校舎の渡り廊下を走っていった時、外からパッと赤くなった。私は急いで南校舎階上に高く建って居た防空監視所へ駆け登った。

私はそこで大江町方面を見た時、空より落下する無数の焼夷弾、ザァー、ザァーと空を突き刺す様な音、炸裂する音、燃え上る火、私は双眼鏡で大江町方面に 28 個の火の玉を数えた。それは次第に燃え上って大きく大きくなって一面の火の海と化してゆく。次いで京町方面にも同様なことが起り、第 16 部隊の兵舎が赤い焔を背景にしてくっきりと浮び上っていた。

遠くで待避命令のラッパが鳴りひびいていた。この時、室園の電停が炎上した。丁度 0 時 5 分であった。私は監視所で一人熊本の焼ける有様を興奮を押え乍ら眺めていた。済々黌にも焼夷弾が落ちるのではないかと思った。

この時、五高の監視所より「済々黌の先生、頑張って下さい」との叫び声を聞いた。運動場には付近の住民が集って来た。私は監視所より声の限り、弾が周辺に落下して付近は燃上中、校舎付近に近寄らぬ様にと叫び続けた。

次の瞬間、頭を押えつけられる様な大きな風圧と共に南校舎と宿直室を貫く赤い火の柱を見た。とうとう済々黌にも焼夷弾が落下、命中したのである。

出動中の者全員と付近の人々の応援を得て消火に全力を尽したが、朝 10 時頃には殆んど燃え尽きてしまった。本館南校舎、言己念館、斯道文庫を残してあとはすべて焼失、実に校舎の三分の二を失った。

以後一週間に亘り、全黌生徒は、三菱工員と力を合せて焼跡整理に当った。在泊していた軍隊は宿泊所がなくなり基地へ引揚げていった。

8 月 10 日朝、4・5 年生は校内に散らばったまゝになっていた三菱疎開工場の焼跡を整理中であった。その時、立田山方面より急に腹にひびく様な機銃の音が本黌を襲った。多数の艦載機が 5 分～ 10 分の間隔をおいて約 1 時間半に亘って波状攻撃をかけて来た。この時、三菱の女子工員が斯道文庫の防空壕に入ろうとした時、流れ弾が胸部を貫通し即死した。又この日、黒い煙の中から、ひらひらと紙片が落ちてきた。校庭で拾うと「ポツダム宣言」を書いたものであった。拾った者は飛行機が遠ざかるのを確めてそれを集めて焼いた。

8 月 10 日の空襲で黒髪町、立町等済々黌の周辺の電気はなくなりラジオも聞けなくなった。8 月 15 日の重大放送はこれらの空襲にめげず愈々頑張れというものと予想していたら全く意外の放送であったことが分り一同は無言のまゝ学校に集って来た。悲しい、淋しい噂となってしまった。

付記　戦後復興と学砦の再開に当っては三菱青年学校より机を譲るとのことで、毎日渡鹿の練兵場を横切って一人一脚づつ健軍から学校まで机を運んだ。又、21 年 3 月には三菱健軍工場の爆撃された建物の残りを譲り受け済々黌へ運び専門大工の指導の下に全生徒の手によって 12 棟、24 教室を完成し 4 月には教室らしいものを全生徒の力によって作った、これが有名な済々黌のバラックであった。

社宅の生活

佐久間　久見

健軍に何百戸という社宅が出来、名古屋からどんどん転勤して来ると、まさに一つの集落が出来たようなもので早速これらのひとびとを対象に生果物を始め、生活必需品を売る店が開店するようになり、更に近隣の村落からどんどん野菜類を運んで来ては金に代えていった。従って、熊本の物価は健軍で決められるという悪評が他所者という感情に輪をかける結果になった。

この健菱園社宅のちょうど真ん中に管理事務所と集会所が隣合せて建っており、その近くに派出所があった。この管理事務所にはY.Jという男が居た。彼は会社から厚生課長の待遇を受け、社宅全般の管理を任されていた様であった。 20 年に入り空襲が激しくなると頻繁に警報が出された。そして警戒警報が入ると彼は目の色を変えて事務所を飛び出し、社宅を一巡するのである。この時の彼のいで立ちが振っていた。防空頭巾を頭からスッポリかぶり、剣道の胴着で身を固め、槍を小脇に抱かえて自転車にまたがった彼の姿はまさしくドンキホーテーであった。

私は会社から帰り庭で汗を流しているところであった。ちょうどその時警報が出たので早速件の男がやって来た。

「オィ、オィ、コラ」と呼びかけて来たが、その横平な呼びかけには返事もしなかった。やがて近づいて来て「オィ、先程から呼んでいるのが聞こえんか」という。自分は「オイという呼びかけでは誰に言っとるのか判らん、お互に初対面同志なのにオイとはなんだ」といったら「君は敵の飛行機が阿蘇を越えて熊本に入ってくるということが考えられないのか」という。

私は「それはあんたの想像だろう、そういう勝手な想像でものを言って廻るから流言飛語になるのだ、警報は然るべきスジから発令されるのだ。何もガタガタすることはない。少しは落付け。」といってやった。

このことがあって、日ならず別に頼んだわけでもないのに三部屋の社宅が空いたから移らないかと言って来た。

社宅の生活

林　　福洋（小串）

職員社宅は江津湖を見下す一等地にあった。土地は一戸当り 100 坪程で、建坪は 35 ～ 40 坪位であったろうか。家の種類は玄関がドア式のものと引戸式のものとがあり、ドア式の家は主として課長級以上の人が入っていた云 20 年に入って空襲があり焼夷弾で 7 ～ 8 戸が焼失したが、既に空家を間引いてあり、幸い大きな類焼はまぬがれた。これは社宅の端に仮診療所があり、こゝで盲腸の手術中の灯火が洩れ、これがねらわれたという人もあったが、果してそのせいかどうかは判らない。不幸にして家を焼かれた人は同じ社宅内の空屋にすぐ移り住むことが出来た。職員社宅は、将来もっと職員の増員を見込んで建てた為か、戸数にはゆとりがあった様である。

湖東2丁目に今も遺る旧三菱職員用社宅　2010年2月

当時、私は小学生で、健軍小学校へ防空頭巾をかぶって登校していたが、空襲が激しくなると学校まで行くことは出来ず、職員社宅の集会所で授業を受けるようになった。

戦後の通学は飛行機の燃料タンクのゴムで作った草履をはいて通った。ペタベタと重く、はねがよく上る草履であったが、丈夫で長持ちした。

遊ぶ施設もない当時、時に江津荘の芭蕉の木を切って、それを舟にして江津湖を下って来たり、結構のびのびと楽しくやっていた。

社宅の周りには、たくさんの空地があり、それを耕して芋や麦を作り自給自足の生活が続いた。　近所の人が蝿とり紙（俗にいうネバネバの蠅とり紙でなく、和紙に何か薬を塗り、蝿がそれに触れるとマヒを起して死ぬというものであった。）を作り、それを手伝ってアルバイトしたこともあった。職員社宅には、いろいろなものを考え、作り出す頭のよい人がたくさん居た。

やがて職員社宅にも、いろいろな人が入って来た。25 ～ 26 年頃か、社宅一戸 8 万円で払下げを受けた。物価変動の激しい時で、20 万円で売れたとか、30 万円で売れたとかのうわさが、やがてねたみとなり人間関係を悪くしていったのを子供心にも感じていた。

工場疎開

唐木　文穂

熊航に対する最初の空襲は昭和 20 年 3 月 18 日、グラマンによるものであった。グラマンは工場をめがけて急降下爆撃を行った。この時、長崎造船所から熊航の鍍金工場長として着任三日目の三砂応吾氏が、又その他数名の者が亡くなった。戦局はますます熾烈を極め、熊航も空襲の公算大なりとして昭和 20 年初め頃より柳本武部長、下田利夫工場長、田尾真一工場長などが疎開先等を検討していた。

昭和 20 年 3 月下旬のある夜、私が宿直で工場に居ると、夜 10 時頃、田尾工場長が来られ、「これからすぐ江津荘に行き、須永九州軍需管理部長の命を受け小倉まで行って来てもらいたい」と言う。とりあえず江津荘に行くと須永管理部長と大塚所長が一杯飲んで居られ「熊本工場空襲の公算大なり。よって小倉輸送分遣隊に行き、疎開に付きトラック 10 台借りてくるべし」とのことであった。

早速熊本駅に行き、汽車に乗って小倉へ行き、小倉輸送分遣隊を訪ねた。漸く分連隊を探し当てると、その日は日曜日のためか、隊長の福田中佐は長府の自宅に帰られているという。そこで再び汽車に乗り長府の福田中佐の家を尋ねたがわからない。幸い福田中佐はもと神戸製鋼長府工場の監督官をしておられたと聞いていたので長府工場を尋ね福田中佐の自宅を教えてもらい、須永軍需管理部長の命令を伝え、トラック 10 台借用を申し入れた。ところが福田中佐は「こんな酒に酔っぱらった様な命令がきけるか、現在小倉輸送分遣隊は小倉工廠の疎開を実施中である。小倉工廠が大切か、熊本航空機が大切か、その辺を十分検討された上での命令かどうか聞きたい。」と逆襲された。

これには私は返す言葉もなかった。そこで私は「よく分りました。ではこれから早速帰って御主旨の程報告し、尚それでもトラック 10 台借りてくるべしとの事であれば、再び来る故その節は必ずトラック 10 台お貸し願いたい」と申し出た。その時、福田中佐は「よいことを教えてやろう。目下熊本師団は暇だから熊本師団に行き、応援を頼んでみよ、その方がトラック 10 台よりもっと多くの応援を得られるであろう」と教えてくれた。

それからとんぼ返りに熊本に戻り、健軍の社宅まで小走りに走って午前 4 時頃、田尾工場長の社宅の門を叩き、福田中佐の言を報告し「何がなんでもトラック 10 台借りて来いというなら直ちにこれから小倉に戻り借りて来るが御指示を得たい」と報告した。

これに対し田尾工場長は「朝会社に行き、所長と監督官とも相談して何分の指示する。それまで休め」とのことであった。

結局は監督官と桜井京造部長が熊本師団に行き、疎開の応援を頼むことになった。その結果、4 月の初め、3 日間に亘り熊本師団から兵隊二千名、戦車、輯重車などの応援を得ることになった。この他消防団、五高の生徒などの応援を得て、工場にある機械設備、材料など殆んど全部疎開先に運び出され、工場はもぬけの殻となってしまった。 然し 2000 屯プレスは重量物であり、これは持ち出すことは出来なかった。その後、6 月頃、改めて重量物専門の輸送業者を福岡市に訪ねた。この時は監督官と私と二人であった。偶々その業者を監督官が知っていたので、その業者も一度現物を見るということで、熊本に来て現物を見たが、結局終戦時までに 2000 屯プレスは運び出すことは出来なかった。

さて 20 年初め頃より疎開計画が種々検討されたことは前述の通りであるが、その頃疎開本部が設けられ私もその一員として福祉関係を担当させられた。

3 月 18 日の空襲で福祉の倉庫がやられ、酒類は殆んどやられてしまった。どうせ空襲でやられるなら、疎開に協力してくれた人に残っていた酒を慰労酒として振まうということで、炊き出しや慰労酒を出した。

長船から熊航へ

柳本　武

昭和 18 年の半ば頃になると、所謂戦訓によって艦政本部から本店艦船計画課に来る指令はぐらつきが見え、挙句の果ては中止になってしまうような仕事が多くなって、全く無駄骨ばかり折るのが私共の業務の実情でありました。

一般の戦況は、軍艦よりむしろ航空機が欲しいという破目になっていると思われました。

私は「今こそ艦船計画課を解体して全技術者を航空機の方に配転すべきである」と考えました。偶々、元良社長から仕事についての所感を聞かれたので、私は率直に考えていたことを直言しました。社長は「よく言ってくれた」と感慨一入のようでした。

一週間後には私の考えは実現することに決まりました。私は郷里熊本に転出を申し出ました。赴任に際して社長は「熊本では日向ぼっこと体操ばかりやっているそうだが、早く仕事にかゝれるようにしてくれよ」と言われました。

私は冗談だろうと思って笑って聞き流しました。

熊本に着任してみたら、総面積 150 万坪の敷地の中央部に点在する一棟 1 万坪クラス大工場の数棟に先づ圧倒されましたが、その各工場の中が殆んどガラン洞だったのには二度びっくりでした。しかも従業員の大部分は青天の下で、全く社長の言葉そのまゝであることを確認して呆然としました。のみならず、既に他場所から転入して来ていた幹部級の人達までも、皆手持無沙汰の為体であったのにはむしろ義憤を感じました。

やがてこのような無様な状態を生んだ原因が何処にあるかということは大体分りました。しかしこれは私共新来者では容易に手がつけられない根深いものでした。私は、私より先に転入していた愛野君とひそかに対策を練りました。

その後折りよく重役の査察があった機会に、私達は所長に現在のやり方を改め、広く責任を分担し、全幹部の能力を総動員するような制度を確立すべきであると主張しました。これが契

機となり所長の果断によって間もなく新体制が実現しました。これで各工場の作業が見るからに活発になり、先づ工場の整備状況が著しく改善されて来たと思いました。

一方、熊本製作所としての本生産についても、松原工務部長と私達が中心になって、所用部品を揃える全工場的な会議を強化しました。

この会議は連日夕刻から徹夜で続けられました。夜食にウドンが支給されるので、主席監督官はこの会議をウドン会議と叫んでおりました。会議の司会は三人が交代でやりましたが、余りに長く、きりがっかないので、遂には全員疲労困憊を極めました。間もなく部長が病床につき、次いで愛野君が倒れ遂に私一人になって一段落がつくまでにはへとへとになってしまいました。

それでも後続機に対する部品の整備は行き当りバッタリの状態から脱却出来ず、何時までも追いまくられ通しでした。

頭を突込んでみて初めて分って驚いたことですが、熊本では無数の設計変更の整理が出来なくて肝腎な所要部品のリストすら完全なものがないので、甚だしきは一機毎に新旧部品の選択や不足部品の検討に随分と無駄な時間を浪費する有様でした。しかしとにも角にも関係者の習熟によって、非能率的ながら何とか生産機が出せる道筋はついて来ました。

その後、部長も愛野君も既に復帰し、ぽつりぽつりと出来上った航空機は片っ端から戦場に駆り立てられて行っておりました。

その頃から敵機の大爆撃が懸念される時期になりました。既に小規模ながら工場も度々襲われて被害が出ました。私が爆死したという誤報が市内に流れたこともありました。

そのうちに、所内に工場疎開計画委員会が出来て、私も兼務でこれに加えられました。しかしこんな重大なことは片手間ではやれないので辞退を申し出ましたがどうしても許されず、私は自分の判断で疎開計画に専念すべきであるとしました。

この頃の生産機は月産数機の程度でした。幸い二名の優秀なスタッフに恵まれ、所謂分散疎開の基本計画がやがてまとまり、いよいよ県下三十数ヶ所の疎開予定先との交渉に取りかゝりました。今から顧みれば実に甘い計画でした。

分散した疎開工場は、胴体、主翼、その他の三本ルートに沿って逐次組立てて流れ、最後に健軍の総組立工場で組立てるという筋になっておりました。

偶々隣の太刀洗工廠が大規模の爆撃で一挙に灰燼に帰してしまったという軍の連絡機が飛来しました。次は熊本だ！という訳で、主席監督官が所長室に来て疎開計画がどうなっているかを訊し、呼び出されて出頭した私の説明を聞き終るや否や、「この計画によって全工場を二日間のうちに疎開させよ」と所長に厳命されたのです。私はひそかに計画が何とかこの急場に役立ってよかったと、ほっとしたものです。

その日から蟻の引越しのような異状な疎開作業が昼夜兼行で実施されました、勿論二日間でというのは無茶ですが、正味七日間で無事に全工場をすっかり空けてしまう事だけは出来ました。

しかしそのあと、疎開先の整備が全く大変なことでした、新しい職制の下で、全員四苦八苦の頑張りが続きましたが、何処も作業を開始するまでにはかなりの日数を要しました。

ちょうどその頃、長崎造船所では、航空機製作所に転向する下準備として若手技師 20 数名を熊本で研修させる意図の下に派遣して来ました。これらの技師はすべて私の指揮下に入り、市内の疎開工場に分散配置され、主として生産の要をなす正確な部品リストの作製に協力し

てもらったのであります。

しかし未だその成果が見えないうちに、突如長崎にも原爆がおとされ、これらの技師はすべて急拠長崎に帰還させることになりました。

この時まで事態が終戦に急転直下しようとは夢にも思いませんでした。

整備工場の思い出

久保田　亘

昭和 19 年 12 月、私は健康を害して海軍をやめ三菱に入ることになったが、三菱からは健康さえ許せば明日からでもこいということで12月 13 日付で入社した。当時、整備工場は白石工場長、鶴田技師、吉田さん、杉本工師補と私、それにもう一人陸軍から来た下士官上りの人（氏名失念）と一緒であった。白石工場長は軍人嫌いであった。聞くところによると監督官の秋山中尉に木刀で叩かれたことがあるとかで以来軍人は嫌いになったとか。

鶴田技師は戦后天草の塩田の責任者になった人で、この人も海軍中尉から転じた人であった。私が入った頃、飛行機の地上運転方法を習っておられた。

杉本工師補という人は温厚な人であった。吉田さんという人は陸軍准尉（？）上りの人であったろうか。整備工場というところはエンジン運転等飛行機を実際に動かすところでもあり、あまりボーとしている人では困るので、或る程度ピリッとした人間でないと危険な仕事であった。

当時は徹夜、徹夜の連続であった。私は単身赴任であったため熊本市の真ん中にあった白川寮から通っていたが、その内にいちいち白川寮まで帰らず、会社に寝泊りする様になった。岩下さん（整備工場の庶務担当か？）が竹の食器に雑炊を持って来てくれたり、色々面倒をみてくれた。

食べものは、当時はどこでも同じで碌なものはなかったが、整備工場は秋山監督官が時折、航空糧食をもって来て我々に配ってくれた。タバコやケーキなど、とても民間では食べることも出来ない品物も少しではあったが配ってくれた。私は海軍でもともと整備をやっていたので、さして苦労はなかった。海軍に居た時の習慣で夜半「飛龍」の機体検査をやっていた時、ふと頭を上げてあたりを見廻すと今まで一緒にやっていた作業者が一人も居なくなってしまった。どこへ行ったのかと思って、あたりを探してみたら工場の裏の方で輪になって火をたき、イモを焼いていた。何せ寒い時なので時折、この様にしてでも暖をとらないと身はちじむは、手はかじかんでしまうはで、とても耐えられるものではなかった。海軍に居た頃は勤務中に乱りに持場を離れることなど、とんでもないことであったが、民間ではその辺りは随分自由であった。

パイロットは前田さんだけであったが、もともとパイロットである秋山監督官も領収飛行として乗っていた。

20 年に入ると、一機でも多く一日でも早く前線へということで、皆鉢巻をしめて頑張っていた。前工程の各工場がスケジュール・キープのため未完成のまゝ後工程へ送ってくることがよくあった。例えば総組立工場で計画日時に達するとそのまゝ整備工場へ送ってしまった。従って、それら未装着品や未完作業は組立工場の人が機体を追いかけて来て作業をした。又、時には、最終工程である整備工場にシワが寄ることもあった。

そのせいか、整備工場に入ってから半月もかゝって、やっと飛行検査に入るという状態であった。順調な機体なら一週間程で飛行試験に入った。試験飛行は三菱側で 3 回程飛び、最后は秋山監督官が飛び、不具合がなければOKであり軍に渡していた。幸い「飛龍」という飛行機は極めて優秀な飛行機であったため、部品の遅れさえなければさしたる不具合もなく順調に引取られていった。

整備工場では夜も寝ないで飛行機の点検と作業者の監督に明け暮れしていたことが記憶に残っている。

飛行場には「飛龍」の他に飛燕、新司偵、などいろいろな飛行機が居り、我々のエンジンラン等屋外テストは整備工場前（東側のエプロン）で行った。整備工場のハンガー内には 2 機収容であったが時に斜めに入れて 3 機収容していたこともあった。20 年 5 月頃であったか、沖縄特攻に出撃する兵隊が我々にまで挨拶をしていった。神風の鉢巻をし、目の輝いた、童顔の兵隊であった。

健軍飛行場からは様々な特攻隊が出て行ったのでよく見送ったのを今も憶えている。

動員学徒と共に

中西　誠一

済々黌の動員学徒は、黄線の入った黒帽子に黒服、ゲートル姿の五年生組、続いて戦闘帽、国民服の四年生、計約 450 名が第二通用門から堂々と入場していました。次いで尚絅、菊池、玉名、山鹿の各高等女学校はモンペ姿に防空頭巾を背負い校名入りの腕章を付けており、皆同じ顔に見え印象的でした。部品工場に配属された学生は、五年生の糸永、宇野、緒方、森本、木原、清永、徳永、中村、林田、東田、牧野、正木、松波、平山、深水、山口、渡辺の諸氏と四年今坂、出来田の各氏と共に仕事をした様に記憶しています。

私の班は、爆弾を投下させる装置の組立が仕事でした。生徒の作業は単純なものもありましたが、それは真剣にどんな小さなものでも級友と協力しながら汗を流して頑張っていました。学徒の他に陸軍一等兵、戸倉氏、熊工専の新田氏、徴用工の岩下、船津、森永の各氏、女子挺身隊は益田、岩本、梅本、平良、中村の各嬢の 20 名位でした。

工場ではキー 67 、いわゆる「飛龍」と呼ばれる陸軍の最新鋭爆撃機を生産していました。銀色の機体、透明の風防を付け、「キーン」と音をたて飛行機雲を引いて南下すること 46 機で終戦。

第 1 号機の飛行テストの成功には、工場挙げて歓喜の渦が沸き、しばし仕事が手に付きませんでした。飛行機は流れ作業で生産されますが、工場閉鎖時、私達の部品は 124 号機であったと記憶しています。

工場生産には、部品の「オシャカ」（不良品）と、労働災害が発生するのは今も、昔も同じです。天草出身の女子挺身隊員がボール盤に頭髪を巻き込まれ、頭皮の全面から血が吹き出し、電源が切られた時は一本の毛も無い悲惨な姿でタンカの人となりました。このあと再発防止のため機械に塩をまいて清めましたが、この光景は一生忘れられません。聞くところによると、戦後元通りに生え整ったとのことで安心しました。

また、済々黌の動員学徒が特別幹部候補生に合格し、入隊直前、作業中プレスで指を切断、入隊を断念したという話も聞きました。

ヤクザ風の若い徴用工が、済々黌の生徒を殴る事件がありましたが、これは男子就業禁止職のため、色々の人が徴用されて来た結果でしょう。

昭和 20 年に入ると学徒も挺身隊も 12 時間労働となり、工員、徴用工は 24 時間労働。更に一機でも多く生産して戦地に送ろうと 36 時間連続勤務体制に切り替えられました。朝は 7 時に工場入りし、翌日の夜 7 時に退場、工場で四食とり昼夜休みなく働けというのですから、これはもう地獄以外の何物でもありませんでした。冬の徹夜は寒く、暖をとろうにも薪はなく、木製組枠や鋳物を燃やして作業を続けました。3 月 3 日から青木黌長も学徒隊長として出動され、四月から学生も夜勤作業の二交替制となり、昼一週間出て一日休み、夜一週間出て休みというのです。

夜の工場には陸軍青年将校が赤ダスキに棒を持って作業場を巡回し、仕事を怠けている者が居ると殴っていました。私は工員や徴用工達が作業台の中や、書類棚の中で仮眠中、イビキで発見され、半殺し状態迄打たれる様子を何回か見ました。しかし学徒でも要領よく工場 2 階の幹部用仮眠室でゆっくり寝た人も居たそうです。又、或る監督官は、医者をいじめた為、麻酔薬抜きで手術をされたと聞き溜飲を下げたものでした。

昭和 19 年 8 月の給与明細表では賃金より諸手当の方が 2 倍以上も多く、驚いたことに現金は皆無、差引支給額 159 円全額国民預金に天引されていました。又勘定袋の裏には「神風ハ一億一人一人ノ胸二在り、起せ神風吾等ノ飛行機増産デ」と書いてありました。

20 年 4 月に入ると空襲が激しくなり、工場も連日の空襲で健軍神社裏の竹薮に退避、飛行機の生産は満足に出来ませんでした、艦載機による機銃掃射により女子挺身隊員何人かの死者が出たこともあり工場疎開が始りました。

4 月 15 日、三菱工場の学校工場として済々輩の柔、剣道場が指定され、18 日、南校舎を部品工場とする開場式がありました。

それに先立ち、健軍から工具及び部品を持って、6 キロの道を空腹を抱え丸一日がかりで 2 往復した苦労は学生も、工員も今も忘れられないでしょう。しかし開場はしたものの部品が間に合わないため、ブラブラの毎日でした。

5 月 8 日、斯道文庫は工場に、衛生室は英霊室に決定。6 月には北校舎に陸軍田口隊が入居しました。

その頃、黒髪町一帯も連日空襲に晒され、女子挺身隊員が機銃の犠牲になるなど、通勤もまゝならぬ状態でした。

もし、済々黌が学校工場に指定されなかったら、五高や、清水高等女学校（現九州女子学院高校）の様に焼失をまぬがれていたに違いありません。

長崎に原爆が投下された 8 月 9 日、学校工場は焼失したため、仕事がなく早目に弁当を開いていると立田山の方に黄色い煙が高く上るのを斯道文庫より見ました。

社宅一空襲

佐久間　久見

20 年 5 月頃から米軍の艦載機が健軍上空を舞う様になった。滅多に爆弾は落さなかったが人の姿を見かけると物凄い機銃掃射を浴びせかけ、時に電探を撒いていった。そのビラには「防空壕の上の南瓜が随分伸びましたネ」とか「無駄な抵抗は止めて一日も早く投降しなさ

い」という文が書かれて居り、誰か敵方に内通するものが居るのではないかと思わせる程、事情に通じたビラが頻りに撒かれた。各々自分の庭に防空壕を造り、擬装のために南瓜等を植え、良く伸びるので壕の存在は判らぬ様になっていた筈だが、敵機の撒くデンタンには余りにも明瞭にその辺の事情が書かれているということは、「アメリカは何もかもお見通しだよ」という心理的な動揺を与えるものであった。

自分も庭に壕を掘り、その上に南瓜を這わせて警報と同時に家族を退避させていた。或る日、警報と同時に襲撃を受けた。物凄い機銃の唸りと雨の様に降りそゝいできた機銃弾が屋根を突き抜け、瀬戸焼の丸火鉢の縁を削りとって畳に穴をあけたが、幸い家族に異状はなかった。敵機が去ってから畳をめくってみると土の中から機銃弾が見つかった。あの時、縁を削りとられた丸火鉢はその後も記念品として永く残っていた。

南町にある旧三菱工員社宅　2軒長屋の片側1戸　2010年2月

それから幾日も経たぬ日、瞬発性の爆弾が社宅の真中に落され二人が犠牲になった。初めの内は近くの村落で食料品の買出しをしていたが、時がたっにつれて段々遠くまで行かないと手に入らなくなり、遠く買出しに出歩いている途中で空襲にあったことも再々であった。

長船から熊航への応援

白井　秀雄

熊航の応援は、7 月 12 日、下記の 13 名が三菱の熊本航空機製作所に派遣された。田中尚、池田卓雄、国司孝、境信夫、肥口俊一、中村一夫、奥園時和、豊岡銀四郎、堤二郎、平口秀夫、山本敏也、辻啓一、小泉貴次の各氏である。

当時の熊航（熊本航空機製作所）は、すでに総組立工場を除くほとんどすべての工場が爆撃されていて、本部は軍の使っている料亭に、工場は五高の講堂、物理実験室、その他の学校等に分散していた。もっとも疎開したのは、大爆撃を受ける前のことである。応援に行ったものは、だいたい各部品の組立工場に配属され工場長付または現場技師として、乱脈を極めていた部品図面の整理の仕事に専念した。

熊航は、航空機増産のため急設された陸軍の爆撃機「飛龍」の専門工場であり、終戦の年の正月から生産機が出る予定であった。もちろん最初のうちは名古屋の親工場から部品が送られてきて、それを熊航で組み立て、次第に準備をととのえて、熊航自身で部品を生産することになっていた。僕は長崎にいたが、正月からの生産予定機数を聞いていたので、この熊航が予定の生産をあげてくれれば、「飛龍」の編隊が長駆サイパンを襲い、あわよくばこの島を奪回できるのではないかという淡い望みを持っていたものだった。だから、熊航に応援を出してくれという話が決まったときは、二つ返事で承諾したどころではなく、待っていましたという気

持ちであった。ここで造っている爆撃機は昭和十七年十二月、三菱重工の名航（名古屋航空機製作所）で完成した陸軍の双発重爆撃機、高度 6，100 メートルで 537 キロという当時としての最高性能、後では海軍も攻撃機として採用し、台湾沖海戦に出動して魚雷攻撃に偉勲をたてたというもの。われわれ素人は、この飛行機をたくさん造って、サイパンを奪回してくれんかと思っても無理はあるまい。13 名のものが熊航で仕事をしているうちも、敵機の空襲は頻繁にあった。P 38 の双胴機ならびにグラマンの艦載機に、熊本の街も工場も、しばしば襲われ、このため仕事は大いに阻害された。食糧事情もわるく食糧買い出しも日課の一つになり、これの当番さえできた。手に入る畑のものといえばカボチャ、トマトくらいしかなく、朝、昼、晩つづけてトマトを食べて下痢するもの、腹が空いて自転車に乗ると転倒するものさえあった。

なにしろ熊本に到着したのが、7 月 14 日、翌月 9 日は原爆なのだから熊本で正味仕事をしたのが約 3 週間に過ぎず、何程の仕事ができたか大いに疑問であったろう。

しかし、自分は長崎にあって、正月から時々聞く熊航の噂、さては応援に行った方々の報告などによって大いに得るところがあった。それは、新工場の運営のむずかしさはどこにあるのかということに関する知識を得たことであった。そして、この時得た知識が思わぬところで、後日、立派に役に立ったのであった。それは、終戦後、名古屋にいたとき、F 86 という戦後最初の戦闘機工場を名古屋の地に建てたのだが、その職制を作るに当たり、当時得た知識が立派に役に立ったのであった。

余談はさておき、肝腎な「飛龍」は、できていただろうか。当時は月産三台を目標としていたということであったが、部品が揃わず親工場の名古屋は、前年暮れの地震とその後の被爆で部品を送るどころではなかったろうし、長崎の応援隊は、地上にある「飛龍」を確かに見たというが、飛んだところを見た覚えはないというのだから、われわれが応援に行っていた四週間の期間には飛んだものは一台もなかったのではないかと思う。

それよりも、原爆の時刻には、あんな遠い熊本でも、地震のようなものを感じたという熊航応援班の方のお話、原子雲や異様に赤い夕陽を見たという大勢の方のお話は、聞くものに原爆の恐ろしい力を感じさせて感銘的である。

遠い出張先で故郷の災害を聞いた出張者は、10 日から 12 日にかけて、三々五々、一応帰崎したが、途中の列車は北九州にはいると機銃掃射を浴び、生きた心地もなかったということだった。

長船編集「原爆前後」より

熊本で見た赤い夕陽

富岡銀四郎

田中　尚隊長以下 10 数名、造船設計より熊本の飛行機工場へ生産応援のため、出張中のことである。

その当時熊本市内は毎日の様に空襲があったが、機銃掃射だけで近い時は屋根瓦にガタガタと機銃弾の落ちる音がして、時雨の去る如く一しきりすると静かになった。

その頃は既に、飛行機工場は爆撃されて鉄骨の残骸となり、熊本駅前一帯を残し、健軍町方面の町家は焼夷弾により一面の焼野原となっていたのであった。この時の爆弾により長崎の

製缶工場より出向いていた三砂技師が爆死されたことを後になって聞いた。

飛行機の部品製作は、市内の女学校、小学校、中学校等辺都な場所に疎開されて居た。吾等が之等疎開先の連絡に廻る時は自転車が欲しいと思った。熊本唯一の交通機関であった電車もなく、真夏の炎天下を、空腹を抱えて重い足を引きずって廻るより外なかった。

森の町熊本といわれる程、町の中には木が多かったことは、町中の焼残った木の枝に赤、青、緑等のリボンのついた焼夷弾が不発のままいくつもぶら下っていたのでわかった。又焼けた家の庭等には筍の如く地に突き刺ったまゝの無気味な焼夷弾がいくつも見られた。

熊本地方は又櫨の生産の盛んな所でもあった。市内の焼跡に製蝋工場があって工場は焼けていたが、そこに集められている櫨の実の山が、幾日もくすぶって何とも言えぬ嫌な臭が空復にこたえたものだが、今だにその臭が鼻についている様な気がする。

我々が、長崎を出発する迄B 29 が長崎の上空を編隊で幾度も飛んだが不思議と爆撃は受けなかった。出発に当っても熊本の飛行機工場が爆撃を受けたということが聞かされなかったように思う。勿論市内が焼夷攻撃を受けたことも聞いてなかったので正に来て見てがっくりだった。

我々は、7 月も終りの或るよく晴れた日の午前中、熊工専の工事状況視察に出かけたことがあった。五高に程近い熊工専の裏門から入って行ったのだろうと思われる。門を入るとすぐ平家建の工場が幾つか並んでいた。実習工場だったのだろう。その入口の門近くに何の木だったか、右手に深い蔭を作った大木があって、その下枝にからんで高く蔓が延び、黄褐色の花をつけた時計草が日蔭の中に明るく咲いていた。

我等五、六名は各工作室を一巡したが仕事をしている者はまばらで、その一人に聞いて見ると出勤率も悪く能率が上らない由。本工場爆撃後のことでもあるし、疎開後間もないことで工場態勢が整っていなかった点もあるらしい。こゝの仕事は鋳物、鍛造部門が主で工員の指導に当る者が、爆撃の時負傷したりして欠勤中らしく、多くの徴用工員は、今迄農業に従事して居た者が多く仕事も不慣れであるらしい。自分等は、工場内は日の丸の鉢巻姿で大勢の工員が戦局を見つめ乍ら、火の車の様な作業状態を想像して居たが、之では全く開店休業状態でしかなかった。これが戦争下の工場態勢かと驚かされた。話に聞く爆撃機「飛龍」の姿は何処にもなかった。田中隊長はこの工事現況に対して各方面より、工事進展の陰路となっている点を見出し隊員設計人としてのなすべき仕事を検討していたのであろうと思われる。その後我等数名（数班に別れたが）は五高の一室に落付いて図面に依る部品の整理にかかった。

私は或る日、市内の菊地電車の一駅、藤崎宮駅前で空襲に会って今度こそは自分も最後だと思ったことがあった。どうしたことか、その日は同僚は居らず自分一人だった。丁度藤崎宮駅に通り掛った時警報が鳴り、五、六名の者が防空壕を探してうろちょろする間に、爆音が頭の上に来た。道端の防空壕に飛び込んだが、防空壕とは名のみで一米程の空壕に板片を覆っただけのものである。熊本では一米以上掘ると水が出るので何処でもこの程度のものであることを後で聞いたが、自分達が長崎で町内等で作ったものに比べると、全く心細いものだった。五、六人のものが、出来る丈け身を低くして、じっとして誰も一言もしゃべる者も居ない。空にはぶんぶん爆音がする。中の一人がおろおろ声で南無阿弥陀仏と念仏を唱える。自分も心の中でなむあみと念じて全神経を上空の飛行機音に集中しいて居るとなかなか上空を去りそうにない。人間こう追い詰められると覚悟の様なものが出来る。身じろぎもせずじっと居ると、ガラガラガラガラと近くの屋根瓦の上に機銃弾の音がはぢけるのが聞える。愈々、自分等

の頭の上にも降りかゝるかと、目を閉ぢて居ると、急に静かになって飛行機は去ったらしい。見廻すと、一所に固って居た行きづまりの五名も、ほっとした顔で、無事でしたね、と言って左右に別れて行った。

その当時の熊本空襲は、機銃攻撃丈けで爆弾は落さなかった。艦載機とすれば、九州の南の海は既に米艦の自由圏になっていたことになる。

今思い合せると 8 月 9 日のことになるが、毎日の例の如く、疎開工場の一つ五高より、残業を終えて宿舎に帰る途中のことだった。度々のことで、その日空襲があったかどうかは記憶にないが、仕事場の五高より宿舎に通う道は、家の立込んだ狭い裏通りを行くのが一番近いので、田中隊長以下数名、戦局の話とか食糧難の話等、冗談を交わしながら、例の如くこの道を西に向って歩いていた。その日は暑い一日であったが、太陽は西山にかゝろうとする時刻であった。

ふと、自分が顔を上げて、西空を見ると、傾いた太陽が真赤になり、光が落ちて、しかも大きな夕陽であった。あっ夕陽が赤い、綺麗だなあと自分は暫らく立ち上って眺めた。一同に注意すると、満州の夕陽もこんなだろうかと誰かゞ言った。しかし、それ以上誰も気にしなかった。自分も、日常とは違うなあという気がした程度だった。そして、その翌夕の新聞に、長崎に変な爆弾が落された。先日広島に落されたものと同じものらしいと、はっきりしない記事が載っているのを見て、田中氏一同不安な気持になった。お互い長崎の家族の上に色々と思い馳せた。

その翌日になると、長崎で負傷した人々が二人三人と熊本に帰り、様子が少しづつ伝わり出した。長崎は大きな爆弾が落ちて全滅だ、而も従来の爆弾でなく新型らしい、浦上の方がひどいらしい等と情報が少しづつ入って来る。その日は午前中から熊本市内も空襲があり、吾等は学校裏の林の中に一時避難した。（防空壕らしいものはなかった。）その時、田中尚さんが皆に向って大体の綜合情報を説明し、浦上方面に家のある者を一時帰すか、全員が長崎の情況を見に行くか、造船所の方は大した被害はないらしいが、隊員中国司、中村君等は刑務所近くに家族も居ることだし気掛りである。（今の平和公園が刑務所だった）などと色々話は出たがつまるところ、長崎造船所にこちらの情況報告もあるので、今の職場は一応其儘として、皆今日の汽車で長崎へ帰って見ることになった。

昨夕勤めより帰途、町中で見た真赤な太陽は、その日午前 11 時 2 分、長崎に落された原爆のため地上の塵が天空に拡がり、それを通して見た太陽であったことは後になって一人合点したことであるが、その時は誰も長崎に原爆が落されたことを知る由もなかった。

8 月 11 日、第一回熊本引揚げの帰途列車が空襲を受け立往生したり、車内にて同僚小泉君が盲腸炎となり、二、三名と一緒に佐賀市の県立病院に連れ込んだ所、病院が空襲を受け病人と共にベットの下にもぐり込んだり、未だ色々と思い出す事等、書き度いことが沢山あるが、この辺で筆を置くとする。以上は、日付の順序もなくたゞ私の印象に残っていることを書き綴っただけのものだが、当時熊本で生死を共にする覚悟で働いた皆様の思い出を誘い出すよすがとなれば幸いである。

長船編集「原爆前後」より

監　督　官

佐久間　久見

当時、軍需工場に軍から派遣されていた 20 才台の監督官と称する判らず屋と、ピストルを携行して睨みを利かせていた憲兵の存在は憤慨に耐えなかった。生産ということに何の知識もない者を、何のために送り込んで来たのか、今だに理解に苦しむ。

全部が全部とはいわないまでも、中には権力を笠に着て協力工場まで飲み廻る奴も多分に居た。特に少尉の肩章を付けた 21 ～ 22 才位の若造が始末におえなかった。

在る日、村田技師がこの若造の監督官に梱り、散々文句を並べられた。村田技師は相手の話の筋が通らないため、その聞違いを指摘して抗弁した。いきり立ったその監督官は問答無用とばかりに村田技師をはりとばした。その場では黙って殴らせたがこんな奴には口でいっても判るまい、とばかり急ぎ自宅に帰り、軍服を着用して再び工場に取って返し、件の監督官を呼びつけた。昂然として現れた監督官は村田技師の服装を見て顔面蒼白に一変した。

村田技師の肩には陸軍大尉の肩章が輝いていた。「知らぬこととはいえ、貴様らは上官を殴ったのだ。第一、任官早々の貴様らに複雑な航空機の生産のことなど判る筈はない。その為に部所、部所に責任を持たされた我々が居るのだ。虎の威借りる無暴もいい加減にせい」と村田技師の腰の座った発言に若い監督官は返す言葉もなく、直立不動の姿勢で挙手の礼をするとすごすごと引下っていった。

空襲をくぐり抜けて、給料運ぶ

大島　豊三

それは、B 29 の本土空襲が日増しに激しさを加えてきた頃。

熊本航空機製作所も、御多聞に洩れず工場の分散疎開、事務関係ももちろん疎開した。私達会計課も、購買課等と水前寺公園近くの小学校に、又家族も皆、山手方面の田舎に疎開し、私達は責任上、事務所近くに民宿した。家族の方へは、月二、三回しか帰れない始末であった。空襲は昼夜間断なく、阿蘇上空方面より来襲してくる。工場の建物も機械も従業員にも被害甚大で、驚くばかりであった。

その間工場の建設に、又飛行機の増産に日夜身命を賭して働いた。ただ最後の勝利を確信して！

当時従業員、徴用者、及び学徒を含めて約 400 人、それに軍よりも数百人の応援があり、なかなかの大世帯であった。

空襲中、こんなこともあった。

当時電信電話が全く不通で、東京本社及び名古屋への連絡に困っていたが、或るとき従業員の給料支払日の前日になっても、毎月のように資金の振り込まれる熊本の肥後銀行に、福岡の三菱銀行より資金振込みがなく、熊本の銀行では連絡不可能の状態で支払えないという。これが対策を上司に相談の結果、当方より福岡へ行くことになり乗物について軍に交渉した。さいわい、当日福岡行きの車の便はあるが、生死の程は保証しかねるとのこと。だが、この際生死など考えてはいられない。決死の覚悟で同乗を願った。

直ちに大沢中尉の車に同乗（私一人）、空襲の真只中を車は走る走る。全く無我夢中、運を天にまかせ、心の中で神に無事を祈るのみ。

神の御加護か、道中何の事故もなく三菱銀行福岡支店に着き、早速支店長に会い、大沢中

尉にも同行願い事情を話して了承を得、現金（当時の額で 90 万円）を金種別のため、セメント袋よりちょっと大きい「リュック」に一ばい受け取りつめ込んで、銀行の車を借り、博多駅まで送ってもらった。

大沢中尉とは軍の用件のため、ここでお別れした。ただ一人大金を持ち不安な気持ちに襲われた。

駅では駅長に会い事情を話し、特別乗車を願い出たところ、親切にも便宜を計って下さったことは、二十有余年経った現在でも、心から感謝の念を禁じ得ない。あの不安の連続の中で、駅長の親切に寸時心を癒やしたものであった。

列車はそれこそすし詰め満員で、窓から飛び込む人も多かった。途中空襲三回程、その度にみんな線路わきの壕に一目散に避難した。私は重いリュックがあるので、大切な 90 万円と心中覚悟で運を天にまかせながらも、無事を念じておった。リュックの重みと、なんとしてでも届けなくてはという責任感に加えて、空襲の不安感で足はガクガクするやら、全く生きた心地がしなかった。

長い時間を不安の裡に、どうにか熊本駅着、早速軍の駅詰所に行き、お願いして車を出してもらい、会社に無事辿りついたのは夕暮れの 6 時頃だったろうか。

これで明日の給料払いに差支えなく、重責を果たしえた喜びで、疲労も昼食なしの空腹もすっとんでしまった。

今想い出しても、良くやれたと思う。その場に直面すれば、どんなことでも不可能ではないと思うものの、全く命がけであった。私ばかりでなく、全部の人々も同じ心境で働かれたのであろう。周囲の人々に、不安と迷惑をかけたくなく、一方会社の信用を守る責任感によるものであったのであろう。

噴煙なびく阿蘇の山々を背に、熊本健軍の台地に雄々しく建っ工場より熊本城を眼下に、戦国の世を忍んだ当時の空襲下の様々の姿が、次々と眼に浮かんでくる。

肥後の夕映え、有明の海はあくまで美しかった。

名航・菱光会「往時茫々」より

大量工具の買付け

中村　貞喜

昭和 20 年 8 月

九州軍需監理部より富山市の不二越工業が満州国へ売却する当時の金額にして 300 万円程の工具類があるので、それを買上げ九州一円の軍需工場に配分したい。ついては不二越と交渉したいので工場側の代表として三菱から出て欲しいということで九州軍需部の監督官と私が富山の不二越へ行き、交渉に当った。当方、高木監督官と私、先方、現地の軍関係者と不二越の担当者間で交渉が進み、貨車 3 輌分を三菱熊航へ送る手配をして帰熊した。

終戦の一週間程前のことであった。

私は帰熊後、それらの膨大な量の工具を熊航へ送ってもよいものか、これは三菱だけのものではない。万一盗難若しくは紛失した場合、三菱の責任となる等の理由もあり、当時福岡の竹下というところに熊航の分工場である福岡工場があり、急拠貨車 3 輌を福岡工場へ入れることに変更した。竹下には軍監理部交易営団もあり、代金を同営団が立替払をしている等の理

由からみてこの変更は適切であると考えた。

こうして大きな買付けに立会い、貨車 3 輌の工具類は福岡の竹下駅引込線に入った。大任を果してやれやれと思っていた矢先に 8 月 15 日を迎えた。

監督官は開口一番「中村さんよかったネ」といった。私は「一億総ショックの時に軍人ともあろう人が何ということを……」と声を大にして云ったら監督官は「いや、貨車を福岡に止めたことがですよ」とあわてて補足した。

あれだけの工具が熊本に着いていたら、あのドサクサにまざれて何が起ったかも知れないと思うと、確かに福岡止めにしてよかったとホットした思いがした。8 月 15 日の終戦の報を聞き、お互いにこの先どうなるのだろう・・・・・・等々の不安に満ちた話ばかりで暫く仕事も手がつかなかった様である。初めての体験でもあり、あらぬ想像ばかりの会話を交し、長い一日、一日が過ぎ漸く一週間程過ぎて気持も落付き、残務整理（特に支払関係の）に入った。

21 年秋、三菱を辞し名古屋へ帰った。それにしてもあの工具はあれから一体どうなったであろうか。今でも気になる時がある。

昭和 20 年度　日記

入江　敬之介

1 月 1 日　病床にて元旦を迎える。一億敢闘の秋、申し訳なき気持なり。白川校生徒の唱う「年の始め」が聞える。

6 日　空襲警報発令、熊本上空に現れるも投弾なし。業務課演芸会をやる。

9 日 14 : 32 分　B－ 29　1 機、整備工場より 1000 米のところに爆弾 4 発投下さる。

16 日　八丁馬場に防空壕を掘りにゆく。

18 日　福永と共に上熊本工場を見学にゆく。

28 日　日曜日と言えども出勤、このところ公休更になく一同疲労の色濃し。

2 月 2 日　金田工場長より離任の挨拶を受く。お気の毒の感探し。

3 日　秋山中尉の斡旋により、キー 6716 号機に搭乗。62 戦隊機なり。飛行時間 40 分たらず。聊か気酔いたる感あり。

11 日　紀元節。公休日なり。寮生 17 名にて、入手のチキン 3 羽を“支那テン”及びケンチン汁にして大いに喰う。

13 日　仕事上、帰りの汽車に乗り遅れ、夜 8 時半鉄路を徒歩にて帰寮せり。

16 日　休養のため休む。一日屋根に上り陽なたぼっこをする。この時間、熊本の空の平和なるを感ず。反面、これでよいのか、と我を叱る厳しき声を感ず。

18 日　初めて定時で帰る。車中、女子従業員、女子挺身隊の多きことよ。聊か気がひける。敵機動部隊近づくとの報に工場緊張す。

24 白　帯山方面に飛行機掩体候補地を見にゆく。

3 月 18 日　朝より空襲に入る。午前二回、敵機来襲あるも被弾なし。午後 3 時半、遂に投弾、死者及び負傷者を出す。予は本部にあり、終始勤務するも、率直に言って気持よきものに非ず。

20 日　復旧報告のため、工場内を歩き廻る。鍍金工場の被害最もひどし。新事務所に引越し終る。

26 日　生産増強手当金貰う。金 68 円也。

27 日　空襲警報発令、上空通過に対し、高射砲応戦す。午後、デマに踊らせられ全員場外に退避す。デマは恐しいものである。深夜空襲あり。

29 日　このところ連日警戒、空襲警報下の一日なり。不安の連日である。

4 月 1 日　日曜日なるも出勤。7 時出発、高瀬に向う。大野鉄鋲、天名中、高瀬高女、玉名家政の各校を視察。疎開先の調査を行なう。

本日より疎開本部要員となり、俄然忙しくなる。徹夜となる。

4 月 2 日　本日一日中地下防護団本部詰め、22 時帰寮す。

5 日　臨時輸送本部、解散となりやれやれという処なり。

14 日　定時に帰寮し、白川寮発展会を開催する。妻木技師（寮OB）をも招待し総勢 20 名なり。

24 日　小林君に召集令状来る。夜、小林君の壮行会を紅蘭亭にて行なう。大いに飲む。（まだ飲み喰いする材料があったらしい。）

5 月 13 日　日曜日なるも出勤するつもりであったが朝から空襲警報が発令され出社できず。一日中、白川寮にて頑張る。夜は城東寮（女子寮）に全員で行き、慰問する。

14 日　一日中空襲もの凄し。警直勤務のため無理を押して出社する。被爆、投弾のスリルを身をもって味あう。　（投弾、近くに落下か、壁に掛けてあった名札板が爆風で吹き飛んでいった。身を伏せて敵機の通過を待っ。

15 日　警直明け、昨晩はほんの仮眠しか出来ず疲労の色顕著なり。築山、中尾両兄と睡眠のため寮に帰り、17 時再び出社す。

21 日　大雨のため事務所の雨洩れ激しく仕事にならず。（新事務所は木造であったため、投弾による歪みが出来、雨が洩る様になった。）

27 日　本日より水前寺新事務所に移転す。（この事務所は出水小学校と記憶するが？）

6 月 16 日　業務課、懇談会を村山さん宅にて行なう。馳走なり。

21 日　代休をとり、一日がかりで疎開荷物を整理し、築山さんと共にリヤカーにて島崎まで運ぶ。空襲下聊かか気持良し。

7 月 1 日　愈々明日結婚式のため準備に忙殺さる。白川寮とも今日にてお別れなり。課長他出席方お願いにゆく。

2 日　無念なり。遂に来る一日深夜、熊本市焼夷弾攻撃を受く。白川寮、今暁一時、遂に焼け陥ちたり。熊本全市一夜にして灰燼に帰す。夜明けと共に結婚相手の安否確認のため市内を徘徊すれど情報なく焦りしも、女子師範に避難せしを知り安堵す。夜は報国寮に世話になる。　　－以上にて白川寮時代を終る－

4 日　親戚宅に一泊す。払焼、再空襲あり。一部焼夷弾攻撃も受く。

13 日　川尻方面に家を探し歩くも目的達せず、愈々市内居住の腹決める。

8 月 9 日　長崎、新型爆弾により被爆、ソ連参戦と時局今や重大段階に入る。夜、島田課長より新型爆弾の件で大分驚かされる。

10 日　空襲続く。小中型機 10 ～ 12 時にかけ機銃掃射と焼夷弾攻撃をしかけて来る。銃弾一発、我が住居（親戚宅）の座敷の畳に突きささりたり。

15 日　微熱つづきあり、レントゲンをとるべく三菱病院に行かんとするに、病院は前の空襲により焼失せりと。

日本無条件降伏の報、突如として来る。嗚呼！

21 日　会社より羅災見舞 300 円、月給 190 円入る。

28 日　会社より石鹸等大量の配給あり。

30 日　戦災給与、金 200 円貰う。軍隊配給品、半ズボン、袴下も貰う。

9 月 7 日　終戦後体調悪く、又満州の兄戦死の報も入り精神的にも、自暴自棄となり、久しく出社を拒みしが、友に誘われ、この日久し振りに出社せり。

20 日　健軍の三菱青年学校に移転せる業務課へ初出勤する。

28 日　我が 189 会より最初の退職者出る。予も時間の問題ならん。

11 月 5 日　転換計画作成の為、調査課全員徹夜せり。

15 日　市内間借り生活より、健軍社宅に引越し一家を構う。

12 月 2 日　公休、社宅内外の畑を能率的に耕し、ソラ豆、ピース等播種す。

7 日　我が誕生日なり。漸く火鉢を入手。戦災見舞金、更に 200 円載く。7 月ボーナスの免税分 115 円を貰う。

昭和 20 年　熊航

細川　隆康

§　当時の通勤機関は熊本駅一水前寺一工場引込線のルートで工場前まで、朝一往復、夕方定時退出時の往復と、午後七時半頃残業者を乗せて出る一本だけで熊本市電はまだ水前寺までしかなく、郊外の会社線、田崎一百貫電車のレールを持って来て延長される予定であったが、その水前寺一健軍線は道幅を拡げてルートがっけられただけで雨の日には神水のお茶屋と言われていた細川侯爵家の別邸を貫通したその敷地は湖水さながらの水溜りとなった。

水前寺電停から 300 ～ 400 米の地点と工場を結ぶ輸送路とルートがつけられただけで、到底通行できる状況ではなかった。

§　各課、各工場と所長室との文書の上げ下ろしに当っていた私は所長、副所長、総務部長といったお偉方が帰られるまで退出するわけにはいかなかった。午後 8 時半頃、所長用乗用車が出て行った後は市電水前寺停留所まで歩いて行く他なく、私は健軍神社八丁馬場を急ぎ足に抜けて小一時間かけて水前寺電停まで歩いたのち、市電を待って乗った。自宅に帰りつくのは毎晩 10 時頃であった。

§　昭和 20 年 4 月 29 日、私は徹夜勤務の翌日、丁度その日は天長節であり、珍しく公休日であったので帰宅しようと思っていたら警戒警報のサイレンが鳴った。帰るわけにもいかず、そのまま待機していた。昼近くに警報解除になったので出勤して来た牧野課長に「今から帰ります」というと課長は「今まで居たんだから他の日に改めて代休をとったらどうか」と言われたのでそうだなと思い、私は自分の席に戻って新しい起案用紙一冊をとり出して机の上に置いた。間もなく再び警報のサイレンが鳴り、やがて米軍機が工場の上空を飛行した。その時、飛び去るかと思われたが、工場の東側に陣地をおいていた高射砲中隊が米軍機目がけてポーンと一発発射した。全然命中などしはしない。それどころか、その一発のおかげで何事もなく偵察かたがた上空を飛び去っていった敵機が引返して来て工場の上に数発の爆弾を投下した。私は慌ててバラック建の二階から降りようとしたが階段の途中で下から吹き上げてくる土煙りに目と耳をおおって狭い階段の上に這って、あゝこのバラックと一緒に吹き飛ばされてし

まうのかと観念していた。

一通り爆撃が済んでやれやれと思って階段を降りてみると会計課の部厚く長い大きなカウンターが壊れて吹き飛ばされていた。自分の席に戻ってみると恐らく機銃弾であろう私の席の後の柱をえぐり私の机の上の真新しい一冊の罫紙の真中をぶち抜き、更に机をも貫通していた。私が席からとび出すのがもう 30 分早くても、遅くてもあの世行きであったろうと思った。その後も不思議と私の徹夜、夜勤明けの早朝に敵機はやって来た。工場の方には沢山夜勤の人達が居たが、事務所の夜勤は私一人だけであった。

空襲警報で慌てて重要書類をファイバー製の函に入れて事務所から飛び出して正面のところまで来た時は、もうB－ 29 数機が頭上に居た。何処か防空壕はと辺りを見渡すが目に入らない。やっと初期に作られた粗末な防空壕が見えたので這うようにして中に入り耳と目を押えて腹這いになって、「南無妙法蓮華経」と法華宗の御題目を唱えていた。近くに爆弾の落下した地響きが、ズシンと腹に伝わってくる。たった一人、こんな壕の中で爆死したら死体は見付かるだろうか。行方不明として放置されるのではないか等と案じていた。爆撃が一通り済んで壕から出てみると程近い空地に直径 30 米程の深い摺鉢形の穴があいていた。B－ 29 は応揚であったが、ロッキードやグラマンといった戦闘機は一人の人影でも、動くものは何でもターゲットにして襲いかかり機銃掃射して来た。

§　熊本工場から重工本店や名航あての書類は郵便によらず逓送員による方法がとられていた。これは熊本から書類を逓送員が鳥栖まで運び、同じ頃長崎造船所を出た逓送員に鳥栖駅で手渡し寄託した。熊本工場から鳥栖までの逓送員は二名が隔日勤務で当った。夜中の一時二時頃鳥栖から熊本へ下る列車はなかった。朝の一番の下り列車を待って熊本へ帰ってくる訳だが、寒の内など駅舎のベンチで待うのは大変なことであった。何処か泊めてくれる家はないものかと職員を派して探させたが、そんなところはありませんと不首尾な報告であった。私は何とかしなければと思い自身で出向いてみた。鳥栖は鉄道交通の要街である。鹿児島本線や長崎本線で鳥栖で交替下車した運転手や車掌の休憩所があるのではないかと鳥栖駅で訊ねたら幸いにもそうした民間の宿舎があった。早速そこに御願いして当所の逓送員も泊めていただくことにした。

こうした逓送員のことで私は今も心の疼く懐いがある。それは逓送員の一人が病気で服務出来ないという連絡があった。とりあえずの代行者は何とか補充して凌いでいたが長期に亘って病欠を続けた揚句に元の逓送員はそのまま退職してしまった。聞くところによると天然痘であったそうである。恐らく混雑する列車の中で接触感染したものであろうと思う。今なら公病扱いで労災保険の適用という方法もあったろうに何の手も打たず了いにしてしまったことは心残りであった。

§　月にたった一日の公休日を指定するのは所長でなくて陸軍航空本部監督官兼軍需監理官の隊長である石山大佐という人であった。それが前日の午後四時近くになって突然言われるので文書係の我々としては、それから大童でガリ版の原紙を切り、手押の騰写版で刷って各課、各工場に五時前に間に合うように配布しなければならない。一番遠い整備工場には私が自転車でとばして持って行ったが、片道 20 分近くかかった。

§:熊本工場の分散疎開の必要を最初に言い出されたのは優秀で重厚な小山工務課長（或は田尾さんかも知れない）と聞いているが、監督官の石山大佐は、それを臆病者扱いされたと聞いた。然し結果的には前述の第一回爆撃を喰ったあと大急ぎで工場分散が始められた。

私達庶務課、文書係は水前寺電停に近い私立女子商業学校の教室の一部を借りることになったが、何処にでも電話がある時代ではなし、他の課、他の工場が何処に移ったかも把握出来ず、まさに開店休業の態であった。

§　昭和 20 年 7 月 1 日の夜、熊本市は大空襲に見舞われて一面の焼野が原と化した。電車もしばらく動かなかった。

近くの肥後製蝋会社が焼かれて蝋の原料の櫨の実が明々と一週間以上も燃え続けていた。工場の資材は、あちこちの山の中や竹林の中に木や竹を伐り払って隠匿された。その伐り倒した孟宗竹林の補償方について島崎方面に行った。伐り倒した孟宗竹一本について 7 円くれということである。当時帝大卒学者の初任給が 75 円に押さえられていた時代である。呆っ気にとられていると、こして伐採した竹山が元の通りになって筍がとれるようになるには十年位かかるということである。そういえばそうかも知れないと思ったが、私はその補償が為されるまでは居残っていなかった。

§　この工場で出来た「飛龍」が健軍飛行場から金属的な音をたてて飛び立って行く時は 7 ～ 8 粁距たった私の家迄も夜半、目が覚めて布団の上に正座して両の掌を合わせて、せめてもの思いで武運の長久ならんことを祈りつつ涙したものである。

長崎に原爆が投下されて長崎造船所との連絡も全く途絶えてしまった。逓送員との接触も出来ず困り果てて五日目くらいだったか、私は鳥栖経由で貨車に乗って長崎に出かけた。長崎駅前で飴のように崩れた建物とクニヤクニヤに曲った鉄骨だけが目についた。長崎兵器の跡とかいうことであった。造船所にたどりついたが、ここは原爆による直接の被害はあまり目につかなかった。一時間程居て私はその日の内に長崎を離れて帰熊した。

八月の何日だったか、沖縄から長崎に徴用か挺身隊かで送り込まれた若い女性が原爆を被って、どうして、何処からたどりついたのか、何の前振れもなく旧私立女子商業に居る私のところに疲れ果ててやって来た。休日であったのかその場には私だけしか居なかったように思う。電話連絡も出来ず運んでやる車もない、仕方なく神水の三菱病院の所在を教えて行って貰う他なかった。その女性二人だったか三人だったかもはっきり覚えてはいない。ただ無惨にもところまだらに黒く火傷を負っている顔が、悲惨で、強烈なショックであった。何とか他にしてやれる術はなかったものか、あの女性達は、どうなったであろうか、と今も私の心を嘆かせる。

空　襲

吉長　富士男

§ 1　通勤途上の空襲

汽車通勤の途上、春竹駅（現在の南熊本駅）を出たところで空襲に逢った。急停止した列車よりとび降り、麦畑の畝の溝に仲間 5 ～ 6 人と逃げ込んだ。とその時、北の方から艦載機が超低空で真正面から来て、頭上でロケット弾を発射した。初めて見たロケット弾の発射には驚いた。幸に狙われた先には、都市ガスのタンクがあったが命中しなかった。

この時は市内のあちこちも襲われた様で汽車は仲々運行しそうにもないので仲間と一緒に工場まで歩いて行くことにした。

水前寺まで来た時、今度は双発の軽爆撃機（B－ 26 、マーチンと思った）が東方より、これ又

超低空で進入、前方より機銃掃射をした。その薬きようが 20 米～ 30 米前方にパラパラと落ちた。その後続いて今度は爆弾を投下した。ズシンという裂烈音が伝わって来た。この空襲で市内はかなりの混乱と麻痺状態が続いた。時刻は午後二時頃であった。ここで大半の者は工場行きをあきらめて帰った様であったが、その日宿直である私や、工場防衛員である友人ら数人は意を決して工場まで行くことにした。

かくして工場へたどり着いた時は午後四時過ぎであった。此の日、工場は空襲を受けなかった様で組立工場も健在であった。

§ 2　工場での空襲

×月×日　夜も明けやらぬ頃、組立工場の東にある木造二階建の事務所で、二階宿直室の布団から抜け出したばかりの当直職員 5 ～ 6 人が一階の事務所に顔を揃えた。その日の作業前のひとときで、その中に手島工場長の姿もあった。

その時、かすかに爆音の様な音がした。神経質. な元教授の江頭技師が「敵機来襲では？」といった。一瞬全員の神経がピリッとする。一番若くて、目も、耳もよい私が「消防車の音では？……」と聞きわけての発言で皆ホッとする。

やがて雲一つない、すがすがしい黎明を迎えた。その時、かすかに爆音を感じた。今度こそ本当の「爆音ダアー！」と私がどなって東の阿蘇外輪山の空を見ると、逆光の中に胡麻粒程の、多数の黒点が見えた。

「空襲ダアー」と全員が一目散に東の荒地にある、いくつかの防空壕へと走り、私は目の前の一つに飛び込んだ。

若い私は入口で敵機の数を目で追った。単発機だ、素早く 1 . 2 . 3 . · · · · · · 44 . 45 と数えたた時、先頭機が突込んで来たので、壕の奥へ引き込んだ。と同時に「バリバリバリ……ドカーン、ドカーン」と機銃音に小型爆弾の裂烈音、それに爆音が入りまじって通り過ぎた。近くでドドーンという大きな音がすると共に壕が振動した。何せ 40 機以上ものお通りなので、随分と凄まじいものであった。

全機が通り過ぎると、生産機が気掛かりで何人かが壕をとび出して行った。私も走りながら被害の程度を目で追いっつ夢中で工場内に駆け込み、機体は？と見ると、昨日の姿のままの機体が淋しそうに我々を待っていた。外観上は健在であった。然し、工場の屋根や側壁のスレートが、そこかしこと壊れ落ち、床に飛散していた。幸い火災は免れた。敵機を気にしながら、これだけことを見定めた頃、一次攻撃を終えた敵機は市街上空を抜け、金峰山手前で左右に分れて旋回し、又戻ってくる気配に、私は急ぎ再び壕にとび込んだ。壕の中で「やられたアー、やられたアー」と工場長の声、「どこをやられたのですか？」と誰かが尋ねると「いや、俺ではない。工場がやられたんだ。」との返事が今でも忘れられない。

後で見たら、我々の這入っていた防空壕の上と、付近に沢山の機痍弾の跡が、又直径 4 ～ 5 米の爆弾の穴があちこちにあった。近いところでは 10 米程のところの別の壕（幸い誰も入っていなかった。）の入口にも穴があいていた。我々の壕でなくてよかったと胸をなでおろしたのであった。

又、先程まで居た事務所は、半分が直撃で吹き飛ばされ、夜半寝ていた布団が裂け、壊れた梁に引掛っており肝を冷やしたことが今でも脳裏に焼きついている。出勤前で人が少なかったことが幸いし、死傷者は出ずに本当によかったが、跡片付けにひどく苦労した一日の始まりの出来ごとであった。

空　襲

久保田　貢

昭和 19 年春、単身で熊航、整備工場に着任し、白川寮に起居していたが昭和 20 年 4 月長崎から家族を呼び寄せ、千徳の近くに落付いた。

段々空襲を受ける様になったが、整備工場はあまり空襲らしい空襲はなかった。生産設備のある元を叩かないと効果は少ないとみて、部品、板金、機械工場等、工場の中央部を攻撃したのではなかろうか。従って工場地域の離れたところにあった、然も建物だけの整備工場など攻撃する必要はなかったのではないかと思われる。空襲の思い出といえば、工場より市内に居住していた家族との思い出の方が強い。

7 月 1 日夜、熊本市が空襲を受けた時は死ぬ思いであった。当時私は家族と一緒に水道町の千徳の近くに住んでいた。

その夜、大々的な空襲を受け、近くの榎の下に家族を集め、なりゆきを見守っていた。焼夷弾が、本当に雨の様に降りそそいで来た。

廻りはもう火の海となった。熱い、とに角熱い、わが身に火がついているわけではないが熱い。何とかしなければと思い、幸い目の前を流れていた白川の流れの中に家族（母と妻と二人の子供）を誘導し、熱気を避けるため首まで水に浸っていた。生れて 1 ケ月目の二男はもう顔色はなかった。

長い一夜が明け、家に戻ったら釜に用意しておいた米があの熱気ですっかり炊けた状態になっていた。家の中には 60 キロの不発爆弾が突きささっていた。これが裂烈していたら、恐らく我々はダメであったろう。

翌日、阿蘇の実家に帰り家族を落付かせた。数日後、単身で健軍工場に出社した。その後、再々阿蘇一健軍を往き帰していた。そして 8 月 15 日、終戦の放送を阿蘇で聞き、翌 16 日、とるものとりあえず工場へ駆けつけた。この日からしばらく茫然自失の状態であった。

板金工場長　即死

柳本　　武

昭和 20 年の早春の頃、熊本の三菱工場が艦載機群にやられ、施設や人員にかなりの損傷を蒙ったのでありますが、これは熊本での最初の本格的な集中爆撃だったので、地元の人々に異常な衝動を与えました。私にとっても、それは別の意味で永久に忘れられない悲痛な追憶を刻銘した因縁の事件でありました。

その日は早朝から晴れた穏やかな天気でした。私は徹夜の業務を終えて軽く食事をとったあと、自転車で関係工場を見て廻りました。道すがら板金工場に西口からはいり、建坪七千余坪の作業場を横切って、東口の一角を占めた工場事務所を覗いたら、既にM工場長が出勤して技師連中と何やら打合せ中であったのでびっくりしました。というのは、この工場長は長崎から転勤着任後三日目で、それまで私が兼務していた板金工場長の役を昨日引継いだばかりの人で、未だ旅館に投宿中の身であったが、まさかこんな早朝に出勤出来ようとは想像もしていなかったからであります。聞けば作業の手配が気がかりで、早起きしてやって来たため、まだ朝食もとっていないとのことでした。

そこで私は、工務部に残っていた弁当を三つ取り寄せて、その一つをM工場長に、他の二つを昨夜泊り込んだm•t両技師に提供しました。三人とも非常に喜んで美味そうに食べました。しかしこの弁当に不思議な運命がまつわっていようとは、知るよしもなかったのであります。

その後間もなく警戒警報が発令され、引きつづき空襲警報が出ました。各工場とも全員それぞれの任務に応じて所定の防空壕に分散して待機しました。鍍金工場の幹部は、建物の南の道路越しに設けてある壕にはいりました。

敵機は一向に来ないのに、空襲警報は何時間も解除されませんでした。壕の中で退屈した人達は、次々に這い出して、日向ぼっこをするやら居眠りするやらで、全くのんびりしたことになってしまいました。

私はこの地区一帯の防空分団長だったので、正午近くに見廻りをして板金工場に行って見たら、工場長以下幹部は事務所にはいって、ラジオの下に集っていました。「壕のそばでは情報が聞こえないのでラジオを聞きに来た」ということでしたので、私は「とに角、ここは危険だからなるべく早く切り上げて壕に帰るように」と工場長に言って東空地にある工務部の壕に戻りました。

昼食をすませ、壕の出入口からさし込む暖かい日ざしを浴びていたら徹夜の疲労が一度に出て眠くてたまらなくなり、つい横になっているうちに、いっしか深い眠りにおちて行きました。

突然、何だか叩き起されたような感じで目が覚めました。全く不意打ちの来襲でした。寄せては返す敵機を頭上に感じながら、誰しも身動きも出来ない恐怖の時間でした。ようやく爆音が遠ざかるのを待って飛出したら、あちこちに爆弾が落ちていて、大変な騒ぎになりました。中でも鍍金工場が最もひどくやられていて、事務所附近が大きく破壊され、鮮血に彩られた木片や、スレートのかけらが一面に散乱して目も当てられぬ惨状を呈しておりました。ここではM工場長が爆弾の破片で頭部を打ちくだかれて即死、t技師は胴体をやられて絶命、m技師は腕をいかれて重傷、その他軽傷者数名出したのであります。

その日のたそがれ時に、私は、この事務所の入口を見下す工務部の二階の窓にもたれて、尊い犠牲者の生前をしのびながら追憶にふけっておりました。あの張り切り屋のM工場長の頼母しい面影、あの真面目なt技師の端麗な紅顔、それらが入れ替り、立ち替り目に浮んで消えました。

つい今朝がたあの弁当を食べた三人の中、二人はもはやこの世の人でなく、一人は重傷で病院に坤吟している。事務所に居合わせた十数名の中で、揃いも揃ってこの三人が最大の犠牲を強いられたのだ。この気味悪い事実が妙に気にかかって、私の心はどうにも落ち着きを取り戻せないでおりました。

ふと窓の下に、惨事のあとを見つめてたたずんでいる人が目につきました。よく見ると、板金工場に配属されていた松橋高女動員学徒の監督の先生でした。私が窓から声をかけたら、ハッとこちらを見上げるなり、そのまま硬直したかのように、目を見張って暫く声も出ない様子でした。

ややあって、「ああ御無事だったのですか。爆死されたと聞いて亡くなられた跡を弔うつもりで来たところでした。生徒達も泣いていたのです。早く帰ってこのことを知らせてやりましょう」と言って飛んで帰って行かれました。

あとで分ったことですが、鍍金工場長即死の報が口伝えに広まり、私が三日前に交替して

いたことを未だ知らない人が多かったので、てっきり私が即死したものとされていたのです。この誤報は既にその日のうちに広く市内にも伝っておりました。

その夜、家内の里の当主が、お通夜の用意をして私の家にやって来て、何の異常もないのに面喰って玄関で立往生をしたのをはじめ、お悔みを言う積りで来られた客が幾人もありました。その後も当分の間、久し振りに会った人に、「あれ、生きていたのですか」という嫌な挨拶を受けたことが度々ありました。

二ケ月ほどあとのこと、工場疎開の一端として、私は母校の第五高等学校に学校工場を設置したいと思って、その交渉のため校長室を訪れました。すると先方が突然「ワッ」と大笑いをされました。不審に思っていると「爆弾で死んだ者が来る筈がない。あれはおかしいぞ足元を確めよう」ということで確めたら「足はやっぱりあった」という次第であると聞かされ、私も一緒になって大笑いしました。

日が経ってしまえば、このように笑っても居れますが、当時を思い出すと、余りにも悲痛です。

私の母は、亡くなられたM工場長は私の身代りになられたのだと主張しますが、私は強いてこれを否定しておりました。熱心な仏教信者である母は、こんな私に代って、命の限りおっとめをするのだと言って、本当に自分が亡くなるまで、毎年欠かさず、その日が来ると命日の供養を続け通してきたものです。

長船編集「原爆前後」より

召集者の貰い下げ

唐木　文穂

戦争が熾烈なものとなり、熊本工場でも召集される者が増えていった。私も召集され、昭和19年8月1日、松本の部隊に入隊することになった。然し即日帰郷となり、熊本へ帰って見ると社宅で隣に住んでいた田澤貞助さんが召集を受け、仙台の部隊に入隊という事になっており、その送別会が開かれるという処であった。私もその送別会に参加したが、「一兵卒として働くより、軍需工場で働く方がお国の為になるのではないか、貰い下げを働きかけてみるべきではないか」と進言したところ、その席に居られた小山荘之助課長が「よし分った。お前は即日帰郷で帰って来たばかりだから、今すぐ仕事ということもないだろう。明日所長に了解を得るからお前は田澤と一緒に仙台に行き田澤を貰い下げて来い」とのこと。

そこで、監督官の証明書を貰い、田澤さんについて仙台に行ったが、生憎汽車が遅れ、上野駅に着いたのは東北本線の最終列車が出たあとであった。

止むなく上野駅で野宿をして、朝一番の列車で仙台に向ったが、仙台に着いた時は、もう決められた入隊時刻を過ぎていた。そこで早速リンタクを探し、田澤さんを送り、そのあと私もリンタクを探して仙台の部隊に駆けつけた。

門の番兵に監督官の証明書を見せ、聯隊副官に会いたいと申し出て副官に会うことが出来た。私は副官に「田澤貞助なる仁が召集を受け、今ここに来たが、彼は三菱熊本航空機で重要な仕事をしている。一兵卒として働くより、軍需管理工場の熊本航空機で働く方がお国の為であると思う。何とか御一考願いたい」とお願いした。副官は「しばらく待て」といって、軍医の処に行かれたが、すぐ帰って来て、「彼は慢性の心臓病である。即日帰郷とする」と尤もな理由を

作って即日帰郷にしてくれたので二人で熊本へ帰った。

その後、間もなく同じ業務課の岩限さんが都城の部隊に召集になった。大島業務課長は私に「都城へ行って岩隈を貰い下げて来てくれ」と言う。これも亦、都城の部隊に行き副官に会った。たまたま岩隈氏は昔、肋膜炎をやったことがあると聞いていたので、このことも話し、頼んだが副官は「召集解除ということは師団雄旨本師団）が決めることであるので、師団に話してくれ」という。「入隊日は明日であり、師団へ行って話す時間もないから、何とかお願いしたい」と言って熊本に帰って来た。

工場に戻ってみると岩隈氏より、即日帰郷になったとの電報が来ていた。あとから聞いたところによれば、入隊の日、出身地別に整列していると、衛生兵が来て「岩隈はおるか」と真先に呼び出され、軍医の所に連れて行かれて検査を受け、即日帰郷になったとのことであった。

次に私の上司である板倉財務係長が召集になった。大島課長は私に「又、板倉を貰い下げて来てくれ」と言われたが、この時は原価の井上係長が貰い下げに行くことになった。然しこれは不成功に終り、板倉係長は戦死されてしまった。残念なことであった。

長崎原爆

佐久間　久見

昭和 20 年 8 月 9 日、長崎に投下された原爆のキノコ雲を自分達は遥か健軍の丘から鮮かに見ることができた。

その日、自分は縁側にラジオを置いてボリウムを上げ刻々と報ずるラジオの報道を聞きながら、前庭にもう一つの防空壕を掘っていた。午前 10 時頃であった。

「ただいまB－ 29 一機が大隅半島の上空から進入しました。天草の上空を目指して居るものと思われます。続いて又一機。皆さん、広島に投下された落下傘爆弾はこの様に小数機の潜入によって敢行されました。明らかにその危険性があります。十分御注意下さい。」

全身汗みどろになって、モグラの様に中に入り込み、スコップを振りながら全神経を集中してラジオに聴き入っていた。

「敵B－ 29 は天草の上空から機首を熊本の方に転じました。熊本の皆さん、落下傘爆弾に十分御注意下さい。」然し、B－ 29 は熊本の上空を飛び去った気配である。後で判ったところによると、この日、攻撃目標の小倉へ行ったが、小倉は雲が多く視界不良のため機首を転じ長崎に向った。午前 11 時過ぎ「長崎の皆さん頑張って下さい」と声を限り叫び続けているラジオの叫びも肝心の長崎市民の耳には達しなかったであろう。

健軍の丘より見た長崎上空の原子雲は、恰も巨大なキノコの如く、又はクラゲの如く、もくもくと盛り上り、拡がった雲の中に幾すじかの閃光がキラめいていた様であった。

健軍飛行場と義烈空挺隊

昭和 17 年、工場建設用地買収と同時に、完成機の試験飛行場として併設することとなり、58 万坪が買収された。買収の状況は工場用地の買収と同様に進められた。滑走路造りは、勿論専門土建業者によって進められたが、昨今の様なブルドーザー、シャベルカー等があるわけでもなし、専ら砂利や土は人海作戦で、近隣の婦人会、中学校低学年生徒、捕虜、連行朝鮮人等がモッコをかついで運んだ。来る日も、来る日も多勢の人達が黙々と土砂を運び、18 年終り

には一応滑走路は完成した。早速、名古屋からの連絡便が離着陸し、工場への部品の輸送、連絡に使用を始めた。

昭和 19 年 4 月には、熊航で完成させた「飛龍」第一号機がここから離陸し従業員始め、応徴工、女子挺身隊、学徒を感動させたのである。19 年中頃より、戦局も日に日に激化し、戦場がフィリピン、台湾、沖縄と北上するにつれ、日本本土の基地として九州各地に第一線の航空基地が移動して来た。健軍飛行場は、本来三菱熊本工場の試験飛行場であったが、戦局の推移と共に格好の基地として転用、逆に軍作戦の間に試験飛行をやらせて貰うという状況になった。滑走路西端に三菱の整備工場があり、北側には陸軍の航空部隊が進出した。又、北東部には陸軍少年飛行兵の教育隊もあったとか（？）

義烈空挺隊の碑　自衛隊健軍駐屯地内

健軍飛行場というと三菱の付属飛行場と思うのは元三菱社員か、健軍付近のごく一部の人達だけで、多くの人はむしろ沖縄へ強行着陸をして特攻攻撃を行った「義烈空挺隊」の発進基地としての印象の方が強いのではないか。

この義烈空挺隊というのは、沖縄をめぐる攻防戦たけなわの昭和 20 年 5 月 25 日、大本営発表によると「陸軍大尉、奥山道郎の指揮する我が特別攻撃隊、義烈空挺隊は、5 月 24 日夜、沖縄本島北及び中飛行場に強行着陸し、直ちに在地敵機、軍需品集積所、飛行場施設等を相次いで爆砕、敵を混乱に陥らしめ大なる戦果を収めっっあり」というものである。

この空挺隊の記念碑は戦後、旧熊本空港の一角に造られたが、今は自衛隊西部方面総監の敷地の一角に移されている。

三菱としては工場で造った飛龍 46 機の試験飛行、領収飛行を始め、その間の名古屋との連絡便の離発着に使用、北側にあった陸軍の部隊では作戦上及び訓練等の離発着に使用、或は他部隊機の不時着用基地として、終戦まで使用された。従って終戦時には「飛龍」を始め、「新司偵」「九七重爆」他単発機、連絡機などいろいろな機種がずらりと並んでいた。終戦と同時に、飛行場跡に穴を掘り、一部新鋭機をその中に陥し入れ、ガソリンをかけて焼却した。9 月 28 日、占領軍将校が、熊本進駐の下検分のため、この健軍飛行場に着陸。その後 10 月 15 日までに約 5000 人の進駐軍が熊本に進駐して来るとすぐにこの健軍飛行場に来て、まだ未処理の「飛龍」他 10 数機の機首部分にダイナマイトを仕掛け、破壊、焼却していった。

戦時中日本各地の婦人会や、学徒、兵隊の力で急造した滑走路は、終戦と同時に旧地主に返還され、再び田畑に返り咲いたケースが多い。然し、健軍飛行場はその様な道をたどらず戦後 10 年間そのまま放置され、昭和 31 年秋、滑走路も 1200 米とし、民間空港としての形を整えていったのである。

このあと、昭和 46 年に熊本新空港が開港するまで熊本空港として活用された。

義烈空挺隊.　熊航とは直接関係はないが、熊航の飛行場（健軍飛行場）が全国に知れ渡ったのは、この義烈空挺隊が発進した飛行場としてである。従って健軍飛行場を語るには義烈

空挺隊を語らずして素通りするわけにはいかない。義烈空挺隊とは、同じ沖縄戦に 2500 機余も繰り出して華やかに伝えられた神風特攻機の陰にあって殆ど知られていない。

この義烈空挺隊はサイパンが占領されB－ 29 の基地になった時、この基地に強行着陸をしてB－ 29 を焼き払うという戦法が提案され、落下傘部隊である奥山大尉の率いる作業中隊が当ることになっていた。作業中隊が選ばれたのは地上に係留中のB－ 29 を爆破するのがその任務だからであった。

奥山隊は事前にベニヤとトタンで作られたB－ 29 の模型機で、地上機の攻撃訓練を重ねていた。しかしサイパンを攻撃するには硫黄島を中継しなければならなかったが、その硫黄島に米軍が上陸したためサイパン作戦は中止になった。

そして 4 月に入り沖縄に米軍上陸となり、遂に義烈空挺隊は沖縄作戦に転用されることとなる。

空挺隊員の輸送機としては九七式重爆を使うこととなった。パイロットは一機当り 2 ～ 3 名で、彼らも空挺隊員と同じ服を着て武装し、胴体着陸後、地上戦に入るのである。専門の空挺隊員は工兵出身者が多く、帯状爆雷や、長い棒の先につけてゴムで吸いっかせ四発爆撃機の主翼を破壊する吸着爆雷が用意された。5 月 24 日決死の出撃は迫っていた。この目夕、金峰山に夕陽が静かに沈む頃、奥山隊長以下 136 名は迷彩をほどこした兵服を着用し、地下足袋、またはゴム底靴を履き、巻脚絆で身を固め、自動短銃、吸着、帯状爆薬、手相弾、破甲爆雷を各自が携行し、分隊ごとには軽機関銃、榔弾筒を携帯し出陣式に臨んだ。昨日と同じ様にもう一度乾盃した。昨日やったからもういいと思ったが折角、飛行場大隊が準備してくれたので、同じ様な出陣の儀式を繰り返した。

義烈空挺隊
決行部隊　空挺五個小隊　136 名
第 3 挺身飛行機　九七式重爆（1 機に 11 名）　12 機
（パイロット 32 名も着陸後は地上戦に参加する）
支援部隊
飛行場爆撃隊
第 6 航空軍　第 60、第 110 戦隊　飛龍　12 機
（北及び中飛行機場に対して）
第 5 航空軍　第 16、第 90 戦隊　九九双軽 10 機

（伊江島飛行場に対して）
決行時　昭和 20 年 5 月 24 日　夜
目　標　沖縄飛行場読谷へ 8 機、同嘉手納へ 4 機
離陸地　熊本県　健軍飛行場
離陸時刻　5 月 24 日　夜 7 時頃
突　入　同　日　夜 10 時半頃

万才三唱が終ると、各機ごとに一斉に係留地に向った。全員塔乗完了。奥山（隊長）と諏訪部（指揮官）は操縦席の天蓋を開けた。上半身を出し出発の合図をする。格納庫の前には飛行場に居る全員が並んで帽子を振った。夕陽は金峰山に投し、阿蘇は紫色に映えていた。

これから 3 時間余、暗黒の洋上をはうようにして敵の電探をさけ、一路目標に向う。成否は既に天に在った。

途中、一機が故障で引き返したが 10 時 25 分以降、北の読谷飛行場に突入を図った四機が次々と高射砲で撃墜された。五機冒だけが成功、12 名の隊員は敵機三十数機を爆破、損傷を与え、又逃げ廻る米海兵隊員に対し機銃弾を浴びせ 19 名を死傷させた。又、九七重一機が墜落する時、米兵 8 名が戦死、義烈隊員は米軍のC－ 46 の機内にかくれ、手榴弾で応戦、最後に全員散華した。滑走路は機体の残骸が飛散し、少くとも半日以上は使用不能になった。

中飛行場には四機のうち二機が　突入したが状況は不明であった。

健軍飛行場滑走路造り

熊中　　森　　幹雄

敗色濃くなった昭和 20 年 5 月、我々熊中 3 年生は健軍の飛行場へ、毎日滑走路作りの勤労奉仕に行った。その頃は沖縄に米軍が上陸し、毎日米軍との間に死斗が繰り返されていた。

毎日、水前寺、保田窪を通って（その頃の保田窪は点々と農家が点在し、薮ばかりで畑が多く、道はぬかる'みであった。道の両側も薮であった。）約一里半程歩いて街道より南側へ行くと、麦畑の中に雑木林を切り拓いた広大な滑走路がある。それをたどって行くと、林の中の所々に日本陸軍の最新型の重爆・偵察機が隠してある。朝 8 時頃になると沖縄に向かって飛び去って行く。その形といい、スピードといい、全くすばらしいものであった。

我々は毎日炎天下で石を運び、槌でこれを割って滑走路にはめ込んれでいた。石を割るには石の叩き方で簡単に割れる。将校が「石には目があるのだ。材木と同じだ」と叩いて見せてくれた。隣の滑走路では四式重爆が飛上り、低空を飛んで訓練していた。

我々は朝から夕方まで、毎日モッコに泥を載せて運び、鍬で林の中の泥を掘り、毎日土工の仕事をした。雨が降るとシャツもズボンもずぶ濡れになり、上半身裸で作業をしていた。

20 年 5 月「義烈空挺隊」がここ健軍飛行場から出撃したその翌日のことであった。我々は作業終了後、夕方飛行場で解散を待って小雨の中に立っていた。広い飛行場の真中、我々の目前二百米程の所に、割合旧式の重爆が五機程止っていた。飛行機の回りには数人の兵隊が忙しそうに行ったり、来たりして、発進の準備をしている様である。

すると、その中の真中の一機の胴体の上から煙が一条かすかに上った。我々は皆、「あれは何だ」と言っていると、各機の回りの兵隊がバラバラと飛行機から遠くへ逃げ出した。我々があっけにとられて眺めていると、逃げ出した兵隊が皆、各々の機へ集って来た。我々は「うろたえて何ば行ったり来たりしよるのかな」等と勝手なことを言っていた。

一方、兵隊達は煙の出ていない機の周りに取りついて、各機を皆で、うんうんと押して、煙の出ている機から離し、遠くへ押して行った。我々は物珍しくかつ緊張しながら見ていると、煙の出ている機から炎が吹き出した。

「わあー」と大声をあげたところ兵隊が走って来て、大声で「貴様らは何事だ。この戦争中に見せ物ではないぞ。ここは第一線だ、楽しそうに何事だ。」と怒鳴りつけた。小雨の中で飛行機は派手に火を吹き出した。

ドン、バリバリと大きな音で爆発音がして、何か弾丸の様なものが破裂し始めた。「どうも手榴弾が爆発しているぞ。いや機関銃弾だろう。」「いや、大砲の弾丸だ。」飛行機は紅蓮の炎の塊りとなった。バリバリと弾が破裂していた。機体の車輪がぐらりと崩れ、機体は地にはいつくばった。音が凄じい。我々は小さい声で「沖縄の空挺隊への弾丸の補給に行くのだろう。」「始め皆逃げたのは爆発が怖く、また他の機を助けるために集って押したんだ」とひそひそと話していた。我々は悪童の頃で、皆心の中は楽しく、一心に、瞬きもせずこの派手なショーを眺めていた。

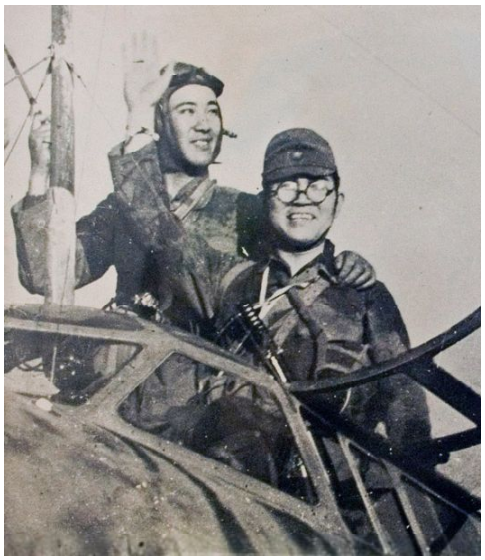
約一時間もすると、機は燃え崩れて残骸のみが黒く塊りとして残った。他の機は皆他の滑走路を使って沖縄へ向かって飛んで行った。

熊中同窓会誌」より

義烈空挺隊の出撃を見送る

吉長　富士男

昭和 20 年 5 月 24 日、退社時（6 時過ぎ）通勤列車のホームに向っていた時、夕暮れの空一杯に飛行場の方から、いろいろな機種の編隊が賑やかに南下して来たのを見上げた。こんなに沢山の編隊飛行は今までに見たこともなく、珍しい事でもあり、早速数えてみたが 40 機位であったろうか。



沖縄へ出撃する奥山空挺隊長（手前）と諏訪部操縦隊長　「戦誌刊行会」発行『空挺部隊写真集』より

列車内では「やけに多くの飛行機だったが、何んだったのだろうか……」との話題でもちきりであった。

数日後、あの時の編隊飛行は、沖縄に殴り込みをかけた「義烈空挺部隊」だったと知った。そして二、三週間後に「日本ニュース映画」でその出撃の様子を見た。画面では隊員が整列し、指揮をとる隊長が、見送る隊長に敬礼の号令をかける。そのあとは別れの盃を交わし、それぞれが各機に搭乗する。そして壮途へ……。小旗や帽子を打ち振り見送る残留員、機上よりそれに応えて手を振る隊員……。飛行機が次ぎ次ぎに離陸していく。カメラがそれを追ってパンニングする。背景の山に金峰山がチラリと写ったので出撃場所が健軍飛行場だと判った。

若くて血気にはやっていた私は、このニュース映画を 2 回も見て感激した当時のことが想い出されてくる。

日本ニュース　第 252 号（昭和 20 年 6 月 9 日）

終　　戦

昭和 20 年 8 月 15 日朝、ラジオは玉音放送の予告をした。

「謹んで御伝え致します。畏きあたりにおかせられましては、この度、詔書を渙発あらせられます。畏くも、天皇陛下におかせられましては、本日正午、おん自ら御放送遊ばされます。洵に恐れ多き極みでございます。国民は一人残らず、謹んで玉音を拝しますように」ということであった。多くの人がこれを聞き、それは「戦争が緊迫し、苦しいだろうが、国民心を一つにして頑張って欲しい」という激励の言葉であろうと推測していた。

そして正午、あの雑音入りで、とぎれとぎれの陛下の放送は、むつかしい言葉とあいまって、内容がよくわからず、即座に終戦とは理解できないままに、時間がたつにつれ、何となく日本の降伏のお言葉であろうということがわかり、多くの国民は「やっぱり降伏か」という気持ちがジワジワ胸に応えてきた。「遂に来るべきものが来てしまった。」と誰もが思った。同時に張りつめていた緊張感がガタガタと音をたててくずれていく様な気持ちになった。熊航の幹部始め、一般社員、徴用工、挺身隊、学徒のすべてが「敗れて悔いなし」と自分を納得させるには、尚心に引掛るものが多くあり過ぎた。それは軍に対し、又我々自身に対する後悔の気持であっ

たが、やがて、悔んでも返らぬ現実に思い及んだ時、過去の愚痴をあきらめると共に、「これからどうなるのであろうか」と不安が交さくし、あれや、これやと想像を巡らすのみであった。虚脱状態におちいった民衆は、今後の日本がどうなるかについての明確な見通しをとっていたわけではなく、今までの惰性で毎日の生活に追われていた。

熊航としては早速当座の方針が打出された。それは、全従業員を従来通り出勤せしめて、生産作業は続行し、工作機械の修理、工場内整理、部品材料整理等を始めた。勿論、宿直警備以外、夜業、残業、休日出勤は規制されたけれども、とにかく生活のための給与を与え、従業員を閑居せしめず、軽挙妄動を防ぐ手段を講じて当局の特命を待つ態勢を整えた。

8 月 20 日本店より三菱重工の各場所に今後の在り方につき中央の方針が示された。熊航は常務が長船へ行かれるので、長船に出向いて指示を受けた。同日九州軍需管理部より 8 月 15 日付け文書をもって、軍需生産停止命令が来た。熊航としては膨大な人員に対する処置が優先された。先づ動員学徒、女子挺身隊、徴用工を帰す処置がとられ、そのあと希望退職者を処置し、尚、余剰の人員については解雇の処置をとった。

又、納入品の支払関係、契約関係、被爆損害に対する保険関係の調査を行なうとか、財産を明確にしておくため棚卸しを行なうとか、盗難予防のため警備を厳重にする等々具体的な対策がとられて来た。

詔　書

朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ収拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝園政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑々帝国臣民ノ康寧ヲ図リ萬邦共栄ノ楽ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二国ニ宣戦スル所以モ亦実ニ帝国ノ自存ト東亜ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他国ノ主権ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戦已ニ四歳ヲ閲シ朕カ陸海将兵ノ勇戦朕カ百僚有司ノ励精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ尽セル二拘ラス戦局必スシモ好転セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ惨害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戦ヲ継続セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯クノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神霊ニ謝セムヤ是レ朕カ帝園政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムニ至レル所以ナリ

朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ開放ニ協力セル諸連邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク且戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝国ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス

終戦の詔書

健軍商店街の発展

小粥　　治

戦後、健軍の発展は著しいものがある。旧三菱工場跡地には国、県、市関係の公的機関が立ち並び、人口増加に併い各種学校も増加した。又旧部品工場と組立工場の間を東西に走る道路は第二空港線として都心との重要な交通網となっている。現在では健軍終点を中心として東西南北に商店が出来たが、何といってもその発展の基を作ったのは南側の健軍商店街である。その健軍商店街発展の歴史をたどってみよう。

昭和 25 年頃、元三菱寮の焼跡にぽつぽつ商店街が出来始め、その組織づくりが行なわれた。その頃の商店といえば宮坂八百屋店等 16 店舗であった。

昭和 28 年に、6．26 水害で市中心部で被害を受けた人々が健軍へ移り住んで来たため、商店も増加、小規模な商店街としての形を整える。これと同時に自費で歩道の手入れを行ない、スズラン灯を設置するなど、商店街の基礎作りをした。そして皆で力を合せ桜の木を自衛隊通りに植えるなどの活動をした。

この頃、店舗は 34 軒になっており、円滑な運営を図るため事業協同組合を作った。

昭和 32 年にはニコニコ堂の前身の銀栄会（スーパー）が開店し、健軍商店街の位置づけが強く打ち出された。

昭和 34 年には木製のアーケードを造り、お客様の買物のし易い態形づくりをした。その後人口の増加に伴い商店の数も増加し、40 年には現在のマルショクの前身であるスーパーかめ屋（約 240 坪）が開店、当時としては近代的なショッピングセンターであった。

その後、消費人口は増加の一途をたどり、41 年には市営バス秋津支所・南町線が開通、45 年には「かめ屋」を「大洋」に移譲した。この頃、商店は 98 軒にふくれ上り、商店街振興会をつくり、アーケードを改造した。

昭和 47 年末には歩道をカラー舗装し、同時に新しいアーケードをつくり、地域消費者の力強い支援を受け、市東部の商店街として名実共に認められるようになった。48 年太洋デパート火災のため、50 年には当商店街の「太洋」も現在の「マルショク」に移譲された。積極的な店内改造を施した「マルショク」と、「ニコニコ堂」の二大ショッピングセンターとの態形の中で、健軍商店街が一体となり、新しくて、よい商品を、安く提供することによって、地域消費者の力強い支持を受けている。

昭和 50 年には、自衛隊通りに植えた桜も見事に成長し、満開時を中心に桜祭りを行なうこととなった。この頃商店は 420 舗になった。

昭和 62 年、明るく、楽しく、安心して買物が出来る商店街を目ざして道路のカラー舗装、街路灯及びアーチの建替え工事を行った。

時代の移り変りに伴い、老舗が姿を消し、新店舗が入り、又店舗改装が行われ、時代の流れを反映した街に代っていく。63 年 4 月には「マルショク」が「サンリブ」として売場面積を拡張し、立体駐車場を設けて改装オープンした。

昭和 20 年、三菱寮の焼跡地にこっ然として現れた数軒の店舗から、今日の健軍商店街の姿を誰が予想出来たであろうか。

市電終点
2010年2月

ピアクレスの前から自衛隊
通りを見る
2010年2月

商店街ピアクレス
市電終点側
2010年2月

寮前薬局前より動
物園通りを見る
2010年2月

ピアクレス南側
2010年2月

私と健軍　三菱工場　　往　時　茫　々（回想記）

熊航の想い出

田尾　真一

熊航の工場配置、生産計画、そして建設計画を守屋さん（昭 5 入社）小山さん（昭 6 入社）田尾（昭 7 年入社）というメンバーで進めた。

昭和 18 年に藤原査察使が来られるというので、熊航の計画、工事の進捗状況、問題点などの説明資料を作るのに名古屋の旅館の一室を借切って、毎日、毎晩遅くまでかゝりきりであった。

このあと名古屋から 15 人程の養成工の先輩を連れて、私はとりあえず単身で熊本に赴任し、寮生活をやり乍ら工場建設工事の監督や、教育体系の設定、同マニアルの作成を行ないそれらを使って養成工や応徴工、女子挺身隊等の教育に当った。恐らく熊本では飛行機など始めて触れる人達ばかりだろうと思い、これらの人々に対して実物による教育が最適であるとして水島にあったデボアチンという飛行機を譲ってもらい、これを熊本に運び、青年学校の敷地に置き、実機に触れながら生きた教材として養成工らの教育に当った。　当時、初期に現地採用された人は 3 ケ月から 6 ケ月程名古屋で教育を受け、実務習得をやっていたが、後半からはそんな余裕もなく、又既に教育を受けた人々による展開教育も可能であったため熊本で教育訓練をやった。教育訓練のスケジュールを作り、実習工場ではヤスリ、タガネ等を扱う基本訓練をやり、時折講堂に集めて飛行機の話をした。殆んど毎日、こんな座学教育をやっていた。新しく採用した養成工が里心、がついたのか、寮を逃げ出したので先輩養成工らと熊本駅まで探しに行ったこともあった。

航空機生産に当っては先づ部品の調達から始めなければならなかった。もともと技術の最先端をいく飛行機を造るには、いろいろな部品を造る協力会社が据野の様に拡がっていなくてはならない。だが残念乍ら熊本には工業的な背景は少ない。

従ってこれらの高度な部品が思う様に集らず、皆、名古屋から取り寄せなければならなかった。それには主として鉄道でどんどん運び引込線に入れたが、緊急品については飛行機で取りに行ったり、リュックサック部隊が出かけていって一人で持てるだけの部品を背負って運んだり、大変であった。名航も自分のところの生産機分と、熊本の飛龍の分まで面倒を見なければならなかった。

私の工機工場は当初 140 ～ 150 名位の人が居たであろうか、隣の機械工場には旋盤始め、機械類が 1000 台程あったと思う。19 年の終りから 20 年にかけて殆んど毎日交代で徹夜の作業が続けられた。時には疲れて居眠りをする者も発生し、この対策に監督官からヒロポンの錠剤が渡され、夜 10 時になると当日の徹夜組を並ばせ、口をあけさせて一錠づっ投げ入れた。

20 年に入り漸く暖かくなった頃、グラマンが多数来襲し健軍工場を襲撃した。艦載機といえども両翼に 250 kg爆弾を 1 個づっ吊っていた。平和な工場が突然戦場と化した感じであった。私は先づ学徒、女子挺身隊、応徴工の人命保護に全力をそそいだ。

6 月に沖縄が玉砕してからというもの、空襲は日を迫って激しくなり、警報は毎日のように発令された。

或る日、中央司令の防空壕に任務についた。中に軍の司令部があり、部屋は二重の土塁で出来ていた。これがどのあたりにあったのか定かでない。部品工場隣の空地あたりだったろうか。

この日、グラマンが 50 機来襲。5 本の電話にぢゃんぢゃん情報が入っていたが、やがてズシン、ズシンという鈍重な音がする度に電話回線が一本切れ、又一本切れ、とうとう 5 本とも不通になってしまった。最後に受けた爆弾は強烈で、これが正に生死紙一重であった。艦載機は三菱の工場を爆撃すると、その帰りの駄賃で熊本市街を機銃掃射していった。

こうなることを予測して 20 年春には健軍工場も疎開の計画を進めていた。

私の部門は植木に疎開することとなった。植木の山あいの谷にバラックを建て、その中に機械を 10 台程移動した。疎開が始った時からもう生産はストップの状態であった。

この疎開の植木の山の中にまで、米軍は空襲をしかけてきた。何か情報が突っ抜けになっているのではないかと思われる程、米軍はこんなところまでちゃんと知っていた。それは空撮の写真を比べると急造された電柱がはっきりと写っており、それをたどって来たのだと聞いた。

植木の工場には 140 ～ 150 名程が疎開要員として行った。彼等は近郊の民家に泊めてもらい、そこから、それぞれ通勤していた。

20 年 7 月に入り私は疎開先で十二指腸と胆石で苦しみ、同 19 日北岡先生執刀の手術を受けた。山の中のこととて設備もないので手術道具を運び看護婦を連れて来て現地の医院を借りて開腹手術を受けた。幸い回復も順調で、まだ少し早かったが 8 月 9 日から現場に復帰した。

8 月 15 日朝から植木工場でいよいよ本確的に稼動を始めるに当って会議をやっており、横のラジオが雑音ばかりでうるさいので放送を切ってしまった。この間に玉音放送があったが、当然聞いていなかった。

会議を終えて所長室（江津荘）へ報告に行ったらシーンと静まり返っており、何か異様な感じであり、その時終戦を知った。

戦後のドサクサ時に大塚所長から何か工場を残すよう熊本市側からも要請を受けているということで上熊本に「熊本工業㈱」という会社を造り、バスボデー等を造った。又熊本には立派な竹があり、節と節との間が長く、これがアメリカの度量衡法によるヤード、ポンド法が施行されるに当り利用度が高くなるとみて、ヤード単位の物差しを造るのに最適であり、この竹尺を作るための自動目盛打刻機を開発し特許をとった。然し、この物差しを量産するに当っては他の工程も自動化すべきであったが、それが出来ず、打刻機だけを熊本市に買いあげてもらい、この企業をやめた。

その後、北岡さんと脳外科の治療機を研究開発しこれも特許をとった。当時の脳外科手術は頭がい骨を開けてやっていたが、この機械では頭の桟から穴をあけるだけで簡単に手術が出来るようになり戦後しばらく脳外科手術にこの機械が活躍した。実験一号の患者はドイツ語を勉強中の女子大生で首尾よく成功し、本人からも感謝された。

私が熊本の仕事を始めたのはまだ 30 代の若さであったが、あれからまたたく間に歳月が流れ、目下齢 80 才になった。

当時の仲間が集って、今も親交を続けている。尽きない想い出を語りあいながら。

会計検査院による会計検査

唐木　文穂

工場建設が官設であったため会計検査院による会計検査が 2 回行なわれた。最初は昭和 18 年で発動機の静岡工場が先に行なわれることになっていた。何れにしても熊杭が会計検査を受けるのは初めてのことでもあり、どう対応すべきか等、会計検査の模様を具に見てくるよう命を受け静岡工場へ出張した。まさか見学させて下さいというわけにもいかず、当日は三菱地所㈱の唐木技師ということにして検査会場の片隅に座り、会計検査の状況を見学した。

検査官は国民服に儀礼章をつけ「只今より天皇陛下の名に於いて会計検査を実施する」という宣言の下に会計検査が始められた。当時会計検査院は天皇直属の機関であったためこんないかめしい宣言があったのであろう。熊本工場の場合も同様であったが建設途上ということで検査は比較的簡単に済んだ。

第二回目は終戦後であり昭和 21 年に実施された。この時はさすがに「天皇陛下の名に於いて云々」という宣言はなかったが、検査は工場設計図と実際の建設工事の結果を比較検討するなどきびしく行われた。何れも工場建設工事に対する検査が主であり、主として三菱地所が応対した。

静岡工場に対する会計検査の状況を見るため、静岡工場に出張したのを機に、社宅その他の厚生施設を見せてもらったが、静岡工場の社宅には雨戸が付いていたが、熊本の場合は雨戸はついておらず、どうして熊本には雨戸がついていないのか奇異に感じ、帰任後所長にこのことを併せ報告しておいたが雨戸の件はこのまゝで終ってしまった。

熊航の思い出

村上　隆行

名航に入った時、君はどういう仕事がしたいか？と聞かれたので人間が好きだからといったら労務へ廻された。昭和 19 年 1 月に熊本に着任した。大島業務課長や高城労務課長等、名古屋でお世話になった人が多々居られ安心した。今まで（在学中）ずっと女気のない環境で育って来たが、こゝに至って女子挺身隊を預ることになった。朝礼というものがめずらしかった。勝又さんから朝礼時に体操の指揮をとれと云われ指揮台に上った。見渡す限り若い女性がずらりと居り、皆私の方を見ている。瞬間目がくらみ、やがて頭に血が上って来た。

しばらく目を閉じて気を落付かせる。当時女性の服装は皆モンペをはいていたので差支えなかろうと思い、体操の一環として逆立ちをやらせたが、1/3 位しかやらなかった。（出来なかったのかも知れない）

会社の仕事も段々忙しくなると 8 時まで残業する日が多くなった。もう外はまっ暗だから女子挺身隊を家まで送り届けなければならない。三人程同じ方向の人をグループにして送り届け、そのあと私は家に帰って風呂に入ると寝るのは大抵 11 時頃になっていた。あの頃は灯火管制で外はまっ暗、どこに江津湖があるのかすらわからないので提灯を灯けて夜道を歩いた。

熊航建設の話が決ったとき、我家の所有地もたくさん提供した。坪 5 円であった。売上金はバアチャンが全部赤十字社に寄付してしまった。戦後土地改革で新しい地番になり自分の土地が一体どこにあるのかわからなくなってしまった。しかし、税金だけはどんどん来る。我が家にとってこれが戦争の後遺症である。

水前寺付近の小学校に疎開していた頃、所長伺の印を貰うのに江津荘へ行った。（当時疎開で、所長室は江津荘に入っていた）大塚所長と片岡副所長が座敷に並んで居られ、およそ事務所らしからぬ和室とあって、思わず「殿」と云ってにじり寄って行き印を貰う雰囲気であった。あれで袴でも着ておればまさしく時代ものであった。広島原爆の翌日から黒い服装はいかんというので白い頭巾をかぶって出勤した。広島、長崎に新型爆弾が投下され、日本の風船爆弾も、もうアメリカに着く頃だ、きっと何らかの戦果があるだろうと誰かがいっていた。

三菱・健軍工場の思い出

江藤　オトミ

昭和 17 年、健軍に三菱の工場が建つこととなり、工場は竹中工務店が、厚生施設である寮、社宅は大林組が施工を担当することになりました。多勢の人夫や土工の人が居り、いろいろな雑用があり、それらの事務をやっておりました。当時は軍の機密事項が多く、陸軍の監督官や熊本北警察署の監視が厳しく、北署の特高警察官から人夫や土工の人達の中で居動不審、怠業者等があったらこれに名前を書いて報告せよといって一冊のノートを渡されました。まだ若い私が工場内の事情を外部に洩らすことができましょうか。遂にノートは預ったまゝ何も記入することなく終戦と同時に焼却してしまいました。

工場建設作業は、当時資材不足の折柄遅々として進まず、まだ完成していない内から飛行機の生産に入りましたが、その敷地は広大なもので秋津の仮事務所から北端の整備工場まで歩いて業務連絡に行くと往復で半日がかりでした。

当初、第一次工事として計画されていた作業が 20 年 5 月にやっと完成し、竹中工務店の現場作業所の規模が縮少され、私はこの時、三菱に入社しました。

職場は厚生課、不動産係で社宅の規格別、家賃（月 1 円 50 銭～ 2 円位だったでしょうか？）の徴収、出張人員を把握して厨房へ報告することなどを担当しておりました。

当時、叔父の家に牧野元さん、宮川さん、内田さんらが下宿しておられ、朝 6 時半に家を出て歩いて健軍まで通いました。20 年 7 月、報国寮で仕事をしていた時、病院が移転して来て、半分は寮として、半分は病院として併用していました。報国寮には大分経専、宮崎工専の動員学徒が居り、8月 15 日の玉音放送を聞いて彼等は寮の玄関で泣き伏していました。やがて殆んどの人が退寮しましたので残り少くなった住人を、准員は 5 寮へ、正員は神水荘へ移転し報国寮は病院だけになりました。戦後、社宅と職員寮関係の残務整理に当り、熊機時代は社宅の家賃の収支と、関連資料を財務局へ提出する仕事を担当し、24 年 9 月、熊機閉鎖と共に退職致しました。

健軍三菱の思い出

是枝　京（村上）

昭和 18 年 5 月入社、労務課、給与係に配属となりまだ総事務所は完成しておらず、その隣のバラック建の仮事務所へ行きました。私はこゝで工員の方々の給与計算をしていました。

当時の工員さんの給料は本給よりも残業等超過勤務手当の方が多かった様に思います。こゝで先輩に太田静子さん（旧姓清田）が居られ、以後づっと一緒でいろいろ教えていただきました。

当時、水前寺の家から引込線で通勤しておりましたが、時間によっては満員で鈴なりになり、デッキの扉は閉らず、昨今ではとても考えられない危険な状態で通勤しておりました。19 年 4 月 29 日、天長節の日に飛龍 1 号機が完成し、進空式が行われました。私達の工場で造った飛行機が頭の上を、あの独得なキーンという金属音をひびかせて飛んでいく姿を、私達は事務所の窓から身体をのり出して、手を振って見送ったことが強く印象に残っています。その記念すべき日に陶器製の飛行機の模型を記念にいただきました。

20 年に入ると空襲も激しくなり、空襲警報が出ると男子職員が給与計算の根拠となる「工員出勤簿」を非常持出品として大きな袋に入れて運び出しておりました。私達は工場付近の畑、或は健軍神杜の近くまで逃げていきました。その内、私達は水前寺の砂取小学校に疎開しました。

ここでは教室を各係事務所として仕事をしていました。当時の給食は殆んど「うどん」でした。勿論昨今の様な味のいい「うどん」ではなく寒天のようなうどんでした。又加給品として乾バナナや黒砂糖の配給が時々ありました。

甘いものにうえていた当時のことでもあり、これは結構楽しみでもあり、有難いものでした。

7 月 1 日の空襲で家も焼失し、その時大切にしていたいろいろな資料は全部焼かれてしまいました。

終戦は砂取校で迎え、皆席に座ったまゝ玉音放送を聞きました。18 才の暑い夏でした。

整備工場の思い出

南　　政一

19 年初め、まだ整備工場は出来上っていなかったように思う。総組立工場から整備工場まで運び、そのあと飛行場へ運んだ。その 1 号機の整備が最初の整備作業であった。
1 ～ 3 号機は組めるだけにして名航から各務原へ運び、そこで組立テスト飛行をやったと聞いている。青年学校の関係で名古屋へ行き、帰って来たら丁度、4 号機が出来ていた。

会社の仕事はキー 67 を飛ばすまでゝ、そのあとの兵装等は大刃洗の兵隊が来てやっていた。軍の領収パイロットはあゝでもない、こうでもないと文句をつけ、一機の領収に半月位かゝっていた。本当に飛行機が悪かったのか、どうかはわからぬが、どうも時間を延していた感じが無くもなかった。

彼等の滞在が長いので、時に軍の車（崖のついた軍用車）を借りて買出しに行った。時に畑からイモを失敬した奴が警察につかまり、その貰下げに行ったこともあった。

当時の食事は雑炊で、糸コンニャクに米粒がついている程度のものであった。この車で厨房へ行っては銀メシを食べさせてもらった。この頃は各工場が疎開して殆んど人が居らず米が余っていたのかも知れない。食べ盛りの我々若い連中にとっては唯一の楽しみであった。

整備工場の陣容は天草の女子挺身隊と、鉄砲もゴンボ剣もない兵隊が作業をしていた。こういう臨時の人に飛行機の最終工程である整備作業を任せるわけにはいかず雑役に従事してもらった。

女子挺身隊はガソリン補給のバケツリレーをやった。テストフライトの都度、ガソリンを抜い

たり、補給したりしなければならないが、燃料補給車が一台しかなく、それもあまり性能がよくないのでガソリンの吸い上げ効率が悪く、手で運んだ方が早かった。そのため一列に並んで、機体へのガソリン補給をやった。

20 年に入ると忙しくなり整備工場の中で寝泊りしていた。別に飛行機がどんどん出来てきたわけでもなく、ただ雑用ばかりが増えていた。

整備工場は機体、エンジン、電気の三グループに分れており、私は電気グループに居た。仕事はアースとりばかりやらされた記憶がある。時には飛行場の向えの陸軍の部隊からも応援の要請があり、時々手伝いに行った。

或る日、海軍の零戦が不時着して帰りのガソリンをくれといったが、陸軍はこれを拒否し、どうしても欲しけりゃ熊本軍司令部の印を貰って来いという。

零戦の若いパイロットは腹の中をにえたぎらせて一日掛りで軍司令部に行き印を貰って来てやっとガソリンを補給してもらっていた。見ていて気の毒であった。お国の為に戦っているのに、こんなことも融通がつかないものだろうか、これも陸、海軍の抗争かと驚いた。

整備工場は当然疎開もせず最後まで現地に居た。逆に疎開している部品工場へトラックで部品集めに行った。

空襲時は整備工場横の排水溝に逃げた。飛行機は格好の目標とばかりやたら銃撃していった。領収に来たパイロットの飛行機（キー 67）には、出撃数を示すピンクの桜の花が画かれていた。桜の花が 3 つも 4 つも画いてある飛行機はさすが歴戦の勇士ともいうべきか、戦火をくぐり抜け激しい戦闘を繰り返して来た様子が伺われた。胴体前部に弾のあとがあるものなどザラで、中胴、後胴にも弾の当った穴がいくつもあいたまゝであった。

会社のパイロットは一人で、本当に飛行機を飛ばすだけで、あとは会社の整備員、検査員、技術者 6 ～ 7 名が同乗して不具合個所をチェックするだけであった。総組立工場から、やゝ上り坂を上って整備工場まで完成機を運ぶのに、牽引車もないので何十人という人間がヨイサ、ヨイサと押していった。

領収に来たパイロットもいろいろ個性があるのか、あまり大きくない健軍飛行場では機体をしゃくる様にして離陸していった。

戦後すぐ三機の飛龍にグリーンの十字マークを入れてアメリカへ技術調査のため持帰ったと聞いた。終戦時、各基地から健軍飛行場まで飛んで来て、そのまゝ飛行機を放棄していったので、いろいろな飛行機をみることが出来た。やがて進駐軍が来るというので飛行場の一端に大きな穴を掘って機首を突込ませ、ガソリンをかけて飛行機を焼いた。まだ飛べそうな飛行機は、ひょっとしてもう一度特攻にでも使うかも知れないというので、車輪を外して一応飛べない格好にしておいた。やがて進駐軍がやって来て、まだ型の残っている飛龍などのエンジンにダイナマイトを仕掛けて爆破していた。20 年 10 月初めであったろうか。

岩崎副社長をお迎えして

牧野　元

昭和 20 年 1 月頃三菱本社の副社長岩崎彦弥太様が、現場激励の有り難い思召しから熊本航空機製作所へ来所され、当時の陸軍監督官石山大佐がなかなかの強者で大塚所長が随分困っておられたので、三菱本社副社長のおん身であり乍ら、同大佐を一夕招宴されて懇談され

た。流石の石山大佐も非常に感激されて、その後は非常に好意的になられたように見受けられた。

そして岩崎副社長は予定の視察を終えられ、私は副社長のご案内役として日本航空中尾操縦士が操縦するダグラスDC型の待っ熊本航空機製作所の飛行場へ、40 年型のビュイックで着いた。ところが副社長はトイレに行きたいといわれる。格納庫附属の便所は非常に不潔なので、私はその旨を恐る恐る申し上げた。副社長はかまわないといわれるので、便所の戸を開き副社長が入られ、私は便所の戸を外からしっかと閉めて三間程遠ざかってお待ち申し上げた。暫くすると便所の戸がドンドンと叩かれ「牧野、牧野」といわれるのが聞こえたので驚いて戸のところへ走り寄ると、なんと外から戸にカンが掛かって居るではないか。緊張の余り手が無意識の内にカンを掛けたものと思われ、私は恐縮し急いで戸を開けた。岩崎副社長は軟かい調子で「オイひどいぞ」と一言おっしゃっただけで飛行機の方へ歩まれ、随行の甲出岩太郎氏とご一緒に荘田泰蔵氏が所長をして居られる水島航空機製作所へ向かって離陸された。

私は当時熊航の庶務課長であったから職務上の大失態であり、如何なるご処罰を仰せ付かっても致し方ない仕儀であったが、その後本店から何のご沙汰も蒙らず、彦弥太副社長御中のご寛容なご人徳とご温情に只々感激するのみであり、ご恩は終生忘れることが出来ない。

（昭和 4 年 3 月　航空機本店入社）　　名航・菱光全編　往時茫々

熊航に着任

山田　鹿之助

さきに東海地方を襲った大地震により名航の生産は打撃を蒙ったので水島、熊本の生産に力を致すため、昭和 20 年 2 月 15 日有川藤太郎氏と共に熊本に赴任することとなった。

赴任のとき便乗したのが朝鮮に空輸される陸軍のキー 67 重爆であったので、その状況を述べてみます。私は機長のすぐ後の席、有川氏は左横の助手席に居られました。その日は各務ヶ原飛行場を立っ頃はちぎれ雲はありましたが、飛行日和のように思いました。しかし京都上空では雲の間から市中が見え隠れする景色でしたが、大阪から瀬戸内海に出ると急に雲が厚くなり、視界が無くなりましたので高度を上げ、全くの雲上飛行をされていました。機長さんが「ェンジンにかかる風圧の感じでは大分流されておる。左側の雲の切目の発見に努めるよう」と乗員に注意されました。この機はまだ完全に整備されてない有視界飛行なので、機長の勘に頼る外ない飛行。さいわいベテラン機長なので、一同落ち着いて雲の切れ目を見張っている。「左前方に切れ目らしいものが見えます」との報告に機首をその方向に取り進む内、右下に海岸らしいものが見えてきました。機長はすぐ「土佐湾の海岸だ。今少し後だと太平洋に迷い出るところであった。この風では熊本直行は無理であるから、佐伯飛行場迄行き後北上して熊本に行く」と指揮された。

この頃から少し頭痛を感ずるようになり、動いてみたい気持がした。先頃から助手の方も有川さんも時々後方に行かれることに気付いてはいたが、理由は知らず過ごしている内生理小用したい気分になり、私も後方に行きましたが、WCの設備はどこにも見当らず、己むなく胴体の砲座とおばしき小窓より外部に向け放射しました。壁に打ち付けるような感じと共に細かい氷のしぶきが体に返って来ましたが、どうすることも出来ず、後で窓の縁が白く凍りついていました。しまったと思ったが後の祭、折から後の方に居た整備員が「あなたの小便を頭からか

ぶりましたよ」と笑って話されるので「どんな方法で用をたすのですか」と尋ねましたら「長い曲ったパイプを通し外に出すのです」とのこと、成る程と思いました。熊本陸軍飛行場に着陸して機体を見ましたら、霜のように白く凍っていました。大塚所長さん達に迎えられ無事宿舎に着きました。

名航・菱光全編　往時茫々より

健軍三菱の思い出

松崎　尚子（石田）

戦時中は毎日水前寺から引込線で通っていました。車輌は貨物車だったような気がします。職場は作業課の庶務係で、現場の中の事務でしたので女性が少なく、皆さん大事にして下さいました。仕事は庶務ですので電話の取次ぎから文書の発信、受信、配布などが主でした。

係長さんはSさんという方で五高一東大に進まれた秀才でした。当時女性のあこがれの様な人でした。何せ現場の庶務ですので大した仕事もなく、その人は毎日ロシャ語の本を訳しており、時折私はその浄書をお手伝いしました。

今から考えるとよく特高にマークされなかったものだと思います。こんなむつかしい仕事をする人だから将来きっと出世する人だろうと思っていました。戦後、佐賀県の市長選挙に共産党から立候補され、びっくりしました。

20年に入り空襲が始り、初めの内は警報が発令されると熊工の方まで逃げていましたが、その内に私共作業課、100 人近くは五高へ疎開しました。そこで何故か私はすぐまた農学校の方へ再疎開しました。ここでいきなりグラマンの襲撃を受け目の前を機銃弾が走った時は本当にこわくて身動き出来ませんでした。7 月 2 日の空襲で大宮町の実家が焼けてしまいました。

農学校に居た時、長崎に特殊爆弾が落されたというラジオ放送を聞きました。終戦前は、あちこち引越しばかりで落付いて仕事も出来ず、結局疎開後は大した仕事をしていなかった様に思います。

戦後、勝又さんの下で厚生の仕事をしました。江藤さんと一緒でした。厚生課では入浴券、理髪券、牛乳の担当で、牛乳が余った時はごはんにかけて食べたこともありました。熊機の時代は第一工作課、鋳造係の現場事務所へ行きこゝでも一般庶務をやりました。西整になってからは土地、不動産処分のお手伝い（事務処理）をしました。

三菱の思い出

今村　秀子（中島）

昭和 19 年 10 月入社し、庶務に配属になりました。当時は飯野村から毎日歩いて通勤しておりました。朝早くからてくてくと歩き、雨の日など下駄ばきでびしょびしょになりました。

20 年に入り空襲が激しくなり警報が出ると健軍神杜の森へ避難しました。現場は勿論、事務部門も疎開し、私の飯野村にまで疎開品が持込れ、個人の土蔵に運び込れました。ただただ、お国の大事とあって嫌応なしに預かった疎開品を大切に守り通して来ましたが、戦後、これらの行為に対して何等の挨拶もなく肩身の狭い思いをしました。4 月に庶務課は江津荘と出水小学校に疎開しました。空襲は道路が寸断されたり、交通機関が止ったりで、この頃になると

始業時間もあって無きに等しく、まちまちに出勤して来ました。8 月 15 には大事なお話があるということで工場に集って玉音放送を聞きました。勝利の日を信じて一心に働いていた、その張りつめた気持がプッツリと切れたせいか、わけもなく泣けて泣けて仕方がありませんでした。純心だったのでしょう。

戦後、熊機でも庶務課で、青年学校事務所で仕事をしました。やっと落付いて仕事が出来るようになりましたが、24 年になると熊機閉鎖の話が持上り、長船、下船等へ転勤する人、井関へ行く人、退職する人等で落付かない日々でした。24 年 9 月の熊機閉鎖後は又々庶務に入り、29 年 1 月まで西部整理事務所の庶務担当として勤務致しました。思えば熊航時代の大塚さん、熊機時代の広兼さん、西整時代の山口さんと三代の所長仕えしてきました。

29 年 2 月、西整最後の記念にと、岡野多聞さんの引率で京都、東京（本店）、鎌倉、名古屋、伊勢を廻り 10 年間に亘る三菱熊本工場の生活を締めくくりました。

三菱•熊本工場の思い出

山本　チエ子（村上）

昭和 18 年入社、当時江津荘で仕事をしており、総務の男子が 4 名（庶務の麻生さん、建築の志内さん、厚生の高本さん、労務の中島さん）、女子が 3 名程でした。女子の仕事は来客接待、電話の応対等走り使いが多かった様に思います。19 年 6 月になって健軍の工場へ移動しました。当初はスレート•バラックの建物でしたが、後程総事務所に入り、所属は庶務課でしたが後に購買課に行き、タイプを担当しておりました。

20 年に入り空襲が激しくなるとよく健軍神社裏の防空壕へ入りました。これらの防空壕は各職場毎に自分達で掘ったものでした。4 月に入り現場は疎開をはじめ、私共事務所の者も出水校へ疎開致しました。各教室毎に分散し、それを事務所にしました。7 月頃になると熊本市内を始め、県下あちこちが空襲を受けました。宇土方面の空襲をよく見ていました。

その内に出水校も空襲を受けました。私が外に出ていると突然艦載機が来たので、あわてて中に入ったら、あとを追う様にバリ、バリ、バリという機銃の音が追いかけて来ました。当時、動くものは何でも撃ってきたようです。

幸い怪我はありませんでしたが、課長の机に機銃弾が当っていました。事務系統も各課によって疎開先が異なり、連絡がとれないので、さしたる仕事も出来ず「特攻人形」など作っていました。

8 月 15 日、終戦の放送は出水校で、皆んな集って聞きました。そのあと一週間程空白があり（何をしていたのか記憶がありません）健軍工場へ引揚げました。戦後のナベ、カマ時代、熊機時代、そして西部整理事務所時代を通じて庶務所属でタイピストを続け、昭和 28 年 1 月退職致しました。

熊航―熊機―西整

新美　すみえ（佐藤）

昭和 19 年、女子挺身隊として入社「撃ちてし止まん」の精神に燃えて日夜、キー 67 の生産業務に従事、食物もなく、仕事に追いまくられたり、敵機に追い廻される日々でしたが、純粋に明日の勝利を信じて唯々働いて来ました。

そして終戦、張りつめていた弦がプッツリと切れた様に虚脱状態に陥入りその日から数日後に三菱を後にしました。しばらくして再び会社から元挺身隊の人達の中から社員に採用する試験があるが受けてみないかという話があり、又三菱の門をくぐりました。試験場は青年学校の講堂でした。講堂には一杯の人、人、人で、何でも千人以上の人が集り、さすがの講堂もあふれんばかりでした。どんな試験が行なわれたのか記憶はありませんが幸い採用していただきました。採用されたのは僅か十余人（？）だったと聞きました。私は工作班・工務担当で工具室の仕事に従事することになりました。仕事は工具の保管や棚卸でした。疎開工場等から返って来る工具類はまだ馬車で運んでいました。

工場の建物は空襲で大方破壊され、敷地にはところどころに爆弾による大きな穴があき、秋草だけが丈高く茂っていました。そんな中で比較的損傷の少なかった工機工場に機械と共に沢山の計器類や切削工具等が集められ、そこで、それらの保全手入れをやっていました。戦時中、軍の力で全国から貴重な測定工具、器材等を集めたため、戦後は入手し難い器材の一部を学校に寄付したとか聞きました。

昭和 27 年賠償解除と共に工具類も払下げが可能となり、その頃から全国の中小鉄工所等から工具類の買取りが始り、毎日いろいろな人が物色に来ました。私は、それらの人達を工具、器材置場まで案内をし売込みをしました。そして昭和 28 年秋、それらの殆んどが処分できましたので、私は三菱ふそう自動車（大阪）に再就職をしました。

約 10 年間に亘り、夢多き乙女時代を過した熊航ー熊機ー西整での生活は、物もなく、苦しい時代であっただけに、私の青春時代の思い出として、胸底深く残っています。

熊航最後の入社

田澤　玉雄

昭和 20 年 6 月入社、私は戦時中に三菱へ入社した最後の社員ではなかろうか。戦地に居た時、私の部隊で飛龍を使っていたせいか、飛龍の生産工場へ行けということで航空隊から直接三菱へ入った。だから入社試験など受けた記憶はない。

職場は総組立工場で、機体の組立、儀装作業が完成するとその機体を皆で押して整備工場まで運んだ。もうこの頃、組立工場以外の各工場は殆んど疎開しておりもぬけの殻同然であった。

我々社員の他に天草方面からの女子挺身隊や動員学徒がいた。警戒警報が発令されるとすぐ健軍神杜の森の中へ退避した。

或る時、警報が出たので学徒を連れて逃げようとしたら、監督官が「空襲警報が発令されるまで仕事を続けよ」という。私は「皆の命を保証してくれるのなら退避はしない」といったらその監督官にぶんなぐられた苦い思い出がある。あの連中は構内の近いところに退避壕があるのでそんなことが云えたのであろう。

私は多数の学徒や女子挺身隊を預っている以上、彼等の身を守ってやる責任があった。監督官というのは生産のフォローをするだけで（作業者の怠まん等に対して激をとばしたり、追いまくったりまるで人間だけを管理している様な存在にみえた。この仕事は軍の監督下にあるのだということを作業者に意識させるためにのみ居た様なもの）作業内容、技術的なこと等についての判定、指示等は一切しなかった様であり、その様な知識、経験のない若い少尉ク

ラスの者ばかりであった。或る日、今まで一緒に仕事をしていた一人の社員が出征して行った。ところがしばらくして、その男が今度は監督官として舞い戻って来た。何か急に居丈高くなったのでコンチキショーと思って食いついてやったら「田澤君、ごめんごめん、俺にも立場があるんだ」と私の耳元で小さな声でいった。

8 月 15 日、総組立工場で玉音放送を聞いた。戦後、海岸で使っていた社有の船を整備したり、牧場へ水道を引きに行ったりして、濃い牛乳をたらふく飲ませてもらった。これに味をしめ、以後頼まれもしないのによく水道の点検に行っては、甘い牛乳をのませてもらった。

空　襲

作　　垂武

3 寮が燃えた時、隣接の社宅に居た。ものすごい火焔で、熱くて防空壕から出られなかった。これは 20 年 5 月(？)の昼の空襲であった。その後も夜の空襲時には照明弾が落され、その明るさに感激した。6 角形の焼夷弾がたくさん落され、あっという間に寮が焼け落ちてしまった。

水前寺の社宅が焼けたあと、その恐ろしさを聞かされていたので、今度は健軍の社宅だとばかり、空襲警報が入ると江津湖の方へ子供を連れて逃げていった。江津湖畔のヨシの中に半分水に潰って身をかくしていた。時折頭をあげるとあちこちで燃えているのが見えた。

二男が防空壕の中で百日ぜきを貰い、時折呼吸をとめる様に苦しがるので、病院へかけつけ、そこで終戦を迎えた。（夫人　談）

工場防衛隊の募集

吉長　富士男

各地での空襲被害の情報がもたらされて居た頃か、或は熊本が初めて空襲を受けてからか、何時頃であったかは記憶にないが、武器（機関銃）は軍より貸与を受けて、工場のあち、こちに銃座を設けて、敵機が来襲した時は「自分達の工場は自分達の手で守るのだ ″」と若者を対象に防衛隊（班だったか）組織の募集があった。

血気盛んな私も心を動かされたが、私は「海軍整備予科練習生」として佐世保鎮守府から入隊通知が来ていたので、これには応募出来なかったが、私と小学校同級で、汽車通勤を共にしていた友は応募し、その組織下に入った。彼とはその後、稀にしか逢えなかった。

彼の話によれば、一応の武器の基本操作は軍より教わり、その後の寝食は会社内となった由、どの程度の人数や規模かは言及しなかったし、以来話も聞けなかったので、実際に空襲を受けた時に、どの様な行動をし、どの程度の効果があったのかは不明である。

熊航に出張

長船　塚根　健治

戦局愈々酷しくなった昭和 20 年 7 月、当時の第二船殻工場長の竹沢五十衛氏から突然呼び出しを受け、暫く熊本航空機製作所で飛行機作りの応援をして来るようにと指令を受けました。構成人員は船殻工作部門からはこう鋲係長の松瀬隆国氏をリーダーに 15 名、造船設計部門から田中尚氏をリーダーに 15 名、合計約 30 名が 7 月 12 日午前 10 時ごろ長崎駅発の列車

に乗り込んで熊本に向かいました。今なら 3 時間もあれば行けるものが、当時は頻繁に空襲警報が発令される時だったので途中待避で遅れ、熊本駅には定刻より 2 時間も遅れて午後 10 時ごろ到着しました。

その夜は旅館風情の初音寮に泊まりました。この寮には長船船殻工作部の現図係長・馬場熊雄氏も単身で転勤しておられ、ここから疎開工場の五高に通っておると話しておられました。翌 13 日、一行は製作所差し廻しのバスに乗って江津湖の辺にある健軍報国寮に落ち着くことになり、 その後、航空機本部で大塚所長の挨拶を受けたあと、健軍本工場の総組立工場を見学しましたが、広大な工場内には人影も疎らで活気溢れる感じはしませんでした。

そのころは熊本市内も既に焼夷弾爆撃を被り、市街も広範囲に亘り焼け野原になって、その土面には無数の焼夷弾の殻が突き刺さり、焼けただれて動けなくなった路面電車が、あちこちに放置され、電車の交通は不能状態になっていました。一行は 3 日間、市内の農学校の仮事務所で有川工務部長、松原第二工作部長それに長船鉄工場溶接係長から転任された愛野技師等の講話を聞く傍ら、市内の分散工場も見学しました。

さて、健軍の本工場は空襲の被害を逃れるため、第五高等学校、鹿本中学、済々黌、熊本中学、九州学院、御船、菊地、田迎、隈庄、植木、上熊本等に分散して、それぞれ板金作業、分割組立作業を分担してやっていました。本工場では、分散工場から送られてくる製品を胴体、主翼、尾翼などに総組し、また発動機、儀装品、プロペラ、組立電装工事等をやる。航空機の一機当たりの工程は大型機で 2．5 か月ないし 3 か月で完成するとのことでした。

一応仕事に関する教育も終わりましたので、各分散工場への人員配置の件で、製作所幹部の方と出張員一行を交えて打合せがあり、浜崎祐一氏と私が五高の作業場に配置が決まり、他の人もそれぞれの部署に就きました。初出勤の朝は 5 時半に起き 6 時に健軍の寮を出て、急ぎ足で歩いて黒髪町の五高に着いたのが 7 時半でした。支部長の馬場熊雄氏に面会挨拶を済ませたあと、支部長に通勤の実態を話し、今から先き通勤に往復三時間余り掛るのは仕事の面でも支障が出ると思い、時間的に余裕をもって仕事に打ち込み、早く技術を身につけたい気持と、食物も底をついている折から通勤面での体力消耗を少なくして仕事面に活用したい考えから、浜崎氏と二人で五高周辺の下宿屋を探しはしたが、食糧難と空襲の不安を理由に至る所で断わられましたので、己むを得ず寮から通うことにしました。食物で思い出すことは、空腹を抱えて五高からの帰り道、水前寺公園の茶屋で限られたトマトを一皿 2・3 個盛ってあって 1 円から 1 円 50 銭で売っていたのを無性に食べたことなど、染々と懐しく思うことがあります。

五高の作業場は校舎、講堂を開放して、ここで飛龍の主要個所胴体中部の分割組立を、本工と動員学徒合同で部材の組立、穴明、こう鋲作業を分担して懸命に奮闘していました。私達も図面の見方、生産機番号別の組立進捗状況のチェック、不足部材の調査の傍ら、作業場の一線でハンマーやドリルを握り、またニューマチックハンマーを持って手伝いをしました。

私達にとって馬場支部長が船殻出身で前から気心を知り合った先輩後輩の仲だったので、解らないことは遠慮なく聞き質すことができ、これに対し懇切な指導を受けたことは幸せだった、と今でも有難く思っています。

熊本の上空には何処から飛んで来るのか知りませんが、毎日のようにグラマン戦闘機が編隊を組んで偵察飛行を繰り返し、心身の不安を感じている中にあっても、次第に職場の環境にも馴れてきました。そして作業員の作業振りを観察してみますと、人に対して工具不足が原因

で仕事が片寄り、手待ち時間が生じておることが判明しました。ところが、当時の長船立神の工具庫の気圧工事関係の工具の在庫余剰があると確信しましたので、この旨を馬場支部長に話したところ、支部長も乗気になられ、急遽長崎に出向いて善処して欲しいとのことでした。早速、翌日係員を集め工具の打合せをやり、不足工具のメモを作り、第一工作部の仮事務所の盲唖学校で長崎までの旅行証明書を受けました。当時は一般旅行者の乗車券入手は仲々困難でしたが、軍需工場の証明があれば優先的に入手できたのでした。そこで動員学徒の人にお願いして長崎までの切符を求め、翌日長崎へ帰りました。

久方振りに長船に出勤して、私の上司蒲原係長に熊本の事情を説明して工具借用の件を申し入れ協力を求め、工具管理担当の島田工師を介して工具工場長の吉田扶美雄氏にお願いしたところ、心よく応諾されましたので、その場で借用手続きを済ませました。

長船編集「原爆前後」より

熊航へ応援派遣

長船　　田中　　尚

20 年の 6 月末か 7 月初め、造船設計から 13 人編成で熊本へ応援に行くことを命ぜられました。もう通の船の設計をする仕事はなかったので、少しでもお役に立てばといった処ではなかったかと思われます。結局、飛行機生産に大いに貢献する処まで行かない内に終戦になりましたので、色々我々のお世話をして頂いた丈、却って生産を阻害しに行った様な結果となりました。当時熊本は部品工場、小組立工場の疎開やら再編成に大童で、その上空襲が始まり生産が軌道にのらず、我々の居る間に遂に一機も完成しなかったと覚えています。

最初の間は色々説明を聞いたり、近郊と云っても相当遠い町や村まで疎開した部品工場等を見て廻ったりしました。我々の仕事は生産計画の一環である部品の系統図を作る事で、色々の符号のついた部品を小ユニットより段々大きなブロックまで系図の様に纏める事です。仕事場は五高の教室で、宿舎は市内の宿屋に合宿でした。私の任務は、毎日だったか一日置きだったか忘れましたが、健軍町の本部まで連絡やら厚生物資の配給の受取りに行く事が主なものでした。五高から健軍までは相当の距離で、電車に乗った筈ですが暑い道をボクボクと歩いた印象が強く残って居ます。編上げの軍靴まがいの靴の底がひどく痛んで釘が出て来てどうにも痛くて苦労しました。途中で艦載機の銃撃を受け肝を冷した事もあります。銃撃と云えば、五高の教室で作業中に全く突然バリバリとやられあわてたり、空襲警報で奉安殿の松林の近くの防空壕に飛び込みましたが、銃撃の場合はこの様なオープンの壕はあまり気持の良いものではありませんでした。同志 13 名の内 2 名は（後から亡くなられた広船辻技師長はじめもう 10 名が来られましたので、約 20 名の内から 2 名だったかどうか忘れました）食糧補給係として活動して貰いました。この方面にも天才的な素質のある某氏による鶏とソーメンの収穫に対しては、未だにその感激が忘れられません。いろいろの事がありましたが、広島に新型爆弾が落ち、ついで 8 月 9 日長崎方面の空に異様な雲が見え、ついで長崎も大変な事になっているらしいと云う情報が入り、全員一応長崎に帰って見る事になりました。もう一度熊本へ後始末に行ったかどうか思い出せませんが、之が飛行機作りの結末でした。

長船編集「原爆前後」より

熊航での終戦前後

林　　テツ

昭和 17 年、津田塾を卒業後三菱に入り健軍の建設事務所で庶務業務を担当していました。20 年に入り空襲が激しくなると女子商業へ疎開し、ここで米艦載機による機銃掃射の弾が書類壷に当っているのをみて戦争の緊迫を感じ、追いっめられた感じで仕事をしておりました。やがて 8 月に入ると機銃掃射と並行して艦載機からビラがまかれるようになり、私が拾ったのはポツダム宣言に関するものでした。それが何を意味するものかよくわかりませんでしたが旬日にして終戦になりました。

再び健軍工場へ帰り整理業務のため青年学校あとに入りました。その頃は中林課長、野田さん、後藤さんと一諸でした。 10 月に入り熊本にも占領軍が進駐する様になり、ジープで乗りつけてはタイプライターや、工具等会社の品物を持去っていく機会が多くなりました。受領証を書いてもらっていましたが中には字の書けない黒人のGIも居ました。或る時、工場へ案内するように言うので連れて行った時、工場のくぐり戸で頭をぶっつけ、血を流したので怒ってあばれ出した時は本当にこわい思いをしました。所長付の二世（韓国人か？）の通訳が居たが、米軍の気嫌をとったり、勝手なことをしており嫌な思いをしました。

21 年に熊航の機械、設備が賠償指定を受け、日田の陸軍工廠に貸与してあった機械を引揚げることになり、この時、私達女子 3 名も支援のため日田へ行きました。健軍工場へ帰って、今度はそれら賠償機械のインベントリー・シートを作成し、30 cmx 80 cm程の用紙に一件、一件機械の仕様、寸度、程度等の評価を英語で作っていました。

24 年 9 月、熊機閉鎖と共に、引続き清算業務に入り 25 年 5 月末退職し、県警に入りました。

終戦時の健軍飛行場

岡野　允俊

私と三菱・熊本工場との縁は昭和 20 年 8 月 26 日、大津の海軍航空隊から三日がかりで復員した日から始る。一両日後、熊航の整備工場に居たという友人が尋ねて来た。二人で健軍の電停付近に居た時、突然ロッキードP－ 38 （双胴の悪魔と呼んでいた）が超低空で飛んでいった。ひょっとしたら飛行場へ降りたのかも知れないと思い二人で健軍飛行場へ急いだ。

飛行場にはキー 67 他、いろいろな飛行機が並べられていたが先程のP－ 38 は見当らなかった。人っ子一人居らず見捨てられた飛行機が肩を落とした様に並んでいた。駐機中のキー 67 を見て廻り、彼がいろいろ説明してくれた。機内に入ろうとしたがステップがない。戦斗機なら翼に足をかけて容易に登れるが、こんな大きな爆撃機はどのようにして機内に入るのかわからない。すると友人が胴体の真下あたりから懸垂・逆上りの様な格好をして機内に入っていった。私も同じ様にして機内に入った。彼が得意気に機内を説明してくれた。 1 ケ月程してまだ多数並んでいた他機種も見たかったので再び彼と飛行場へ行ったが、もうその時は進駐軍が来て飛行機のエンジン部分にダイナマイトを仕掛けて破壊作業をやっており近寄ることは出来なかった。

それ以来、健軍飛行場へは行ったことはない。

健軍校区のうつり変り

健軍小学校創立百周年誌より

戦争が激しくなると、運動場に 1100 名の児童が退避するための防空壕が 147 も掘られていました。学校では校舎の屋根や壁に色を塗って敵機に見つからないように工夫しました。ガラス窓にはテープを貼ってガラスがとび散らぬようにしました。また天井板をとり外して、焼夷弾による延焼を防いだりしました。

20 年になると戦争はますます激しくなり、熊本の上空に敵機が飛んで来ることも屡々でした。

朝、登校の途中で、警戒警報のサイレンが鳴り、来た道を急いで我が家にひき返し、先生や、クラスの友達とも会えない日が続きました。学習用具の他に防空頭巾や、救急袋をもって登校しました。

このように空襲が激しくなると、学校まで行って勉強をすることが危険になり、町内ごとに近所のお寺や、集会所を借りて勉強しました。

1 年生から 6 年生までの子供たちを 1 ～ 2 人くらいの町内担当の先生が教えられるのですが、大変なことでした。

学校の運動場には食糧増産のため、さつまいもやとうもろこしが植えられました。7 月の大空襲で学校は幸い焼けませんでしたが、健軍の多くの家が焼けました。

戦争が終ると、仕事も勉強も手につかないありさまでした。

昭和 22 年に学校制度がかわり、小中学校の 9 ヶ年は男女がいっしょに机を並べて勉強することになり、学校の名前も健軍国民学校から健軍小学校になりました。学校は郊外の森の中にあったため、空襲でも焼けずに残りましたが、窓ガラスも満足になく、冬の寒い、冷い教室で靴下もはかずにいる子が殆んどでした。もちろん火の気は全くなく、教室にストーブがつけられたのは 43 年からでした。教科書も今の様な色刷りではなく、新聞紙のような教科書を使いました。またノートや鉛筆も不足がちで、木や竹のキャップをつけて長くして使っていました。

昭和 24 年～ 25 年頃までは、米のかわりに、さつまいもや、じゃがいも、カボチャなどの代用食といわれるものを食べていました。弁当箱にはさつまいもを底に一列に並べ、その上にごはんをのせて持ってくる子もいました。

健軍小学校の生徒もだんだん多くなり、昭和 30 年には 2000 名を越え、31 年には新しく泉ケ丘小学校が出来、約 1500 名の子供が移っていきました。

【交　　通】

昔の校区の道路は道巾も狭く、舗装してなかったので雨の日などは大変困った。農家が多かったせいで、田んぼや、畑に行く狭い道、野原の中の道、木が生い繁っていて昼間でもこわいような道もたくさんあり、人通りも少なかった。こんな中で熊本市の中心と結ばれていた木山県道は他の道路と比べ、わりあい広く、人々や荷馬車、リヤカーを引いた農家の人の住き来で振っていた。

乗用車、トラックも時々は通ったといわれている。しかし、すれ違うのがやっとであった。今も残っているこの旧道は神水橋から終点にわたって三つ目を右に分れて、森本酒店の前に出る道である。その頃は茶店などもあり、通る人が昼ごほんを食べたり、休んだりした。

市電は昭和 20 年 5 月、三菱の工場へ通勤する人々のために水前寺⇔健軍間が単線開通、

昭和 27 年 4 月、同線が複線になった。

【商店街のようす】

昭和 17 年頃では、店は殆んどなく、木山と市内の間の休けい所として、馬車を曳く人たちの弁当を食べる店が 2 軒と、農家で使う、くわ、すきを作る鍛冶屋さんが一軒しかなかった。

戦争が激しくなって、三菱の工場が作られ、そこで働く人たちの住宅が、今の商店街あたりに 900 戸ぐらい建てられた。又工場で働く人達を運ぶために電車が終点まで延長された。これらのことが現在の商店街発展のもとになっている。

【戦後のようす】

昭和 20 年頃になると戦争でたくさんあった寮も空襲で焼かれ、残ったのはわずかになりました。 戦後、それらの寮のあとが払い下げられ県営や、市営の住宅が造られました。又、三菱工場のあとに、今の自衛隊の人々がうつり住むようになりました。

【中央通りのにぎわい】

三菱の工場が払下げられて工員さんの住宅は、そこに勤めていた人達に渡されました。

そこで食べもの屋を始める人がぼつぼつと出てきました。又電車の停留所の近くにあったため、買物に来るお客の数も増えてきました。今の福屋パンのそばに映画劇場があり、人々の楽しみの場所となっていました。

更に店が多くなったのは戦争で家を焼かれた人や、引揚げてきた人々がそこに住みつき、又、昭和 28 年の白川の水害におそれをなした人々が、高台の割合値段の安い土地を求めて町の中心からここに移って来ました。

店を発展させるために 30 数軒の人たちが力を合せて、本通りのドロドロの道を自分達で金を出し合って手入れをしたり、スズラン燈などを灯けて、一層賑やかにしました。

熊機時代の思い出

吉長　富士男

進駐軍向けのロッカーをどんどん造っていたころのことである。このロッカーは工場内引込線から貨車に積んで出荷していた。

運輸課は製品の発送計画に従って貨車をあらかじめ日通を通して依頼しておく。貨車は朝 10 時頃に機関車に引かれて水前寺から工場の専用引込線に這入って来て再び午後 3 時頃に取りに来るのだが、万一その時間までに積込みが終ってないと機関車は空で帰り、貨車の滞貨料が取られるのである。

従ってその日の積込量に見合う貨車数をお願いするのだが、或る日手違いで二日分の貨車が一度に這入って来た。滞貨料をとられない為には全貨車に満載しなければならない。運輸課は大慌てとなった。おまけにしょぼしょぼと雨が降り出して来た。

そこで事務所の女子社員を除く全員が運搬車やトラックに分乗し、ピストン輸送で貨車への積込みに当った。岡本係長はナッパ服を着、率先してトラックを運転し、自らもロッカーを担ぎ込む程であった。又、荷造斑も大変なもので貨車に積込まれたロッカーが揺れて傷がつかないようにフェルトを取りつけたタルキ材で止めるのだが、狭い貨車内のことでもあり作業がしにくく、当然荷造り作業の方が遅れがちで大忙しであった。

昼食、昼休み抜きで総員が頑張り通して、 3 時前にやっと完了した。一同ぐっしょり雨にうた

れ寒さを感じていた。勢いよく燃えるドラム缶のストーブで暖をとり乍ら遅い昼食を済ませ、作業を間に合わせた喜びを感じていた。

その時「所長が来るゾー」と誰かの声、反射的に蜘蛛の子が散る如くストーブを離れ出した。すかさず「そのままで良いぞ、責任は俺がとる」と岡本係長の力強い一言、案の定、「君達は･･･」と所長の叱咤の声が飛んで来た。

岡本係長は穏やかに「本日の仕事の責任上、私が今休ませているところです」といってことの経緯を説明された。事情を知った所長は「知らぬことで申し訳なかった。皆さん御苦労様でした。十分休んで下さい」といって引き上げられた。

表彰申請

田口　守蔵

終戦後一応消滅せる荷造り班を会社の要望により再編した。これは入社前の業歴にもとずき経験者を選出して編成、工具は各自が自家より持参し、又使用資材の収集に努力し、戦前とは全然異質の荷造り班を結成し各方面との資材の移動並びに製品輸送に縁の下の力持ちともいうべき地味な仕事に黙々と従事している作業者の意気を評価していただきたい。

以下にその間の一例を示す。

㈹　進駐軍向けのロッカーの発送に当っては殆んど遠目、24 時間以内に貨車積込みのため強制的に残業、日曜出勤等をやって期日までに作業を完了した。

(ロ)進駐軍向けパン入籍の発送

木材等荷造資材の入手困難な折柄、材料、倉庫課と協力し必要資材を早急に集め、かつ残業、日曜出勤等を強行して期限内に作業を完了した。

再上記作業につき資材及び車輌を節約一車輌に付き平均木材 0．46 石、釘 500 メ、フェルト（3 尺× 6 尺）5 ～ 6 枚使用していたが、支え木材を削り面取りをすることによりフェルトが不要となり、釘、フェルト等の材料節減に寄与した。

又、貨車への積込み方法を改善し、従来一貨車当り 30 台のロッカーを積込んでいたものを 36 台積込みとし、五輌に一車輌の割合で節減が可能となった。

現在の様な会社の状態にあっては、今後の作業も益々多忙となるも人員の増加は望むべくもなく、ただ作業員の自覚に待っより他に手段なき現在、何とか表彰につなぎ全員の意識を少しでもかき立てたい。

熊航に思う

細川　隆康

蛇尾蛇足ながら 1 年早く発足した水島航空機製作所は成長して、水島自動車㈱として成長を遂げた。

熊本航空機製作所は戦後の肥立悪く天折してなくなってしまった。

熊本に大規模工業が育たなかったのには多分に熊本の県民性が与かっていると思う。先に一寸触れたように重工本社からは博旨本のは三菱ではない」と言われていたのといい、戦後熊本市では「奴等は威張っていたから潰してしまえ」という気持があったようであるが、そのことは、そもそも「肥後の鍬形」とか「あんたが大将」とか「肥後の旦那衆」という辞があった

ように「薩摩の藩づる」とは対照的に協調性というか一致団結する組織力が脆弱であったことも一つの因であったのではなかろうか。

「あんた」という呼び方は熊本では目下の者に言う言葉である。見下げて「あんた」といい乍ら「大将」ともち上げる「お前は偉い、だが俺はお前の家来じゃないぞ」という一種けん制を表わす。

皆が皆、めんめん（めいめい一各自）が、かぶとに鍬形をうったる御大将でなければおさまらない、人の風下には立たないという気慨は立派と言うべきであろうが、これでは現代工業の流れ作業がスムーズに運ぶのに障碍を来さないとは思えない。

「武士は食わねど、高揚子」というのは肥後だけの精神ではないが、栄養不良でやつれた妻子に針仕事をさせながら自分はあくせく働かなくとも食える「良か衆」であるぞという貫禄を示す。

そういう自分の体面を保ちたがる。これら皆、旧熊本の男の、いうなればモッコス精神に相通ずるものである。

今後の熊本の産業を開発する上にも今日なお一考を要することであるかも知れない。

忘れ得ぬ人々

岡山　忠生

（1）片岡金吾氏

昭和 18 年 6 月、最初に三菱に入社する時、軍装で神水付近を歩いていたら通り過ぎようとした車が停って後席の紳士が「乗れ」という。三菱で採用の面接を受け、「明日から来い」といわれたのがその人であり、片岡金吾副所長であった。戦後大阪で会い、売れずに困っていたジュラルミン製の電灯笠一万個を買ってもらった。弁当箱は無いのかと言われ、それは統制品みたいなもので、旦っ在庫もなくお断りしたことがあった。

（2）広兼美朗氏

復員後再度三菱へ入った時の所長であった人だけに印象は大きい。広兼さんとは南九州をお伴して廻ったことがある。南九州には焼酎しかないと教えられていたので一升瓶の酒を 2 ～ 3 本持って行った。一諸に鹿児島の磯御殿に泊った時の印象が強く残っている。

（3）山口正晴氏

昭和 24 年 10 月、熊機が閉鎖され整理事務所になった時、所長として着任した人である。この山口所長は昭和 19 年、比島に征くため私の部隊を編成した時、主計少尉として応召していた。

まさかと思ったがその山口少尉が熊本へ赴任して来た。然も今度は彼の方が私の上司であった。　応召前は三菱・京都発動機に居た由。

忘れ得ぬ人々

佐久間　久見

（1）愛野種正氏

戦後の熊本工場を一番心配し、熊機として立上るための努力をされた。

航空機閥だ、造船閥だといっている中で、その勤務地が造船であろうと、熊本であろうと区別

はなく、今の立場に最善を尽すという信念に徹した人であった。従って自分の持場以外の所で何が起ろうと淡白であり、そのことが人によっては愛野さんを誤解させたのかも知れない。
最後まで自らの職責に努力の限りを尽し、遂に熊本の土に還られた。
（２）岩永徳一氏
　酒豪であった。後に胃癌の手術をされたとき長時間かかったため酒豪がたたって麻酔がきれたにもかかわらず、最後まで頑張った豪胆な人。
　柔道四段、銃剣道三段の古武士を思わせる風格、熱心なクリスチャンであり責任感が強く、自分の身体を張って仕事の責任を果された。個人的にも意気投合、兄貴のような存在であった。
（３）広兼美朗氏
　大塚さんの様に大柄ではなく、どちらかというと小柄な方で、細表の顎のとがった顔で、頭にはほどよく白髪を交えた品のよい好々爺風であった。ややせわしげな物の言い方だったが、いくらか鼻にかかった丸味を帯びた声がうまく調和し、一見物やわらかな優しいお爺さんという感じであった。
　一口にいって、三菱の鋳型の中から取り出された典型的な三菱紳士であった。

忘れ得ぬ人々

林　　盛雄

　熊本での戦中、戦後を通じて、私の知る範囲で、真に熊航、熊機のために努力された忘れ得ぬ人々について触れさせていただく。
広兼美朗様
　戦後の整理をされた責任者で、かっ民需転換後の初代所長、厳しいが若者を愛された。厳正にして計数に明るい方であった。
牧野　元様（故人）
　戦中、戦後を通じて管理部門の責任者。後工場長、いついかなる時も余裕を持たれ、特異のギャグで相手を煙に巻くか笑いを誘う特技の持主。三菱系社内知人多し。熊航、熊機の存在を広く示した方。

柳本　武様（故人）
　工学博士、温厚篤実で優れた技術者。戦後の熊本技術陣のトップ。のち熊本大学教授となられる。

愛野種正様（故人）
　溶接の権威、戦後の製造責任者として、又熊機の将来に備えて引きとめられた方。熱血漢で厳しい指導者、視野広し。

山本鐘二様
　戦中、戦後の営業の責任者。明朗にしてよき相談相手。
唐木文穂様

戦中、戦後を通じて企画、経理の責任者、熊航について最も詳しい方。上下の区別なく誰にでもよき相談相手となる方。我々のよき兄貴格として頼り甲斐のある方。

勝又貞隆様

戦中、戦後の労務の責任者、筋の通らぬ話はダメ。

中野武雄様

戦中、戦後の製造責任者、大変な勉強家であり努力家。芯の強い方で外柔内剛型、博識の技術屋さん。

後藤　昇様

戦中、戦後の人事の責任者、やさしいが芯は強く筋を通し人員整理では苦労された方。

佐久間久見様

労組の指導者、初代組合長、理論家、弁説さわやかである。

深谷様

労組の指導者、二代組合長、親分肌の人。

あ　と　が　き

「まえがき」にも書いた様に、健軍地区の発展振りに驚き、この急激な発展の礎はなんであったのか、という素朴な疑問と、三菱熊本工場の幕を降したというこだわりから、この工場の生いたちを調べ、まとめるのも面白かろうと思っていた。偶々定年退職後で時間的にもゆとりができ、この気持がゆるがぬ内に「健軍三菱物語」をまとめたいという宣言をした。

昨年 9 月、旧熊航・熊機に係りのある方々に主旨書を送り資料や話題の提供につきご協力をお願いした。ものを書くということは自信があるか、なれているか、根気がないと仲々書けない。この条件を満たす方々からはすぐに提供をいただいたが数は限られる。あとはこっちの足で集めるしかなく、早速各地への取材旅行が始った。地図を片手に目的の家を探りあて、一人 2 ～ 4 時間にも亘って当時の話を回想してもらった。何せ年輩の方が多く、日頃話し相手は欲しいのだがこんな思い出話しは共通の体験をした人でないと共感がない。

そこへそんな話を聞かせて欲しいというのだから随分歓迎された。私はこういう体験をしたと貴重な話をとくとくと語ってくれた。最初は漠然と何から話してよいか手こずっているが、焦点をしぼってこちらから水を向けると、40 余年も前の記憶をたぐり乍ら思い出を語ってくれる。時には戦中、戦後が混同したり、当時思い込んでいた出来事が案外違っていたりする。数字、日時はあやしいが、苦しい時代の、さびしい体験だけに出来事だけは今尚はっきりと覚えておられる。

こうして色々な話を聞き、書いたものを送っていただき、頭の中で整理していくと点が蓄積され、やがてそれらがうまく継いで線になっていくから面白い。今回遅ればせ乍ら、このように言い継ぎ、語り継ぎをまとめてはみたものの、もう 10 年早く着手しておれば、もっと正確なものが出来たと悔まれる。だが逆にもう 10 年遅かったら、もうまとめられなかったであろう。

いろいろな人に会い、いろいろな話を聞かせて貰い、寄せてもらった。ところがそれらの文

章を原稿用紙に整理するとその量は当初の予定より相当量もオーバーしてしまったため掲載出来なかった資料、文章が多々発生し、これらについては多少割引かざるを得なかったのは残念であった。何せ 40 余年も前のことである。確たる資料もなくまとめあげたため多少の相違もあるかも知れない。当時のそれぞれの立場で（正しくはこうだ）という経緯を御存知の方は是非御意見など御知らせいただきたい。

今回の「健軍三菱物語」作成に当って次の方々には特にお世話になった。

○　唐木　文穂様　（横浜）

重工本社、菱重㈱などに出向き熊航の資料を探し、或は熊航にかかわりがあった方々に照会していただき外郭をまとめていただいた。又出来上った原稿を逐一読んでいただき御意見を賜った。

○　佐久間　久見様（名古屋）

熊航から熊機閉鎖までの大量の生活記録、就中、労働組合活動をこく明に綴った資料をお借りし当時の生活状況を知ることが出来た。

○　吉長　富士男様（名古屋）

ていねいに保存された貴重な資料をお借りし、又中京地区在住の方の家に車で案内をしていただいた。

○　岡山　忠生様　（熊本）

井関移譲を中心に面白い裏話を多数まとめていただき、又発刊に当り色々な御意見を賜った。

○　江藤　オトミ様、新美　澄江様、林　テツ様　（熊本）

熊本取材時に、色々な人を召集していただいたり、一戸一戸案内していただいた。

○　井上　敏明様　（熊本）

工場跡地、健軍地区の昨今の状況を写真でまとめていただいた。又参考資料を多数送付いただいた。

○　中西　誠一様　（熊本）

熊本の情報を逐一提供していただき、又数々の調査をしていただいた。

その他学徒、挺身隊の方々始め多数の方々の協力によって出来上りました。まとめて終って熊航のあの大きな工場が短期間に出来たエネルギーは何であったか。国家と国民のターゲットが一致して計り知れない大きな力となったのであろう。一転して熊機の場合はどうであったか？

本書は何を訴えようという大上段に構えたものではない。ほぼ半世期も前の、貧乏で、苦しい時代に勢一杯生きて来た人々の共通の思い出集として読んでいただければ幸いである。

§　当初「熊航物語」（仮題）という標題で進めておりましたが、熊本在住の人々は「健軍の三菱」と呼んでいたので「熊航」というより「健軍三菱」の方がなじみがよい。という御意見があり、特に社員以外の方には「熊航」では通りが悪く、標題を「健軍三菱物語」－熊本は東へ･･･と致しました。